
薬の罖に気をつけて

宮野りう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薬の罫に気をつけて

【Nコード】

N3127E

【作者名】

宮野りう

【あらすじ】

王弟フィオン・アルファードに『惚れ薬』が盛られた。まったく困った様子も見せず、一人の少女を口説き始めるフィオン。そんな彼にいきなり甘い言葉をささやかれ、戸惑うコレットだが……。

1・薬

まわりを石の壁に囲まれた部屋。

ほぼ部屋の中央に置かれた古びたテーブルの前に、一人の少女が腰を下ろしている。

この部屋には似つかわしくない十代後半ほどの少女は、周りの雰囲気に飲まれたように小さくなっていた。

壁につけられたろうそくの灯りだけが、ゆらりゆらりとあたりの様子をうつしだし、薬品棚とそこに置かれたビンを妖しく照らししている。よくは見えないが奥の方に置いてあるビンの中身は、どうみても動物の体の一部ではないだろうか……。

どこからともなく匂うツーンとした刺激臭は、この部屋にある何十という種類の薬草のためか、それともカビが侵食しているためかは、薄暗い室内のなかではそれをはかり知ることはできなかった。

部屋の奥から、影がぬつと姿を現した。

肩でそろえられた少女の黒髪がびくりとゆれる。

少女の座っていた三脚のイスが大きく音をたてた。

奥から出てきた影は、この部屋の住人。

黒いローブをすっぽりとかぶったこの部屋の主は、少女のむかいのイスに腰を下ろした。

ふうと大きくため息をつく。

「まったく、あなたの主人も人の話をきかないね」

「も、申し訳ありません。ですが、その、本人がここにいらつしやることも目立ちますので……」

目の前にいるこの老婆の機嫌をそこねないよう、少女は言葉を選びながら答えた。

「まあいいさ。もらうものはもらったしね。これがその薬だよ」

ローブの端からしわしわの手が現れ、くるりと返したかと思うとその手のひらに小さな小瓶が現れた。それを長い爪を伸ばしたまま

の指がつまみあげる。

持ち上げられた小さな瓶には、とろりとした液体が入っている。目の前に出されたものに、少女はごくりと息を飲んだ。

「この薬はね、材料がとても貴重なんだよ。失敗してももう材料がないからね。それをよつくとあんたの主人にお伝え」

まあ、言わなくてもわかってるとは思うけどねと、老婆は続けた。老婆の手の内にある小瓶は、その部屋にはにつかわしくないほどに繊細なつくりで、わずかな灯りを受けてキラキラと光を反射している。これがあるのがこの部屋でなかったのなら、香水の瓶か化粧水かと見まごうほどだ。

「それと、この薬は飲んでから効果がでるまでに時間がかかるからね。薬っていうのはね、飲んでから効果がでるまでに時間がかかるものなのさ。十分体にまわって、ここに到達するまでにね」

ヒヒヒと笑いながら、ぬっと伸びた長い爪が少女の心臓部に押し当てられる。

鋭い指先を服越しに感じ、少女の額から汗が一筋つたい落ちた。

「どのくらい、かかるのでしょうか」

カラカラに干上がった喉から、かすれた声で少女がたずねる。

「効果が出る時間は個人差があるから、一概には言えないね。ほんの一瞬かもしれないし、かなりの時間を要する人間もいるだろう。その時間ずつと一緒にいければ成功するんじゃないかい」

数時間の間、ずっと……。

それはかなり厳しい条件なのではないだろうか。

少女の思考を呼んだように、ローブから見える口元がにやりと笑ったようにゆがむ。

「失敗を恐れて使わないのも一つの選択だよ」

そのほうが、相手のためだしねと言葉を続ける。

「だが、もし成功すれば……」

少女から指を離し、小瓶を机の上におく。

静まり返った部屋の中に、コトリという音がやけに大きく響いた。

「相手の心は、
あなたのものだ」

2・発現

バード公爵家の従者であるロイドは、彼の主人である公爵を探していた。

彼が今いる場所、ルノワール伯爵邸ではもうすぐ夜会が始まるうとしていた。

もうすぐ初夏という現在、夜会が始まるうという時刻にあってもまだ外は明るさをたもっている。夕暮れが近づきあたりは少しずつ暗くなつてきているが、美しく灯りをともされた庭園を堪能している人たちも多い。

ホストであるルノワール伯爵夫人にあいさつをすませたゲストたちは、本格的なダンスが始まる前に庭やホールで知り合いと話したり、それぞれに紹介を受けたりとあたりをにぎわせていた。

まだ人目につく場所にいってくればいいのだが、とロイドは大きくため息をついた。

ここには客人用として休憩するための個室の多く用意されている。そこに入っていれば一つ一つ確かめるためにかなりの時間を費やすだろうが、それをしている時間の余裕がないためロイドはかなりあせっていた。

足早に歩を進め渡り廊下を横切ろうとしたとき、奥の庭から女性たちの歓声のような声が聞こえた。

ピクリと反応し足を止め、ロイド声のしたほうへと顔を向ける。

パーティーの間、従者が駆け回るのは決してほめられた行為ではない。

しかし、公爵家の従者として十分訓練されていたロイドは、そのことを失念していたような猛スピードで声のした方向へと走っていた。

「公爵、もうすぐダンスが始まりますわ。今宵はもう相手はおきまりですか？」

「お決まりでないのなら、ぜひわたくしと」

「いいえ、ぜひわたくしと踊ってくださいませ」

「わたくし、今日のために一生懸命ダンスを練習してきましたのよ。たくさん妙齢の女性が集まっているその中心に、彼の探していた人物がいた。」

さらりとした金色の髪青年は、女性たちより頭ひとつ分以上の身長差があり、遠めでもよく目立つ。

「ありがとう。僕の体がひとつなのがとても残念だ」

にっこりと笑う公爵に、まわりからは甘いため息と歓声がおこった。

若き独身の公爵は、今日も若き女性たちからの人気は絶大なようである。

近付いてくる従者に気がつき、バード公爵フィオン・アルファードはおやつ？という表情で彼をみた。

いつもならこういう場面で邪魔をすることなどないのだが、今日はやたらと険しい顔をしている。

フィオンの視線に気がつき、まわりの女性たちもロイドの方に視線をむけた。

注目を浴びるなか、ロイドはきつちりと臣下の礼をとる。

「お話し中申し訳ありません。公爵に至急の用件がございます。お楽しみ中かもしれませんが、ご足労願ってもよろしいでしょうか」

「こんなところですかい？」

夜会は社交の場である。そこに従者が入ってくるのなら本来許されることではない。だが、それを中断させてまでも自分に報告しなくてはならない事項とは……。

フィオンはロイドをじっと見る。

しばらくの沈黙。

「わかった、行く」

「ありがとうございます」

フィオンとロイドのやりとりに、まわりの女性たちがざわつく。せつかく公爵の目にとまるチャンスだったというのに、それがつぶされてしまうわけだ。

「行っておしまいになるんですの？」

「申し訳ありません。みなさんとの楽しいひとときをここで中断するのはとても残念なのですが」

まわりの女性たちをゆつくりと見ながら、微笑みかける。

「またの機会がありましたら、ぜひに」

フィオンのやわらかい笑顔に女性たちのため息がもれる。多くの熱いまなざしをうけながら、フィオンはロイドを伴ってその場を離れた。

客室として用意された休憩室に入ったフィオンは、そこにおかれたソファに腰をかけた。

足を組み、背もたれに体をあずける。

「いいタイミングだったね」

廊下で伯爵家のメイドになにやら言付けし、彼女からグラスとポットののった盆を受け取り室内に入ってきたロイドに、フィオンは話しかけた。

いつもは遠巻きに見ているしかない女性たちも、今日のホスト、ルノワール伯爵夫人の紹介によりフィオンに話しかける機会を得た。何度も話したことがある令嬢もふくめ、ここぞとばかりに若き公爵の目に留まるうという女性たちにかなりの人数囲まれてしまっ

いたのである。

あの状態のままダンスが始まったとき、誰を選んだ選ばないで話題にされるのかと思うとぞっとしない。

「楽しまれていらっしやっただように拝見いたしました……」

「女性と話すことは楽しいけれどね」

問題は、結婚相手を誰にするかと目を皿のようにしてフィオンを見ている人物が多いということだ。

「フィオンさま、ご気分はいかがですか？」

「気分？」

「はい。なにかいつもとかわったような症状はありませんか？」

しばし考える。

「いや、特にはないよ」

それがいったいどうしたというのか。

「それより、至急での用件があつたんじゃないのかい？」

フィオンの問いにロイドは何も答えずに、彼の前にグラスを置き、水を注いだ。

「水を飲まなければ話が聞けないほど、僕は酔ってはいないよ」

「酔い覚ましのためではありません。お話しますから、とりあえずお水をお飲みください」

ロイドをじつとみつめ、フィオンは大きいため息をついた。

ロイドの性格はよくわかつている。

自分にとって、公爵家にとって何が最善であるかを一番に考えている彼をフィオンは信頼していた。

体を起こして水の入ったグラスを持ち上げる。

喉の渇きは覚えていないが、言われるとおりにそれを口へと運んだ。

「もうすぐ、医師も参りますので、それまでたくさん水を飲んで……」

……

どこから出したのか、大きめの金属製の容器をフィオン目の前におく。

「ここに吐いてください」

言われた言葉に、フィオンは吹き出しそうになった水をあわてて飲み込んだ。

あわてて飲んだため、気管に入った水によって激しく咳き込む。

「げほっ、ごほっ、ロイ……、何を言っ……」

激しくむせて涙目になりながら、水をこぼさないようにと自分の手からグラスをとって背中をさすってくる従者をにらむ。

息をするのが精一杯で、にらむ以外は言葉にならない。

なんとか咳がとまり、肩で息をしながらフィオンはソファにもたれかかった。

「先ほどフィオンさまの飲み物に薬を入れたというものをとらえました」

頬杖をつきながら、フィオンはロイドの報告を聞く。

「薬？」

「はい。どの時点で服用されたのかはまだ調べがつかっておりませんが、落ち着きましたら本日どのようなものを口にされたのか教えてくださいいただきたいのです」

「薬、ねえ」

バード公爵フィオン・アルファード。

現在公爵位にあり臣下の礼をとってはいるが、現王パトリック・アルファードの腹違いの弟である。

王弟として、毒に耐性を付けるための訓練はしている。

たとえ飲んでいたとして、今の今まで症状がでていないのだから、そんなに大騒ぎするようなことなのだろうか。

ロイドが差し出したグラスを再度受け取り、水を飲む。

この場で吐く気はもうとうなかったが、薬を飲んだとして、体内濃度を低下させておくことに異存はない。

しかし、今日口にしたものに変な違和感を感じたものはなかった

が、薬など本当にはいつていたのだろうか。

「味も、においもなしか」

一応の毒物の知識ぐらいあるつもりだが、これだけ症状がでないのは薬を入れたものを服用していなかったと思うほうが自然ではないのだろうか。

「症状がでる時間は人によって違うようです」

フィオンの考えを読んだようにロイドが答えた。

「それで、なんの薬を入れたと犯人はいつてるんだい？」

一時の沈黙。

「それは……『惚れ薬』だそうです」

「は？」

惚れ薬……。

毒薬ではないが。しかし。

「すいませんっ！」

やおら大きく声を上げると、ロイドは九十度に体をまげて頭を下げた。

「私がつとまわりに目を配っていればこんなことには」

惚れ薬。

フィオンに飲ませて彼を虜に……という作戦だと考えられるが、しかしそれは好きな相手を自分のものに以上の意味が生じる。

バード公爵か、それとも王弟としてか、はたまたフィオン本人か、どれを狙っての犯行か。

どの縁談にもいい返事をしないフィオンに、業を煮やしたものがいたということだ。

目の前で頭を下げるロイドに、フィオンは大きく息を吐いた。

本当に飲んだとして『惚れ薬』の効果はまだでないようだ。

「頭をあげて。まだ薬の効果は出ていないようだし、なんとかなる

だろっ」

ゆつくりと頭を上げたロイドとフィオンの視線があった。

「ところで、このまま二人でいると、もしかして僕はロイドに惚れる可能性もあるのかな？」

にやりと笑っていうフィオンの言葉に、ロイドが固まった。

背中を冷たい汗が流れる。

可能性は、なくも、ないが……。

「冗談だよ」

気心が知れている相手といっても、さすがに男は遠慮したい。

視線をはずしたフィオンに、ロイドは呪縛を解かれたように力を抜いた。

トントン。

ドアをノックする音に、ロイドはそちらへ向かった。

ドアを開けると、そこには公爵家御用達の医師と公爵家従者の二人が立っていた。

ロイドが顔を確かめ入室すると、医師は顔を隠すように大きな布で口元をおおい、頭もすっぽりと布の袋をかぶった。

薬の効果がいつ現れるかわからない状態で、不用意に相手に顔を見られないための手段である。

なるほど、と、先ほどフィオンにいわれたことを気にしたロイドは、自分の胸ポケットにはいったハンカチーフをとりだすと、三角にたたんで口元をおおい後ろに縛った。

これならなんとか少しは……。

「フィオンさま、医師がいらつしやいました。診察を」

布越しで少しくぐもった声になりながら、ロイドはフィオンに声をかけた。

診察をするために医師をフィオンのそばに案内するが。

ソファに座ったまま、フィオンはロイドたちとは別方向に視線を向けたまま振り返らない。

「フィオンさま？」

再度呼びかけるが返事がない。

フィオンが見ている視線の先は窓。

すべての窓のカーテンをきつちりと閉めたつもりだったが、もうすぐ初夏となるこの季節、部屋を閉め切るには暑すぎるため、窓は開けていた。

フィオンが見ている窓のカーテンが大きく揺れている。

「どうかされましたか？公爵」

医師が呼びかけるもまったく反応のないフィオンに、まわりにいた人間はみな一様に息をのんだ。

まわりを見もせず、ただ窓一点をみていたフィオンはすっと立ち上がり、窓に向かって歩いていく。

止めに入ろうとロイドが動いたのと、フィオンがカーテンをあけたのは同時だった。

これから夜会が始まるうとしている邸内では、建物やホール、その周辺には灯りがこうこうとともされている。

そのため、窓から見える景色も建物周辺はよく見える。

その一点をフィオンはじっと見つめていた。

「公爵っ！」

背後で医師が大きく声をはりあげてフィオンを呼ぶ。

やっと呼ばれたことに気がついたように、フィオンが振り返った。

その目は、何かに驚いたような、信じられないものをみたようなそんな表情を浮かべている。

「公爵、『なに』を『ごらん』になりました？」

今、彼が見つめていたもの。

問われた答え、それを確かめるようにフィオンはもう一度窓の外に視線を向けた。

目的のものを探すように視線をさまよわせ、そして……。

くるりときびすを返し、フィオンが走り出した。

止める間もなく部屋を飛び出し、廊下で歩いていた人にぶつかりそうになるのをするりとよけ走り去る。

あわててロイドや他の従者も追いかけるが、一人がメイドにぶつかり、グラスが絨毯へと転がり飲み物がしみていく。それを横目で見ながら、ロイドはフィオンの後を追いかけた。しかしすでにその距離はかなりひらいていている。

部屋に一人残された医師は、先ほどまでフィオンが見ていた窓の外の景色を見わたしたため息をついた。

とつとつ薬の効力が現れてしまったか。

問題は、彼が誰をみていたのか……。

3・出会い

ルノワール伯爵夫人への挨拶を終えたコレットは、庭園の明かりのなかによく見知った顔を見つけて頬をゆるめた。

伯爵夫人は、現王妃の父方の叔母にあたる人物だが、貴族の令嬢のレディ教育に熱心な人物ということもあり今日のパーティーには妙齢の女性が多く集まっている。伯爵夫人が自分が教育した女性たちをお披露目するために開いた夜会なので、そんなに堅苦しくないパーティーではあるが、そこは王妃の叔母である。パーティーの参加者の面々には、かなり身分の高い人物も少なくない。

マカリスター男爵家の娘であるコレットは、三年前に子爵家へとお嫁に行った姉のついで、ルノワール伯爵夫人のレディ教育に通わせてもらったことにより、今回の夜会への招待をうけていた。

ルノワール伯爵夫人との面識はあるが、来客には知り合いが少ない。豊かな土地ではあるが、地方の小領主であるマカリスター男爵家と強いつながりが必要とする貴族は決して多くはないのだ。

見知らぬ人のなかで心細い思いのなか、見知った顔を見つけてほっと息を吐く。思っていたよりも緊張していたらしい。

コレットの視線に気がついた相手、エリサ・コールフィールドはあでやかな笑みを浮かべ振り返った。

「お久しぶりね。最近パーティーでも見かけなかったけれど、どうかなさったの？」

二人で給仕から飲み物を受け取ると、エリサが口を開いた。

「……」

「婚約の準備で忙しかったのかしら？それなら、わたくしには経過を報告していただき良かったわ」

コールフィールド伯爵家のお嬢様らしく、すこしつんとした口調でエリサはコレットに言葉をかける。それでも、エリサがコレット

を親友として扱っているせいか、見下した感じはない。

「実は……」

コレットが口を開きかけたのと同時に、近くで歓声が上がった。

庭園のなか、綺麗に手入れをされた木や花のアーチなどによってさえぎられ、どこから歓声が聞こえたのかはわからない。

「なにかあつたのかしら」

「ああ、今日はバード公爵がいらっしやってるから」

「バード公爵さま……ですか？」

エリサの言葉に、コレットは小首をかしげた。

バード公爵といえば、前王の王妃の父親にあたる。かなりの年齢になっていたと思うが、こんな若い人の多いパーティーに参加するのだろうか。でも、ルノワール伯爵夫人の兄、現王妃の父親はバード公爵家の姫君を妻にとられたのだから、親族として出席してもおかしくないか。

「違うわ。バード公爵は代をかわられたの。現在公爵位はフィオンさま」

「フィオンさまって……」

「そう、王弟フィオン・アルファードさま」

王弟フィオン・アルファード。

前王とバード公爵家の姫との間に生まれた王子であり、現王とは腹違いの兄弟にあたる。

前バード公爵には姫が二人。一人は前王の後妻となりフィオン王子が生まれる。もう一人の姫は侯爵家へと嫁ぎ、その子供が現王パトリック・アルファード、フィオンの兄の妻である。

実質跡継ぎがいなくなったバード公爵が、王妃となった娘の子供、フィオン・アルファードに正式に公爵位を譲り渡したのは去年のことだった。

そういえば、父親であるマカリスター男爵がそんなことを話していたような気がするコレットは思い出す。

「結構噂になってましたのよ？フィオンさまは、独身男性のなかで一番の注目株ですもの。以前からみんなのうわさの的でしたし。まあ、婚約者のいるコレットはあまり興味なかったでしょうけれど…」

話していて、エリサはコレットの様子が少しおかしいことに気がついた。

何かいつもと違う。

「少し、歩きましょうか。まだ時間もあることですし」

近くのテーブルに持っていた飲み物を置き、エリサはコレットを庭園の奥へとうながした。

薔薇のアーチを抜けると、あたりの人も少しまばらになった。その先にある東屋に腰を下ろす。まだ日が落ちるまでにはしばらくの時間があり、庭園の景色がよく見えた。

「なにかありましたの？」

「え？」

「わたくしにわからないと思いませんか？」

エリサの問いに、コレットは困ったような笑みを返す。

「実は……、婚約の話はなくなっただんです」

「は？」

「……」

自分の耳が信じられないといったように、エリサはその青い瞳でコレットをまじまじと見つめた。コレットが嘘をいっているとは思えないが、それにしても。

エリサとコレットは、ルノワール伯爵夫人のレディ教育の時に仲良くなった。もともと貴族の娘である二人は、お互いの存在は知っていたものの特に話す接点がなかったのだ。

エリサは社交界にデビューする前にと両親であるコールフィール

ド伯爵夫妻に進められたのだが、コレットは確か婚約前の花嫁修業の一環だったはずだ。

婚約者が王立学校に行っていると言っていたが、卒業を迎えたら婚約するのだと言っていたのに。

エリサの反応に、コレットは悲しそうに瞳を伏せた。

婚約。それは正式にしていたものではなかった。

婚約者であるアッカーソン男爵第二子息であるキースが王立学校を卒業後正式に発表するということで、両家の間で二人が幼いころから口約束となっていたことだ。

今年の春に、キースは王立学校を卒業。

春から初夏にかけて、王都では社交シーズン真盛りとなる。その際に王に許可を受け、正式に婚約を発表する予定となっていたのだ。しかしよりにもよって、婚約相手のキースに子供が出来たというのだ。

相手については詳しくはわからない。父親もかなり腹を立てて、詳しくは話さなかった。もし話していたとしても、混乱したコレットの耳にちゃんとどいていたかはわからないが。

どうしてこんなことになってしまったのかコレットにはわからなかった。何が悪かったのだろうか。

確かに、最近キースと会うことは少なかった。でも、それはキースが卒業にむけ王立学校での勉強が忙しかったからだと聞いていたのに、実はそうではなかったのだろうか。

しょせんは親が決めた婚約である。長年の間、キースにもいろいろ考えるところがあったのかもしれないが、真相はわからぬまま。父親のあの剣幕では、キースと直接会うどころか、手紙のやりとりも無理だろう。

結局、コレットはなにもわからぬまま婚約解消へといったってしまったこととなる。

幼馴染でもあるキースはコレットにとって優しい兄のような存在だったのに、その彼がまさかこんな形で自分から離れていくななんてどうして想像できただろう。

大まかに婚約解消の話聞いたエリサは、大きく息を吐いた。
ちらりとコレットを見る。

友人としての欲目ではないが、コレットに大きな欠点があったとはエリサには思えなかった。

だいたい、この婚約に異論があったのなら、最初から別の理由で婚約を解消すればよかったのだ。家同士の婚約の約束ならば、それは本人たちの問題よりも家同士の問題ともなる。それを土壇場になって他に女が出来たから別れたいなんていうのは、どうみても相手の男が悪い。

会ったこともないが、エリサの中で、その男の印象は最悪だ。そんな男のために、コレットがこんなに落ち込んでいるのが頭にくる。「コレット、そんな男はこちらから願い下げです。もうお忘れなさい」

どうあがいても、あげればあがくほどコレットの評判は落ちる。正式に婚約していなかったのが幸いだったというべきだろうか。口約束だけのことなので、婚約の話を知っているのはごくわずか、限られた人間だけだろう。相手方としては自分の方に非のあるスキヤンダルである。お互いにとって公にしたくない事情もあり、これならコレットの将来へも影響は少ないはずだ。

「今日はいろいろな男性も多いことですし、嫌なことは忘れて楽しめる方がいいですわ」

今まで婚約者に操立てして、あまり他の男性と親しくしなかったコレットである。新たな婚約者候補を探すのには、今日のこの場は絶好といってもいい。

「気づいてらして？先ほどからあなたを見ている男性、多いんですよ？」

コレットの手をとり、エリサは立ち上がった。

冗談めかしたエリサの口調に、コレットはくすりと笑った。

「それは私ではなくて、エリサを見てるんです」

濃い金色の髪に青い瞳。

お嬢様のなつんとした印象はあるものの、エリサはかなりの美人である。

「まあ、自分のことをわかってないのね」

エリサはそう言つと肩をすくめた。

幼いころから見られることには慣れているエリサである。相手が自分をみているのかそうでないかくらいはわかる。

艶やかな栗色の髪に、琥珀色の瞳。コレットが今日着ている柔らかな若葉色のドレスは、ちらりちらりとあしらわれた白いレースや刺繍もあいまって彼女をとても可愛らしくみせている。

派手な印象をもつエリサとは対照的に、コレットの印象は可憐な花を思わせる美しさがあった。

まわりの視線に疎いのは、幼いころから婚約者一筋だったのだから仕方ないことが。

「仕方ありませんわね。今日はたっぷりとコレットに付き合っただけですわ」

「くすくす。今日はいいんですか？お目当てのお方は」

「あの方は今日いらつしやらないのよ。だからって、静かに待つてるなんてわたくしの性（じやう）に合わないわ。あの方がわたくしを選ぶのではなくて、わたくしがあの方を選ぶのですから」

自分は選べる立場なのだとつきりというエリサが、コレットにはまぶしかった。

二人が伯爵邸の近くまで戻ると、夜会の開始も近いことから多くの人が集まりだしていた。

高くなりはじめた月が、その色を濃くしていく。もうすぐ満月も近い。少しずつ太陽の時間から月の時間へ。空が夕焼けを残した赤紫から徐々に月明かりを含む群青色へと変化していく。

月に目を奪われていたコレットは、ふと何かに気がついたように人の波をみわたした。

「どうかしまして？」

「え？いえ、なにか、今声が出たような気が……」

コレットが言い終わらないうちに、あたりがざわめきはじめた。

まわりも気がついたらしく、人々の視線がざわめきの方へと注がれる。ざわめきが大きくなるのと、人垣が割れるのはほぼ同時だった。

はじめにコレットの目に飛び込んできたのは、明るいプラチナブルンドの金髪だった。走ってきたのだろうか、すこし肩が揺れている。

人並みの間をぬけて現れたその人は、誰かを探すように視線をさまよわせた。

コレットと視線が重なる。その瞬間瞳が驚いたように見開かれ、そしてはじかれたように笑顔がこぼれた。

まっすぐにコレットの前に進んだ彼に、あたりは何が始まるのかと静まりかえった。さっきまでのざわめきが嘘のようだ。

自分を見つめてくるエメラルドの瞳に、コレットは動くことができな

きない。
「僕と踊っていただけませんか？」

そう言ってコレットの前にひざまずいたのは、王弟フィオン・アルファードその人だった。

4・ダンス

「僕と踊っていただけませんか」

静かになった夕暮れの庭。彼の声だけがやけに大きく聞こえた。

いきなりのことで、なにが起こっているのかわからなかった。

今目の前で自分を見つめている人物を、コレットは知っていた。

いや、ここにいるもので知らない人などいないであろうその人。

バード公爵、フィオン・アルファード。

だが、コレットは彼と会話をしたことどころか、今の今までまともな目を合わせたこともない。そんな彼が、今目の前で自分にひざまずいているのだ。

ひざまずく行為は、自分にとって目上の人物に行われるのが常識である。王弟であり、バード公爵の爵位をもつ彼がその行為を行うべき人物といえ、王と王妃、そして現在は隠居してバード公爵の領地で生活をしている前バード公爵ぐらいだ。

身分の上下に関係しないとすれば、それは婚約者や伴侶、恋人に對してであるが……。

固まっているコレットのとなりで、ふうとため息が聞こえた。

「彼女とお知り合いだったなんて、初耳でしたわ。公爵」

声のしたほうにフィオンの視線がうつった。

視線の呪縛から開放され、コレットの肩から力が抜ける。

声の主、エリサに気がつく、フィオンは立ち上がり軽く会釈をする。エリサもそれに答えるようにドレスのすそをつまみ、ちいさく腰をかがめてあいさつをした。

「お久しぶりですね。エリサ嬢」

「公爵にもご機嫌うるわしゅう。お噂はいろいろおききしています

わ

名門コールフィールド伯爵家の令嬢であるエリサは、王弟の前でも臆するところなどない。

少しだけ肩をそびやかに、フィオンが笑う。

「どんな噂となってエリサ嬢のところのとどいているのでしょうかね」「ところで、彼女とはどこでお知り合いになりましたの?」

エリサはにつこりと笑って会話を換え、フィオンとコレット両方に視線を送った。

「本日が、初めてです」

「初めて……ですか?」

微笑みながら答えるフィオンに対し、彼女の親友はわけもわからないといった表情で小さくうなずいている。

「公爵。紹介もなしに急にでは、彼女も驚いてしまいますわ」

「あつ、そうですね。申し訳ありません」

「い、いえ」

につこりと微笑まれて謝罪されれば、コレットはそう答えるしかない。

「彼女はコレット・マカリスター。マカリスター男爵家の令嬢です。よ」

「はじめまして、コレット嬢」

フィオンは自分の胸の前に片手をそえ、優雅に一礼した。

慌ててコレットもドレスのすそをつまみ、あいさつを返す。

「は、はじめまして。お会いできて光栄です、バード公爵」

「僕をご存知なのですね」

知らない人がいるのだろうか……。

そう思ったが、あまりに嬉しそうに笑うのでいいだせない。

「コレット嬢。僕と踊っていただけませんか?」

あらためてフィオンは彼女に申し込む。

コレットの視線が無意識にエリサの方に動いたことに、フィオンは気がついた。

「コレット嬢をおかりしてもよろしいですか？」
少し引き気味に小さくなっているコレットをエリサはちらりとみる。

フィオンにしっかりと向き直り、にっこりと微笑んだ。

「コレットはわたくしの大切な友人ですよ？公爵」

「はい」

「あまりいじめないであげてくださいね」

「エリサっ！」

助けるどころか、フィオンの側についた友人の名を、コレットは抗議をこめて呼んだ。

二人に注目されて、コレットは赤くなっとうつむく。

「もちろん、そのくらいの良識は心得ているつもりです」

エリサに答えると、フィオンはコレットにしっかりと向き合って、そつと彼女の前に手をさしだした。

「コレット嬢、僕に今宵のあなたのお時間をいただけませんか？」

その手と、フィオンの顔を交互に見つめる。

「コレット」

耳元でエリサに促される。

ちらりとエリサに非難の目を向けたあと、あきらめたようにコレットはフィオンの手をとった。

こうなった以上、ここから逃げることなどできない。

彼女の手をとり自分の腕と組む形をとると、フィオンはコレットににっこりと微笑んだ。間近でとろけるような幸せな笑みをつけ、コレットの頬が無意識に赤く染まる。

まわりがざわめきはじめるなか、二人は伯爵家の広間へと足を進めた。

広間へ入ると、周りの視線は一気に二人に注がれ、ざわめきが

きくなった。

それもそのはず、本日一番の注目人物、王弟であるバード公爵が女性を伴って現れたのである。

どこの令嬢なのか、公爵とはどのような関係なのか、いろいろな言葉がコレットの耳にも届いていた。

そんなざわめきを気にもせず、フィオンはコレットを伴ったまま、ホスト、ルノワール伯爵夫人のところまでやってきた。

「まあ、公爵。コレット・マカリスター嬢とお知り合いだったのですか？」

「ええ、先ほどから」

そう言ってコレットに微笑みかけるフィオンを、あらあらといった感じでルノワール伯爵夫人は肩をすくめた。

広間に音楽がなりだす。

「ミス・マカリスター。公爵を少しお借りしますわね」

恋人たちの間に割り込むのは無粋なことだが、パーティーの開始時はホストのダンスから始まるのが常である。

ホストは自分のパートナーか、または失礼にならないようゲストの中でもっとも身分の高い人と最初にダンスを踊る。今日の伯爵夫人の最初のお相手は、ゲスト。優先すべき賓客、つまり夫人の最初の相手は王弟であるフィオンである。

慌ててフィオンの腕から自分の手を離そうとしたコレットより先に、フィオンはそつと彼女の手をとった。しっかりと握りしめたまま、そつと顔をよせる。

「少しだけ待っていて」

まるで恋人同士のように耳元でささやかれると、コレットはどうしているのか分からないままうなずくしかなかった。

「公爵、大丈夫ですか？」

ダンスを踊りながら、ルノワール伯爵夫人はフィオンに声をかけ

た。

まわりも少しずつダンスに加わり始めている。音楽の音にダンスの足音、広間のまわりに集まっている人々のざわめきで二人の会話がまわりに聞こえることはない。

「ああ、伯爵夫人はご存知なのですね」
フィオンに薬が盛られたことを……。

いつの時点で薬を服用したのかはわからないが、本来なら王弟であるフィオンに薬が盛られたのである。夜会を中止するべきなのだろうが、服用したのが『惚れ薬』ということから、彼がこの屋敷内にいる時点でまわりに知られることは、若い女性も多いこの場では危険が伴う。

公爵はまわりに気が付かれないように伯爵邸を後にし、両家の家臣により夜会の参加者にいるであろう主犯を探すと報告を受けていたのだが……。

「申し訳ありません。こちらの事情で伯爵夫人にはご迷惑をおかけすることになってしまいました」

伯爵邸が事件の現場となってしまったのである。

せっかくの伯爵夫人の主催の舞踏会を台無しにする以上に、彼女の評判を落とすことにもなりかねない。

「まあ、ご心配ただいてありがとうございます。でも、こちらの心配よりも、公爵の方が大変なのではなくて？」

「……そうですね」

公爵家としても当主の一大事であるが、王家としても王弟への不逞^{てい}の行いである。王家としても黙っているわけにはいかないだろう。

「彼女ですね」
フィオンが選んでしまった相手は。

優雅に伯爵夫人をリードしながら、フィオンは視線をコレットにむけた。

広間にフィオンと供に現れた少女である。そのためまわりも遠慮したのか、彼女をダンスに誘おうという人物はいなかった。まわり

の人間と少し距離を置いて一人立っている。

彼女の姿を見るだけで、フィオンの胸に熱いものが湧き上がってくるような感情が起こる。これが本当に薬のためだというのなら、ものすごい威力である。

それでも……。

「伯爵夫人には、困ったときには恋愛指南をお願いするかもしれませんが、そのときはよろしくお願いします」

にっこりとフィオンが微笑む。

コレットと知り合いである伯爵夫人であるのなら、的確なアドバイスももらえるかもしれない。

フィオンの言いたいことがわかって、伯爵夫人は目を丸くした。

口を開こうとしたとき、ぴたりとフィオンの動きが止まった。伯爵夫人が気がつかないうちに、一曲目が終了していた。

優雅に礼をし自分から離れていくフィオンを、ルノワール伯爵夫人は目で追っていく。フィオンはまっすぐにコレットの前行き、声をかけていた。

コレットのことを知っているルノワール伯爵夫人には、コレットが犯人でないことがわかる。彼女はそこまでして彼の気を引くほどバード公爵に興味がなかったはずだ。他の女性が姦^{かしま}しく噂をするなか、彼女の中では他に相手が決まっていたように見えたが……。

薬を飲んだことを自覚した上でのフィオンの行動に、伯爵夫人はまわりに気がつかれないくらいに小さくため息をついた。

コレットの手をとり、フィオンは広間の中央へと進み出た。

王弟である彼が通る場所は、まわりの人々が失礼にならないようにすぐに場所を空けるため、たくさんの人があつまる広間でも誰にぶつかることも、ましてや歩調を緩めることも必要なく目的の場所へ行くことができる。

彼女の手に少し力が入ったことに、フィオンは気がついた。コレ

ツトは緊張のためか、少し不安そうな表情をうかべまっすぐ前だけを見つめている。

「緊張してる？」

「えっ？は……はい。こんなにたくさんの人の前で踊るのは初めてなので」

緊張の大半の理由は目の前にいる人物のためなのだが、あえてコレットはそのことには触れなかった。

「ふふ、大丈夫。しっかりリードするから、まわりを見ずに僕のとだけ感じていて」

そつと耳元でささやくと、フィオンはコレットの手を包み込むように握り、そつと腰に手をあてる。今まで何度となく行ってきた行為だというのに、やけに緊張していることにフィオンは気づいた。

そんな自分がおかしくてくすりと笑うと、コレットが不思議そうに自分を見つめた。どうしたのかと問うように少し首をかしげたくさが可愛らしい。それに答えるように、フィオンはにっこりと微笑み返す。

ダンスの曲が始まる。自分の手にすっぽりと納まってしまいうような小さな手を強く握ったのを合図に、ゆっくりと最初のステップを踏み出した。

くるりくるりと舞う姿は、まるで触れようとするりと逃げてしまう風に舞う花びらのようだと思っただとフィオンは思った。

ピンク色がかったトパーズのイヤリングが、ダンスのステップを踏むたびにきらりきらりと揺らめいて光る。結い上げられた艶やかな栗色の髪には白いジャスミンの花が編みこまれていて、甘い香りがフィオンの鼻腔をくすぐった。

花の香りだけではない甘い匂いに、頭の芯がしびれたような感覚がする。

もっと強くこの手に捕まえて、その甘い香りを思う存分確かめたいくなるのをぐっところらせる。

ダンスのためだろうか。そのすべらかな頬が赤く染まっ
ていく姿がとても愛らしい。

少しずつ緊張がとけ表情がやわらかくなってきたコレットから、
フィオンは目を離すことができなかった。

5・使者

舞踏会の次の日というのは、どこの貴族の館でも朝が遅いのが常である。王都の東部地区にあるマカリスター男爵家でもその常のとおりに、遅い朝食が始まるころには日がだいぶ高くなっていた。

ただいつもと違うことがあるのならば、そこにエリサ・コールフイールドの姿があったことだ。

天気もいいので、テラスのテーブルについて二人は軽めの食事をとる。給仕のメイドが、二人に甘めのミルクティーとパン。色とりどりのジャムに、ふわふわの卵やきを並べていく。

「それで、昨日はどうでしたの？」

エリサの言葉に、コレットはびくつと体を震わせた。

朝、今日男爵家を訪問するむねの連絡をつけとったとき、その質問がくることは予想はしていたが……。

友達を進んでフィオンに預けたエリサであるが、さすがにどうなったのが気になっていた。

昨日の夜会、落ち込んでいたコレットの気分を晴らすのにバード公爵は絶好の相手だった。

普段、コレットと公爵が出会う機会などほとんどない。正確には、会ったとしても紹介がないと言葉も交わせないため、知り合いになるチャンスはかなり低くなる。それがどうしたことか向こうから声をかけてきたのだ。

王家の人間とのつながりを持てるのであれば、今後の社交界でコレットの立場も高くなるし、それに相手はあのバード公爵である。

今をときめく噂の公爵は、物腰柔らかかで、人あたりもいい。プラチナブロンドの金髪に明るいエメラルドの瞳の見目麗しき王弟殿下なら、ダンスを踊っている間ぐらいコレットの気分を晴らしてくれると期待してのことだったのだが……。

ダンスを踊っている間のこと、というレベルの話ではなかったのである。

「あの後二人でいなくなったから、かなり噂になってましてよ」

「あれは、少しお話をしていただけで……。そんなに噂になってました？」

不安そうに聞くコレットに、エリサは真剣な表情でうなずいた。ダンス一曲のことだと、誰もが思っていた。が、その後パートナ―を変えることなく三曲のダンスを踊ったバード公爵は、ダンスの順番を今か今かと待ち構えていた令嬢たちを後目に、二人でテラスの外へと姿を消したのである。

その少女以外目に入らないといった状況のバード公爵に、噂が大きくならないわけがなかった。

エリサの表情にコレットは大きいため息をついた。

ダンスは確かに楽しかった。

バード公爵は、とてもなれた手つきでリードしてくれたので、緊張していたコレットもまわりを気にせずダンスを踊れるほどに楽しむことができた。

が、その後あるうことがバード公爵はコレットをテラスの方へ誘い出した。

本当にそこでは二人話をしていただけだったのだが、公爵のことを気にする女性たちが遠巻きに出入りする姿が何度も視界に入ってきた。

だが、王弟であり名門バード公爵家の当主に対して、どうしてコレットから話しを切り上げることができただろう。結局パーティーが終わるそのときまで、まわりからみればコレットがバード公爵を独り占めしていたことになる。

「それにしても、本当に公爵とは初対面でしたの？」

バード公爵のコレットに対する執着の仕方は、気に入った女性に声をかけたというレベルの話ではなかった。あの眼差しはどう見ても、恋する人のものだ。

「王弟殿下ですもの。遠くから拝見したことはありませんけど……」
今年社交界にデビューしたばかりのコレットである。

社交の場で公爵に会うことすら初めてだったというのに、なにがどうしてあんなったのか、彼女自身さっぱりわけがわからない。

「一目惚れ……とか？」

「まさか」

「わかりませんわよ。もしそうだったらどうします？」

「どうするもなにもありません」

きっぱりというと、コレットは甘めのミルクティーを口に運んだ。

「私と公爵では、釣り合いがとれません」

「そうかしら？」

昨日の二人の姿は、とても様になっていたようにエリサには見えただが。

「そうです。それに王弟殿下には、婚約者候補がたくさんおいでになります」

「まあ、ね」

名門貴族で年頃の娘を持っているものは、こぞって公爵に結婚の話を持ち込んでいて噂は後を断たない。バード公爵家としてはつきりと選んだわけではないが、家柄、女性の年齢や人格等からその中でも三人の女性が有力候補となっていることは、社交界では周知の事実である。

「それにしても、昨日のことはなんだったんでしょうねえ」

「本当に」

二人でため息をついて、顔を見合わせたそのとき。

バタン。

テラスへの扉が大きく音を立てて開いた。

見ると、肩で大きく息をしたマカリスター家のメイドが少し髪を乱しながら立っていた。

「ノーラ。お客様の前よ」

さすがのコレットも注意をするが、ノーラは慌てた様子で二人に近づく。

「も、申し訳ございません。ですがお嬢さま、た、大変です」

「なにかあったの？」

「い、今。今玄関の方に……」

「玄関に？」

「ゲ、ゲホ。ゴホ、ゴホッ」

「ノーラ、落ち着いて。どなたかいらっしやったの？」

「王宮からのお使いの方がっ！」

「えっ!？」

驚いてコレットは立ち上がる。

「今、男爵さまがお話なさっていますけれど」

王宮からの使い。

コレットとエリサは顔を見合わせた。

思い当たることといえば、昨日のことだが……。

「まだ仕度をはじめていないの？」

ふいに先ほどノーラが出てきたドアから、コレットの母、マカリスター男爵夫人が姿を現した。

「王宮からで、王妃さまがコレットに御用があるんですって。と、とりあえず、早く仕度をして。ノーラ何してるの、早くコレットの準備を」

「は、はい」

ノーラは慌てて、室内に連れて行くためコレットの手をとった。

「エリサさま。本日はせっかく来ていただいたのに申し訳ありません。今ほどのお話でわかったかもしれませんが、緊急の要件がはい

りまして」

「そのようですわね」

エリサが椅子から立ち上がり、コレットにそっと耳打ちした。

「また、連絡しますわ」

言われて、コレットは大きくうなずくと、エリサに一礼してその場を後にした。

よほど気が動転しているのか、男爵夫人もエリサにあいさつをすませると慌ててコレットの後を追っていく。

王宮からの呼び出しは、おそらく昨日のことに関連しているのだろう。

さすがに焚きつけた側のエリサは、少し責任を感じるが……。

小さくため息をつく、メイドに案内をさせエリサは男爵家を後にした。

6・提案

王宮の中、少し奥まった場所にある部屋に、王と王妃、王家直属の家臣数名が集まっていた。

重苦しい空気を引き裂くように、ダンッと王がテーブルを叩く。

「まったくどうということだ。犯人に逃げられるとはっ！」

苦々しく言葉を吐き捨てる、ギロリとまわりを見渡す。普段温厚な王だけに、怒るとかなり迫力があつた。

犯人。

ルノワール伯爵邸でフィオンに『惚れ薬』を飲ませたのは、メイドに扮した女だった。赤みがかった金髪の女は、ルノワール伯爵邸で他の召使に混じって給仕をしていたらしい。どうも様子がおかしいので捕まえたところ、今回の事件が発覚したのだ。

犯行が途中で失敗したために、飲ませた『惚れ薬』の効果が目的の人物以外に出てしまうことを懸念しての自白だったと思われる。

その実行犯である女が、入っていた監獄から逃げ出したとの連絡が今ほど入ったばかりだった。

昨日の内に所持品などは没収していたとはいえ、これから真犯人の究明には欠かせない人物だ。それを追求も途中だというのにみすみす逃がしてしまうとは、今後の捜査にも大きな影響を与えるだろう。

がいえば、この逃走により、脱獄を助けることができるだけのものが背後についていることがうかがい知れる。

みな口にはしなかったが、頭のなかには現王パトリック・アルフアードに不満をもっている人物たち数人の名前があがっていた。

パトリックは隣国スロンの姫の子供である。

隣国から嫁いできた王妃の容姿を色濃く受け継いでいるため、精悍な顔立ちに髪も目もスロン王家の特徴である鳶色をしている。

しかし、それが今回の事件にも大きくかかわる部分なのだ。

王妃であったスロンの姫君亡き後、現王の立場は国内においては微妙だった。後見となる人物がいなかったため、世継ぎの王子でありながらも立場は弱かったのだ。母親の実家であるスロンでは、そのころ内政に問題が生じていて、パトリックの後見となる力はなかったのである。

そこに国内でも屈指の名家バード公爵の姫が、王の後妻に入ってフィオン王子が生まれた。年の離れた兄である皇太子がいるのに、フィオンを王家の跡継ぎにする意思は前バード公爵にはなかったため、ローレン侯爵家からバード公爵の外孫にあたるディアナをパトリックに嫁がせることによって、ローレン侯爵家とバード公爵家が推す形でパトリックが王位を継ぐこととなったのである。

しかし、現在国内が落ち着いたスロンが、血縁関係をもってこの国の内政に干渉してくるといふ懸念を持っているものも少なくない。そのため国内勢力をまとめるには、外国の血の入ったパトリックではなく、フィオンを王にと推す声は根強い。

王と王妃の間には、まだ二歳になる姫しかいないことも、その要因を強めていた。

フィオンが誰と結婚するか。

それはバード公爵家の問題だけではない。婚姻という形でフィオンを手に入れることができれば、親族としての影響力が強くなる。フィオンを王にと願う人物たちにとっては、またとないチャンスを得ることができるのだ。

今回の惚れ薬の事件。フィオン個人に対しての恋情という話だけではすまされない事情があった。

「コレット・マカリスター嬢、ですか」

王妃がぼつりとつぶやいた。

フィオンの薬の効果の相手。今年社交界にデビューしたばかりの、マカリスター男爵家の次女。デビュー前に王と王妃に拝謁している

が、栗色の髪の可愛らしい少女だったという印象しかなかった。

「マカリスター男爵では……無理でしょうね」

今回の犯人を逃走させることは。

マカリスター男爵領は、王都より北東に位置するさほど大きな領地である。領地の北側にあるレイノー山脈からの雪解け水によって豊かな土壌ができ、そのうえ代々男爵家により治水も整えられつつあることで、作物の生産も安定しているようだ。しかし、あくまで地方領主の域を出てはいない。

中央での役職はなく、社交シーズン以外はほとんどを領地で過ごしているようなマカリスター男爵に、監獄から犯人を脱出させるだけの人脈があるとは考えにくかった。

みなが押し黙ったところに、フィオンの到着が告げられた。

「遅くなりました」

扉が開くと、今話題となっている人物、バード公爵フィオン・アルファードが姿を現した。王と王妃以外の家臣は、フィオンを迎えるためにみなイスから立ち上がり頭を下げる。

「フィオン、体の具合はどうだ？」

「兄上、ご心配をおかけしてすみません。特に体に問題はないんですけれどね」

兄である王、パトリック・アルファードに一礼すると、フィオンは王と王妃に次ぐ上座に腰を下ろした。フィオンが座つたのを確認し、迎えた家臣たちも席に着く。

「本当に、大丈夫ですか？」

先ほどまで診察をしていたため、フィオンと供に入室してきた医師に王妃が問いかける。

フィオンにとって王妃であるディアナ・アルファードは現在義姉となっているが、血のつながったいところでもある。そのため、二人はよく似ている。王妃の方が少しくせがあるものの、プラチナブロ

ンドの金髪や顔立ちなども、王であるパトリックよりもディアナの方が姉弟きょうだいのように見えるほどだ。

「公爵のお体自体には、特に異常はみられないようでございます。

体温や脈なども正常ですし、意識もしっかりしておられます。ただ

……」

問題は、『惚れ薬』としての効果である。

「フィオン、あの夜会で誰かと会うお約束なんかはしていらっしやいましたの？」

事前に会う約束をしていたのなら、それを狙って犯行を行うこともできる。

「約束、ですか？事前に、ということでしたらありませんでした。

邸内に入ってからは、たくさん声をかけられましたけどね」

パーティーのたびに、フィオンに群がる若い女性たちをみな一様に思い出す。

「何かを口にしたのは、いつだったのだ」

王の問いに、しばし考える。

「伯爵邸についてからは、二度ほどでしょうか」

夫人にあいさつをした後、参加していた友人たちと会話をしていたときに運ばれてきたもの。その後、再度伯爵夫人と会い、何人かの女性を紹介された。ホールで人だかりが大きくなると来客者の妨げにもなる。そのため庭園の方へ移動したのだが、確かそのときも飲み物を渡されたような気がする。

「ああ、従者に連れられて薬を飲まされたと聞いた後、水も大量に飲まされましたよ」

フィオンの話を聞いて、王はため息をついた。

実行犯がいらない今ではどちらで服用したのかはつきりはしないが、状況から見ても後者であろう。薬の効果がでるまでの時間がまちまちであるようなのではつきりとはいえないが、フィオンが飲み物を飲んだ後に会った人物を全員割り出す必要があるようだ。

「実行犯の女をすぐにさがしだせ。それと、フィオンが会ったであ

ろつ令嬢を中心に、ルノワール邸の夜会に参加していた人物を洗い出すように」

「はい」

王の命令に、臣下一同頭を下げた。

話し合いも進んだころ、ドアをノックして王家の執事が入ってきた。

「申し上げます。コレット・マカリスター嬢が到着いたしました」
話題の人物の名前が上がり、まわりの視線が執事に集まった。

「私が呼びましたの」
にっこりと王妃が微笑む。

「だって、どんな方かわからないと困ってしまいますでしょう？」
これからのことを考えても、コレットがどんな人物なのかは重要となってくる。いくらコレットが犯人である確率が低いとしても話は別だ。

「コレット嬢がいらっしやっただんですか」

嬉しそうに声を弾ませ、フィオンが立ち上がった。

「兄上、席をはずしてもよろしいですか？」

「フィオン」

王がたしなめ、家臣がざわめく。

「僕が必要なお話はもうおわりましたよね」

聞く耳をもたなそうなフィオンに、王はしぶしぶといった感じで退席を許す。

「フィオン、私も後から参りますので、それまでミス・マカリスターの相手をよろしくね」

「はい。では兄上、失礼いたします」

王妃の言葉にうなずき、王に一礼しフィオンは席をはずす。

噂以上の熱の入れように、王を含め家臣一同深くため息をついた。入室してきたときは、薬を服用したことなど感じさせないほどい

つもどおりのフィオンだった。しかし、コレットに対してのあの態度。今までの女性たちとは比ぶべくもないほどの豹変ぶりだ。

これが『惚れ薬』の効果だとすれば、ものすごい威力である。

「解毒薬はつくれそうなのか？」

証拠品としてあげられた、『惚れ薬』の入っていた瓶をちらりと見て王が問う。

すべて使われたのか、残りは捨てられたのか、犯人を捕まえたときから瓶の中身は空っぽだった。残りから成分を割り出すことは難しい。

「薬の成分がはつきりしないので少しお時間がかかるかと思いが、必ずや……」

それまであの状態のフィオンを、いったいどうするか。

「よろしいんじゃないかしら」

そこにいるみなんの視線が王妃に集まった。

「マカリスター家が今回の事件に関与した可能性はかなり低いのでしょうか？彼女の性格自体に問題がなければ、フィオンのことはしばらく様子をみてさしあげたら？」

「王妃……」

「お言葉ですが、王妃さま。これを黙認しておりますと、王家としての示しがつきません」

「もちろん、犯人を許すとは申してませんわ。解毒薬の研究と犯人の特定はしっかりとしていただかないと。でも、その間ぐらいフィオンの好きにさせてあげたらどうかしら？あの子も公爵としての自覚があった上での行動でしょうし」

……そうだろうか？

ここにいて一同、先ほどのフィオンの様子を思い浮かべて心のかなでつぶやいた。

「それに、フィオン今とっても幸せそうなんですもの。好きな人から引き離すなんて可哀想でしょう」

語尾にハートマークがつきそうなほどの能天気さで、王妃はにっこりと微笑んだ。

7・再会

通された部屋で、コレットはそこにある絹張りのソファに腰を下ろし、誰にも聞こえないくらいに小さくため息をついた。

出入り口には、王家のメイドが用件があればすぐに対応できるように控えているが、それがなんともこの場所では見張られているように居心地が悪い。

そこから視線を動かすと、大きな吐き出し窓からは、中庭と呼ぶには広すぎる庭園が広がっていた。明るい日の光をうけて、木々の葉がきらきらときらめいている。

以前王宮に来たときは、王と王妃に拝謁するためだった。

そのときは王宮の公の場所だったが、現在いるこの場所は王宮のさらに奥、王家の方々の住居スペースなどを主たる目的とする場所である。

(私、何かしたかしら……)

王家と関係する立場に、マカリストー男爵家はいない。

そう考えると昨日のことで呼ばれたと考えるのがもつとも有力だが、バード公爵とダンスを踊っただけで王妃から直々に声がかかるとは考えにくかった。

(これ以上公爵に近付かないように言われるのかしら。……これが一番ありそうかも)

自分から率先してバード公爵に近付いたわけではないが、地方領主の娘があまり王弟に近付くのは問題だと判断されたのかもしれない。

重い空気のなか、ドアがノックされメイドが扉を開いた。

慌ててコレットはソファから立ち上がり、頭を下げる。

「コレット、よく来たね」

その場に明るい声が響く。

王妃が入室してくるものとばかり思っていたコレットは、頭の上に降ってきた声にあれ？と顔を上げた。

そこにいたのは、昨夜の夜会、帰り際まで自分を解放してくれなかった人物。

「バード公爵」

コレットが驚いている間に二人の距離をつめ、フィオンはそっと彼女の手をとった。貴婦人にするように、彼女の手にもそっと唇を落とす。

「昨夜は楽しい時間をありがとう」

につこりと微笑むと、コレットの手をとったまま彼女をソファに座らせ、その隣にフィオンも腰を下ろした。

距離が近くないかとコレットは思うが、彼に手をとられたままじっと見つめられていては動くに動けない。

なにか気の利いたことでも言えればいいのだろうが、微笑みながら自分を見つめるエメラルドの瞳に、コレットは何を言ったらいいのかわからなかった。

昨日といい、今日といい、いったい何が起きているのか。

「あの、公爵」

「フィオン」

「はい？」

「名前で呼んで」

いや、さすがにそれは……。

いくら本人に言われたからといって、さすがにコレットには抵抗があった。

まっすぐな視線に耐え切れず、コレットの体が少し後ろにさがる。しかしすぐに背中にソファの肘掛けの部分があたったことを感じ、それ以上体を離すことができなかった。

(ど、どうしたらいいの〜)

心の中で叫ぶが、もちろん助けてくれる人物はいない。

視線をさまよわせた先にいたメイドは、よく教育されているのが慣れているのか、コレットと目を合わせるそぶりさえもなかった。

「コレット」

名を呼ばれ、コレットはフィオンに視線を戻した。

気がつくともコレットが離れた分だけ、フィオンがその距離を詰めていた。いや、先ほどよりも距離が近くなってはいないだろうか。

「僕のことを名前で呼んで欲しい。フィオン、と」

「……」

嫌と言える雰囲気ではない。

というか、嫌だといつても諦めてくれる雰囲気ではなさそうだ。でもでも……。

「フィオン、マカリスター嬢がとまどってらっしゃるわ」

気がつくとも、王と王妃が扉の前に立っていた。

慌ててコレットは立ち上がり頭を下げる。左手だけはフィオンにとらわれたまま……。

「よく来た。頭を上げなさい」

王の言葉に、コレットはゆっくりと顔を上げた。

「急にお呼び立てごめんなさいね。あなたに大切なお話があったものですから」

「いえ。陛下と王妃様にお会いできて、とても光栄に存じます」

そういうと、コレットは小さく腰を落としてあいさつをする。

じつと王に見られていることに気がつき、コレットの背中に冷たい汗が流れた。

(な、何か変……?)

パニックになりそうな頭を回転させて、はたと気づく。

左手はフィオンにとられたままだ。

だが、しっかりと握られた手を振り払うことは、フィオンが離してくれない限り難しそうだった。

「お話はここではなんですので、私の部屋に参りましょう」
そんなことは気にもせず、王妃が言う。

「そうそう、陛下とフィオンは遠慮してくださいね」
二人とも初耳だったらしく、えっ？と王妃を見る。

「私がマカリスター嬢をお呼びしましたのよ？それに、お二人がいては話がしにくいですわ」

ねえ、といった感じで王妃はコレットに笑いかける。

同意を求められても、王と王弟に対して邪険にするようなことを言えるわけがない。

「王妃」

「あなたが出てきては、マカリスター嬢が緊張してしまうわ。フィオンもいいわね？」

ぎゅっと左手が強く握られ、コレットは驚いてそちらをみる。

フィオンと視線がからみあった。

瞳に宿るのは、先ほどまでとは違い寂しそうな光だった。

握った手を、フィオンはゆっくりと引き寄せて唇を寄せる。

「コレット、また会えるのを楽しみにしています」

そういつて、やっと彼女の手を開放した。

「さあ、まいりましょう」

いまいち納得のいかないような男性陣を後目に、王妃はコレットを部屋の外へとそっと促した。

部屋に残されたのは現王パトリックとフィオン。

切なげに二人が出て行った扉をみていたフィオンに、パトリックは大きいため息をついた。

「まったく、お前の変貌ぶりにはみな驚いていたぞ」

兄の言葉に、フィオンはやっと視線をパトリックへと向けた。

「そうですか？」

「薬の効果を知っても、マカリスター嬢に会いたいとはお前らしく

ないんじゃないか？」

女性に対してとても優しいフィオンである。

コレットのことを思えば、これ以上彼女を巻き込まないようにする方がお互いのためではないのだろうか。

それに、あえて薬が関係した女性を選ばなくても、他に相手はいくらでもいそだが。

「僕は、とても僕らしい判断だと思いますけどね」

兄である王に、フィオンは微笑む。

「僕は何も変わっていませんよ。彼女を愛しいと思うこと意外は」
薬を飲んでしまったからといって、今までの考えや判断が侵されてしまったわけではない。

フィオンをじっと見た後、王はため息をついた。

フィオンのことは信頼している。

自分が現在この国で王としていられるのも、前バード公爵と弟であるフィオンのおかげだとパトリックは知っている。

前バード公爵にその意思がなくなるとも、フィオン自身が王になりたいと考えればいくらでも手はあったはずだ。パトリックが王になった今でさえ、フィオンが望めば王位を手に入れることは決して無理ではない。

だが、フィオンはそれを望まない。

まわりの巧みな誘惑に耳をかさず、だが、国内の貴族と王家との関係を崩してしまわないように激しく突っぱねることもせず。

年の離れた弟が、この若さで国内の重鎮ともいえる面々とわたり合うことは、かなりの重圧になっているはずだ。しかし、いつも軽い口調でまわりにはそんなことを感じさせたりはしなかった。

「僕を信用してくれませんか」

決して薬の効果だけに踊らされているわけではない。

真剣な表情のフィオンに、パトリックはじっと見つめた後にふうと息を吐いた。しばらくは二人の様子を見守るしかないようだ。

パトリックはフィオンの言葉に答えるように、彼の肩にポンと手

を置いた。

8・紅茶

王妃の私室らしき部屋に通されテーブルにつくと、王妃はそこにあつた呼び鈴をならした。

すぐに、カートを押ししたメイドが入ってくる。

そちらを見もせず、王妃はコレットにっこりと微笑んだ。

「ごめんなさいね。急におよびたてして」

「い、いえ。とんでもありません」

入ってきたメイドにちらりと視線を動かしていたコレットは、声をかけられ王妃を見た。すぐに紅茶が入れられ、コレットと王妃の目の前に置かれる。それとともに王妃の前には小さな小瓶が置かれた。

その小瓶をしなやかな指でつまむと、王妃は目の前の高さに持ち上げる。

「これがなにかわかりました？」

キラキラと光る綺麗な小瓶をじっとみる。

何か……と聞かれても。

「香水の瓶……でしょうか？」

「これは紅茶を美味しく飲むための香料のようなものですわ。入っていますからどうぞ召し上がってみて」

にっこりと微笑み、王妃は目の前の紅茶を飲むように促す。

なにか腑に落ちない気もするが、コレットは目の前のカップに手を伸ばした。

ふんわりと上がる湯気から、薔薇のような匂いがした。一口飲むと少し甘いような味がする。

「どうですか？」

「はい。美味しいです。お花のようないい香りがします」

その答えに満足したように、王妃はにっこりと微笑んだ。

「気に入っていただけただけのならよかったですわ」

そういつと、王妃も自分の紅茶に手をつけた。

「それで、今日お呼びした件なんですけれど」

「はい」

「まあ、だいたい察しはついていると思いますけれど、フィオンのことですね」

「……はい」

「驚いたでしょう。急にですものね」

「は、はあ」

「こうなってしまった以上、あなたも無関係ではありませんのでお話しますけれど。フィオンは惚れ薬を飲まされたようなのです」

王妃の言葉に、コレットはパチパチと目を瞬かせた。

「惚れ……薬？」

「そう。それであなたを見てしまったらしいのよ」

コレットの顔が青ざめる。

震える手を何とか動かし、カップをソーサーの上に戻した。

「もちろん、あなたが薬を入れたとは思っていないわ。こちらでもいろいろ調べていますから。ただ、フィオンがあの状態なので、ミス・マカリスターには少し協力をお願いしたいの」

「協力……ですか」

「そう。フィオンのお話相手になってくださらないかしら」

「薬のためならば、お会いしないほうがよろしいのではないでしょうか」

変に噂にでもなれば、王弟殿下としても問題なのではないだろうか。

「フィオンの様子を見ていたらわかると思うけれど、あのこかなりあなたのことが気に入ったみたいなのよ」

「でも、それは……」

「たとえば薬のせいだったとしても、それは本人にはどうすることも

できないでしょう？恋する気持ちは自分でコントロールできるものではないし。お願いできないかしら」

コレットの額に嫌な汗がにじむ。

王妃直々に頼まれて、断れるわけがない。だけど、これを承知するのはあまりにも問題が多いような気がするのだが。

「ね？」

「……………はい」

にこにこ微笑む王妃には、決して相手に『否』と言わせない雰囲気があった。

そんな王妃に対し、コレットはうなずくしかなかった。

コレットを退出させると、時間を少し置いて王が部屋に入ってきた。

「王妃。どうだった？」

「ミス・マカリスターはやはり犯人ではありませんわ」

目の前に置いてある小瓶を見ながら、王妃は答えた。

お茶を入れるところを会話で気をそらし、さらに犯行に使われた『惚れ薬』の容器を目の前にちらつかせる。

犯人であるならば、それが何の容器であるかわかるはずだ。

もし見ていなくても、昨日の今日である。自分にやましいところがあるものは、いろいろな想像力が働きお茶を飲むことができないだろう。

そして犯人ならば、絶対に薬の味など判るわけがない。飲んだらどうなるのかわかっているのに、それを試しに飲んでみるようなことをする人間はいない。紅茶に別の味が混じればそれだけで不安に駆られるはずだ。

実際紅茶に入れたのは別の容器に入っていた薔薇の香料で、特に飲んでも問題はなかったのだが。

コレットはそれを何の違和感もなく飲んだ。

特に手が震えることも、体が受け付けなくなる事もなかった。少し緊張していた様子だったが、王妃の目の前である。それは許容範囲だろう。

フィオンと二人でいたときも、彼の甘い言葉につつとりとして自分を見失うようなこともなかった。ちゃんと自分の立場をわきまえている少女に、王妃は満足そうに微笑む。

「彼女なら、フィオンをまかせられそうですわ」

「王妃、何を考えている」

「何のことですか？」

「さっきの会議でもそうだ」

みなの前で、あえてコレットとフィオンを近づけようとしていた。薬が関係していることである。今後のフィオンやコレットのことを考えれば、どうしたって二人をあまり接触させないほうがいいと思われるのだが。

「王妃」

「……」

「ディアナ！」

強い口調で名前を呼ぶ王に対して、王妃は涼しい顔でカップを持ち上げると、紅茶をゆっくりと口に運んだ。

「マカリスター男爵家が今回の事件に関与した可能性ははっきりいってありませんわ」

カップを両手でもったまま、王妃は口をひらいた。

「マカリスター男爵家の令嬢がフィオンと会う確率はとても低いですし、ルノワール伯爵夫人に紹介をお願いするのも不自然ですしね」
コレット個人としても犯行は難しい。そして、地方の小領主であり、中央の政治にもあまり関与する職にもついでないマカリスター男爵も、フィオンをそこまでして取り込むメリットはない。それは先ほどの話し合いでもみな意見が一致したところだ。

もちろん娘の結婚相手としてフィオンは誰もが羨む相手ではある

うが。

「それで？」

「ならば、犯人にとってこれは不測の事態。だったら、フィオンがマカリスター嬢と仲がよろしいことを見せ付けてやればいいのです。それを引き離すなんて、犯人の喜びそうなことをこちらからする必要なんてないですわ」

犯人は目的を失敗したのだ。

その失敗の尻拭いをこちらで率先してする必要などない。

王家として二人の仲を引き裂かないのなら、それを不都合と思う人間が何らかの策を講じるしかない。

につこりと王妃は王に笑いかける。

その艶やかな笑みに、なぜか王の背筋に冷たいものが走った。

「みなさん、どんな反応をするのか楽しみですわね」

人の口に戸は立てられないとはよくいったものである。

マカリスター男爵家の町屋敷タウンハウスの居間で、コレットは大きいため息をついた。

王立学校の寄宿舎から戻ってきていた弟が、読んでいた本からちらりと視線を上げたが、コレットを一瞥いちべつしただけで再び視線を本へと戻す。

そんな弟に気がつかないまま、コレットは昨日のエリサとの会話を思い出していた。

「惚れ薬って本当のことですか?」

いきなり訪ねてきて、開口一番がそれだった。

あまりの剣幕に、コレットの方がたじろぐ。

コレットが王宮に呼び出されたのは三日前のことだ。いったいどこからそのことが洩れたのだろうか。

何も言わないコレットにエリサは詰め寄った。

「本当ですよ!?!」

「あの、どこでそのことを?」

「質問しているのはこちらですよ。どこでだなんて、もう王都中の噂です!」

いらいらしたように話すエリサはメイドが引いたイスに座ると、キッとコレットを見る。

「それで、本当のことですか?」

「……………はい」

小さく頷くコレットに、エリサは大きく目を開いた。

「なんてことなのっ!」

そう言うと右手で顔を押さえる。テーブルの上に置かれた左手は怒りのためか小刻みに震えていた。

バード公爵にコレットを預けたのはエリサだった。

こんなことになるのなら、あの時どうしたって二人を一緒になどしなかったのに。

親友のためを思ってしまったことが、思いっきり仇になってしまったのだ。

押し黙ったエリサの向かいに、コレットも腰を下ろした。

「それで？」

「え？」

つぶやくような言葉だったので、よく聞こえなかった。

エリサは顔を上げて、しっかりとコレットを見る。

「それで、バード公爵とか王家の方とか、なにか言って来ましたの？」

「えっと……」

言うてもいいのだろうか。

だが噂が広まっている以上、黙っていても仕方がない。

先日王妃に呼ばれたときに、協力を依頼されたことを話す。

「とりあえず、王家の方はコレットを疑ってはいないのね」

エリサの言い回しに、コレットは眉根を寄せた。

その言い方だと……。

「わたくしのところにもいろいろ噂が聞こえて来ましたのよ」

その中には、犯人は捕まったというものや逃げられたというもの。そして何より、フィオンの恋の相手となったコレットが仕組んだことではないかという声まであった。

冷静に考えれば、マカリスター男爵家がおいそれと王弟であるフィオンに近づけるはずもないのだが、一か八かの賭けで行ったのではないかという話まででている。

そんなことを考えるのだったら、コレットだけではない。あのときパーティーに来ていた令嬢すべてが犯人の可能性がある。だいた

いにして、女性と同じぐらいの人数の男性もいたのだ。一か八かをするには、あまりにも危険すぎる。

もちろんコレットがそんなことをすることなどありえないと、エリサは十分わかっている。

つい最近まで婚約者一筋で来ていた彼女が、その傷もいえないうちから他の誰かに心を許せるほど器用なことができるわけがない。

「それにしても、どういっつもりなのかしら」

「え？」

「王妃さまも、バード公爵もです。あれだけ人が集まる夜会でのことですし、噂が広まる可能性は十分にありますでしょう？それなのに」

「……断りきれなくて」

エリサの剣幕に、コレットが申し訳なさそうに答える。

「王妃さま直々に言われたなら、断れなくて当然です。問題は公爵ですわ。薬の効果が切れたらどう気持ちが悪くかわからない女性に對して、一緒にいたいなんていい加減すぎます」

噂が広まれば広まるほど、薬の効果がなくなったときに受けるコレットのダメージはいかばかりだろう。

これ以上会わなければなんとかコレットの体面も保たれる。しかし、もしこのまま言われるがままにバード公爵と会っていたら、いったいまわりからなんとと言われることか。

身の程をわきまえず公爵に近づいたのだの、いい気になっているだの言いたい放題言われた挙句、今後のコレットの縁談などにも響いてくるかもしれない。

コレットのことを考えれば、公爵と一緒にいるという提案はできないはずだ。

「いいですか？コレット」

「はい」

「王妃さまに協力を乞われたからといって、バード公爵がコレットに会わないと決めたならなんとかかなると思うの」

バード公爵がコレットに執着を見せているからの提案だ。

公爵もいきなり惚れ薬を飲まされたのだから、きつと混乱しての行動だろうとエリサは思う。ならば、少し落ち着いたならば彼女の状況も分かってくれるはずだ。

「きちんとお断りしていらっしやい。一緒にはいられませんって。それがお互いのためなんですからね」

コレットの両手をしっかりと握って、エリサは真剣に言う。

そんな彼女に気圧されるように、コレットはこくりと頷いた。

冷めてしまったお茶を口に運び、コレットは再びため息をついた。噂が広まっているならば、コレット個人としてはエリサの言うとおり、このまま公爵ともあわずに静かにしているのが一番いいのだろうと思う。

しかし一度引き受けた以上、それを今更無下に断るわけにもいかない。

(それにしても……)

「私って、そんなに魅力ないかしら……」

不意に聞こえた姉の言葉に、アンリ・マカリストは飲んでいたお茶を吹き出した。読んでいた本にお茶がかかり、慌ててカップをテーブルの上に戻す。胸ポケットからハンカチーフを取り出しすぐに本のお茶を拭き取るが、薄く跡が残ってしまった。

テーブルにこぼれたお茶は、近くにいたメイドが拭き取って新しいものを淹れなおしている。

惨事の原因ともなった姉を見ると、貴族の令嬢らしからずぼんやりと頬杖をついていた。

「いきなり何？」

不機嫌そうに声をかけるが、コレットはそんなことを気にもとめ

ず身を乗り出して弟の顔をじつとみた。

「ねえ、私ってそんなに魅力ないのかな？どう思う？」

「どうもなにも……」

そんなことを訊かれても、なんと答えていいのか困る。

だいたいにして……。

「弟にそんなこときくなよな」

「……そうよね。ごめんなさい」

そういつたため息をつくとき、コレットは力が抜けたように体をイスの背もたれにあずけた。

それにしても……と、アンリはしょんぼりしている姉を見た。

弟の目からみても、コレットの容姿や性格はそんなに悪くはないと思う。この間この邸宅に遊びにきた王立学院の同級生の間で、途中あいさつをしたコレットが可愛いと話題になった。ただ十七歳にもなつて、四つも年下の弟の同級生から可愛いといわれて嬉しいかどうかは別の話なので、本人には伏せているが。

だが、最近の一連の事柄は、コレットの容姿だとか性格に問題があるという話ではない。

婚約者には振られ、次に声をかけられた相手は惚れ薬をのまされていた。これだけ次々といろいろなことがあるれば、自分になにか問題があると思いたくなる気持ちもわからないではない。

「で？今をときめくバード公爵に迫られて、なにが不満なわけ？」

「意地悪ね」

理由を知っているくせにと、コレットはすねたように弟を見た。

数日前、コレットは王妃に呼ばれ王宮へ。さらにその次の日には両親まで王宮へと呼び出された。

詳しくは教えてもらえなかったが、今後のことなども含めいろいろ説明があつたらしい。

それはそうだろうとコレットは思う。

薬のせいなのに、娘が王弟から本気で求愛されていると勘違いされてしまつては、王家としても困るだろう。

この状況はフィオンに薬の効果が見れている間だけで、決して継続して続く事柄ではない。

もちろんマカリスター男爵家にもそれ相応の迷惑をかけることになるのだから、その件を前もって謝罪と協力を願い出たということもあつただろう。

その状況をわかつてるくせに、慰めもしてくれない弟に非難の視線を送る。

別に慰められたからといって何が変わるわけではないのだが、少しぐらい優しい言葉を掛けてくれても罰は当たらないと思う。

「悪い方ばかりにとるなよ。いいことだつてあるだろ？」

「いいこと？」

「王家の人たちとつながりをもてるなんて、そうそうあることじゃないぞ。それも向こうからの頼みごとなんだから」

男爵家としては、協力しておいて損はない。

下手に拒否して相手の心証を悪くしてしまつては、変な疑いを掛けられる可能性も否定できない。

こちらには疚やましいところなどないのだから、堂々としていればいいのだ。

「王宮なんてめつたにいけるものでもないし、いろいろ見てくるのもそのうち話の種になるって」

「……どういふ慰め方だろう。」

「だいたいにして、コレットだけが大変なんじゃないからな」

「お姉ちゃんって呼びなさいっていつも言つてるのに……。どういふこと？」

「蓮いちれんたくしやう托生たくしやうつてことだよ。コレットが失敗したら、こっちだつてままずいんだから」

「失敗つてなによ」

怒つたように睨んでくるが、全然迫力がない。

「例えば、公爵の機嫌を損ねるとか」

ピクリとコレットの肩が反応する。

「例えば、王さまや王妃さまの不興をかってしまつとか。とにかく、コレットの態度ひとつで男爵家の立場はすつごく変わってくるんだから」

「わ、わかつてるわよ」

「本当かな。とりあえず」

アンリは淹れなおされたお茶を口に運んだ。

「王妃さまのお茶会に呼ばれてるんだろ？準備しなくていいの？」
遅れたら、とても失礼なことになる。

「……わかつてるわよ」

コレットはイスから立ち上がった。

言い負かされたようで悔しいが、このままここにいってもまた何を言われるかわからない。

それにアンリの言うとおり、お茶会に遅れたら大変なことになる。なにしろ王妃さま直々の招待だ。

両親が王家を尋ねたときにうけとつてきたのだが、父親のマカリスター男爵は複雑そうな顔だった。それはそうだろう。娘がやっかないことに巻き込まれてしまったのだから。

反対ににこやかにかえつてきた母親は、お茶会のためにドレスはどれにするかなどを嬉々として選んでいた。

どうやら王宮でバード公爵にも会つたらしい。

とつても素敵な人だったと、ニコニコしながら話していた母親を思い出したため息をつく。

エリサの言うことももつともで、アンリの言うこともよく分かる。だが、相手の心証を悪くせず、公爵と会わないように……というのは、かなり難しそうだ。

（頭、痛くなりそう）

コレットは手で額を押さえながら、今日何度目か分からないため息をついた。

10・お茶会

「みなさんに、私の新しいお友達を紹介いたしますわ」

うららかな午後の日差しの中、ガーデンパーティーとなったお茶会での王妃の言葉に、みんなの視線がコレットに集まった。

今噂の令嬢に、招待客の目は何も言わずとも興味津々の色をたたえている。

今日の招待客は十人ほどで、王妃のお茶会としては少ないほうだった。それも、全員が結婚している女性である。

いえば、バード公爵の結婚相手とはなりえない人たちだけが招待されたことになる。

そのためかまわりの視線は値踏みするようなものではなく、純粋に現在噂となつている少女への興味といったものの方が大きかった。「コレット・マカリスター嬢ですわ。みなさん、仲良くしてさし上げてね」

紹介され、コレットはドレスのすそをつまみ、膝を落としてあいさつをする。

この場の招待客は年齢には多少の幅はあるものの、社交界でも交流が厚いらしく、コレット以外はみなが知り合いであるようだ。

まわりの雰囲気は好意的であるが、それでもやはり居心地の悪さはぬぐいきれず、コレットは緊張した面持ちで進められるままイスに腰を下ろした。

それを待つていたかのように、まわりから声がかげられる。

一通りのあいさつとそれぞれの紹介がすんだころ、のんびりとした口調でいきなり核心をついたのはオーエン伯爵夫人だった。

「この方が、フィオンさまのお相手ですの？」

あまりにストレートな言葉に、コレットは言葉もせずに伯爵夫人の顔を見る。

しかし、驚いているコレットをよそに会話は続いていく。

「そうなの。フィオンがとっても気に入っているみたいで」
薬のせいなのにと、コレットは心の中でつぶやくが、王妃はそんなことを気にも留めないようににっこりと微笑んだ。

「将来は、私の義妹いもつとになるかもしれませんから、みなさんよろしくね」

王妃の言葉にコレットはぎよつとする。

「王妃さま!？」

話が変な方向にいつている。

王妃に協力を依頼されたのは、フィオンの話し相手ということではなかったのか。

というか、薬のせいなのに、どうしてそれを無視して話が進んでいるのが、コレットにはまったくわからなかった。

「あら、フィオンではご不満かしら？」

「え?あの……そうではなくて」

「では、お好き？」

急な展開に、コレットの頭はパニック寸前だ。

まわりの女性がよくすすくと笑う。

「王妃さま。マカリスト嬢が困ってらっしゃいますわ」

「まあ、ごめんなさい」

コレットの不安そうな表情に、王妃が謝る。

「つい、可愛らしい義妹いもつとができるかもしれないと思うと嬉しくて」

(義妹!?)

驚いて声もでない。

「義姉の口からいうのもなんですけれど、フィオンはとて面白い旦那さまになると思うのよ」

そういう問題ではないのにと、コレットは心の中で叫ぶ。

「あなたのことも、とっても愛しく思っているようですよ」

それは薬のせいだからで……。

「ね?考えてみてくれないかしら」

考えるもなにも、考える余地などあるのだろうか。

いくらなんでも、受け入れられるわけがない。

それより、なぜまわりの人も疑問に思わないのか。惚れ薬の噂がエリサのところまで届いているということは、ここにいる女性たちの耳に入っているはずである。

それなのにまるでこれでは、バード公爵が本当にコレットのことを好きであるかのようだ。

だが、薬のことをコレットが言うのもはばかられる。

噂はあくまで噂。

本当にみなが知っているかどうかも分からないのに、王妃があえて口にしないそれをコレットから言ってもいいのだろうか。

「ミス・マカリスター」

隣の席に座っていたバークリー侯爵夫人が、そっとコレットに耳打ちした。

「みんな薬のことは知っていますよ。でも、その上で王妃さまはこうおっしゃられてるのよ」

不安な表情を浮かべるコレットに、バークリー侯爵夫人は優しくにっこりと微笑んだ。

薬のことをみなが知っているということは、ここにいる全員がコレットを犯人だとは思っていないことになる。犯人だと疑っているのなら、いくら王妃に言われたとはいえ、そんなにすんなり受け入れられることではないだろう。

それは信頼してもらえたということと喜ぶところなのかもしれないが……、しかしだからといってあまりにも状況を受け入れすぎではないか。

王妃が、王家派のフィオンの結婚に利害の生じない女性たちばかりを集めたことも、この状況を受け入れやすくしている要因であることを、コレットは知らない。

「フィオンさまといえば、ここにいるみなさんにとっては弟みたいなものですよ」

急な話に、性急にコレットに返事を求めては逆効果になると、才

「エン伯爵夫人は少し話題を変えた。」

「王妃さまとわたくしたち、小さいころからのお友達ですので、フィオンさまにもよくお会いしてましたの。」

小さいころのフィオンさまはこんなんだったと、みなのおい出話に話題が移り、コレットは小さく息を吐いた。

春の日差しは庭園は、花の香りをまとった風が心地よく通り過ぎてゆく。

しかし、握り締めていたコレットの手には、じつとりと汗がにじんでいた。

「お邪魔しても、よろしいですか？」

しばらく思ひ出話に花が咲いたころ、ふいにコレットの後ろで声がした。

聞き覚えのある声に振り返る前に、その声の主はコレットの肩にそっと手を添える。

イスに座ったまま見上げたそこには、エメラルドの瞳が間近にあった。

目が合い、バード公爵はにっこりとコレットに微笑みかけた。

王弟の登場に、まわりにいる夫人たちはイスから立ち上がり、腰を軽くかがめてあいさつする。だが、コレットはフィオンの手が肩にあるため立ち上がることができない。

しかし、まわりはそのことに気にも留めていないようだ。

「みなさんで何を話されていたのですか？」

みなをイスに座るよう促して、フィオンが尋ねた。

とても楽しそうに会話が弾んでいたようにみえたが。

「くすくす、もちろんバード公爵のことですよ。」

「今一番の噂的ですよ。」

「僕のことはいいですけれど、あまりコレットをからかわないでく

ださいね。嫌われてしまつては困りますから」

「まあ」

噂どおりの執着ぶりに、まわりからくすくすと笑い声が洩れた。公爵を嫌う女性がいるのなら、お目にかかつてみたいものだ。

「公爵がいかに素敵なのか、マカリスター嬢にお話していたところでしたのに」

その言葉にフィオンは肩をすくめ、コレットの顔を覗き込む。

「本当に？」

エメラルドの瞳に間近で見つめられ、コレットはただ頷く。

と、とりあえずフィオンの話を聞いていたことは本当である。

その返事に、フィオンはにっこりと微笑んだ。

「少しは僕のことに興味がわいた？」

「えっ？」

「残念」

くすりと笑つて、フィオンが顔を上げる。

「姉上。今日は、彼女をおかりしてもよろしいですか？」

「どうしましょう」

王妃がまわりをみる。

今日お茶会に集まつているのは、王妃さまと仲のよい既婚女性である。

そのため王妃が認めている女性を、フィオンから引き離そうというような気持ちの人間はいなかった。

『惚れ薬』が関係したことは聞いていても、フィオンの態度を見ていれば薬の効果というよりも、フィオンがコレットに一目惚れしたといわれたほうがしっくりくる。

薬を飲まされた本人であるフィオンがコレットといることを望んでいる上に、王妃もそれを容認している。何か考えがあるのなら、自分たちがそれを妨げるようなことは必要ないだろう。

「王妃さま。あんまり焦らしては、フィオンさまがお可愛そうですわ」

バークリー侯爵夫人がくすくすと笑いながら言った。まわりの夫人たちも同意見といった感じで笑い声が洩れる。

「よかったわね、フィオン。みなさんの許可ができてよ」

王妃が楽しそうに笑った。

フィオンは、まわりの女性が思わず見惚れてしまうように微笑む。

「ありがとうございます」

そういうと、コレットの手をそっととる。

「みんなと楽しんでいるところごめんね。僕に、この庭園を案内させてくれないかな」

先日からまわりの迷惑のままに動かされているようで、コレットは自分が嫌になってくる。

しかしこの状況で、まわりの夫人たちと王妃に退出の許可を出されて、それを断ることはできなかった。

それでも。

(チャンスなのかもしれない)

バード公爵と直接二人で話しをすることができればなら、この状況を変えるきっかけができるかもしれない。

コレットはしっかりとフィオンをみて、彼にとられた手に力を込めた。

中庭を抜け、王宮の裏手へとフィオンとコレットは足を進めていく。

散歩道として白い石が敷かれた道のまわりに植えられた木々は、心地よい風をうけさわさわと涼しげな音を立てていた。それに合わせ、木漏れ日が石畳の上でちらちら揺れる。

フィオンの腕に手を添える形で、コレットは彼の隣を歩く。

これではまるで恋人同士の距離だと、コレットは小さくため息をついた。

しかし、一度フィオンにとられた手を無理やりはなすことは、さすがにためらわれた。

それにしてもと、コレットは先ほどのことを思い返す。

いくらなんでもおかしくはないだろうか。

どうして、誰もフィオンとコレットが一緒にいることに疑問を持つてくれないのか。

もちろんそれは、王妃がそういう人をこのお茶会に招待しなかったというのが一番の理由であるのだが、コレットはそこまでの社交界での勢力図などは知るべくもない。

コレットはちらりとフィオンの横顔を見る。

コレットの歩調に合わせてゆっくりと歩きながら、にこやかに王宮を案内しているフィオンがコレットには一番わからない。

コレットに知らされたくらいである。『惚れ薬』のことを当事者であるフィオンが知らないはずはないと思う。

それなのに、どうして自分から進んでコレットに近づいてくるのだろうか。

バード公爵位をもち王弟でもある彼は、いわば『選べる』立場の人間である。あえて『惚れ薬』で好きになってしまったような女性

を選ぶ必要もないし、なんといつてもバード公爵家とマカリスター男爵家とでは身分がつりあわない。

それだけ薬の効果が強いのであればまわりの人間が止めるだろうに、王妃を始めとして彼の行動を強く制止する人がいないのは、どう考えてもおかしいと思う。

考えれば考えるだけ、なんだかコレットは腹が立ってきた。

どうしてみんな平気な顔でいられるのだろう。

王弟に薬が盛られた。その事実だけでも大変なことなのに、どうしてここでは当事者であるフィオンを筆頭に、そんなことを気にする様子さえないのだろう。

庭を案内されていたコレットの歩調が遅くなったのに気づき、フィオンはおやつと振り返る。

可愛らしい眉根を寄せ、コレットは何か考えているようだ。

「どうしたの？難しい顔をして」

フィオンの問いにはっとしてコレットは顔を上げた。

やはりここははっきりしておいたほうがいいと思う。

「公爵。あの……」

「フィオン」

「えっ？」

「そう呼んでといったよね」

「それは……」

確かに聞いたけれど、そんなおいそれと呼べるものではない。

「……公爵？」

「……」

「バード公爵」

「……」

どうあっても返事をしてくれないらしい。

全然聞こえてないように視線をはずすフィオンに、コレットは困ってしまう。

名前を、やはり呼ばなくてはいけないのだろうか。

大きく息を吸って、覚悟を決める。

「フィオン……さま」

「なに」

にっこりと微笑んで、フィオンはコレットを見た。

「お話があります」

「話？」

「はい」

真剣な表情のコレットに、フィオンは少し考えたような表情をした後、裏庭の方に視線を動かした。

「それじゃ、少し座ろうか」

そういうと、フィオンは視線の先にある東屋へとコレットを促した。

背中に手をあて、フィオンはコレットを裏庭の東屋へと誘う^{こびな}。

東屋は、王宮の裏に広がる花の庭園をちょうど見渡せる場所にあった。白亜色の石作りの東屋にはまわりに壁はなく、庭を楽しむためにつくられたものだ。

東屋のなかにあるベンチに、二人は腰を下ろした。

やわらかな春の風が、東屋の中まで花の甘い香りを運んでくる。

「フィオンさまは、お嫌ではないのですか？」

「何が？」

「何がって、薬のことはご存知なんですよね？」

自分が惚れ薬を飲まされたことを。

「ああ、そのこと」

あまり気にしている様子もない。

「平気なんですか？」

「まあ、びっくりはしたよね。いきなりだったし」

びっくりって、そういうレベルの問題ではないと思うが。

「いいんですか？私と一緒にいても。私、すっごく嫌な女かもしれないよ？」

「どんなふうによ？」

「えっ？」

そう切り返されると思っていなかったので、口ごもる。

例えば……。

「薬の効果をいいことに、フィオンさまのこと独り占めにしたり……とか？」

フィオンには婚約者候補がたくさんいる。それなのに、身分の低い女性がフィオンを独占することは、バード公爵家としてはよくないのではないだろうか。

もちろんマカリスター男爵家も貴族の一員である。庶民というわけではないのだから、公爵家との縁談もまったくありえない話ではない。だが、王弟である彼には他にふさわしい女性がたくさんいるのは確かなのだ。

「困るようなわがままをたくさん言ったりとか」

惚れた弱みに付け込むことなど、この状況では難しくくない。

「嬉しいよ」

「えっ？」

「君が僕を独り占めして、そしていろんなわがまままで僕を振り回す。そうなってくれたら嬉しい」

本当に嬉しそうに微笑まれそんなことを言われたら、いったいどうすればいいのか。

「で、でも、私が薬を飲ませた張本人だったらどうするんですか。

犯人の思惑通りになっってしまうですよ？」

「そうなの？」

コレットの顔を覗き込むように見つめる。

なんだか目が楽しそうなのは気のせいだろうか。

「……違いますけど」

くすくすとフィオンは笑う。

もちろんフィオンには、まわりから言われる前からコレットが犯人でないことはわかっている。

いくらなんでも、人を見る目はそれなりにあるつもりだ。
自分の敵となるか味方となるか。

それが分からなければ、この貴族社会を乗り越えていくことなどできない。

味方のような顔をして、その実その人物が一番気をつけなければいけないことなど珍しくない。

そう、フィオンが望むと望まざるとに関わらず、彼を担ぎ上げ王へと望む者たちのように。

「君でよかった」

つぶやくように言われた言葉。

その言葉の意味に、コレットはえっ？とフィオンを見る。

フィオンのまっすぐな瞳がそこにはあった。

フィオンにも、コレットが不安になる気持ちはわからなくはない。
いや、良識ある令嬢あるのならばそれは当然のことなのだろう。

彼女のことを思えば、一緒にいないほうがいいのかもしれない。

それでも、彼女を欲しいと思ってしまう。

それは自分のわがままだ。

今日の茶会は、自分がコレットに言い寄っているのだとはつきりとさせるためだった。

一緒にいても、それはバード公爵であり王弟でもある自分のわがままなのだとしめるためのものだ。

それによって、コレットがフィオンにまわり付いているのではないことをはつきりさせ、彼女の立場が悪くならないようにとの配慮だった。

義姉もにこやかに協力してくれたが、それが何か裏があったのにとだとフィオンにはわかっている。

いともあるディアナとは長い付き合いである。

祖父であるバード公爵の計らいにより、ある意味本当の兄弟である兄よりも一緒にすごした時間は長いかもしれない。

そんな義姉が、コレットを何がしかに利用しようとしていることは分かっているが、それでも王妃である彼女がコレットの後ろにつくことには大きな意味があった。

「僕が好きになったのが、コレット、君でよかったと思ってる」

コレットの手を取り、今度ははっきりとフィオンが言った。

「僕のことを嫌いかな」

「えっ？」

急にそんなことを言われても。

困ったことになったとは思ったが、コレットはまだフィオンを好きだ嫌いだというほど、彼のことをよく知っているわけではない。

「君のことが好きなんだ」

真剣な表情で熱っぽく見つめながら、そっとコレットの指先に口付けを落とす。

「僕のことを嫌いでないのなら、君を好きでいることを許して欲しい」

だめだと言えばよかったのかもしれない。

エリサが言っていたように、一緒にいることはお互いのためにならないとはつきり言えればよかったのかもしれない。

でも……。

自分をまっすぐに見つめるエメラルドの瞳は、切ないほどに一途な目で自分を見ていた。

きっと自分よりも、フィオンの方が苦しい表情をしている。

(そう……なんだ……)

本当に苦しいのは、自分の方ではない。

薬を飲まされたことにより、一番辛いのはフィオンではないのだろうか。

たとえ、自分から進んでコレットを口説いているようでも、あふれるほどの好意を向けているとしても、それは本来彼が望んでいた

ことなのだろうか。

今、それを彼に尋ねたのなら、きっと自分の意思だと答えるだろう。

でも、それは薬のせい。

やはりそうなのだと思う。

薬のせいだと割り切って、ここで拒絶の言葉を言うことができればどれだけ楽なのだろう。

『恋』という魔法にとらわれてしまった彼は、例えどんな拒絶の言葉を吐いたとしても、コレットを責めたり、マカリスター男爵家に圧力をかけたりはしないのだろう。

コレットがどんなことを言っても、アンリのいうような不興を買うようなことはないかもしれない。

会わない、ただそれだけでコレットはここから逃げるることができる。

でも、本当にいいのだろうか？

コレットの拒絶の言葉は、どれだけ鋭い刃となって彼を傷つけることだろう。

それは逃げる場所のない彼に、本来負う必要のない痛みを与えることになる。

それはきつと、自分が婚約を解消されたときのような、いやそれ以上の痛みを。

そうなることを、彼が望んだわけでもないのに……。

お互いのことを冷静に考えれば、ここで断ることが正解なのだと思う。

でも……。

真剣な表情で自分を見つめるフィオンに、コレットは首を横に振ることができなかつた。

困ったように自分を見ながらも、拒絶の言葉を口にしないコレットにフィオンは再度請う。

「僕が君の側にいることを、どうか許して」

フィオンの言葉に、コレットは促されるようにこくりと頷いた。その反応に、フィオンは嬉しそうに微笑む。

(なんだか、子供みたい)

今をときめく王弟殿下は、物腰柔らかかで、人当たりもよくて。バード公爵位を継いでからは、その華やかな容姿もあいまって女性たちの間ではかなりの人気をばくしているという。

パーティーなどで見る彼とはまったく違う、少年のような表情を見せるフィオンに、コレットはしかたないなといった風に微笑み返した。

王弟に薬が盛られた。

それだけでもとても大変なことなのに、まるで本当に好きな人が側にいるかのように幸せそうに微笑むフィオン。

どうせいつかは薬の効果は消えるのだろう。

惚れ薬が本当にあったのなら、王家の力をもって解毒薬をつくるのもそう大変なことなのではないかもしれない。

それまでは、どうやらもうしばらくフィオンのわがままに付き合っただけだ。

微笑んだコレットを見て、フィオンはまぶしそうに目を細めた。

12・手紙

王都の高級住宅街にある一際大きな邸宅。

上品な家具や調度品にかこまれた、バード公爵家の応接室の扉がパタリと閉じられた。

閉じたと同時に、今までにこやかな表情を浮かべていたフィオンは、疲れたように小さくため息をつく。

今のでいっただい今日何人目の客だったか。

父親に連れられてきたランデル子爵家の令嬢が、去り際フィオンのことを何か言いたげな表情で見つめていたが、さすがにそれを相手にしている気分にもなれなかった。

フィオンが惚れ薬を飲まされたとの噂を聞きつけ、バード公爵家に足を運ぶ貴族が前にもましていっそう増えていた。

そのほとんどが、娘を伴っての訪問である。

口では見舞いの言葉を告げながら、内心は別の目的があるのが明らかだ。

貴族社会の礼儀として、そしてフィオンの立場上、見舞いに来るといふものをあまり無下に断ることはできない。

しかし、惚れ薬の相手がなぜ自分の娘ではなかったのか、そう言いたげなのがありありと感じられると、さすがのフィオンも辟易へきえきとしてくる。

今ほど出て行ったばかりのランデル子爵との会話を思い出し、フィオンは柳眉を曇らせながらイスに体を預けた。

「公爵。お噂はお聞きしました。なにやら大変なことになったようですね」

たつぷりと太った体には春の日差しでさえきついのか、ランデル子爵は額に浮かぶ汗をぬぐいならら話かけてきた。

応接室でにこやかに迎えたフィオンは、子爵と彼に伴ってやってきた令嬢を客室のテーブルへと誘う。

「お体の方は大丈夫ですか？」

ランデル子爵の後ろに控えていた、ジェシカ・ランデルが尋ねる。父親に似なかったことが幸いしてか、ジェシカはなかなかの美人である。

お見舞いにくるには少し派手では？と思うような赤のドレスがよく似合っていた。

父親であるランデル子爵は、爵位でこそ子爵であるが、王宮での職務にも熱心な人物である。ただ唯一の難点は、彼もフィオンを王にと望む一派の一員だということだ。

表だつてそれを口にするにはできないが、それとなくフィオンに働きかける言の葉で察することはできた。

ジェシカとも会うのはこれが初めてではない。

ランデル子爵には、ジェシカを何度も引き合わされている。

フィオンの結婚相手にと望んでいることは明らかだった。

フィオンはにっこりとジェシカに微笑みかける。

「心配してくれてありがとう。みなにも言っています、体は本当になんともないんです」

薬を飲まれたといつても、とくに具合が悪くなったりしているわけではない。

「ですが……」

言いにくそうにジェシカがいいよどむ。

言いたいことは分かる。

フィオンが口説いているという少女のことだろう。

だが、フィオンはあえてそれに気が付かないフリをして話題をかえた。

「子爵も大変でしょう。確か、実行犯が入っていた監獄の責任者の
お一人は子爵の親族の方でしたよね」

「え、ええ。まあ」

確かに、ランデル子爵の弟が責任者の一人として名前を連ねてい
る。

「実行犯が早く捕まることを願っていますよ。それによって真犯人
にたどり着きやすくなる」

「尽力はしているようなのですが、なかなか……」
痛いところをつかれ、子爵は汗を拭く手を忙しなく動かす。

ランデル子爵個人の責任ではないとしても、事態が事態だけに、
犯人が捕まらなければ今後の責任問題も大きくなってくるはずだ。

子爵家に飛び火する前に何とかする必要があるだろう。

他の相手に心奪われているフィオンに、本来なら娘を売り込んで
いる場合ではない。

「何かわかりましたら、すぐに公爵にご連絡さしあげます」

「ええ、よろしく願います。真犯人の顔をぜひ見てみたいもの
ですからね」

「公爵は犯人には言いたいこともたくさんおありでしょう」

なんといつても、わけの分からない薬を飲まされてしまった被害
者なのだから。

「それもありませんけれど、興味があるんです」

「興味ですか？」

「ええ。そこまでして僕のことを手に入れたかった人が、どんな人
なのか」

「まあ、そうかもしれませんね」

「こほんと子爵は咳払いする。

「とにかく、まだいろいろ捜査の段階でもあるようですし、公爵に
は薬のお相手とは少し距離をとっていただければと……」

「薬の相手？」

「マカリスター男爵家の令嬢と伺いましたが」

「ああ。それはちょっと難しいですね」

少し考えるようなしぐさをして、フィオンが答える。

「これが薬の効果なのかどうか、僕には分からないのですが、彼女と一緒にいたい気持ちを抑えることができないんです。マカリスタ嬢にはとても迷惑をかけていると思いますが」

惚れ薬の効果に戸惑うこともないフィオンに、ランデル子爵は焦る。

さすがに、それはまずい。

「で、ですが公爵。まだその、犯人が捕まっていない時点では、そのいろいろと問題があるのでは」

「何がですか？」

「その女性が犯人ではないという確証もありませんし」

「ああ、コレットは犯人ではありませんよ」

言い切るフィオンに、子爵は引きつったような表情を浮かべた。

あの後ランデル子爵には、コレットと距離をとるようつづたえられた。他の来客と違わぬ言葉を、切々と聞かされたことになる。

「まったく、どうしてみんな反対するのかな」

来客と入れ替わるように応接室に入ってきたロイドは、いきなりフィオンに話しかけられ、何のことかわからず固まる。

「どうしてみんな、コレットとのかを反対すると思っつ？」

「それは……理由はいろいろあると思いますが」

以前より、自分の娘や親族をフィオンの結婚相手として望んでいる人物にとって、ぽつと出の男爵令嬢にフィオンを奪われるかもしれない事態におちいつているのだ。あせるのも無理はない。

「出会いが、出会いですし、なかなかみなさん理解されるのは難しいのではないのでしょうか」

惚れ薬で一目惚れなんて、とうてい許容できる範囲ではないということだろう。

王弟であり、名門バード公爵家の当主の結婚相手として、一地方領主の男爵家令嬢というのは、そうそうあることではない。

「さすがに僕も、男やメイドに恋をしたなんてことになったら焦っただろうけど、コレットで何か問題があるのかな？」

身分の問題を出すものもいたが、コレットは男爵家令嬢であり、きちんとした貴族の娘だ。労働者階級や中流階級の女性でもあるまいし、たいした問題ではない。

薬のことが公にならなければ、本当にフィオンがコレットに一目惚れしたということになっていただろう。

それを阻止したのが実行犯の証言なのだから、ある意味その犯人は自首した目的を果たしたことになる。

「はあ」

フィオンの言葉に、ロイドはなんともいえない表情で相打ちを打つ。

コレットではみながだめだと思っ理由は理解ができる。

それを無理やり通そうとする主人の方が、恋に盲目になっているような気もしないでもない。

さすがに従者であるロイドはそんなことを口にはしないが。

トントン。

ドアがノックされ、バード公爵家の老執事であるクレマンが応接室へと入ってきた。

手には手紙がある。

「大旦那さまからでございます。書斎へとお持ちしますか？」

「そうだ、クレマン。君はどう思う？」

「はい？何がでございますよう」

手紙を持ったまま、クレマンは首をかしげた。

「君も反対するかい？僕とコレットのこと」

「反対でございますか」

「どうやらロイドは、来客と同じ意見のようなんだ」

二人に見られて、ロイドはたじろぐ。

ロイドから視線をはずし、執事であるクレマンははっきりと答えた。

「マカリスター男爵のご令嬢を反対する理由が、私にはございませんが」

クレマンの言葉に、フィオンはにっこりと笑う。

フィオンは立ち上がると、クレマンが持ってきた手紙を受け取った。

「というわけだから、ロイド。君も僕とコレットがうまくいくよう協力するようにね」

去り際にぽんとロイドの肩をたたくと、執事の言葉に機嫌をよくしたフィオンは、軽い足取りで応接室を後にした。

応接室に残されたロイドは、考え込むように眉根を寄せると首をかしげる。

フィオンとクレマンの二人が賛成しただけで、自分の意見の方が間違いであるかのように感じるのはなぜだろう。

テーブルの上に残っていた来客用のカップを片付けるクレマンに尋ねる。

「なぜ反対されないのですか？」

「何をですか？」

「マカリスター男爵令嬢とのことです」

「反対する理由がありますか？」

ロイドにはたくさんあるように感じられた。

なんと言っても、かなりのスキャンダルであることは確かである。

「いくらでもありそうですが……」

家柄は貴族という意味では許容範囲だとしても、きっかけがきっかけである。まだ犯人が捕まっていない今の状況では、マカリスタ―男爵令嬢をすんなりと受け入れるのもどうかと思われる。

「ロイド。あなたはもう少し、主人の気持ちを理解する必要があるようですね」

「気持ち……ですか？」

戸惑うロイドに、クレマンは微笑むように目を細めた。

「きつと、大旦那さまも反対はなさらないと思いますよ」

書斎に着いたフィオンは、イスに座ると手紙を机の上に置いた。

手紙には蜜蝋の上から、前バード公爵であり祖父でもあるヘンリーの押印がある。

祖父はバード公爵位をフィオンにゆずった後、現在はバード公爵領で隠居生活を送っていた。

ペーパーナイフで封を切り、手紙に目を通す。

なかに書かれていたのは、先日の件を報告したことの返事である。

『思うとおりにしなさい』

体調を気遣う言葉の後に、そう書かれていた。

先ほどの執事同様、祖父であるヘンリーもコレットとのことに反対はしていない。

これでバード公爵としても、フィオンはコレットを口説くことができる。

イスの背もたれに体を預けると、フィオンは窓の外に目を向けた。昨日のコレットとの会話を思い出す。

琥珀色の瞳の少女を思い出すだけで、フィオンの胸に甘い感情が湧き上がってくる。

困ったようにフィオンを見つめながらも、拒絶の言葉を言わなかったコレット。

本当なら、惚れ薬で好きになったなど、いくら王弟といえど失礼にも程がある。コレットには、フィオンを罵り、拒絶する権利があった。

そして拒絶以上に、この状況を利用することさえコレットには出来たはずだ。

王弟であり、バード公爵である自分の利用価値はフィオンが一番よくわかっている。

フィオンの口説き文句にあわせていれば、社交界で確固たる地位を築くこともできるかもしれない。

でも、彼女はそのどちらもしなかった。

困ったような表情をしながら自分を見ていたコレットは、この状況に困惑しながらもフィオンのことを気遣ってくれていた。

コレットに恋をしてしまったフィオンが、彼女の言葉でどれだけ傷つくのかを十分理解し、言葉を選んでいるのはフィオンにもよく分かった。

そんな彼女の言葉一つ一つで、コレットへの愛しさがどんどん募っていく。

ロイドに問うまでもなく、みながコレットを反対する理由をフィオンは知っている。

だが、だからこそそのチャンスである。

惚れ薬を飲まされた。

それを利用することにより、反現王派の干渉する姫以外を手に入れることができる。

もし薬の効果であっても、男だつたり身分が貴族出身でなかったり、そしてなにより現王に対する反対勢力、フィオンを王にと望むものの関係者だった場合、気持ちを抑える自信はフィオンにはあった。思いは止められなくても、会わないといった判断はできる。

だが、マカリスター男爵家は王宮での権力はなく、フィオンに政治的圧力をかけられるような立場にはいない。そして、王宮での役職を利用して圧力をかけられたりする心配もなかった。

思いもよらず、フィオンにとって結婚相手の条件に当てはまった家柄だったのだ。

そして何より、コレットを手放したくないと思う自分がいる。

薬の効果に踊らされているわけではなく、逆に薬の効果を利用してコレットを手に入れようとしている自分は、コレットにとってもっとも危険人物なのかもしれないと、フィオンは自嘲するように笑った。

説明しているわけではないが、祖父と執事であるクレマンはそのことを理解しているのだらうと思う。

だからこそ、惚れ薬で好きになってしまったという女性に対して、公爵家に迎えることになるかもしれない事態であっても反対しない。

(さてと)

次はどうするか。

昨日の別れ際、コレットには来週王宮で開かれるパーティーの招待状を渡してある。

いくら気持ち伝えても、コレットはどうかやら自分が完全に薬のせいで彼女のことを口説いていると思っっているようだ。

まずはそんな彼女に、自分がどれだけ本気であるかを知ってもらう必要があると、フィオンは楽しそうに口元をゆるめた。

13・湖畔

ゴトンと馬車がゆれた。

四人乗りの大きな馬車に乗っていたコレットは、馬車の窓から外をみると小さくため息をついた。

最近ため息のつきすぎだと、慌てて口元に手をあてる。

馬車に乗っているのはコレットと、付き添いで同行したメイドのノーラだけなのだが、無意識にため息をついてしまるのが癖になっ
てはいけない。

ノーラはといえば、先ほどからコレットの向かいに座って、馬車
の中をきよるきよるしながら見回していた。

馬車の内装はよく磨きこまれた飴色をしており、イスにはふんわりとしたクッションが敷かれている。居心地のよい馬車の中は、長
旅でさえ耐えられそうなくらいだ。

その馬車の御者側の内装には、バード公爵家の紋章があった。

バード公爵家からの使者が来たのは昨日のことだ。

この前会った時に王宮でのパーティーの招待状をもらったばかり
である。

来週にはまた会うというのに、バード公爵家の別荘への招待が来
たのだ。

別荘といっても、誘われたのは王都の郊外。王都の西に広がるス
ティルス湖の湖畔にあるもので、王都から日帰りできる距離にある。
夏になると、涼を求めて別荘に集まる貴族でかなり賑わう場所
がある。

目上の貴族からの誘いや訪問は、貴族たちにとってはかなり名誉
なことだ。バード公爵家とマカリストー男爵家の間で微妙な問題が
あると、その風習は変わることはない。

両親からの許可を受けて返事を出すと、次の朝にはしっかりと公

爵家から迎えの馬車まで用意されていた。

(早まった……かしら)

コレットは窓の外に見える森と湖をぼんやり見ながら思った。

フィオンの切ない瞳に彼を拒絶できなかったコレットだが、拒絶できなかったことでフィオンの誘いに遠慮がなくなっているのではないだろうか。

もし拒絶していたとしても誘いがなかったとは限らないのだが、そう思わずにはいられなかった。

「お嬢様、あれじゃないですか？」

ぼうつとしていたコレットは、ノーラの言葉にはつとずする。

湖のほとり、少し小高い場所に目的の場所があった。

白いお城のような建物は、緑色の森と青い空にはえてとても美しい。

大きな柵の門が開かれ、馬車はその建物にむかって走っていく。

近づく、その建物の大きさがはつきりしてきた。

別荘であるのに、どうみても領地にあるマカリストー男爵家のマ園屋敷ナイハウスよりも大きそうだ。

しかしバード公爵家にとっては、各地にある別荘の一つ。それ以外にもいくつかの領地にそれぞれ荘園屋敷があると聞けば、どれだけバード公爵家の規模が大きいかうかがえる。

決してマカリストー男爵家は貧しい貴族ではない。

王都にある町屋敷タウンハウスも領地にある荘園屋敷もきちんと手入れがいきとどいているし、メイドなどの使用人も必要な分を雇えるだけのゆとりもある。

それでも一地方領主の男爵家と、連綿たる歴史を持つ公爵家とではその差は歴然としている。

大貴族というだけでなく王族でもあるフィオンと関わるなんて、きつとこの事件が起こらなかつたらなかつただろうとコレットは思った。

馬車が止まった。

入り口付近で待っていた従僕が、馬車の扉を開きコレットに手をかす。

馬車からおり、開けられた玄関に進もうとしたとき。

「よくきたね」

屋敷の中から、一人の青年が現れた。

さらりとした金髪にエメラルドの瞳。女性が思わず見とれてしまうような甘い笑みを浮かべながらコレットを出迎えたのは、ここ数日でよく見知ってしまった相手である。

「公爵、本日はお招きありがとうございます」

腰を落として、コレットはフィオンに頭を下げた。

フィオンはコレットに近づくと、そつと彼女の手をとり口付けを落とす。

「急にごめんね。どうしても君に会いたいのを、我慢できなくなっただ」

呼び出すのが公爵邸ではあまりにも目立ちすぎるため、この別荘を選んだ。

他にも別荘はあるが、王都からは遠い。

どうしても泊まりになってしまう場所は、最初から警戒心を生んでしまうかもしれないので、とりあえず今回は避けておく。

「それと」

すいっとフィオンはコレットの耳元に顔をよせた。

「フィオンと呼んでと、そういったよね」

空気のゆれさえ感じてしまうほどの耳元でそうささやかれ、コレットの肩がぴくりとゆれた。

無意識に頬が熱くなるのを隠すように、コレットは少し顔をふせる。

名前なんて、人のいる場所で呼べるわけがない。

一度はフィオンを名前で呼んだコレットだが、さすがに人前であまり親密な感じを出すわけにはいかない。

いくらそれをフィオンが望んでいるといっても、はじめはつけなくては。このまま彼の言葉に流されてはいけないのだと、コレットは自分に言い聞かせる。

耳朶^{じた}まで赤く染まったコレットに満足するように、フィオンはくすりと笑う。

「二人になったときは、名前で呼ぶようにね」
耳元に吐息を感じながら、コレットは小さく頷いた。

コレットの手をとり、フィオンは屋敷の中へと入っていった。出迎えるために玄関にでてきたロイドは、そんな二人のやりとりを目にする。

本気でコレットを口説きにかかっているフィオンに、コレットがどこまで耐えられるのだろうかと、ロイドは小さくため息をついた。

やわらかな日差しの射す午後ひととき、コレットとフィオンは森の中を散策にでた。

コレットが持っていた白いレースのパラソルは、出たと同時にフィオンに奪われてしまった。

パラソルを持っていればある程度の距離が保たれるのだが、フィオンにとられてしまっただけでしかたがなく、コレットはそっとフィオンの腕に手を添える形になる。

今が湖での避暑のシーズンではなく、人影が少ないのがせめてもの救いといったところだろうか。

ふと、森の中から馬のいななきが聞こえた。

視線をさまよわせると木々の間から柵が見え、ちらりと馬の姿がみえる。

コレットの視線に気が付いたように、フィオンが声をかけた。

「馬が好き？乗ってみる？」

「えっ。いいえ。私、馬には乗れなくて……」

乗馬は貴族のたしなみの一つでもある。

しかしたしなみとはいえ、恐怖のためや、お転婆に見られるといったことで敬遠する女性も少なくはない。

コレットも興味はあるのだが、母親が女の子には危険だと乗馬を許可してくれることはなかった。

父はマカリストー男爵領と一緒に馬に乗って回りたかったらしく、何度か母親を説得していたのを見かけたが、今の今まで許可が下りたことはない。結局コレットは、弟のアンリが練習しているのを見ていることしかできなかった。

「大丈夫、そんなに怖くないよ。行ってみよう」

コレットの手をしっかりと握り、フィオンが駆け出す。

それに引っ張られる形でコレットも走り出した。

少し前を走るフィオンの顔は、すごく楽しいことを見つけたみたいに輝いている。

それをみていると、自然とコレットにも笑みがこぼれてきた。

なんだか、すごく楽しいことがあるような、そんなわくわくした気持ちになってくる。

本当は小さいころから、コレットも馬に乗ってみたかった。

弟が馬の背に乗って颯爽と走り回っているのを、すごくうらやましく見ていたのだ。

厩舎に近づくと、フィオンはそこにいた馬丁に声をかけた。

どうやらこの厩舎一帯の牧場は、バード公爵家の持ち物らしい。

散歩でしばらく歩いたと思ったら、まだまだ公爵家の敷地内だっ

たようだ。

馬丁が馬に鞍をつけ、乗馬できるように調えるとフィオンとコレットの所まで連れてきた。

パラソルを馬丁に預けると、フィオンはひらりと馬にまたがる。

「コレット。手を」

そういうと、馬上からコレットに手を伸ばす。

コレットがフィオンの手をしっかりとつかんだのを確認し、ぐいと彼女を引き上げた。

馬の上に横座りの形になったコレットは、ゆっくりとまわりを見渡す。

いつもの視界よりも高く不安がないわけではないが、それでも思ったよりも恐怖は感じなかった。

「怖い？」

頭上で聞こえた声に、コレットははっとして顔を上げる。

すぐ側で優しく見つめるエメラルドの瞳。自分の姿が映し出されているのが見えるほどに近くにあるそれに、コレットは急にドキドキし始めた。

馬に乗れることですっかり失念していたが、二人で乗るといふことはこういうことなのだと思えて気が付く。

フィオンの問いに答えるように、コレットは視線を少しずらすと頭を振った。

さすがに吐息を感じることができそうなくらい近くで、フィオンを正視することなどできなかった。

間近で真摯な瞳を向けられては、いくらがんばったとしても無意識に頬が染まるのを止めることができない。せめてできるのは、それをフィオンに見られないように少し顔を逸らすことぐらいだ。

「しっかつかまって」

コレットの腰に片手をまわし、フィオンが手綱をとる。

ゆっくりと馬が歩き始めると、先ほどまで感じることもなかった

空気の流れを感じた。

コレットの瞳が、楽しそうにキラキラと輝く。そんな彼女を間近でみながら、フィオンはまぶしそうに目を細めた。

興味が乗馬に移っているためか、こんなに近くにいるというのにコレットの意識はフィオンにはまったく向いていない。それをちよつと不満に思いつつも、コレットが自然に笑う姿をみる事ができるならそれも悪くないと、フィオンは思った。

馬に乗ったまま湖のほとりを散策すると、湖からの涼しい風がコレットの頬をなでた。

湖は鏡のように空と森の景色を映し出し、波が起こるたびにきらきらと光を反射している。

いつもより高い視界から景色を眺めると、その景色がいつそう美しく見えてくるから不思議だ。

「きれい……」

コレットの口から感嘆のため息がもれる。

「夏になったらまた来よう。そのころにはボートに乗るのもいい季節だ」

「はい」

嬉しそうにコレットが頷いた。

景色の美しさと、初めての乗馬に心奪われていたコレットは、自分がこれからのことを約束してしまったことに気づいていない。

楽しそうに馬上の風を感じ、馬の首筋をなでる余裕ができてきたコレットにフィオンが口を開いた。

「乗馬に興味があるならやってみる？今度教えてあげるよ」

「えっ、でも……」

さすがにそれを願うのは図々しすぎる。

乗馬なら男爵家でもできるのだ。母が許可を出してくれさえしたなら。

「考えておいて」

「でも、お忙しいのにそんなことまで」

「君に会えるなら、どんなことをしても時間をつくるよ」

フィオンの言葉に、父に相談してみるとだけコレットは答えた。

興味はあるが、乗馬ともなればさすがに自分一人で決められることではない。

それに惚れ薬の一件もあることだし、あまりフィオンに迷惑をかけすぎるのも問題だ。

「まあ、僕としては、コレットに乗馬を教えるのも楽しそうだけど

……」

「？」

「こうして君を、腕の中に閉じ込める機会が減ってしまうのは残念かな」

そういうと、フィオンはコレットの腰に回っていた手に力を込める。

力の方向にしたがうように、コレットの体がフィオンの方へ軽く傾く。

それだけで二人の間にあっただわすかな距離が消えて、コレットの頭がフィオンの肩にことんと当たった。

頬に上質の絹の肌触りを感じる。

「フィオンさまっ」

思わずフィオンにもたれるような形になってしまい、コレットが抗議の声を上げる。

「ほら、しっかりとつかまってないと危ないよ」

にっこりと微笑むと、フィオンは少しだけ馬の速度を上げた。

乗りなれていないコレットは、それだけでフィオンから離れられなくなってしまう。

しっかりと自分の服を握り締めるコレットに満足すると、フィオ

ンは彼女の甘い香りを感じながら、楽しそうに馬を進めた。

14・白い薔薇

馬車から降り立つと、コレットはその華やかな雰囲気気圧されるように息を飲んだ。

王宮に来るのはこれが四度目である。

一度目は社交界にデビューする前、王と王妃に拝謁するため。そして二度目はフィオンが惚れ薬を飲まされたことを知らされ、三度目は王妃のお茶会に出席した。

だがそのどれも昼間のことであり、王宮の大きさ、威厳を見せつけられるのには十分であったが、今日の夜会ではその雰囲気ガラリと変えていた。

日が傾いている時間帯、あたりは徐々に暗さをましている。

だが、王宮内にともされた灯りは煌々^{あか}と輝き、王宮の姿をはつきりと夜空に浮かび上がらせていた。

暗さと明るさをその身にまとう王宮の姿は、荘厳でさえある。

フィオンから招待状を受け取ったコレットだったが、その後両親にも王家からマカリストー男爵家へと直々に招待状が届いていた。

フィオンからの招待状は、王の許可のもと、王弟フィオン・アルファードの名前でのもの。王家の押印の入った招待状は、つまりはフィオンのパートナーとしての正式な招待である。

今日の王宮でのパーティーは、この前のルノワール伯爵邸のものとは違い、気軽なものではない。

王や王妃が出席するこの夜会は、派閥や人間関係などが関係して開かれる貴族の夜会とは違って、王家の権威のもとに多くの貴族が集められる。

そこでコレットは、正式にフィオンのパートナーを務めなければならぬ。

王家の申し出を断れずフィオンの願いを受け入れてしまった時点

で、ある程度覚悟はしていたつもりだったが、あまりの華やかな場では、今年社交界にデビューしたばかりのコレットは足がすくんでしまいそうだった。

しかし、今更逃げるわけにはいかない。

王宮内へと先に進んでいった両親に後れないように、コレットは慌ててその後を追った。

大広間に入れば、いくつものシャンデリアが輝き、そのまぶしさにコレットは目を細めた。

到着した貴族の名前が、広間に入ったとほぼ同時に呼び上げられる。

マカリスター男爵家とその名を呼ばれると、みな談笑していたのをピタリと止め、視線が一気に入り口付近に集まった。

その視線の種類は、嫉妬によるものや、興味を持って楽しんでいるもの、大変なことに巻き込まれた男爵家への同情の混じったものなど人それぞれだ。

両親はそれを事前に覚悟していたのか、少し顔を強張らせたものの、その場を通り過ぎ知り合いの貴族を見つけて話しかける。

一瞬凍りついたその場の雰囲気がそれによって少し緩和し、あたりにざわめきが戻ってきた。

「かなり、注目を集めてるようですね」

緊張していたため気配に気づかず、コレットは驚いて後ろを振り返った。声をかけてきたのは、コールフィールド伯爵家令嬢エリサである。

王宮の大広間には、すでになりの人数の人々が集まっている。お互いに知り合いを見つけては挨拶を交わしつつ、それでも今噂の少女が気になるのか、ちらちらとこちらを見ている視線が痛い。

その中に、きつくコレットを睨んでいる少女にコレットは気が付いた。

コレットの視線に気が付くと、視線を合わせたくもないといった感じでぶいっつと横を向く。

その様子をみたエリサはあらあらといった感じで肩をすくめた。

「ノーフォーク伯爵家のジュリアよ」

「ジュリア……さま」

その名前をコレットは聞いたことがあった。

フィオンの婚約者候補として、有力だと言われていた少女の一人だ。

バード公爵家の当主は二十一歳となった今、縁談がかなり持ち込まれている。

まだはつきりと決まっていないため、望みを捨てずにせつせと娘を紹介しているものも少なくないが、その中でも三人が有力候補とみなされていた。

ジュリア・ノーフォークはその有力候補三人の一人だった。

コレットに顔を寄せ、少し内緒話をするようにエリサが話しかけた。

「入り口のほうを見て」

促されるままにそちらをみると、サーランド侯爵家の名が呼び上げられるところだった。

「サーランド侯爵家の姉妹の妹。ほら、水色のドレスの。彼女がモニカ・サーランド。バード公爵家とはご親戚にも当たるのよ」

モニカ・サーランドもフィオンの有力な婚約者候補である。

ただ親族であるがゆえに、バード公爵家の一層の影響力の強さを懸念するため、反対の意見もちらほらと聞かれるというが。

「後は、まだ来ていないようだけれど、オースティン公爵家のアニエス。アニエス以外は、ルノワール伯爵家のパーティーにも来てい

ましたから、見たことあるかしら。とにかく、この三人の名前は覚えておきなさいね」

かすかに見覚えのある顔に、コレットは頷いた。

おぼろげながら見たことがある顔を、しっかりと頭にいれる。名前は聞いたことがあったが、フィオンの婚約者候補として本人を認識するのは始めてである。

「コレット。胸を張って堂々としていらっしやい」

「え？」

「自分に恥じるどころなどないのですから、しっかりと前を向いて。少しでも弱気になっては、まわりの嫉妬を跳ね返すことなどできませんわよ」

最初はフィオンとのことを反対していたエリサだが、こうなってしまうっては仕方がない。

コレットの立場が悪くならないよう、友人として協力するしかなかった。

「弱気になると、人はすぐそれを感じ取って攻撃してきます。その隙を与えないようにね」

「ありがとう」

友人の忠告に、コレットはしっかりと頷いた。

この場の雰囲気のほか、気にせず話しかけ心配してくれるエリサの存在が、コレットにはとても嬉しかった。

ざわめくホールで人の波が避けた。

その中コレットの前に現れたのは、バード公爵フィオン・アルフアード。

今宵は王弟として出席しているらしく、まわりに気を配りつつフイオンはコレットに近づいてくる。

「コレット、よく来たね」

白い手袋をしているコレットの手をとると、貴婦人にするように優雅に口付けを落とした。

「こんばんは、バード公爵。本日はお招きありがとうございます」

腰をかがめて、コレットはフイオンに頭を下げる。

「今夜は楽しんでいってください。エリサ嬢も」

「ありがとうございます、公爵」

隣にいたエリサは、ついでのように声をかけられ肩を軽くそびやかしながら微笑んだ。

コレットに視線を戻すと、フイオンは自分の胸元に刺してあった花を一輪取り上げた。

棘の抜かれた白い薔薇の花をいとおしそうに口付けると、それをコレットの結び上げられた髪にそっと挿し込む。

いきなりの行動に、コレットはどうしたのかと目を瞬かせた。

視線をフイオンが花を挿したであろう場所に移すが、自分の髪に挿された薔薇の花を見ることはできない。

白い薔薇の花を髪に飾ったコレットを、フイオンは満足そうに見て微笑む。

今日のチェリーピンクのドレスと、髪を結び上げた同色のリボンに白い薔薇はとてもあっている。

「よく似合ってる」

嬉しそうに微笑むフイオンに、コレットもつられるように微笑み返した。

「ありがとうございます」

それは花をもらったことに対して。

「それじゃ、また後でね」

そっと耳元にコレットにだけ聞こえるように言うと、フイオンは

その場を離れた。

主催者側の彼は、今日はコレット一人についているわけには行かない。

王と王妃は、パーティーの参加者がそろったところで顔を出す。二人がいない間、来客の相手をするのが、王弟であり王族の一員でもあるフィオンの役目なのだ。

そんな忙しい中、コレットが来たことに気づきやってきたのだろ
うが、そのやり取りがまわりの人々の視線を集める結果になってしまっている。

噂どおりのフィオンの様子に、まわりもかなり驚いているようだった。

それと同時に、いつそう若い女性の視線がきつくなる。

それにしても……と、エリサは去っていったフィオンを見送った後、コレットをちらりと見た。

まわりからの視線を気にしないようにと、しっかりと前を見ている親友の姿に、以前とは違うものを感じた。今しがたフィオンに白い薔薇を贈られたコレットは、この前のパーティーのときよりも戸惑いが少ないようだ。

もちろん、この前のように突然の出来事ではないということもあるかもしれないが、フィオンに対する警戒心がかなり薄らいでいるような気がする。

まあ、フィオンと一緒にいることを選んだ時点で覚悟を決めた、ということもあるのかもしれないが。

「それにしても、この前以上ですわね」

コレットに対するそれは、もう恋人への態度そのものといってもいいかもしれない。

「それも白い薔薇なんて……」

「え？」

「そこまで考えているかどうかわかりませんが。白い薔薇の意

味、知ってまして？」

反応がいまいち鈍いコレットに、エリサは続けた。

「私はあなたにふさわしい」

パーティーで同じものを身に着けるのは、パートナーの印といってもいい。

自分の身に着けていた花をコレットに渡した時点で、このパーティーに来ている人たちに、コレットが自分のパートナーであるとはつきりと知らしめている。

その上で、みなの前でコレットに告白しているようなものだ。

さらにそれが白い薔薇であることで、自分がコレットにふさわしい人物なのだとみなにいつている。

コレットがどうのという問題ではなく、自分がコレットを選んだのだと。

(それって……)

もらった花の意味に、コレットの頬が赤く染まる。

薔薇は愛を告白するときによく使われる花ということは認識していたが、髪飾りとしてもらったために、あまり意識していなかった。あのやりとりでは、意味を知っている人からみれば、フィオンの告白を自分が受け取ったように見えるのではないだろうか。

慌ててみても、今さらどうすることもできないが。

自分が思っていた以上に、バード公爵はコレットのことを本気であるらしいと、エリサはフィオンの後姿を見送った。

フィオンがコレットに興味を持ったのは、惚れ薬を飲まされたから。

そう思っていたが、これだけ公然とコレットをみなの前に出すと

いうことは、それだけではないのだろうか。

あのバード公爵に本気で口説かれたとして、コレットがいつまで耐えられるものかと、エリサは隣にいる親友を思い、小さく息を吐いた。

「好きになったら、大変ですよ」

「え？」

つぶやくように言われたそれは、コレットの耳には届かなかった。どうしたのかと自分を見るコレットに、エリサはなんでもないと首をふった。

15・夜会

王と王妃が広間に入室すると、夜会も本番となる。

大広間のなか、数段高くなっている場所に置かれた玉座の前に立つと、王がパーティーの開始を宣言した。

来客の会話を妨げないものだった音楽は、パーティーの開始の合図とともに、ダンスを行うための曲へと変わる。

王と王妃が玉座に着席したところで、この会場で一人動いた人物。広間の中心に現れたのは王弟フィオン・アルファード。まわりの視線を一身に浴び、それに臆することもなく堂々と歩くその先にいるのは、噂の令嬢である。

フィオンはまっすぐにコレットの前に進むと、彼女にそつと手を差し出した。

シャンデリアの光を反射して、フィオンの金色の髪がきらきらと輝く。

王弟という立場に相応しい輝きを身にまとうフィオンは、その一連の動きでさえまわりの視線が自然と集まり、若い女性のため息にも似た声がもれた。

みな視線の中、ふわりと腰を落として礼を示すと、コレットは差し伸べられた彼の手に自分のそれを重ねた。

フィオンに手をとられる形で歩を進め、王と王妃の前で臣下の礼をとるように頭を下げる。

王と王妃がそれに答えるように頷くと、フィオンはコレットと向かいあう形になり、彼女の腰のあたりに手を添えた。

さすがに緊張で、コレットの表情が硬くなる。

まわりの人数は、ルノワール伯爵邸でのそれとは比べ物にならないほど多いうえ、その視線は決して好意的なものとは言い難かった。緊張している様子のコレットに、フィオンはにっこりと微笑む。

フィオンにとっては、王宮でのパーティーなど慣れたものだ。

「緊張してる？」

小さな声で内緒話をしてくるように話すフィオンを、コレットは上目遣いに見る。

「……します」

「大丈夫。今日もとっても可愛いよ」

そういう問題でもないのだが……。

そう思ってフィオンを見ても、恋する瞳でとろけるような笑みを向けられては、何もいえない。

こんな大きなパーティーの中でも変わることはないフィオンの態度に、コレットの肩から力が抜けた。

つられるように微笑み返す。

コレットの肩から余計な力が抜けたことを感じると、フィオンはダンスのためのステップを踏み出した。

王弟である彼のダンスが、ダンスの始まりを告げている。

いつもなら、そこに少しずつみなが加わり、ダンスパーティーの幕開けとなるのだが、今日の様子は違っていた。

多くのものが様子を伺うように、ダンスをしているフィオンとコレット、そしてそれを見守っている王と王妃へと視線をおくる。

バード公爵フィオン・アルファードのパートナーを務めているのは、『惚れ薬』の相手として噂になっているマカリスト男爵家の令嬢である。

噂以上にその令嬢に夢中になっている公爵に、それに対し王と王妃が何の静止もせず許容している様子は、まるで惚れ薬など最初からなく、フィオンがコレットに一目惚れしているかのようにもみえた。

くすりと壇上から小さな笑い声が洩れた。

それをただ一人聞き逃さなかった王は、その声の主を見る。

コレットとフィオンがダンスをしている様子を、楽しそうに見ているのは彼の妻、王妃ディアナである。

「騒ぎが大きくなるぞ」

小声で王が話しかけた。

楽しそうに瞳を輝かせたまま、王妃は夫に視線を移す。

「何がですか？」

「薬の件、この分では国中に知れ渡ってるのではないのか？」

パーティーに来ているものの反応から、すでに噂はかなりの勢いで広まっているようだ。

「問題は噂が広まることではありませんわ。犯人が捕まらないことです」

王妃はぐるりと広間の中を見渡した。

「きつと今日、このなかにいらしてるんでしょうね」

惚れ薬の効果を狙っていた真犯人は、何食わぬ顔をして、今日のパーティーに参加していることだろう。

薬の効果で、自分が受けるはずであったフィオンの愛情を、別の女性に奪われてしまった形となった犯人は、いったいどんな気持ちで二人を見ているのか。

「しかし、これでは……」

薬の効果が消えたとき、これでは相手となったコレットにかなりの風評被害がでる危険性がある。

王として、臣下となる国内の貴族の令嬢に対して、今後起こるであろう難題をそのままにしておくことはできない。たとえそれが一地方領主の娘だとしても。

「私、コレットがとても気に入りましたわ」

「それならば、なおさら」

「ですから、このままフィオンのお相手として、いていただいても

かまわないと思っってますのよ」

「何を言っているのか分かってるのか？」

「あら、マカリスター嬢では、あなたの弟のお相手としてご不満？」

「そういう問題ではない」

「そういう問題ですよ」

きっぱりと王妃は言い切った。

その真剣な表情に、王は息を飲む。

と、ディアナは誰もが見惚れるような表情で、ふんわりと微笑んだ。

「ほら、ダンスが終わりましたよ。陛下」

一曲目のダンスを終えたフィオンは、コレットの手を引いて玉座の前へと進んできている。

王として、このパーティーに参加しているものとの交流は、責務である。

自分に近づいてくる二人を、王は複雑な表情で見つめた。

王と王妃へのあいさつが終わると、それを待っていたかのようにフィオンのまわりには人が集まった。

夜会は貴族の社交場である。

王や王妃だけでなく、王弟である彼に対しても交流を望むものは少なくない。

取り囲まれたフィオンから、コレットはそっと離れる。

自分がいつまでも側にいると、会話の邪魔になってしまう。

夜会はパートナーが決まっていれば基本的にはその相手とのダンスが中心となるが、パートナーとしか踊れないということではない。基本的にたくさんの人との交流を目的としているパーティーである。パートナーになったからといって、いつまでも相手を独り占めする

ようなことはしないのが暗黙のルールだ。

それが王弟であり、バード公爵位を持つフィオンにならなさらである。

若い女性が気に入った男性を放さない、という光景もときおり見られることもあり、それをまわりが微笑ましく見ることともよく見かけることも確かだが、そんなことをコレットができるはずもなかった。

自分から少し離れたコレットに気が付き、フィオンはすぐに後を追おうとするが、まわりにいる貴族に引き止められる。

自分の父親以上に年の離れた人々に囲まれ、王弟として彼らを下にするわけにもいかない。

申し訳なさそうに自分を見るフィオンに、コレットはなんでもないとというように微笑むと、その場をそつと後にした。

フィオンから少しはなれた場所に立つと、コレットはほっと息をつく。

あれだけ大勢の人の前にでることなど慣れていないコレットには、さすがにかなり緊張していたようだ。

今でもまわりには嫉妬や忌諱きいの視線を感じるが、それでもその視線の数はダンスを踊っていたときの比ではない。

噂の令嬢に、大広間で公然と話しかける人物はおらず、コレットは一人パーティーの様子を見渡した。

フィオンだけでなく、王や王妃のまわりにも、次々とあいさつに伺う人が溢れ、広間の中心ではダンスを踊る人も増えてきている。

その中に、コレットは見知った相手を見つける。

今日は、エリサのお相手もきちんと参加しているようだ、無意識に頬を緩めた。

ふいに、自分の隣に人の気配を感じ、コレットはそちらに顔を向

けた。

コレットの隣に立った人物は、コレットを見ずにまっすぐ前を向いている。

長いブルネットの巻き毛を結い上げた少女は、赤く塗られた唇が白い肌に際立って見える。

コレットの視線に気が付いたように、ゆっくりと視線を合わせるその少女は、息を飲むほどに美しかった。

長い睫毛に縁取られた深い緑色の瞳が、しっかりとコレットを見る。

「マカリスター男爵家のコレット……さんですわよね」

「はい」

問われて、コレットは頷いた。

「わたくし、アニエス・オースティンと申します。お初にお目にかかりますわね」

言われた名前にコレットは、はっとした。

アニエス・オースティン。

オースティン公爵家の姫君で……。

(フィオンさまの、婚約者候補)

聞いたことのある名前に、コレットは息を飲む。

「あなたにお話がありますの。少し、お時間よろしいかしら？」

コレットはアニエスについてテラスに出た。

テラスで談笑している人たちを避け、庭へと降りる階段の下へと移動すると、庭を照らす明かりを見つめたまま、アニエスは口をひらいた。

「あなたはバード公爵のことを、どう思っているの？」

涼しい夜風が、二人の間をすり抜けていく。

「私は……」

アニエスの問いに、コレットは言いよどんだ。

どうと言われても、アニエスに言えるだけの答えをコレットは持っていない。

しばしの沈黙。

「わたくしは幼いころから、フィオンさまの妻になるのだといわれて育ってきました」

コレットの答えを聞かずに、アニエスは言葉を続けた。

オースティン公爵家の姫君で、フィオンよりも二つ年下のアニエスは、身分的にも年齢的にも王弟であるフィオンにつりあっていた。オースティン公爵の計らいで、二人は幼いころから何度も会っている幼馴染でもある。

「あの方が好きなのです」

まっすぐにコレットを見ると、アニエスのはっきりと言う。

感情的にならないように努力しているのか、胸の前で組まれた両手は小刻みに震えている。

「それをこんな形で奪われるのかと思うと、悔しくて仕方ありません」

公爵家令嬢であり、身分的にもフィオンにつりあう立場にいたア

二エスは、候補のなかでも最も有力視されていた。

婚約者候補が他にもいる時点で、フィオンが最終的には自分を選ばない可能性がゼロではないことは分かっている。

それでも、それをフィオン本人が決めたのではなく、惚れ薬でということなら話が違う。

「今回の事件のあらましましはうかがっています。あなたが犯人でないことくらい、わたくしにだって想像できます」

コレットを本気で疑っているのは、嫉妬で目が見えなくなっている人物がほとんどだ。犯人が見つからない今、そのほうが怒りの矛先を持っていきやすい。

「でも、あんな状態の彼と一緒にいてそれで平気だとおっしゃるのなら、この事件を利用しようと考えていらっしやるなら、わたくしはあなたを軽蔑します」

きっぱりとしたア二エスの態度。

公爵家令嬢として育ち、誰にも臆することなどなく発言するア二エスに、コレットは何も言い返すことができなかった。

ア二エスが去っても、コレットはその場から動けなかった。彼女のまっすぐな目が、恋をしているものの瞳が脳裏から離れない。

すぐに広間に戻る気分にはなれず、コレットは庭へと降り立った。王宮の側を流れる人工的に作られた小川のそばで、庭をともしている灯りをぼんやりと見つめる。

王妃の頼みを拒絶できず、フィオンの言葉にうなずいてしまったからこそ、今自分はここにいる。いくらフィオン本人から望まれたこととはいえ、彼が自分の言葉で傷つくことが耐えられなかったからといって、やはり受け入れるべきではなかったのかもしれないと、コレットは小さく息を吐いた。

フィオンを傷つけないと思った自分のために、傷ついている

人間がいる。

フィオンに婚約者候補がいることは知っていた。それなのに、フィオンの態度にそれをすっかり失念していた自分にも嫌になる。

もし、本当にフィオンが自分のことを好きでいるのなら。そして自分が心から彼のことを好きだと思っっているのなら、誰かを傷つけても一緒にいたいと思うことに、意味があるのかもしれない。

しかし、コレットとフィオンの間にそんなものはない。

あるのは、『惚れ薬』が飲まれたという事実だけ。

薬の効果が切れたなら終わってしまう、そんな脆い関係だけなのだ。

それは、アニエスを始め彼の婚約者候補だけでなく、彼を心から愛しく思う人や、そして何よりフィオン本人にも、失礼なことをしているのではないだろうか。

自分の行動が及ぼした結果を突きつけられ、コレットは落ち込むしかなかった。

「お加減でもすぐれませんか？」

ふと声をかけられ、コレットは振り向いた。

庭にも人が出て談笑している人たちもいるのだが、それから少し離れた場所に一人たたずむ少女に、さすがにどうしたのかと思っただのか、一人の給仕のメイドが話しかけてきた。

コレットとたいして年のかわらなそうなメイドに、コレットは力なく微笑むと、首を横に振った。

「なんでもありません。少し夜風にあたっていただけです」

「お飲み物などお持ちいたしましょうか？アルコールの入っていないものもありますか？」

「大丈夫です。ありがとうございます」

メイドとはいえ、今は優しい言葉が辛い。

そのメイドを避けるように、コレットは庭を散策するように歩き

出した。

歩き出したコレットの後ろ姿を、給仕の少女はじっと見つめる。王家の庭に、心地よく夜風がふく。その風に、少女の肩で切りそろえられた黒髪が、さらりとゆれた。

少し庭を散策した後、コレットは王宮へと足を戻した。

さすがにあまり広間から離れていると、両親やエリサ、そして今日のパートナーであるフィオンに心配をかけてしまうかもしれない。フィオンが今日はコレットにばかり付き合っているわけにはいかないとはいえ、だからといってあまり自由に歩き回っているのも問題だ。

広間につながるテラスへ向かう階段が見えてきたとき、コレットの耳に何人かの少女たちの声が聞こえてきた。

向こうもコレットに気が付いたようで、視線が合う。

「あら、これはこれは。マカリストー男爵家のご令嬢ではなくて？こんなところで、何をしていたらっしゃるのかしら」

先に声をかけてきたのは、先ほどコレットを睨んでいた少女、ノーフォーク伯爵家のジュリアだった。

ジュリアと一緒にいた少女たちも、コレットにじろじろと遠慮のない視線を向けてくる。

「広間の方は、居心地が悪いのかしら？」

「それはそうでしょうね」

「というか、この状況でよくここにこれたものですわよね」
遠慮のない少女たちの非難の言葉に、コレットは戸惑う。

一人庭へ降りてきたことへの軽率さを感じていた。

「ねえ、どんな気分かしら。薬のおかげで公爵の心を手に入れたというのは」

コレットたちがいる場所は、王宮の広間からそんなに遠くない場

所ではある。

しかし、木陰になっっているため、あまり人の目には触れにくい。そのうえ王宮は現在夜会の真っ最中である。灯りが煌々とともされているところからでは、薄暗い庭の中はよくはみえない。

それを知っているのか、少女たちは誰に気づかれることもないだろうと、強気になってコレットに話しかけてくる。

「まあ、そうでなければ、公爵はあなたのことなんて見向きもしなかったでしょうけれど」

ジュリアはコレットを値踏みするように見ながら、横を通り過ぎる。

と、視線が一点でとまり固まった。

目を合わせているわけではないジュリアが見ているのは、コレットの髪。そこには、フィオンに贈られた白い薔薇があった。

ジュリアはそれを憎らしげに見つめる。

ジュリアの手が薔薇の花に伸ばされた。

悪意を持って伸ばされた手に、コレットは思わず後ずさるが、別の少女にぶつかる形でそれを止められた。

ぶつかってしまったことに驚いて振り向いたコレットの髪から、薔薇の花が引き抜かれる。

さらり。

コレットの髪が風に揺れた。

花を引き抜かれた際に、それに伴って髪を結っていたリボンも引っかかったのか、ゆっくりと地に落ちる。

おりた髪に驚いて、コレットは両手で髪を押さえるが、触れた刺激で編まれた髪もするととけていった。

慌てて下をみて、落ちたりボンを探すが、薄暗い場所ではなかなかすぐに目に入ってこない。

チェリーピンクのリボンの端に付けられた白いレースが目に残る。

り手を伸ばすが、もう少して手が届くところで、リボンがすいつと動いた。

動いたリボンを視線で追うと、少女の中の一人が笑いながらその手におさめている。

返して欲しいとコレットが言う前に、少女はそのリボンをポイッと投げ捨てた。

夜風にのり、リボンはふわりと風に舞う。

ゆっくりと落ちてくるかと思われたそれは、しかし地に落ちる前に、近くの木の枝に引っかかった。

そんなに高い位置ではないが、コレットが手を伸ばしても届くか微妙な距離だ。

小川も側にあるこの場所では足場が悪く、その上夜会用のヒールのある靴を履いている。飛び跳ねてとるのも難しそうで、木に登ってなんてとんでもない話だ。

「あら、髪がとけてしまいましたわね」

「そんな髪では、広間にはもどれませんわよ」

確信犯であるのに、くすくすと笑う少女たちに、コレットは悲しくなった。

意地悪をされたということもある。

でも、それ以上に、彼女たちにそうさせてしまった要因は自分にあるのだと思うと、どうしていいのか分からなかった。

「どうされました？みなさんで」

不意に聞こえた声にはっとして、コレットは声のしたほうをみた。まわりにいた少女たちも振り返る。

まさかこんな場所に現れるとは思っていなかったのか、コレットのまわりにいる少女たちの顔色が、こわばっている。

「バード公爵……」

ジュリアが驚いたように、その場に現れた人物の名前をつぶやいた。

17・訴え

パーティーの最中、ようやく人の輪から抜け出すと、フィオンは大広間を抜けテラスへと足を進めた。

先ほど囲まれている際に、コレットがアニエスとテラスの方向へ歩っていくのが見えた。

アニエスは、フィオンにとって幼馴染ともいえるほどに見知った間柄である。彼女をよく知っているから、アニエスがコレットに対して嫌がらせのようなことをするとは考えにくかったが、まったく接点のないであろう二人が一緒にいなくなったことは、やはり気になる。

まあ、アニエスがコレットに言うであろうことは、だいたい予想はできるが……。

テラスに一步踏み出すと、一人広間に戻ろうとしているアニエスと目が合った。

アニエスもフィオンに気が付く。

「やあ、アニエス」

「こんにちは、フィオンさま。お久しぶりです」

「オーステイン公爵とは何度もお会いしているけれど、アニエスと会うのは久しぶりだね」

「去年、バード公爵位を継がれたときのパーティーでお会いしたのが最後でしたわ」

「そんなに経ってた？でもあの後は、僕もしばらく公爵領の方に行っていたから、そうだね。元気だった？」

「はい。フィオンさまは、いろいろ大変のようだとお伺いしています」

「大変？」

「薬のお話は聞き及んでいますわ」

「ああ。そのこと」

たいして自分では大変に思っていないフィオンは、何度も言われたそれに肩をそびやかす。

犯人を捕まえることは重要だし、その目的もまだはつきりしていない。確かに大変な状況がないわけではないが、みなが言う大変はそれとは異なっている。

みなが言う大変は、フィオンがコレットを好きになってしまったことなのだ。

「犯人が捕まらないのは、困ってるよ。またどんなことをしてくるか分からないからね」

「……それだけ、ですか？」

「他に何かある？」

フィオンの言葉に、アニエスは苦しそくに眉根を寄せた。

「マカリスター男爵令嬢のことです。今も、私が彼女とテラスにでたことをご存知で、こちらにいらっしやっただけでしょう？」

薬で好きになってしまったという女性を探しに。

「フィオンさまは、それでよろしいのですか？」

真っ直ぐにフィオンをみて、アニエスは尋ねた。

テラスに、広間からの音楽がもれ聞こえてきた。庭を通る風がさわさわと木々を揺らし、心地よくテラスに響いていく。

「薬だろうが、一目惚れだろうが、そんなに違いがあるのかな」

遠くを見ながら、フィオンがつぶやくように言った。

静かな声で言われたそれに、アニエスはえっ？というように大きく目を開いた。今耳にした言葉が信じられない。

自分を見つめたアニエスに、フィオンはちらりと視線を向けた。

誰かを好きになるのに、きつときっかけなんて些細なことだといオンは思う。自分でも気が付かないうちに、その気持ちは芽生え育っていく。

恋はしようと思つて誰かを好きになるのではない。

同じ時間をすごし、同じだけの言葉を交わしたとしても、その人を好きになれるかなれないか、それは自分の中にある。自分の中にありながら、それでいて自分でさえ制御することなどできないもの。自分でコントロールできるのならば、恋で悩む人などいないだろう。相手の気持ちが自分にないからと、すぐに諦められるものならば苦しむこともない。

自分でどうにもならないという点で、薬であろうが一目惚れだろうが、フィオンにとってはたいした違いはないように思えた。

もちろん、王族でもあるフィオンは、恋愛感情だけで自分の相手を決めるわけにはいかない。

だが、それを見越した上で、フィオンはコレットがいいと思つたのだ。

彼女に側にいて欲しいと……。

犯人の思惑通りになるつもりはないが、それでも薬の相手がコレットでよかったと、フィオンは本気でそう思っている。

「コレットが好きだよ」

しっかりとアニエスに向き合つと、フィオンははっきりと気持ちを言葉にのせる。

「僕だつて、薬のことは十分理解してるつもりだ。それでも、ずっとこのまま彼女を好きでいたいと思う気持ちは、恋とは呼ばないのかな？」

「フィオンさま……」

「アニエス、ごめん」

アニエスの気持ちを、フィオンは知っている。

それでも……。

「なら、ならばせめて、彼女を選ぶのは、薬の解毒をされてからにしてください」

他の人を選ぶのはしかたがないにしても、薬の効果が残つたまま

だなんて、そんなことは耐えられない。

「そうしていただかなければ、どうしたって納得なんてできませんわ」

長い睫毛に縁取られた深い緑色の瞳は、涙をいっぱいにためてきらきらと輝いている。

フィオンの婚約者候補として、一番に名を連ねていたアニエスである。

こんな結末を、どうして想像できただろう。

フィオンと視線が絡み合う。

こぼれそうになる涙を見られないように、アニエスは少し顔をうつむけると、フィオンに頭を下げ、そのまま走るようにテラスを後にした。

アニエスの後姿を見送ると、フィオンはため息をつく。

誇り高き公爵令嬢。

アニエスならば、フィオンの相手としてまわりもこんなに騒がずに納得するのかもしれない。

(それでも……)

フィオンはあかりを灯された庭を見渡した。

そこにコレットの姿は見当たらない。

求める少女を探すために、フィオンは庭へと続く階段を下りた。

突然現れた人物に、いつせいにみなが振り返った。

「バード公爵……」

ジュリアが自分の名前を呼ぶのも気にせずに、フィオンはコレットにまっすぐに近づく。

「どこにいったのかと心配したよ」

髪がとけてしまったコレットは、パーティーにはふさわしくない格好になっていた。

それを気にするふうでもなく、フィオンはとけてしまった彼女の髪をそつとなでると、コレットの栗色の髪を一筋すくいあげ、口付けをおとす。

人前で髪にキスをおとされたうえ間近で見つめられ、コレットの頬がかあつと赤くなった。

「髪がとけてしまったんだね」

ちらりとフィオンがまわりに視線を移したことに気が付き、コレットは慌てて言う。

「木に」

「ん？」

「……木に、リボンが引つかかってしまって……」

確かに、少し視線を上げれば、コレットのドレスと同じチェリーピンクのリボンが、木の枝の先に引つかかってはいるが……。

フィオンはコレットから離れると、手を伸ばしてリボンのついた木の枝をつかんだ。枝に力をいれて下に下げると、コレットのリボンを優しく取り上げる。

それをコレットに渡すと、にっこりと微笑んだ。

「君の可愛らしさに、木も嫉妬したのかな」

優しく微笑むフィオンからリボンを受け取ると、コレットは泣きたくなった。

フィオンに対して、本当のことをいうわけにはいかない。

ジュリアや他の令嬢も、コレットがフィオンの申し出を受け入れなければ、こんなことをしなくてもすんだはずなのだ。

先ほどのアニメスも、傷つけることもなかった。

まわりにいる少女たちが、戸惑っていることがコレットにも分かった。

あまり目撃されたくない現場である。すぐにでもこの場を離れたいだろうに、それをしないのは、コレットとフィオンを二人きりにしたくないためか。

コレットはぎゅっとリボンを握り締めると、消え入りそうな声で言った。

「私、一度控えのお部屋に戻ります」

髪がとけてしまった状態では、このまま広間に戻るわけにはいかない。

自分のわきをすり抜けて行こうとするコレットの手を、フィオンがつかんだ。

弾かれるように、コレットはフィオンを見る。

「そのままでは目立つから、こつちに」

言われていることの意味が分からず、コレットは首をかしげる。

「髪。僕が結いなおしてあげるよ」

フィオンの言葉に、コレットだけでなくまわりの少女たちも驚いて目をむく。

王弟であるフィオンに、メイドのように髪を結わせるなんて……。

「だ、だめです」

コレットは慌ててフィオンの申し出を断った。

「どうして？」

「どうして？」

そんなこと言うまでもない。

「フィオンさまにそんなことさせられません」

「大丈夫、結構うまいと思うよ？」

手先は器用だしねと、フィオンは笑いながら付け加える。

「それに、控えの間に行くまで、誰かに見られるかもしれない。こんな無防備な姿の君を、他の男に見せるわけにはいかないよ」

コレットの耳元でささやくと、フィオンは愛しそうにコレットの

頭に手を添えて、彼女の髪に口付けた。

コレット以外目にはいらぬといつたあまりの溺愛っぷりに、まわりの少女たちは顔を見合わせる。

これだけコレットに夢中になっているフィオンに、先ほどのことが知られたらいったいなんと言われることかわからない。

自然と少女たちの視線が、彼女たちの中心人物であるジュリアに集まった。

そんなまわりの様子に、フィオンもちらりとジュリアを見やる。

フィオンとコレットのやり取りに、青ざめたような表情をしているジュリアの手にあるのは、フィオンがコレットにおくった白い薔薇だ。

フィオンはジュリアに向き合うように歩を進めた。

コレットが一人控え室に行かないように、その手は握り締めたまま。

「バード公爵。あの」

「ジュリア嬢、その花を返していただいてもよろしいですか？」

微笑みながらも有無を言わさない言葉に、ジュリアは薔薇を差し出すしかない。

悔しそくに唇をかみ締める。

「拾っていただいて、ありがとうございます」

コレットがリボンの木にとられたというのなら、そのはずみで薔薇は地に落ちるだろう。

白い薔薇に、地に落ちて汚れた形跡がなくとも……。

何か言いたげなジュリアを後目に、フィオンはコレットの手を引いてその場を離れた。

18・結び髪

コレットをその場から連れ出すと、フィオンは庭にある池の側の東屋に足を進めた。まわりに人がいないことを確認すると、コレットをそこにあるベンチへと誘^{こび}つ。

あかり取りのために、東屋の側にもいくつもの火が灯されていた。池に反射したあかりがゆらゆらと揺れ、幻想的な雰囲気あたりを包んでいる。

広間に比べればその明るさはわずかなものだが、それでも相手の表情を読み取れるぐらいの明るさは保たれていた。

オレンジ色の光が二人を照らす。

「ほら、そつちを向いて座って?」

一応断つてはみたが、やはりフィオンはコレットの髪を結う気満々のようだ。

コレットは困ったようにフィオンを見上げる。

「フィオンさま、やっぱり……」

「大丈夫。まあ、道具もないから完璧に仕上げるのは難しいかもしれないけど、控え室に行く際見られても平気なくらいにできる自信はあるよ」

そういうと、半強制的にコレットはベンチに座らされた。

髪がとかれてしまったとはいえ、人気のない場所でフィオンと二人っきりのこの状況は、コレットの現在の心境としては好ましくない。

だが、このままフィオンから逃げるように控え室に行ったとして、確かにフィオンの言うとおり髪がおりてしまったこの姿を誰かにみられる可能性が高くなる。

コレットがまわりから好意的に受け止められているわけではない。現在、それによってどんな噂がたつのかわかったものではない。

この状況では、フィオンの言うとおりにするのが一番いいのだからうけれど……。

「まっすぐ前を向いて」

コレットからリボンを受け取ると、座っているコレットの後ろに立ち、フィオンはそっとコレットの髪に触れた。

リボンがほどけてしまった髪に、ところどころ引っかかっていたピンを抜いていく。そんなわずかな刺激でさえ、コレットの肩がぴくりとゆれた。

いつも髪はメイドが結い上げている。

髪を誰かに触れられることには慣れているはずなのに、フィオンに触れられるだけでいつもと全然違うように感じるのはどうしてだろう。

ピンを取り除くと、フィオンは梳するすけるように、手でコレットの髪を梳とかした。

髪だけでなく、肌に直接フィオンの指先の感触を感じ、コレットの頬がかあつと赤く染まった。恥ずかしくて、顔が自然とうつむく。すいと後ろから伸びた手が、コレットの顎に触れ、そっと顔を上へとむけた。

びっくりして振り返ると、優しく微笑むフィオンと目が合う。

「うつむかないで。ね?」

「……はい」

自分だけが意識しているようで、コレットはなおさら恥ずかしくなってくる。

再び前をむきしつかりと顔を上げると、フィオンの指が再びコレットの髪へとすべり込んだ。

フィオンの指が撫でるように頭部に触れば、その部分から甘い痺れのようなものが首筋から背中にかけて広がっていく。

(どっ……して……)

初めて感じる甘い感覚に、コレットはわけも分からぬ。

いったい自分は どうしてしまったのだろうか。

その痺れるような感覚に耐えるように、コレットは体を硬くした。鼓動は激しく脈打って苦しいほどなのに、頭はぼおっとしてきて何も考えられなくなってくる。理由もわからず涙が出そうになった。

池のほとり。水の冷たさをはらんだ風が、コレットの髪を優しく揺らす。

(おかしくなりそう……)

先ほどより熱くなっていく自分の体温を感じながら、コレットは小波さざなみだつ水面を見つめた後、ぎゅっと目を閉じた。

ほんと両肩に手が置かれた。

思考が停止状態になっていたコレットは、その刺激にびくんと驚く。

「できた。触ってみる？」

フィオンの言葉に促されるように、髪が乱れないように気をつけながら、コレットはそつと自分の髪に手を伸ばした。

あたりはあかりが灯されているとはいえ、水辺で自分の姿を映し見るほどには明るくはない。指で確かめるしかないが、それでも触れる限りではきちんと結び上げられているようだ。

指先にリボンとフィオンに贈られた薔薇の感触を感じる。

コレットと向かい合うように、フィオンが移動した。

仕上げに正面から見据えてコレットの前髪を整えると、出来に満足するようにフィオンはコレットをまぶしそうに見つめた。

にっこりと微笑む。

「それでは、お手をどうぞ」

そう言っ、フィオンは恭まいつしくコレットに手を差し伸べる。

(ここが暗くてよかった)

これなら赤くなつた頬にもきつと気づかれていない。

そう思いながら、コレットはフィオンの手に自分の手を重ねた。

控え室に入ったコレットは、鏡の前に座るとほっと息を吐いた。

フィオンが結ってくれた髪は、櫛を使っておらず手で梳いたため、多少ざつくりと梳かした印象があるものの、それすらもふんわりと編まれた髪にあっついていて、明るいところでも決して遜色がないほどに上手に結び上げられていた。

ゆるく編まれた髪は後ろでねじってまとめられ、ピンで留められている。それを飾るのは、チェリーピンクのリボンとフィオンに贈られた白い薔薇。

状況が状況だったとはいえ、落ち着いて考えてみれば男性に髪を結わせてしまうなんて、とってもはしたないことをしたような気がする。

それも相手は、王弟でもありバード公爵位をもつフィオンである。当人であるフィオンはまったく気にしていないのだから、コレットがそれを気に病む必要はないのだが、そういう問題でもない。

フィオンに申し付けられて、髪を結うためのメイドはコレットが到着する前に、控えの間に待機していた。

一礼すると、メイドは鏡の前に座ったコレットの髪を結び直すためそっとなれる。

フィオンが結った状態でも、普段ならば問題ないくらいの出来栄えだが、ここはパーティの真っ最中。もう少ししっかりと結っておく必要がある。

なれた手つきで髪をとくメイドの手の感触に、先ほどまでの優しく髪に触れるフィオンの指先の感触を思い出し、コレットの頬が赤

く染まった。

急に体を硬くしたコレットに、メイドは小首をかしげる。

「どうかなさいましたか？」

「えっ？あ、なんでもないです」

火照った頬を隠すように手をあてると、コレットは小さく首を振った。

しっかりと髪を結び上げられ、頬の赤みの引いた自分の顔を、コレットは鏡越しに見つめる。

髪を結われたことに少なからず衝撃をうけ、思考が停止状態になっていたが、その前に起こったことを忘れているわけではない。

脳裏にアニエスの悲しそうな顔とジュリアの鋭いまなざしが浮かんできた。

二人の言葉が、コレットの頭の中をグルグルとまわっていく。

これからもフィオンと一緒にいるのなら、それを覚悟する必要がある。でも、本当にそれでいいのだろうか。

答えの見つからないまま、コレットは小さくため息をつくといすから立ち上がった。

控えの間から出ると、コレットは広間に向かって歩き始めた。

離れとなつてこの場所は、王宮の広間がある建物とは別棟になつている。二つをつなげる渡り廊下。庭を臨める回廊の中ほどに、薄明かりの中、白亜の円柱に寄りかかっている人影を見つけ、コレットは驚いて足早に近づいた。

「フィオンさま。どうなさつたのですか？ もう広間に戻られたとばかり」

誰にも見つからないように、もし見つかったとしてもフォローができるようにと、フィオンはコレットを控えの間までエスコートしてきた。

その後は、もう広間に戻つたとばかり思つていたのに。

近づいてきた少女に、フィオンは円柱から体を離れた。にっこりと微笑む。

「君を、待っていたかったんだ」

「ですが……」

王家主催のパーティーで、王弟である彼が長く広間を空けることはあまり好ましくないのではないだろうか。

コレットの言いたいことがわかり、フィオンは言葉を続ける。

「大丈夫。広間には王も王妃もそろつてるんだから、僕がいなくなつてもたいした問題じゃないよ」

王家主催といつても、つまるところ主役は王であり王妃である。

王家の人間としてそれを盛り立てて行くことは大切だが、あまり王族であることを誇示してしゃべることもない。

自らもコレットに近づくと、フィオンはコレットの髪をそつとなでた。

いとおしそうに見つめる。

「……何か言われた？」

一瞬何を言われたのか分からず、コレットは目を瞬かせた。

「アニエスやジュリア嬢に」

挙げられた名前に、コレットの瞳が大きく開く。

フィオンは知っているのだ。コレットがアニエスと広間を出て行ったことも、そしてジュリアがコレットに何をしたのかも……。

なんと言えばいいのだろう。

コレットの視線が泳ぐように庭の景色へと移った。

髪を撫でた指がするりと動き、コレットの顔の輪郭をなぞる。そのままフィオンの手がコレットの頬を包み込んだ。

その手の熱さにどきりとして、コレットはびくりと肩を震わせフィオンを見た。

真つ直ぐに自分を見つめるエメラルドの瞳。その真剣なまなざしに、コレットは動けなくなる。

熱いほどの手のぬくもりを感じ、かあつと頬が熱くなった。直接触れる手の感触に、やっと静まったばかりの心臓がまた早鐘を打ち始める。

(……だめ……なのに……)

こんなふうに、フィオンに対して接してはいけないのに。

彼には婚約者に相応しい相手がいる。そして、薬のせいで自分を好きだと言っている彼は、どうあってもコレットのものにはならない。

「ごめん」

「え？」

「君が苦しい思いをするのは、僕のせいだね」

フィオンがコレットを手放すことができないから。

「でも、君を放してあげることができないんだ」

フィオンの瞳の力に耐え切れず、コレットは少し顔を動かした。

それを許さないとばかりに、フィオンはもう片方の手もコレットの頬にあてて、両手ですっぽりと包み込む。

フィオンに両手でやんわりとだが顔を拘束され、コレットはもは

や顔を逸らすことなどできない。

少しかがんだフィオンの顔が、コレットの間近にあった。

「コレット」

甘くささやくように、フィオンは愛しい名前を呼ぶ。

「君が好きだ」

「でも……」

「薬のことはわかってる。でも、それでも、君が好きなんだ。側にいたい」

息がうまく出来なくなってしまったように、呼吸が苦しく感じる。喉に何かつまつたような感覚に、コレットはそれを飲み込むように息を飲むと、なんとか言葉を搾り出した。

「フィオンさまには、婚約者候補がいらっしやいます」

「あくまでも、それは候補だよ」

「アニエスさまは、とても素敵な方です。身分もつりあいますし、それにフィオンさまのことをとても……とても大切に」

「コレット」

「……はい」

「僕が、君が欲しいと言っているんだ。他の人は関係ない」
添えられた手に、コレットは顔を少し上にむけられた。

エメラルドの瞳に囚われて、コレットはもう目を逸らすことさえ出来ない。

「大切なのは」

フィオンの金色の髪が、さらりとコレットの額にかかった。

「君が僕をどう思っているか、それだけだよ」

心臓の音がやけに煩かった。喉がカラカラに渴いて、呼吸が苦し
い。

（私は……フィオンさまを……）

カツンと大理石の廊下に靴音が響いた。

自分たちのものではないその音に、フィオンのこと以外考えられなくなっていた思考回路が、現実へと引き戻される。

ほとんどゼロになりかけていたフィオンとの間に両手を滑り込ませ、慌てて離れる。

フィオンの手が、コレットの頬からするりと離れた。

「殿下、酔い覚まし……ですか？」

「これはオースティン公爵」

先ほどまで、コレットに口付けるほどに近づいていた現場を目撃されていたことを、気にも留めないようにフィオンはにこやかに話し始めた。

（オースティン公爵さま。アニエスさまの、お父上……）

髪には白いものも混じりつつあるが、瞳は深い緑色をたたえているオースティン公爵は、アニエスと面差しがよく似ていた。そこにいるだけで空気が変わり、ピリつとした雰囲気が漂う。

目上の貴族に対し、慌てて頭を下げようとしたコレットを相手からかばうように、フィオンは彼女を自分の背中に隠した。そのままオースティン公爵との会話を進める。

オースティン公爵は、あいさつもしなかったコレットを気にしている様子はなかった。彼にとっては、コレットなどいないも等しい。

「今宵はすばらしい夜会でした。殿下も王族として、立派にその役割を果たされていらっしゃいましたね」

「ありがとうございます。まだまだ未熟な点多く、お恥ずかしいかぎりです」

「謙遜は美德ですが、真実をまげる必要もありますまい。ところで、

ヘンリーさまは息災ですか。爵位を譲られて領地に戻られてからは、あまり王都に顔もだされないので、なかなかお会いする機会ももてぬのが残念ですが」

「領地に戻って、のんびりとしています。オースティン公が気にかけてくださっていることを聞けば、とても喜びます」

「近々お会いできればと思っております。ご意見を是非に伺いたい事項が多いですからね」

そう、とオースティン公爵は続ける。

「隣国の動きについてなど、特に。フィオンさまもスロンの状況はお聞き及びだとは存じますが？」

「また近隣の小部族を併合したようですね。現在の王は、とても領地拡大に精力的のようだ」

「現在は小さな動きでも、十分に注意する必要がある、ということですね」

「……そうですね」

「殿下」

「公、僕は今バード公爵位を継いだ身。殿下ではなくどうぞ爵位でお呼びください」

「爵位を得られようと、貴殿が王族であることに変わりはありませんぬ」

いくらフィオンが臣下の礼をとっているとはいえ、完全に臣下に下ったわけではない。

まだ王であるパトリックに跡継ぎの男子がない今、王に何かあった場合の王位継承権第一位はフィオンにある。

適任者がいない場合、女性でも王位を継ぐことは出来る。

だが、まだ二歳である王女は、王弟であるフィオンがいる現在は継承権が発生しない。せめて成人になっていれば話は変わってくるのかもしれないが。

「王にお世継ぎがない今、殿下に期待を寄せているものも多い。それはご承知ください」

「リリアは二歳になったばかりですし、義姉上もまだお若い。世継ぎの件を語るには時期早々でしょう」

「国内の安寧あんねいのためには、はっきりしておいた方がいいこともある。きつとお母上もそう思われるのでは？」

空気が止まる。

コレットには、フィオンの肩が小さく揺れたように見えた。だが、フィオンは表情を変えることなく、にこやかに会話を続けている。

「どうでしょう。亡くなった人の考えは、僕には計りかねます」

「そうですね？ 今宵は、そういうことにしておきましょう」

真つ直ぐにフィオンを見据えたオーステイン公爵は、口元だけを緩めて微笑んだ。

オーステイン公爵が去った後、フィオンはふうと小さくため息をついた。

ため息に気がつき、コレットは視線を公爵の後姿からフィオンへと移す。

少し疲れたような、そんな表情。

コレットの視線に気がついたように、フィオンは顔をそちらに向ける。自分を心配そうに見上げてくるコレットと視線があうと、微笑みながら肩をすくめた。

「僕をたき付けようとしている人が多くて困るね」

彼が望むと望まざると、フィオンを王にと望むものがあるということ。

外国の血が混じっている兄ではなく、前王と国内の由緒正しき公爵家の姫君との間に生まれたフィオンを正統な後継者として望む声

は、兄が王座についても完全には消えてはいない。

王家として、外国との友好を図るために婚姻を結ぶことなど珍しくもない。だが、それは相手もそれを望んでいる場合にのみ有効な手段となる。

兄の母である王妃がこちらに嫁いできたときと現在とは、スロンの国内情勢は異なっている。それをふまえた上で国内ではフィオンを王にと推す声が出ているのであるが、だがそれは、現王であるパトリックを支持してこなかったものたちの負い目も、少なからず含まれていた。

戴冠に際して王を支持していなかったから、国を売り渡される危険性を危惧しているのだ。

そんな愚かな判断をする兄ではないことを知っているから、フィオンは自分が王位を継ぐ必要性を感じていない。

また兄であるパトリックの失脚は、別の意味でスロンにこちら側を抗議する機会をあたえてしまうことにもなりかねない。

フィオンの目に宿る切ない色が、コレットの胸に痛みをもたらず。フィオンの微笑みがいつもより弱々しいものを感じられて、コレットは思わず彼の腕に手を伸ばした。腕に触れられたコレットの手を、フィオンは反対側の手でそっと包む。

触れられた手に、はっとしたようにコレットはフィオンを見た。何度も触れたことのあるフィオンの手。先ほどまで熱いほどの温もりを伝えていたその手は、薄い絹の手袋越しにでも感じるほどに冷たかった。

コレットの手をしっかりと握り締めると、フィオンはコレットを引き寄せた。近づき向かい合うようになったコレットの肩に、ゆっくりと額をあずける。

「しばらく……このままで」

フィオンの重みを肩に感じ、驚いてコレットは彼を見た。

さらりとフィオンの髪が頬を撫でる。間近に見える横顔は、金色の髪によって隠されてその表情を知るのは難しかった。

それでも、フィオンが傷ついているようにみえて、コレットは握られている手とは反対の手で彼の髪をそつと撫でた。

驚いたようにフィオンが少し顔を上げる。

失礼だったかしら？とコレットが思った瞬間、フィオンの顔に優しい笑みが宿った。

「……………ありがとう」

ぴたりと窓が閉められ、レースのカーテンからはやわらかな夕暮れの日差しが差し込む部屋で、イスに座っていた少女は忌々しげにテーブルを叩いた。

握り締めた手は強く握っているため白くなり、怒りのためか小刻みに震えている。

「まったくどういうこと！　なぜ、王家の方々は、公爵とあの女のことを黙認しているの!？」

惚れ薬で一目惚れというのは、もう王都中の噂である。

そうであるのに、先日の王宮でのパーティーでは、まるで最初から薬の存在などなかったかのようなバード公爵や王家の反応だったことを思い出し、少女はさらにいらいらとしたように眉間みけんにしわを寄せる。

「そうですねえ」

のんびりと返ってきた声に、少女はさらにいらいらをつのらせ、きつと声のした方を睨んだ。

「トリーヌ。もとはといえば、お前が失敗したのが原因なんですからね！　分かっているの？」

「はあ。ですが、最初から成功は難しいと申し上げた……」

「うるさいわね！」

自分に都合の悪いことには耳を貸さず、少女は指でとんとんとテーブルを叩く。

とにかく手を動かしたりして発散していなければ、腹が立って仕方がない。

「まったく、お父さまには怒られるし、散々だったわ」

薬のことなど、父親にも誰にも話すつもりなどなかった。

あのパーティーでバード公爵に見初められて、今一番注目を集めているのは自分だったはずなのに。

薬のことなど、口をつぐんでしまえば分からない。

自分たちだけの秘密。それですべてがうまくいくはずだった。作戦通りにことが進めば、惚れ薬のことをまわりに話すことなど絶対になかった。

あの日、ルノワール伯爵邸には他にも手伝いのメイドが何人も入っていたし、見慣れないという理由だけでは、トリー又は不審に思われないはずだったのだが……。

思わぬ形でトリー又がつかまったため作戦は失敗し、さらに悪いことにそれはもう薬を飲ませた後だった。

ペラペラと惚れ薬のことを話したトリー又は腹がたつたが、あの現状ではそれが最善の策だったと今は思う。何とか公爵を隔離させ、薬の効果が発現しないようにする唯一の方法だったのだから。

結局薬の効果は出てしまったのだが、その後惚れ薬のせいでバード公爵に気に入られた女への牽制にもなると、王宮内でとどめ置かれそうだった噂をそれとなく広めた。

そうすれば、薬で恋に落ちたなど周りが認めるはずがない。

そうなるはずだったのに……。

じろりと少女は目の前に立っているトリー又をもう一度睨む。その髪に目をやり、ちっと舌打ちをした。

綺麗な衣服に身を包み、お嬢様然とした見た目とはあまりにもかけ離れた態度である。

「髪」

「……？」

「ずれてるわ。ちゃんと整えなさい」

言われてトリー又は自分の髪をぺたぺたと触って確かめた。

その刺激で濃い茶色の髪がずると動き、その下からはらりと赤みがかつた金髪が零れ落ちる。慌ててほつれた髪をきつく結び上げると、女は茶色いかつらを付け直す。

そんなトリー又の行動を見て、少女は大きくため息をついた。

犯人が捕まり、そこから足が付くのを恐れて父親に話した。なんとか実行犯であるトリー又を逃がしはしたものの、これでは彼女がつかまるのも時間の問題かもしれない。

こんなことなら、トリー又を使ってマカリストー男爵令嬢を犯人に仕立て上げればよかったか。

だが、結局は口を割られ自分にたどり着かれてしまう可能性の方が高い。

本来なら、自分のすぐ側にはなく遠くへと逃がすなり、隠すなりした方が自分の身にも安全なのではあるが。

「それで、薬の売人には会えたの？」

実行犯をかねたこの女が、売人から薬を受け取り自分に届けた。

以前から自分に仕えていたこの女に、惚れ薬の噂を聞きつけて買に行かせたのは自分だが、売人に直接あっているのはトリー又だけである。

トリー又から聞いた話では、売り子はまだ若い黒髪の少女だったという。薬師との仲介人を名乗った少女を訝いぶかしんで、薬の実験まで立会いで行わせた。薬だと言われて、ただの砂糖水やましてや毒を売りつけられてはたまらない。

その場で実験をして、一滴餌に混ぜて野ねずみにあたえたところ、しばらくして野ねずみはトリー又にまわりつき大変だったという。体に這い上がってくるねずみに悲鳴を上げながら、なんとか振り切って帰ってきたトリー又は、髪はぼさぼさ、衣服はねずみに這い回られたことよってかきむしり、かなりひどい格好になっていたが、おかげで薬の効果は実証された。

バード公爵と二人つきりで会うことは難しい。そのため場所やタイミングなど、いろいろ考えた上で何とか本番に臨んだというのに、まったくの無駄になってしまった。

現状がこの状態である以上、どうしても今解毒薬が必要なのだ。

バード公爵や王家のあの態度では、薬を解毒する気があるのかさ

え疑わしい。

「すみません。交渉の場だったところには何度も行ったのですが、あれからあの女に会ったという人がいないんです」

もともと、交渉の場になっていたのは目撃されにくい場所だった。他の人間が、黒髪の少女のことを見かけないのも無理からぬことではある。

今、トリーヌを王都で動き回らせるのには危険が伴う。

しかし、それを押してもどうしてもその女を見つけないければならない。

父親には、今の時点で犯人に結びつく証拠などないのだから、おとなしくしていると言われた。そのうち、王家が命じた医師や薬師たちによって、解毒薬が作られるからと。

だが、あれから何日もたっているのに、ちっとも解毒薬の話が出てこない。

その上の、バード公爵と王家のマカリスター男爵令嬢に対する態度である。

王宮でのパーティー。バード公爵は当たり前のようにマカリスター男爵令嬢をエスコートし、他の誰も目に入らないような状態で微笑んでいた。薬のせいであるのに、それが分かってのうのと公爵の隣で微笑んでいるコレットに、はらわたが煮えくり返りそうだ。

あんな二人の姿を、これからも見せ付けられたらと思うとたまらない。

解毒薬が手に入らないとなれば、今後の方針も転換しなければならぬ。

「何か、手を考えましょう」

バード公爵とあの女を引き剥がす手立てを。

解毒薬は必要だ。だが、解毒薬がないからといって、いつまでも手をこまねいているわけにはいかない。

王都にあるバード公爵邸の書斎。

本棚がずらりと並び、そこには歴代の公爵が収集した本が天井高くまで収められている。

窓辺に背を向ける形で座っていたフィオンは、飴色に磨かれた木の机の上に広げた本に目を落とした。

羊皮紙でできたページをぱらりとめくる。

かなり古い書物らしく、羊皮紙の端には湿気でよれてしまったところや、茶色い染みが滲んでいるところもある。本の綴じられた部分が傷まないように、慎重にページをめくっていたフィオンの手がぴたりと止まった。

ドアをノックする音が、部屋に響く。

失礼しますと扉を開けて入ってきたのは、老執事のクレマンだった。

フィオンは目を通していた本を閉じる。

「旦那さま、馬車のご用意が出来ました」

「もうそんな時間か。わかった。すぐに行くよ」

部屋を出たクレマンを見送り、フィオンは読んでいた本を持ったまま立ち上がる。奥の本棚へと近付くと、目の高さの部分にある棚を少しだけ右ににずらす。カチリと音がして棚が手前にずれた。本が載ったままの状態で手前に引けば、それはまるで分厚い扉が開くように動く。その奥にある金属の扉の鍵を開けると、フィオンは今まで読んでいた本をそこにしまった。

再び鍵を閉めて手前に引いた本棚を戻すと、再びカチリと音がして棚は動かなくなった。

棚が動かないことを確認すると、フィオンはそのまま書斎を後にした。

バード公爵家の馬車が、ルノワール伯爵邸の門をくぐる。

あの日以来、初めての訪問となるその場所に降り立つと、迎えに出ていた伯爵家の執事がすぐにフィオンを室内へと案内した。

中で待つていたルノワール伯爵夫人は、フィオンの到着を玄関ホールにまで出て迎えた。

「ようこそ、当伯爵家へ。このたびは、当家の不幸により公爵には大変な事態となりましたこと、重ねて深くお詫び申し上げます」
深々と頭を下げる伯爵夫人に、フィオンはそつと手を伸ばし頭を上げさせた。

「こちらこそ、あの日以来伺いもせず申し訳ありませんでした。僕の方こそルノワール伯爵家には多大な迷惑をかけたと心配しています。陛下には僕からもしつかりと申し上げておきますので」

現在のところ、とりあえず伯爵家が直接的な関与はしていないものとされているが、犯人が捕まるまでは、ルノワール伯爵家では一切のパーティーを中止するよう王家から通達がでている

実際は狙われたのはフィオンであり、自宅でのパーティーを利用されたという点でルノワール伯爵家も被害者の一人なのだが、管理体制の甘さを指摘されてしまうと辛いところだ。

「今日は主人は出ておりまして、せつかく公爵がいらしてくださいましたのに申し訳ありません」

王宮の仕事で留守にしているのだから、私的な訪問のフィオンよりそちらが優先されるのは仕方がない。

「それを知って来たのですから、僕の方こそ急な訪問を謝らなけれ

ばなりません。そういえば、ルノワール伯爵とは先日王宮でお会いしましたけれど、かなり責任を感じていらっしやったようでした」

あの日、別の用事がありパーティーに直接参加していなかったルノワール伯爵であるが、事件の現場が妻の主催したパーティーで、それも自分の邸宅で起こったことである。

息子ほども年の離れたフィオンに、平身低頭に詫びていたルノワール伯爵を思い出す。伯爵がいる状態では、おそらく彼の平謝り状態になってまともに話など出来そうもない。

「あまり気にしないようにと言ったのですが、耳に入ったかどうか伯爵夫人からも、僕がそういつていたと伝えて置いてくださいね」

「もつたいないお言葉ですわ」

会話をしながらフィオンを応接室のソファに促すと、ルノワール伯爵夫人もその向かいに腰を下ろした。

すぐにメイドが飲み物をテーブルに用意する。

「当家でお飲み物を飲まれるのは、気が進まないかもしれませんがねど」

一言添える伯爵夫人に、フィオンはにっこりと微笑んだ。

「とんでもありません。僕は今の状態を喜びこそすれ、愁いてなどはいません。喜んでいただきます」

そういうと、フィオンは気にすることもなく、入れられたお茶を口に運んだ。

パーティーの日、にこやかにコレットを誘っていた状態そのままのフィオンに、ルノワール伯爵夫人は、やれやれと肩に入っていた力を抜いた。

「今回の件、王都中で一番落ち着いていらっしやるのは、当人であるバード公爵だけのようですね」

「そうですね？ 今回のことで僕は大切な人と巡り合えたのですから、喜んでいるのは確かですけど」

「まあ、世の女性陣が聞いたら、卒倒しそうなお言葉ですこと」

「ただ……」

「どうかなさいました?」

「コレットのことです」

「マカリスター嬢がどうかしまして?」

少し考えるようにして、フィオンは言葉を続けた。

「嫌われては、いけないと思うんです」

フィオンの言葉にコレットは困惑したような表情はしても、嫌がるそぶりはない。

フィオンが触れれば赤く染まる頬を見れば、どちらかといえば好意を持っていると思ってもいいのではないかと思う。

「でも、どうもコレットに僕の言葉がちゃんと届いているのか、分からなくなるときがあります」

「まあ」

フィオンの言葉にルノワール伯爵夫人は驚いたような声を上げたが、すぐにくすくすと笑い声が洩れる。

「何かおかしいことをいいましたか?」

「申し訳ありません。でも、バード公爵も一人の男性だったということですね。とても女性におもてになるから、女性の気持ちなどすべてお見通しかと思っていましたわ」

笑うのをやめると、ルノワール伯爵夫人はお茶に口をつけた。

「バード公爵。わたくしはマカリスター嬢をある程度存じているものとして申し上げますけれど、それは仕方がないことですわ」

「仕方がない、ですか?」

「惚れ薬を飲んで好きになったという相手の言葉を、どうしてすべて信じていることができるでしょう」

フィオンの甘い言葉に心揺らされながらも、自分の立場を考えるだけの思慮を持つことは大変なことだと思う。なにせ、薬のせいとはいえ、愛を囁く相手は本気に口説いてくるのだから。

だが、それがどこまでが本気で、どこまでが薬のせいなのか。それを判断することは難しい。

そうなれば、コレットの立場上、フィオンの言葉すべてを信じる

わけにもいかなくなる。

「やはりそこですか」

フィオンはふうつとため息をつく。

たとえ薬のせいだったとして、フィオンにそれを解く気などまったくない。それでも、薬を飲んだということだけで、自分の気持ちが届かないのではどうしようもない。

薬を飲んでいない状態で出会っていればどうなったか。

それは今となっては誰にも分からないのだから。

「フィオンさま、女性の気持ちを動かすにはある程度の時間は仕方がありませんわ」

事態が事態であるし、ましてやコレットは婚約を解消したばかりである。すぐに気持ち切り替えられないのも仕方がない。

今まで女性から声をかけられることはあっても、これだけ口説いて振り向かれなかった経験などないであろう目の前の青年に、ルノワール伯爵夫人は小さく肩をすくめた。

「すぐに手に入らないからと諦められるのであれば、それも仕方がありません。でも、諦めないのでしょうか？」

「もちろん」

そんなことなら、最初から望んだりなどしていない。

諦める気など毛頭ないと、フィオンは悠然と公爵夫人に微笑んだ。

マカリスター男爵家の書齋で、自分の身長より少し高い場所にある本に、コレットは少し背伸びをしながら手を伸ばした。

一冊の本を取り出すと、そのまま近くのソファへ腰を下ろしページをめくる。

最後のページにまで目を通すと、小さくため息をついた。やはり自分の知りたいことはここには載ってはいないらしい。

先にソファに腰を下ろしていたアンリは、コレットが持ってきた本をちらりと見た。

アンリは父親の書齋に自由に入ること許されている。もちろん触ってはいけない場所などはあるが、持ち出さなければ本を自由に見ていいと王立学校に入学された際に許可を受けていた。

勝手に書齋に入ることをつためらっていた姉に付き添って、いったいそこまでしてどんな本が読みたいのかという興味もあって一緒に来てみたのだが……。

「なに？ そんな本読んで。とうとう観念してバード公爵家にも嫁ぐ気になった？」

「馬鹿なこと言わないの」
そういうと、コレットは慌てて本を閉じた。

コレットが開いていた本には、王家にまつわる家系図が記載されている。

現王家の血脈がどう受け継がれているのか、それを知ることが貴族としての常識ともなるので、その手の本はどの貴族の館でも置いてある。

それを見ていたコレットに、将来の親族についてでも調べているのかとアンリはからかった。

「別に俺はどっちでもいいよ？ バード公爵が義理にい兄さんになって
も」

「なっ……」

弟の言葉に、コレットは驚いて大きく目を開いた。

王弟であるバード公爵が、薬によって一目惚れした相手は、一地方領主の男爵家令嬢だった。その家族であり、将来のマカリストー男爵家を継ぐ立場である弟にも世間の目は厳しいだろうに、そんなことは全然気にしていないふうのアンリの態度に、コレットは眉根を寄せた。

あの事件後、一度詳細を知るべく王立学校の寄宿舎から男爵家の町屋敷タウンハウスに戻って来たアンリだったが、その後一度学校へと戻った。だというのに、夏期休暇まであとわずかという今の時期になって、再び自宅へと戻ってきたのだ。

それが今回の事件と無関係だとは思えないのだが……。

「アンリは学校で何か言われたりしてないの？」

先ほどの弟の言葉を逸らすように、コレットは話題を変えた。

「何かって、コレットのこと？」

「そう」

他の貴族にとっては、あまり面白くない事件のはずだ。学校での弟の立場にも影響などしていないのだろうか、コレットは心配になって尋ねてみる。

「だいたい、様子を見てるところかな。今のところ」

王家がマカリストー男爵家を糾弾していない今、みなアンリにどう接しているのか迷っているといった感じだろうか。

王族関係の人間には、バード公爵があつた状態なので何気に気を使われている気もする。王立学校の上層部には王家との血族となる人も多いのだ。早めの夏期休暇に一人入ったのも学校側の配慮であるのだが、それが気に食わないと思っっている人物がいることも確かだ。「まあ、何人が言ってきたやつもいるけど」

「どうしたの？」

アンリはじつと姉を見た。

どうしたのかと、コレットは小首をかしげる。

「バード公爵が姉にかなりご執心で、男爵家としてそれを拒むことは難しいといっておいた」

アンリの言葉に、コレットは目を丸くする。

かあつと頬が赤く染まった。

「みんなの前でそんなこといったの？」

「そんなことつて、本当のことだろ」

「それは……」

悪びれもせず、アンリはしれつと言い返した。

フィオンからの求愛を直接受けている身としては否定もできず、だがそれを肯定してしまうのもどうなのかという感じもして、コレットは口ごもる。

「コレットが公爵とくつついたら、男爵家^{ぶつ}としては断れなかった立場なわけだし、だめだとしても薬のせいであまくいかなかったことにしとくから、コレットの好きにしたらいいよ」

マカリスター男爵家の跡継ぎとして、今後の対処は考えている。

「お姉ちゃんって呼びなさいって言ってるのに……」

そんなアンリの態度に、コレットはぶつぶつとつぶやきながら困ったように弟を見た。

いくらなんでも物分りがよすぎる。

「お父さまは、反対してるみたいよ？」

別に諸手を上げて賛成されても状況が状況だけに困るのだが、フィオンとのことにニコニコと賛成している母親とは反対に、父親であるマカリスター男爵はあまりこの話をしたかららない。

「あれは、父親特有の現象だから仕方がないよ」

「なによそれ。知ったような口きいちゃって」

「父親ってというのは、娘の相手が誰だつて素直には喜べないものなんだつてさ」

以前、コレットの婚約を決めたのは父親である。

コレットが結婚するということが事態に気分を害するようなことは

ないと思うのだが、やはり王家の人ともなると話が違つのかもかもしれないとコレットは思った。

(別に、賛成してほしいわけじゃないけど……)

これではまるでフィオンとのことを認めてもらいたいようだと思いい、コレットは心の中で言い訳する。

そんな姉の様子を見て、アンリは肩をすくめた。

以前のコレットの相手は第二子息だった。

もちろんアツカーソン男爵家とのつながりを持つという意味合いもあの婚約にあつたわけなのだが、それなら第一子息の方が家を継ぐ身なので立場的には磐石である。しかしあえて父親は家を継がない身分である第二子息であるキースを選んだ。

彼をマカリストアー男爵家に迎えてアンリの相談相手とする。そうすれば、コレットはずっと男爵家の一員として家にいることになると考えていた父親の気持ちは、コレットにはよくわかっていない。

バード公爵家といえば名門中の名門。

その上王弟でもあるフィオンでは、コレットは男爵家から出るだけでなく、頻繁に会うことも難しくなってしまう。父親が洩る一番の原因を思い、アンリは苦笑いをした。

もちろん惚れ薬が関わっているというのも、父親が気に入らない原因の一つではあるのだが。

「それで？ 王家に入る気もたいしてなくせに、なんでそんな本を見てるわけ？」

あらためて指摘され、コレットは持っていた本に視線を落とした。ここには自分の知りたかったことに関わる内容は何も書いてはいない。

「誰にも言わない？」

「言われたくない内容なの？」

「……前の王妃さまって、ご病気でなくなられたのよね？」

「前のつて、バード公爵の母親に当たる？」
「そう」

前王には二人の王妃がいた。

一人は現在の王の母親にあたる隣国スロンの姫君、そしてもう一人はスロンの姫君の亡くなった後に後妻として入ったバード公爵家の姫君。つまりはフィオンの母親である。

「病気だつて聞いてるけど、なにか気になることでもあるの？」

「そうじゃないんだけど……」

先日王宮でのパーティー。

あの時、母親のことを言われた時のフィオンの様子が気になった。

「前の王妃さまは、フィオンさまを王さまにしたかったのかしら」

コレットがつぶやくような言葉に、アンリは驚いたように姉を見る。

アンリの表情に、言うべきではなかったかとコレットは思った。

が、弟の口から出たのは別の言葉だった。

「知らなかったの？」

「え？」

「俺でも知ってるのにつて、まあ、家にいるコレットは仕方がないか」

前王妃が亡くなられたとき、コレットはまだ十歳だった。

子供に知らせることもないし、大きな声で言うのもはばかられる内容である。

アンリは王立学校での微妙な貴族間の雰囲気を感じとり、その原因の一つとしてそれを知ったのだから、コレットが知らないのも無理はない。

「なにかあったの？」

ちらりとアンリはコレットを見る。

「俺も詳しく知ってるわけじゃないからな」

「うう、うん」

内緒話をするように、アンリはコレットに近寄った。

「前の王さまが亡くなってから、今のパトリック陛下が王位に就かれるまでに何年か時間があっただろ？」

「それが何かあるの？」

王位の継承など初めてだったので、幼かったコレットはあまり疑問にも思っていないかった。

「あれは、前の王妃さまがパトリック陛下の即位に同意しなかったからだって話があるんだ」

後見のない世継ぎの王子と、国内の有力貴族の出身の王妃。発言権の大きさはおのずとしれてくる。

「王妃さま一人じゃそこまでの権限はないんだけど、他にも今のバード公爵の方に王位を継がせたかった人たちがいて、それでもめてみたいだよ」

その痕跡が今でも残り、貴族間の派閥となつて現れている。

家同士の利害が関わつてくるともなれば、貴族の子息が通う王立学院でも交友関係に微妙に影響してくるのも当然だ。

「でも、前のバード公爵さまは、陛下のご即位に協力なさつてたわよね？」

フィオンの母親である王妃が亡くなった後、前バード公爵の計らいにより、現王パトリックの妻として、フィオンのいところでもあるディアナが彼に嫁いでいる。

それによつて、ディアナの実家ローレン侯爵家とバード公爵家が後見となる形で王の即位が行われたのは有名な話だ。

いくら社交界にデビューしたばかりで、中央の政治的絡みに詳しくないコレットでも、それぐらいは常識として知っている。前バード公爵が今のパトリック陛下を王として押したのだから、まさかその娘であるフィオンの母親が反対していたなどとは思ひもしなかった。

「だから、詳しいことはわからないって言っただろ」

そんな王宮での駆け引きがあつたとき、アンリは実際六歳ほどだったのだから、詳しいことなど知るわけもない。

「結局は王妃さまがご病気になったし、王弟殿下もお若かったから
つていうのもあっただろうけどさ。でもあのまま長引いたらまずか
ったよね」

「何が？」

「国内の権力争いは、国を乱す元だってこと。コレットには難しか
った？」

「からかい半分に笑うアンリを睨むと、コレットはゆっくりと視線
を落とした。

だから、なのだろうか。

王宮で会った王さまとフィオン。

一緒にいるところを見たのはそんなに多くはないが、二人の仲が
悪かったようには見えなかった。むしろ、兄弟仲はいいようだった。
そんな王と権力争いをするようになるのは、フィオンにとっては
不本意だったのではないだろうか。

例え、それが実の母親が望んでいたことだとしても……。

あのとき、母親のことに触れられたときのフィオンの苦しそうな
表情が、コレットの脳裏から離れなかった。

書斎を出て自室に戻ろうと廊下を歩いていると、パタパタとした
足音が聞こえてコレットはぎくりと肩を震わせた。

隣を歩いていたアンリと目を合わせると、恐る恐る音の方向に目
をやる。

書斎に入ること事態が禁止されているわけではない。でも父親に
相談もなかったたので、見つければ注意を受けるには十分な理由だ。

階段を下りて現れた足音の主は、メイドのノーラだった。

「どうしたの？ ノーラ。そんなに急いで」

「お、お嬢さま、ここにいらっしやったのですか？ お部屋にいらっしやらなかつたのでお探ししました」

どうやら書斎に入ったことではなかつたようだと、コレットは肩から力を抜いた。

自分には関係ないことだと、アンリはコレットの横を通り過ぎて行く。

「今、今、今……」

「ノーラ、落ち着いて。今何かあったの？」

小さく首を縦に何度も振って、ノーラはなんとか言葉を搾り出す。

「今、いらっしやってるんです!!」

「どなたが？」

「応接室で、男爵さまとお話されていて」

どうやらコレットが書斎で調べものをしている間に、父親は帰ってきていたらしい。

見つからなくてよかったと、小さく息を吐く。

「早くコレットお嬢さまを連れてくるようにと男爵さまが！」

慌てて話すので、ノーラの言葉は要領を得ない。

コレットは小首をかしげる。

「ノーラ。どなたがお父さまとお話されているの？」

「だから、バード公爵さまです！ 公爵さまがいらっしやってるんです！」

ノーラの言葉に、先に歩いて自室に戻ろうとしていたアンリが驚いて振り返った。

そんな弟と目が合うと、コレットは何か言われる前に視線を逸らした。

22・夕暮れ

応接室の扉を開けると、すぐにコレットに気が付いたフィオンと目が合った。目が合った瞬間、フィオンの顔に弾けるように微笑がこぼれる。

それだけで、窓から差し込む光には変化がないのに、応接室の中が明るくなったような錯覚さえ感じられた。

父であるマカリスター男爵と何か言葉を交わすとフィオンはすぐに立ち上がり、コレットがあいさつをする間もなく彼女に近づく。

コレットの手をとると、貴婦人へあいさつするように彼女の白い手に唇を落とした。

コレットのすぐ後から応接室に入ったアンリが、いきなり目の前で行われた行為に目をむいて、中に進むうとしていた足をぴたりと止める。

王宮に呼ばれたり、バード公爵家の別荘に招待されたり、パーティーのパートナーと務めたりと、薬の性とはいえバード公爵が姉に思いを寄せていることは聞いていた。聞いてはいたが、今まで遠くから見ることにしかなかった王弟殿下の、そのとろけそうなほどに甘い笑みを実際に目の前でみせられると、自分の認識以上だったことを実感する。弟にでさえ言い負かされてしまうようなコレットが、バード公爵の甘い口説き文句に対抗するのはどうみても難しそうだ。息を飲むような弟の気配を背後に感じ、微笑むフィオンのそのおくには、微妙な表情の父親の姿がある。

フィオンと会って、何度となく行われた行為。だがさすがに家族の目の前となると、気恥ずかしさも違ってくる。

みんなの視線を感じ、コレットの頬が赤く染まった。年頃の女性が初々しく恥らっている姿は、とても可愛らしい。

「急な訪問で驚かせた？ 近くを通りかかったものだから、どうし

てるかなと思つて」

コレットの手をとつたまま、にっこりとフィオンが微笑んだ。

「お父上たちを驚かせてしまつたみたいだつたね」

王都を流れるセイズ川の辺、遊歩道ほとりとしてきれいに石畳をしかれた場所で、歩を進めながらフィオンが言った。

突然のバード公爵の訪問に、父親であるマカリスター男爵もどうしていいのか分からず、平静を保とうとしつつも家の中は上を下への大騒ぎだった。

それを感じて、フィオンはコレットを散策へと誘い出した。

初夏の夕暮れ時、川べりでは涼やかな水音が響き、心地よい風が生まれている。

「とんでもありません。フィオンさまのご訪問は、父にとつてとても栄誉なことですよ」

貴族にとつて、目上の貴族の訪問は名誉なことに当たる。

その人から訪問を受けるといふことは、それだけ目をかけてもらつているということになり、交友関係がものをいうような貴族社会での立場を押し上げることにもなるからだ。

それが王弟であり、国内屈指の名門であるバード公爵家の当主であればなおさらである。

確かに突然のことで、平常心ではなかったようだったが。

「君は？」

「え？」

「コレットはどう？ 僕が急に来て、迷惑だった？」

「そんなことっ！ そんなこと……ない、です」

足を止めてコレットを覗き込むように見つめてきたフィオンに、コレットは慌てて否定する。

驚きはした。

まさかバード公爵自らが突然訪ねてくるなんてことは思ってもいなかったから。

ちよつと恥ずかしい気持ちも確かにあった。

家族の前でフィオンと一緒にいることは、嫌というのではないけれど、いつもよりもつとどうしていいのか分からなくなってしまったから。

でも、それでも、決して嫌ではなかった。

「そう。よかった」

につこりと微笑まれ、コレットの心臓がどきんと跳ねる。それに気がつかれないように、コレットはそつと目を伏せた。

再び歩き出したフィオンに合わせて、コレットも歩を進める。

にこやかに話すフィオンに相槌を打ちつつ、コレットはちらりとフィオンを見上げた。

夕暮れ時、オレンジ色に染められた空気が、あたりをやわらかく包んでいる。

その光に縁取られ、フィオンの金色の髪がいつもより色を濃くしてきらきらと輝いていた。

とても楽しそうに微笑んでいるフィオン。

でも……。

コレットはさつき書齋でのアンリの言葉を思い出す。

もつ何年も前の話である。

王位継承は行われ、現在はフィオンの兄であるパトリックが王としての地位を築いている。そんなに気にするようなことでもないのかもしれない。それでもまだ、その傷にフィオンが苦しんでいるかと思うだけで、なんだか胸がずきんと痛む。

王弟であり、バード公爵位をもつフィオンの苦勞など、すべてがコレットに分かるわけではない。理解するなんておこがましいことも分かってる。

(それでも……)

コレットの視線に気が付いて、フィオンがコレットに視線を移し

た。

どうしたのかと優しく微笑む。

コレットは小さく首を振って微笑み返した。

自分が笑う、ただそれだけでフィオンが幸せそうな表情を見せるから、それだけでどうしてだろう、とても泣きたくなるほどに嬉しくなる。

フィオンには笑っていて欲しい。

王宮でのパーティーでみた切なげな表情よりも、幸せに笑っていて欲しいとコレットは思った。

しばらく歩くと、セイズ川を挟んで遊歩道とは反対側にあるリアーズ・ガーデンの奥でにぎやかな声が聞こえた。

「もうすぐ夏至祭だから、その準備をしているんだろっね」

声に反応してどうしたのだろうと広大な王立公園の方を見たコレットに、フィオンは言った。

「コレットは王都での夏至祭は初めて？」

「地元のお祭りを行ったことがありますけど……」

夏至をすぎれば夏も本番へとなっていく。

王宮での夜会が終われば、だんだんと社交シーズンも終了へと向かい、夏至のころには領地に戻るものもちらほらと出てくる。

今年は事情が事情であるので、マカリスター男爵も夏至を迎えようとしている今でも王都にとどまっていた。夏至のあたりから秋の収穫の時期には領地での父親の仕事も増えるため、いつもはマカリスター領に戻っている。コレットにとってこの時期まで王都にいることは初めてだった。

「夏至のお祭りは、国中いろんなところで行われるからね」

夏になるうとするこの季節は、緑が萌えて色を濃くし、太陽はまぶしいほどにあたりを輝かせる。

生命力に溢れる自然を拝して、これからの大いなる恵みと繁栄を願い一年で一番夜の短いこの日を祝う。

「そうだ、夏至の日は僕がここを案内してあげるよ」

「えっ？」

「夏至の夜はこのリアーズ・ガーデンが開放されるんだ」

王家が管理するリアーズ・ガーデンは通常治安維持のため、夜間の出入りは禁止されている。

しかし普段は夜間門扉が堅く閉ざされているこの公園も、夏至の夜だけは毎年一晩中開放される。

フィオンからの誘いに、コレットの頬が無意識に赤くなった。視線が泳ぐ。

「予定がある？ 他の人と」

「そう……ではなくて」

コレットはなんといいのかわからず言いよどむ。

夏至祭は国中で催されるような、一般的なお祭りである。

もっとも自然の力が強くなるこの季節に、人々はいろいろな願いを持って祭りに参加する。

夏至の時期は昔から恋の季節とも重なるため、夏至祭は恋人達のイベントとしての意味合いも持っていた。好きな人と結ばれるように、ずっと一緒にいられるようにと願って共に時間を過ごす。

だから、異性からの夏至祭を一緒に過ごそうという誘いは、あなたを好きだと告白し、恋人になりたいという意味が含まれている。

コレットもマカリストー領で行われたお祭りに参加したことがあるが、いつも家族と共にである。口約束だけとはいえ、婚約者がいたコレットは他の男性と夏至祭に行ったことなどない。

それなのにさらりと誘うフィオンに、コレットは戸惑った。

王都では違うのだろうか……。

もしそうならば、自分だけがあたふたしているようで恥ずかしい。そこまで考えて、以前ルノール伯爵家でのレディ教育のときに、

他の女の子たちとの会話で、みな素敵な相手と夏至の夜を過ごすことが楽しみだと言っていたのを思い出した。

「僕ではだめ、かな？」

「ち、違います」

フィオンの表情が寂しそくに曇るから、コレットは慌てて否定した。

誘われたことも、一緒に出かけることも嫌なわけではない。そんなことは今更である。

(でも……)

王宮で会ったアニエスの真っ直ぐな瞳が、ジュリアの憎しみのこもった視線がコレットの脳裏にうかんだ。

この場所は、別の人のものだ。

本来ならフィオンの隣に、コレットの居場所なんてあるはずもない。

それなのに、乞われるまま公の場にフィオンと出かけるのは、まさに余計な刺激を与えることにならないだろうか。そうなれば、将来的にはフィオンにも迷惑をかけてしまうかもしれないとコレットは思った。

コレットと一緒に出かけることによって、まわりにはつきりと自らの意思を示しているフィオンの気持ちなど、コレットにはまったく分かっていない。

フィオンはコレットと向かい合うと、なんといいのかわからないコレットの手をとった。

「コレット」

「はい」

「僕は、君と一緒にいたい」

「……はい」

コレットはフィオンに握られた手をじっと見る。

フィオンの言葉は、コレットの気持ちを簡単に押し流し嫌と言わせなくするから、瞳を合わせることができない。

フィオンはコレットの手をつかんだままそれを持ち上げる。

手の動きを目で追っていたコレットの前で、フィオンは優しく彼女の手のひらに唇を押し当てた。

そのやわらかい感触に、コレットの体がびくりと揺れる。

「こっやって一緒にいるだけで、僕はとても幸せな気持ちになれるんだ」

まっすぐに熱っぽい視線を受けて、コレットは動くことができない。

「コレット。夏至の夜を、僕と一緒にすごしてはいただけませんか？」

「……」

何も言わないコレットに、答えを待つフィオンの瞳が一瞬不安げに揺れた。

それだけで、コレットの胸がぎゅっとなつかまれるように痛む。

それをみて、どうして断ることなんてできるだろう。

「……………はい」

消え入りそうな声で、コレットが頷いた。

ぱっとフィオンの表情にあかりが灯る。

「ありがとう」

そういつてとても嬉しそうに笑うフィオンから、コレットは目を離すことができなかった。

23・夏至祭

おりるために馬車から一步踏み出したコレットは、周りの賑やかさに驚いてあたりを見回した。

馬車が止まったのはリアーズ・ガーデンの王家専用の門からなのでとくに込み入ることはなかったが、公園内の木々の向こうに見える正門を入ってすぐの停留所はかなりの馬車と人の数でごった返している。

コレットが馬車からおりるのに手を貸そうとしていたフィオンは、触れようとすする寸前に止められたコレットの手苦笑するとそれを優しく握り締めた。

握られた手にはつとして、コレットはあわててフィオンの手をかりて馬車からおりる。

きちんと馬車からおり立ったコレットに、フィオンはにっこり微笑んで持っていた花冠をそっとのせた。

今日のコレットのドレスは袖の部分には肩から薄く地の透けたデザインで、袖口とドレスのすその部分には繊細な刺繍があらわれている。クリームイエローのドレスの上にはやわらかいシフォンがふんわりと重ねられて、歩くたびにふわふわと可愛らしくゆれた。

そこに、セント・ジョーンズ・ワートの可愛らしい黄色の花を中心に、白のノコギリソウの花とオレンジ色のマリーゴールドの編まれた花冠をかぶった姿は、まるで花の妖精を思わせるほどに愛らしかった。

それに満足するようにフィオンはにっこりと微笑みかける。

フィオンの笑顔に赤くなりながら、コレットは礼を言う。

「君が夏の妖精たちに囚われてしまわないように、ね」

セント・ジョーンズ・ワートやノコギリソウには、妖精たちから身を守る効果がある。それを身に付けるのは、自然の力がもっとも大きくなる夏至の日に彼らの国につれていかれないようにとの昔から

の風習である。もつとも、男性が恋人に送るのには、他の男に心奪われないようにとの意味も込められているのだが。

コレットの手を取り、フィオンは園内に歩を進めた。

その後ろから、本日の共として一定の距離をとり従者であるロイドも二人を追う。お祭りの夜、治安の維持を図るためある程度の入場制限はあるものの、リアーズ・ガーデンは広く開放されている。警備も強化されているが、絶対ということはない。王宮や貴族の館でのようなわけにはいかないのだ。

まだ明るい園内の遊歩道を歩けば、あたりにはいろいろなところから楽の音や人の声が聞こえてくる。

園内には貴族以外の人たちも入っているため、貴族のパーティーのようにフィオンとコレットが注目を集めすぎることもない。ときおりフィオンにあいさつをしてくる人がいるくらいで、二人はのんびりと園内を散策できた。

遠目に貴族の令嬢らしき人物の一段がこちらを見ていたが、それでも直接声をかけてくることはない。

「にぎやかですね」

「特にこのあたりはお祭りの中心になってるから。ほら、中央の広場のほうに組み木が見える？」

フィオンが指差す方向に視線をむけると、人ごみの上の方にちらりとそれらしきものが目に入った。

まわりの人ごみに隠れて、コレットの身長でみえるのは組みまれた木の先っぼだけだ。

「日が落ちると、あそこに火が灯されるんだ。それまでに紙に願い事を書いて入れておくと、天にとどけてくれる」

願いをかなえるまじないはいろいろあるが、あれだけ大きいと確かに天までとどきそだとコレットも頷く。

「行ってみようか」

「えっ？」

「願いごとをしに、ね？」

フィオンに促されて広場に来てみると、そこには願いごとをしようとしている人たちがたくさんいた。

さすがに恋のお祭りといったところだろうか。組み木のそばにいるのは、占い好きの妙齢の女性たちや恋人たちの姿が目立つ。広場のまわりには願い事用に綺麗な紙を販売している店もありその近くで願いごとを書いている人たちもいれば、自宅から願いごとを書いた紙を持ってきて組み木のなかに入れている人もいる。

フィオンから綺麗な薄紫色のスミレが描かれた紙を渡されると、コレットはその紙をじっと見つめた。

いきなり願いごとといっても、何を書けばいいのか。

ちらりとフィオンをみれば、すでに書き終えて紙を折りたたんでいる。

ふとその横顔に、王宮でのフィオンの横顔が重なった。

今のコレットに願いがあるとするならば……。

書いた紙を折りたたみ、途中開いたりしないように封筒へと入れる。

それを預かりロイドが組み木へと向かった。今夜は祭りの夜である。ここに来ている全員がフィオンの顔を知っているわけではないが、さすがにフィオンとコレットが直接組み木の側にいくのでは目立ちすぎる。

「願いごとは何を書いたの？」

「えっと……秘密です」

ちょっと頬を赤らめると、コレットは視線をそらしながら答えた。とつさに書いてしまったことでフィオンはコレットがなんと書いたのか知らない。それでもなんだか恥ずかしくてまともに彼を見ることができなかった。

とくに知られてまずいようなことは書いてはいない。書いてはい

ないのだが、それでも『彼がずっと笑っていられますように』ととつさに書いてしまったことに頬が熱くなる。

『彼』が誰であるのかは書いた本人にしか分からないのだが。

「お願いごとはあまりお話ししないほうがいいんですよ?」

それは女の子たちの中での、おまじないの基本でもある。

「そうなの? 言葉にしないと叶わない願いごともあると思うけど」言葉にしなければ伝わらないことがあるから、フィオンはコレットへの告白をやめないわけなのだ。

「君がいうなら、そういうことにしておこうかな」

フィオンの返事に、コレットはほっと小さく息を吐いた。

これなら願いごとを訊かれることはなさそうだ。

「フィオンさまのお願い、叶うといいですね」

話題を終わらせようとなつこり微笑んでそういったコレットに、

フィオンはちよつといたずらっぽく微笑み返した。

「僕の願いが叶うかどうかは、コレット次第つてところかな」

フィオンの言葉にコレットは目を瞬いた。が、次の瞬間その願いごとの内容を察し、コレットは耳まで赤く染めることになった。

広場を後にすると、小さな子供たちが作り物の羽根や赤い帽子をつけて妖精を模した姿で歌っているところで、コレットの足が止まった。子供たちが可愛い妖精たちにふんして、一生懸命に歌っている姿はとても微笑ましく見える。

そんなコレットのドレスの裾が、おずおずと引つ張られる。

驚いて振り向くと、背中に羽根をつけた少女がコレットのドレスの裾をつかんでいた。細く削られた木にすける布を縫い付け作られた羽根が、少女の背中ではらひらと揺れる。少女はおずおずと、かごの中の可愛い色とりどりのリボンの付いた袋をコレットに見せた。

「お一ついかがですか？」

可愛らしい女の子の姿に、コレットの頬がゆるんだ。

「これはなあに？」

コレット質問に、少女はえっ？という表情をする。

コレットはその反応に目を瞬かせた。自分以外の人たちは当たり前知っているものなのだろうか。

助けを求めるようにフィオンに視線を向けると、彼はにっこりと微笑んだ。

「コレットはどの色が好き？」

リボンの色を問われているのだと気が付いて、コレットは少女の持つかごの中に目を落とした。

ピンクにブルー、緑に黄色、赤にオレンジ。

それぞれに異なる色のリボンの中に、綺麗なライムグリーンのリボンを見つけ、コレットの視線がとまった。それに気が付くと、フィオンはかごの中からそれを取り出す。

「これをもらおうかな」

そういうと、少女にコインをわたす。

フィオンを見て赤くなりながらもじもじと少女はコインを受け取ると、手の中のコインを見て驚いたような顔をした後ぱつと表情を輝かせた。

「ありがとうございます！ お二人に夏の女神様のご加護がありますように」

離れていく少女の羽根がひらひらと揺れるのを見送ると、コレットはフィオンを振り返った。

フィオンはコレットが何か言う前に、今少女から買い取った小さな袋をコレットに渡す。

コレットの手にすっぽりと収まってしまつライムグリーンのリボンが付いた袋からは、ふんわりといい香りがした。

「プレゼント」

「あ、ありがとうございます」

プレゼントといわれ受け取ったものの、そのものの意味さえ分
らずコレットは戸惑う。

マカリスター領での夏至祭では、このようなものは見かけなかつ
た……と思う。

「開けてみてもいいですか？」

この小さな袋の中に、いったい何が入っているのだろうか。

「開けるのは、お祭りの終わりにね」

「そうなんですか？」

そういわれてしまえば、そういう決まりのものなのだろうか。

じつと手の中にある小さな袋を見つめているコレットに、近くな
らなくすと笑い声が聞こえた。

側にいたフィオンのものではないそれに、コレットははっとして
そちらを見た。

そこにいたのは、コレットも見かけたことのある人物。フィオン
の婚約者候補でもあるサーランド侯爵家令嬢、モニカ・サーランド
である。

コレットと目が合うと、モニカは笑いを堪えるように口元に手を
あてた。

「こんばんは」

笑いを何とか堪えると、小さくかがんでモニカは二人にあいさつをした。それに答えて、コレットもドレスをつまんで腰を落とす。「やあ、モニカ。今日は一人で？」

「まあ、盛大な嫌味をありがとう。今日はお友達と来てますのよ。お二人の姿を見かけたのでお声をかけましたのに、ごあいさつですわね」

「それは失礼」

そんなやり取りも慣れた様子で、モニカは肩をすくめた。

モニカの家、サーランド侯爵家とバード公爵家は親族にあたる。フィオンの祖父とモニカの祖母は兄弟であり二人は又従兄弟またいとこの関係にあるが、それ以上にモニカはフィオンの婚約者候補の一人でもある。

アニエスとジュリアの顔がコレットの脳裏をよぎった。

モニカもまた、今回の事件のことを不快に思っていておかしくない。

恐る恐る視線を上げたコレットとモニカの視線が合った。と、モニカはコレットにっこりと微笑みかける。

「コレットさん、ですわよね？ 初めましてでいいのかしら。わたしモニカ・サーランドと申します。パーティーなどではお見かけすることもありましたけど、お話するのは初めてですわよね」

「初めまして。コレット・マカリストアです」

いきなりモニカに微笑みかけられ、その真意が分からずコレットは戸惑った。

「コレットさん、フィオンさまを甘やかしすぎるとつけあがりましてよ」

「えっ？」

「それ」

モニカが指差したのは、コレットが先ほどフィオンからもらったあのライムグリーンのリボンがかかった小さな袋である。

「それは恋のおまじないのポプリですよ。夏至の日に行くと効果が高いといわれて、ここ数年はやってますの」

「おまじない……ですか？」

「その香りを身にまわっていると恋が叶うとか。それを何も知らせずにお渡しするなんて、意地が悪いですわ」

「これから話すつもりだった、といっても信じてはもらえないのかな？」

「どうでしょう。ねえ？」

くすくすと笑うモニカに同意を求められ、コレットはどうしていいのかかわからずに微笑み返すしかない。

ひとしきり笑うと、モニカはまじめな顔つきでコレットの手をとった。

急に手をとられコレットは驚いて一歩後ろへ下がるが、モニカはそんなことなど気にしない。このあたりがフィオンと血族といったところだろうか。

「コレットさん」

「は、はい」

「わたし、あなたにはとても感謝していますの」

「はい？」

モニカと話すのは、本人も言っていたとおりこれが初めてである。感謝される覚えなどまったくない。

「どうかこれからも、フィオンさまのことをよろしくお願いしますわね」

いきなりの言葉に、コレットは目を瞬かせた。

「お願いしますというのは、つまり……」。

「今回の件、ふざけるなど彼をひっぱたいてやりたい気持ちもきつとあるでしょう。けれどその辺は目をつぶっていただけで、フィオ

ンさまを受け入れてあげてください」

その微妙な言い回しに、フィオンの眉根がぴくりと揺れた。

「なんだか、応援されている気がしないのは気のせいですか？」

「まあ、わたしほどお二人のことを祝福している人はいないと思いますのに。お二人が一緒になつてくだされば、わたしやつとフィオンさまの婚約者候補の肩書きが返上できますわ」

つまりは自分のためである。

フィオンと年が近いこともあり、モニカは親族が押すフィオンの婚約者候補の一人となっていた。ディアナが王妃となつている現在、親族がモニカをフィオンの婚約者とする動きは強くはない。あまり権力が集中しすぎては、他の貴族の反発も招きかねないからだ。

しかし、フィオンに謀反を企てさせようとする人物から守るという意味では、モニカがフィオンの相手となることにある程度の意味があつた。

「フィオンさまは、わたしを婚約者にする気なんてなかつたんですよ？ それなのにまわりが候補なんて言い出すから、わたし今までどれだけ大変な思いをしてきたことか」

「そんなに無理を強しいたつもりはないんですけどね」

「フィオンさまにそのおつもりがなくても、そのことでいつも姉に嫌味を言われるわたしの身にもなつてくださいませ」

モニカの姉は彼女より五つ年上である。フィオンとの年の差でいえば、モニカは二つ年下、姉は三つ年上だ。それだけの違いなのであるが、親族が選んだのはモニカの方だった。それが姉には面白くなかつたらしい。

後で親戚から聞いた話によると、フィオンと一緒にいる場面ですでに彼を意識してしまつていた姉よりも、モニカの方が幼かつた分くつたなくフィオンに接し遊んでいたため、まわりからはうまくやつていけるだろうと思われたことが原因らしかつた。おかげでモニカは、普段はそんなに仲が悪いわけでもないのに、フィオンが絡むことになる姉からちくりと嫌味を言われる日々を享受しなければ

ばならなくなったのである。

再びモニカはコレットをしっかりと見つめると、握っていた手に力を込めた。

「コレットさんは、どなたか心に決めた方でもいらっしやるの？」

「えっ！？ いえ、あの……」

「いらっしやらないのなら、フィオンさまではだめかしら？ 決して悪い条件ではないと思うのよ」

自分はフィオンの相手にはなりたくないといっておきながら、モニカはしっかりとコレットに彼を薦める。

「好みもあるとは思いますが、フィオンさまは顔の造作も悪くはないでしょう？ 女性の扱いも心得ていらっしやるから、一緒にいて不快にさせることも少ないと思いますわ。公爵位も持つていますし、王弟という地位もあるから入る家柄も悪くないですし」

悪くないどころか、コレットにとっては身分が高すぎである。

「モニカ、そろそろ」

フィオンの言葉に耳をかさず、モニカは言葉を続けた。

「それに」

そういうとモニカはコレットの耳元に口を寄せ、内緒話をするように小さな声で話しかけた。

「フィオンさまはご自分の言動にはしっかりと責任を持たれる方ですわよ。それは親族として保障いたします」

間近で目が合うと、モニカはにっこり笑ってコレットにだけ分かるように小さく目配せをした。

「ですから、フィオンさまのお言葉を信じて大丈夫ですよ」

モニカがその場から去ると、フィオンは肩をすくめた。

「さすがにあれだけきっぱりと嫌がられると、なんだか複雑な気分だね」

面と向かって王弟である自分と結婚などしたくないという候補は、モニカぐらいなものだ。

フィオンと結婚したくないといいながら、その口でコレットにフィオンを勧めてきたモニカ。協力してくれているのか、邪魔されているのか微妙な感がある。

ちよつとすねたようなそんな表情のフィオンが可愛らしくて、コレットはくすくすと笑う。

コレットの笑顔に、フィオンも表情を緩めた。

「それで、モニカに何を言われたの？」

フィオンには聞こえなかった耳元での会話。

「えっと、それは……」

「それは？」

「……内緒です」

口元に指を立ててコレットは答えた。そんな可愛らしい仕草に、フィオンは何もいえなくなって肩をすくめた。

「僕を嫌いになるような言葉じゃなかったことを願ってるよ」

モニカの言葉。

それは、コレットにはフィオンの言動が薬のせいだけではないと言っているように感じられた。

薬のせいであろうとなかろうと、言っていることは彼の意思であるのだと……。

信じてもいいのだろうか、彼の言葉を。

薬のせいだと割り切ってしまった方が、後々の問題は少ないのかもしれない。でも、信じてみたいとコレットは少しだけそう思った。

徐々にまわりが薄暗くなってくると、園内のランプにあかりが灯されていった。

もうすぐ願いごとの組み木に炎が灯される時間となるため、人の流れが広場の方へと流れていく。願いごとをしたものにとっては、それが天に昇っていく瞬間を見逃すわけにはいかないというわけだ。「こんばんは、バード公爵。そろそろ火が灯される時間ですね」声をかけられ、フィオンはそちらに顔をむけた。

「こんばんは、ブラットナー伯。今宵はどなたとの逢瀬ですか？」娘にせがまれました」

見ると伯爵の後ろに隠れるように、小さな少女が顔をのぞかせている。

フィオンが微笑みかけると、赤くなつて少女は父親の後ろに隠れた。そんな可愛らしい姿に、フィオンとブラットナー伯爵の笑いもれる。

「それではフィオンさま、今宵はここで。夏の女神の祝福がありますように」

「ブラットナー伯にも。そして、小さいレディにも、ね」

少し姿勢を低くして、フィオンは少女に笑いかけた。

ブラットナー伯の後ろに隠れていた少女がおおずとスカートをつまんで頭を下げると、伯爵親子はその場を後にした。

組み木に火が灯されるあたりからお祭りのメインである。

広場で直接その瞬間をみるには、そこは人でごった返している。

そのため園内にあるドーム型の楼閣に席を確保していたフィオンは、そろそろその場に移動しようとして振り返った。

コレットに言葉をかけようとして固まる。

さっきまですぐ側にいたはずの彼女がいなかった。

その場にコレットがいたことを示すように、フィオンがいる場所よりも数歩離れた場所にはコレットに贈った花冠が落ちている。

それを拾い上げると、フィオンは急いであたりに首をめぐらせた。つい今までのいた形跡があるのだから、そんなに遠くにいけるわけがない。

「コレット！」

フィオンの声に、人ごみで少し離れてしまっていたロイドがその波をかき分けて近づいてきた。

「フィオンさま、どうされました？」

「コレットがいなくなつた。ロイド、お前は見ていないのか？」

その言葉にロイドの顔からさあつと血の気が引いた。

ブラットナー伯爵が来たときに、ロイドの目からコレットが死角となっていた。伯爵が来る前までは確かにフィオンの少し後ろにいたのだが。

「探すんだっ！」

「はいっ！」

ロイドは頭を下げると、慌ててその場を後にした。

25・拘束

夏至の夜、徐々に薄暗くなっていく園内にランプが灯されていく。空はまだ明るさをたもっているが、木々が並ぶ遊歩道や物見台となっている二階建ての楼閣などが落とす影は暗い。灯されたあかりはそんな暗がりをやさしく包んでいった。

そんな人ごみの中から、フィオンの知り合いらしい貴族の姿が近づいてくる。その姿に、あいさつをするのに手をあずけては失礼になると、コレットはフィオンの腕からあずけていた手をそつとはずした。

手を離してフィオンから少し離れた瞬間、とんと肩がおされてコレットはよろめいた。その衝撃で花冠が頭から落ちる。

急に歩く速度を落としたためかと、コレットは腰を落として地に落ちた花冠に手を伸ばす。しかし、コレットが手に取るより早く、花冠は目の前からすいっと動いた。

顔を上げて花冠を目で追えば、それを手に取ったのは身なりのよい女性だった。ちょうど灯されたランプのあかりが逆光となって、女性の横顔ははっきりとは見えない。

それを返してもらったため、コレットが立ち上がり声をかけようとしたときだった。横から伸びてきた手にコレットの腕がつかまれる。
(えっ?)

自分の腕におかれた手に、コレットは目を瞬く。

自分の腕をつかんだ相手を確かめる間もなく、握られていた腕に力がこめられたかと思うと、ぐいっと引っ張られる。その力によるめけば、相手はそのままコレットの腕をつかんで走り出した。

花冠を手にした女性は、ちらりとコレットのいた場所に視線をむける。そして再び花冠に視線を落とすと、眉根をひそめて花冠を投げ捨てた。そして何事もなかったように歩き出し、人ごみの中に消えていった。

腕をつかまれたまま、引きずられるようにコレットの足が動く。いきなりのことで、何が起こっているのかわからなかった。

「や……」

慌てて声を上げようとすると、建物の影に引き込まれ口をふさがれる。その手を何とか引き離そうとコレットはもがくが、思っていた以上に相手の力が強い。

後ろから片手を拘束され口をふさがれているコレットは、背後に密着した相手を何とか確認しようとして首を動かす。

そこでやっと自分を拘束している相手の姿がちらりと見えた。

コレットよりほんの少し身長が高いぐらいの女性が、コレットの片手を後ろ手につかみ口をしっかりとふさいでいる。暗いため、女性であることは分かってもその姿をはつきりととらえることはできなかった。

コレットはあたりに視線をめぐらせた。何とかこの状況を回避しなくてはならない。

しかし、みなに興味が広場に向かっている現在、建物の影となつて死角となつているこの場所に視線を向けるものなどない。建物の裏側には木々が植えられていてさらに人目が向きにくい。木々の向こうに見えるあかりの下にはたくさんの人がいるのに、声も出せない状況では気が付いてさえもらえない。

コレットがまわりを確認していることを、反撃がやんだと思つたのか女が急に動いた。

コレット口を押さえていた手をはなし、腕をつかんだまま走り出す。急な動きにコレットは引きずられる。

そこでコレットは自分を拘束した相手の後ろ姿をしっかりと確認した。大きなスカーフを三角におり、頭巾のようにかぶっているその頭からは茶色っぽい髪が見えている。格好からすると貴族ではなく、それに仕えているといったような雰囲気である。

その女性に木々のさらに奥に連れ込まれそうになり、コレットははっとした。木々の茂ったこの場所は、昼間なら園内の池を取り囲む憩いの木陰となる場所である。しかし夏至の夜が闇をまとい始めた今、木々の葉が空をかくすこの場所はいつそう闇が濃い。その上この奥にはボート遊びもできる大きな池があることを思い出し、コレットの背筋が震えた。

まさかと思う。

でも、相手の真意が分からない。

「はなして！」

コレットは自分の腕を取った人物にさういうと、腕を取り戻すために力を込めた。しかし、その程度の力では相手の手はびくともせず、反対に相手はコレットをつかんでいた手に力を入れる。力を入られた腕にコレットは痛みで眉根をよせた。

コレットはその女に手をとられたまま、後ろを振り返る。

どんだん人のいる場所から離されていることに気が付けば、恐怖がコレットを襲ってきた。

「いやっ！」

コレットは渾身の力を込めて腕を引いた。

そのとき。

足元に茂る草に足をとられた。つかまっていた手が、一度ぐいと力を入れられた後、離される。

ふわりとコレットのシフォンのドレスがゆれた。

(えっ?)

大きく開いたコレットの目に、急に開けたまわりの景色がゆつくりと動いていく。

先ほどまでの枷はとりはらわれ、コレットの腕は自由になった。しかし、自由になった手は空をきるだけで何もつかむことは出来ない。

木々をすり抜けた場所。池のまわりの遊歩道があるため急に低くなった場所に、コレットの体は投げ出された。

大きなスカーフを三角におり頭巾のようにかぶった女性は、ちらりとコレットの姿が消えた方を見ると、足早にその場を立ち去った。木々の茂る場所からランプの明かりがともる歩道に出る前に、ぱんぱんとスカートの裾をはたいて整える。

歩道にでてまわりを見渡すと、広場を遠くから望める場所に目的の人を見つけて近づいていく。後ろに気配を感じて、その場に立っていた人物は振り返らずに口を開いた。

「それで？ うまくいったの？」

「はい。気がつかれずに引き離すことができました。池の方は今は人気がない時間ですし、発見されるまでには時間がかかると思いますが」

「そう」

表情を変えずに報告を受けた女性は、ゆっくりと振り返った。

報告してきた女性をみると、眉をひそめる。

「髪を直しなさい。少しずれてるわ」

走ったせいかわ、スカーフで押さえられた茶色い髪が微妙にずれている。

言われて慌てて髪を整える姿をみて、女性はふうとため息をついた。その視線を木々の暗がりに移すと、憎らしげににらみつける。

「少しは思い知るといいんだわ。あの方の隣にすることができる立場ではないということを」

草むらに投げ出されたコレットは、ぶつけた体の痛みをこらえて

何とか体を起こした。

その場に座り込んでしまふ形になったコレットは、不安気にあたりを見回す。少し顔を上げて自分が落とされた場所を見るが、先ほどまで自分の腕をつかんでここまでつれてきたであろう人物はいなかった。

コレットが突き落とされたのは、池のそばの歩道近くの草の上だ。草の上だったことで衝撃が吸収されたのがせめてもの救いだろうか。近くには階段がある場所や、堅く舗装された場所が丘に迫っている場所もある。もし階段から突き落とされたり、歩道の上に敷かれた石畳の上に叩きつけられたら、こんなものではすまなかったかもしれない。

(はやく戻らないと)

急に引つ張られてつれてこられてしまった。

何も言わずに急にいなくなってしまったのだから、フィオンはきつと自分を探しているに違いない。

なんとかフィオンの元に戻らなくてはと、コレットは立ち上がるうと足に力をいれた。しかしずきんと強い痛みを感じ眉をひそめると、そのままぺたりと再び座り込む。

服の上から痛みがあった足首を押さえた。

(どうしよう……)

さっき転んだときに足をひねってしまったらしい。

池の周りの遊歩道は、足元を照らすようにランプが置かれている。しかし広い池にはあかりはなく、水面はまわりの木々の影が暗く落とされている。

もうすぐ広場ではお祭りのメインとなる炎が灯される時間となる。みなが広場へと視線を向けて移動している中では、それと反対の位置にあるこの薄暗い場所において気が付いてくれる人がいるのかどうか疑わしい。

そんな中ここでじっとしていても助けがくる可能性は低いだろう。急にいなくなってしまうことで、フィオンに迷惑をかけている

のかと思うとコレットは気が気ではない。

足が痛いから立ち上がれないとは言っていられない状況である。無理をすれば痛みはひどくなる可能性もあるが、それはここを出てから考えればいいとコレットは痛みのないほうの足に力を入れた。しかし、痛むのは足だけではない。落ちたときにぶつけた体もあちこち痛み、急なことに体が驚いているのか足に力が入らなかった。立ち上がることさえできず、痛みと不安でコレットの目に涙が浮かぶ。

「どうかされましたか？」

誰もいないと思っていたのに急に声をかけられ、コレットはびくりと肩を震わせて顔を上げた。

しかし薄暗い場所で、さらに遠くからの光が逆光となり相手の顔がよく見えない。

相手がわからないコレットとは反対に、相手の人物ははっとしたように小さく声を上げる。

「……コレット？」

「えっ？」

急に名を呼ばれば、コレットは驚いて相手の顔をじっとみつめる。そして相手が誰か気が付くと息を飲んだ。

実際に会うのは一年以上になる。忘れるはずもない人。

「キース……」

コレットはつぶやくように元婚約者の名前を口にした。

久しぶりに会った人物に、コレットの体が動いた。

近付こうと無意識に体が動いたのを足の痛みが止め、コレットの口から小さく声が漏れる。

「怪我をしてるのか？ 立てる？」

そういつて、キースはコレットに近付くと彼女に手をかして立ち上がらせた。怪我をしているのに動かすのはあまり好ましくないだろうが、こんな暗がりのなか地面に座ったままではつきりとした状況もわからない。意識はしっかりしているようだから、多少場所を変えるぐらいなら問題ないだろうとキースは判断した。

キースに手をかりてコレットは何とか足を進める。

痛みはある。しかし、手を借りたことで痛む足にかかる負担は大きく軽減された。その上見知った相手だったというのが気持ちの上でもだいたい影響を与えているらしい。先ほどは力がうまく入れられなかった足に力が入る。

池を取り囲む遊歩道近くに置かれたベンチまでなんとか手をかりて歩くと、コレットはそこに腰を下ろした。

直接地面に座っていたときよりも足への負担が減りほっと息を吐く。そして、コレットはあらためて自分の目の前に立っている人物を見上げた。

遊歩道に置かれたランプの光で、さつきよりはつきりと相手の顔がみえる。

コレットの記憶よりも少し背が伸びていて、顔つきも以前より大人びた感じがするが、そこにいるのは確かに幼い頃から知っている元婚約者の姿だった。

「痛むのは、足？」

問われてこくりと頷く。

「……少し、ひねったみたい」

「他は？」

コレットはゆっくりと首を横に振った。体は確かに痛い、ひねった足ほどではない。

それよりも、コレットは目の前にいるキースから目が離せなかった。

会ったら言いたいことはたくさんあった。訊きたいこともたくさんあったのに、突然その機会が訪れてもうまく言葉にすることができない。まるで言葉が喉に張り付いてしまったように、訊かれたことにやっと返事ができるだけだ。

しばしの沈黙の後、キースが口を開いた。

「久しぶりだな」

「……うん」

「噂は聞いているよ。いろいろと大変そうだな」

「そんなこと……」

唇をかみ締めながら、コレットはキースから視線を逸らした。

なんだかわからないが、キースからその話を聞きたくなかった。

「コレット、ごめん」

びくとコレットの肩がゆれた。ゆっくりと視線をキースに戻す。何のことを言っているのか、そんなこと言われなくてもわかる。

「本当はもっと早く言いたかった。でも、会いにいけなかったから

……」

コレットに会おうとしても、父親がそれを許さなかったのだから会えるはずもない。

「君は何も悪くなかったんだ」

「それじゃ……」

（どうして？）

幼馴染として育て、これからも夫婦として穏やかな時間が続いていくと信じていた。

でもキースにとって、幼い頃からの結婚の約束は負担なだけだったのだろうか。

「コレットの話は今でも嫌いじゃないし、妹みたいに思ってる」
「妹……」

「一緒にいたいと思う人ができてしまったんだ」
それは、コレットではない別の人と。

「キース！」

沈黙を破るように、ふいにキースの後ろの方から女の人の声が聞こえた。

石畳を走る足音が近付いてきたかと思うと、ぐいっとキースの腕がとられる。

「もう、遅いよ。どこいつちゃったのかと思った」

にっこり笑う女性を、キースは慌てたように支えた。その女性のおなかには少しのふくらみがある。

「走ったりしたら危ないだろ」

「平気よ。あら？ お知り合い？」

コレットのこと気が付くと、女性は恥ずかしそうにキースに絡めていた手を離れた。

にっこりとその女性はコレットに微笑む。

「はしたないとところをお見せしてごめんなさい。あたしはメリーナ。よろしくね」

コレットの目が大きく開く。

彼女がキースの相手だということ、一目瞭然だった。

相手が名前を名乗ったのなら、きちんと自分の名前をいってあいさつするのが通例である。しかし、コレットは自分の名を名乗ることができなかった。

彼女は知っているのだろうか、キースに婚約者がいたことを。アツカーソンの家に関わっていれば、たとえ最初は知らなかったとしても多少は耳に入っているはずだ。

どこまで知っているのかわからないが、コレットは自分の名前をいうのがためらわれた。

名前をいえば、自分がそうだとわかってしまう可能性がある。

コレットの気持ちを察したのか、キースがメリーナに声をかけた。「メリーナ。彼女は足を痛めてるんだ。送ってすぐにもどるから、約束の場所で待ってて」

「あら、ごめんなさい。痛むの？」

コレットの表情は薄明かりのかなでも分かるくらいに、こわばっている。

明るく話しかけてくるメリーナとは対照的に、コレットは何も答えられない。

目の前にいるキースとメリーナ。

メリーナを見つめるキースの瞳は、コレットの知っているキースではなかった。

その瞳のなかには、幼いころからの約束さえも消してしまうだけの思いが込められている。

わかっていて、ことだった。

キースと会うことも手紙を出すことも禁止されて、彼と連絡を取るすべはなくなっていた。それでも、心の中ではわかっていたのだ。幼い頃の婚約を解消するだけの覚悟が、キースにあったということも。それだけ相手のことを思っているだろうということも。

小さい頃から知っている相手だから、コレットにはそれがわかっていて。

でも、はっきりした言葉がないからと自分でも気が付かないうちにその事実にあたるふたをして、あえて触れないようにしていた。

わかってはいた。

でも、信じたくなかった。

しかし、目の前の二人の姿が、それが現実であるのだとコレット

に知らしめる。

キースは、コレットは何も悪くないといていた。それは、きっとキースの本心なのだろう。

急な婚約の解消は確かにほめられたことではない。貴族の社会で、約束の反故は信用を地におとしめる行為だ。しかし説明が足りずその過程に問題があつたとはいえ、キースが悪かつたわけでもない。コレットは思う。

キースの気持ちが一リーナに行ってしまったのは、コレットが悪かつたわけでも、キースが悪かつたわけでもなく、キースが心から求めた相手がコレットではなかつた。ただそれだけのことだ。

それだけのことなのに……。

(どうして、こんなに胸が痛いんだろう)

こぼれそうになる涙を、コレットは必死でこらえる。

ここで泣くわけにはいかない。

「コレット、送ってく。ここには一人で来たわけじゃない……よね？」

こくとコレットはうなずいた。

喉の奥がヒリヒリと痛い。言葉を吐くげば、こらえていた涙がこぼれてしまいそうで何もいえなかつた。

立ち上がるために差し出されたキースの手を、コレットはじつとみつめる。

もう自分のものにはならない優しい手が、そこにあつた。

コレットは顔をあげるとキースをみつめ、その後ろで心配そうに自分を見つめるメリーナに視線を移すと、再びキースの手に目を落とす。

足が痛む以上、一人でここから動くことはできない。

でも……。

「その必要はないよ」

コレットが答える代わりに聞こえた声に、みな視線がそちらに

移った。

わずかなあかりでも彼の金色の髪がきらきらと光り、そこにいるだけでまわりが明るくなったような錯覚さえする。

急に現れた人物に、キースは姿勢を正した。

こんなに間近に会うのは、キースにとって初めてである。

「王弟殿下……」

つぶやくようにキースの口からその名が漏れる。通りすがりにフィオンがちらりとキースをみると、慌ててキースは頭を下げた。

キースの後ろにいるメリーナも何が起こったのかわからないようにまわりを見た後、失礼にならないようにキースをまねて頭を下げる。

そんな二人の前を通り過ぎ自分に近付いてくるフィオンをみて、コレットはほっと息を吐いた。

まっすぐにベンチに腰を下ろしているコレットに近付くと、目線を同じくするようにフィオンは跪いた。走ってきたのか、わずかに息を弾ませているフィオンがそつとコレットの手をとった。フィオンに包み込まれるように手を握られ、そのぬくもりがじんわりとコレットの手を温める。

「コレット、無事でよかった」

「申し訳ありません。急にはぐれてしまつて……」

「いや、君を見失つた僕が悪い。ごめんね」

ふるふるとコレットは首を横に振つた。

今にも泣き出しそうな表情のコレットに、フィオンは安心させるように微笑むと彼女の頬を優しくなでた。フィオンにつられるように、コレットも少しだけ表情をゆるめる。

もう一度コレットの手を力強く握つた後、フィオンは立ち上がり、と自分に頭を下げているキースに視線を移した。

「君は？」

言われて、キースはさらに深く頭を下げる。

「お初にお目にかかります、殿下。キース・アッカーソンと申します」

ぴくりとフィオンの眉が動いた。

「アッカーソン男爵家の子息、かな？ すまないが、僕は現在バード公爵を名乗っている身。そう呼んでもらえないかな」

「は、はい。申し訳ありません、バード公爵」

フィオンの言葉に、キースの背に冷たい汗が流れた。

決して声を荒げているわけでもなく、どちらかといえば穏やかな口調であるのに、王家の威厳なのかキースは気圧されてしまう。

「それで、君はここで何を？」

キースはその問いに言いよどんだ。

悪いことをしていたわけではない。幼馴染の少女が困っていたから助けようとしていただけだ。

しかし目の前でコレットを愛しそうに見つめるフィオンをみて、うまく言葉が出てこなかった。

そんななか、フィオンの服のすそをコレットが控えめに引く。

どうしたのかと、フィオンが振り返った。

「どうかした？」

優しくフィオンがコレットを見つめる。

「動けなかったところを、助けていただいたんです」

「動けなかった？」

「足をひねってしまつて……」

薄明かりのなかよく見れば、確かにコレットのドレスのすそには転んだようにわずかに草の葉が付いている。

「痛む？ 少しみせて」

そういうとフィオンは再びコレットの前に腰を落とした。

見せてといわれても、とコレットは戸惑って固まった。見せるためにはドレスをわずかが上げなければならぬ。

フィオンは怪我の状態を知りたいだけなのだからと自分に言い聞かせてみるが、男性に足元を見せるなんてはしたくないだろうかと、ちらりと視線を上げた。

コレットの視線が動いた先に気が付いて、フィオンは「ああ」と納得したように頷いた。

「ごめん、ここでは難しいね。他には？ 痛むところはない？」

フィオンの言葉にコレットはうなずいた。

足以外にも、本当は痛みはある。でも苦しいほどの胸の痛みを言葉にするのは難しかった。

そんなコレットを見つめた後、フィオンは立ち上がりキースと向き合う。

「キース、といったね」

「はい」

「僕の連れが世話になった」

「いえ……」

「ところで君は、彼女を見つけたときに他に誰かを見た？」

「誰か、ですか？ いえ、この辺に他にひと気はありませんでした
が」

そんな中に一人動けないコレットを見つけて、驚いて声をかけた
のだから。

「そう……」

何か考えるようにフィオンはあたりを一度見渡した。

「すまないが、彼女が怪我をしているようなので、今日はここで失
礼する。この礼は日をあらためて」

「と、とんでもありません！ 私はただここまで手をかしただけで、
他にはなにも……」

「それで十分、礼をするに値するよ。彼女は僕の大切な人だからね」
フィオンは座っているコレットの髪をそつと撫でた。

「痛むだろうけど、もう少し我慢して」

フィオンを見上げ、「はい」と返事をしようとしたコレットの背
にフィオンの手があてられる。

目を瞬いたコレットに、少し腰を落としたフィオンがぐいっと近
付いた。

「失礼」

そういうと、フィオンはコレットを抱き上げる。

急に視線が高くなり、驚いたコレットはしがみつくようにフィオ
ンの服に手を伸ばした。

「フィオンさま？ あ、あの……」

「ん？」

「私……少しなら歩けます。ですから」

フィオンからはぐれて探させた上に、これ以上迷惑をかけるのは
ためらわれる。

「コレット」

「はい」

「無理をすれば、痛みがひどくなる可能性もある。これ以上君にそんな思いはさせられないよ」

抱き上げられたことで、すぐ間近にフィオンの顔があった。

その真つ直ぐな視線に耐え切れず、コレットはわずかに目を伏せる。

コレットを抱き上げたフィオンに、キースがおずおずと声をかけた。

「バード公爵、私が誰か人を呼んでまいります」

そうすれば、直接フィオンがコレットを抱き上げる必要などなくなる。王弟殿下の手を煩わせることもない。

キースの言葉に、フィオンは彼をじつと見つめた。

「ごくりとキースは息を飲み込む。」

「お急ぎならば、私が彼女をお連れしますが……」

国内の貴族は、すべてが王家の家臣である。

直接王家に仕えているか、領地を預かっている身か、立場はいろいろと違っても、臣下であることにはかわりはない。王弟であるフィオンの手を煩わせることになるのを目の前にして、そのままにしておくことはできないとキースは申し出た。

それは貴族の子息としてまっとうな意見ではあるのだが……。

キースの言葉に、フィオンの服をつかんでいたコレットの手に力が入った。それを感じながら、フィオンは口を開く。

「せっかくの申し出だけけれど、遠慮しておくよ。言っただろう、僕の大切な人だと。彼女を他の人に任せることなんてできない。それに」

言葉を切ると、フィオンはコレットに視線を落とす。コレットと目が合い、とろけそうなほど甘く微笑んだ。

「僕がコレットを抱いていたんだから、ね」

そんなフィオンの言葉に、コレットの頬が赤く染まった。

そして、どうしてだろう。

おさまりかけていた涙があふれそうになる。

それを見られたくなくて、コレットはフィオンの肩に顔を寄せた。それは周りにはコレットがフィオンに甘えているようにも見えた。

そんなコレットをもう一度しっかりと抱き上げると、フィオンはその場から離れた。

キースとメリーナはその場に残ったまま二人を見送る。

はつきりと手助けは必要ないといわれては、二人についていくことなどできない。

見送りながら、キースは少し寂しいような気持ちがしている自分に気が付いた。

最初に婚約を解消したのは自分である。

別の相手を選んだ自分が、コレットのことにこれ以上口を挟める立場ではない。しかし、決して憎く思っただけで婚約を解消したわけではなかった。

二人の姿が見えなくなっても、そのまま立ち尽くしているキースの腕をメリーナがとった。

心配そうに自分を見ている愛しい人。

メリーナに淡く微笑むと、キースはしっかりと彼女の手を握り締める。

自分はこの女性と一緒に生きていくと決めたのだ。

「行こうか」

コレットが今まで座っていたベンチをちらりとみると、キースはメリーナと一緒に歩き出した。

「我慢しなくてもいいよ」

二人から離れてしばらくすると、フィオンの優しい声がコレット

の耳元に届いた。驚いて顔を上げれば、フィオンが優しく自分を見つめていた。

優しいフィオンの眼差しに、コレットの目に涙がにじむ。

なんとか我慢しようとはちばちと瞬きをするが、それで押さえることなどできなかつた涙がぼろりとこぼれた。

一度あふれてしまった涙は、止めることもできずに頬をつたい落ちる。

涙を隠すように、コレットは両手で顔をおおった。コレットを抱いているフィオンの腕に力が込められて、目を閉じていてもその存在が大きく感じられる。

痛む心が、フィオンのぬくもりに包まれていく。

その温かさに、コレットの体が小さく震えた。

フィオンの優しさは危険だ。彼の優しさが、温かさが、傷ついたコレットの心のなかにするりと入り込んできて、ゆるゆるとその傷を癒していくのがわかる。

(好きになつてしまっそう……)

そうなつてはダメだと分かっている。

一度この温かさを望んでしまつては、離せなくなつてしまつことも。

それでも……。

フィオンの腕に抱かれながら、コレットはそのぬくもりにただ身をまかせていることしかできなかった。

「何、これ？」

室内に入ってきて開口一番、エリサがドアの前に立つたままつぶやいた。

マカリスター男爵家の一室。

そこには、花瓶に活けられた花々が美しく飾られていた。しかし、問題はその量である。

テーブルの上はもちろん、現在は初夏のため使用していない暖炉の中にさらにはその上、飾り棚の上に、たぶんそのために移動されたであろう窓際のチェストの上と、部屋のいたるところで大小の花瓶に美しい花が咲き乱れていた。

せめてもの救いは、室内の窓が開けはなたれていることだろうか。花の量のわりには室内に香りがこもりすぎず、その美しさを堪能することができる。

エリサの言葉に、コレットはあいまいに微笑んだ。

実は自分の私室も同じようになっていっているといったら、エリサはどんな反応をするのだろうか。

近くにあったピンク色のガーベラに顔をよせて香りを楽しむと、エリサはくるりと振り返った。

イスから立ち上がろうとしたコレットを手で制すると、コレットの向かいに腰をおろす。

「この花、もしかして全部？」

エリサがあたりを見回しながら言うと、コレットは慌てて手を振った。

「あの、全部というわけではなくて。王妃さまからいただいた分も……」

フィオンから聞いたのだろうか。夏至祭の後、王妃さまから怪我のお見舞いとして届いたものも多少は含まれている。

しかし、ほとんどはフィオン、バード公爵がお見舞いの際に持ってきたものではあるが。

いただいた相手が相手である。

メイドに任せただけでなく、執事までもがむやみに枯らしてはいけないと目を配り、はてはマカリストー男爵と夫人までが気にかける始末。そのため、花のもちが長くなりこの事態となっているわけである。

フィオンとしては、花が傷む前にと新しい花を贈っているだけなのだが……。

「それで？ 足の具合はどうですか？」

お茶に誘ったのを怪我のためにと辞退され、今日エリサはそのお見舞いに来たのである。

「もう、ほとんど大丈夫です。あまり長く立っていると、少し痛みますけれど」

「夏至祭のときなのでしょう？ いったい何がありましたの？」

「えっと……」

何から話したらいいのだろうか。

見知らぬ人にフィオンから引き離されてしまったこと、そして足を痛めたところで元婚約者であるキースにあったこと。あの日はいろいろあった一日だった。

しかし……。

あの日、フィオンの腕の中で泣いてしまったコレットを用意させた馬車に座らせると、彼は優しくコレットの頬にふれ涙をぬぐった。その手のぬくもりを思い出し、コレットの頬が赤く染まる。

その後馬車でバード公爵家に連れられ手当てを受けたのだが、そこに着くまでの馬車の中。安心させるようにと、ずっとフィオンが肩を抱いていたのを思い出せばもういたたまれなかった。

冷静になって考えれば、顔から火が出るのではないかと思うぐら

いに恥ずかしい。

いきなり見知らぬ人に腕をつかまれフィオンとはぐれてしまった恐怖、元婚約者であるキースに会った衝撃。確かにあの時のコレットの心境はかなり不安定だった。

傷ついていた心が、痛む体が、フィオンの優しさを拒否するすべなどなかったのも事実である。

だとしても、いつもよりも近い距離をそのままに、自分を抱き上げるその腕の強さも、優しく頬をなでるそのぬくもりも受け入れ、前髪が触れ合うかという距離で見つめあう。

まるで恋人同士のような距離で、甘えるようにフィオンのぬくもりを求めていたような自分に、コレットは涙がでそうなくらいに恥ずかしくなった。

その上、あの日からフィオンのことばかり思い出してしまって、どうしていいのか分からない。

会いたいと思っていた元婚約者に久しぶりに再会したというのに、あれから脳裏をよぎるのはフィオンのことばかりなのだ。

質問したことに答えずに、一人思い出しながら頬を赤く染めたコレットを、エリサはじっと見つめた。

何があったのか、その詳細は分からない。

分からないが、このコレットの反応から見て言えることは一つ。

「落ちたのね」

「えっ？」

エリサの声にはっと我に返ると、コレットは聞き返した。

考え事をしていたためよく聞こえなかった。

ようやく自分を見たコレットに、エリサははっきりと言う。

「バード公爵のこと、好きになったのでしょうか？」

（好きに……）

エリサの言った言葉を自分の中で繰り返すと、コレットの顔がさ

らに赤くなり、やわらかな耳朶までがふんわりと朱に染まった。

その反応に、エリサはため息をつく。

「図星ですわね」

「えっ、いえ……ち、違います。そんな……」

しどろもどろに答えながら、コレットは熱くなった頬を隠すように手をあてた。

好きだなんて、そんなはずはない。いや、あつてはいけないのだ。そんなふうになくなって否定されてもまったく説得力がないと、エリサは再びため息をついた。

まあ、あれだけフィオンに口説かれて、今まで好きにならなかったのが不思議なくらいなのだが。

「……だめ……なんです」

頬から手を下ろし膝の腕で握ると、コレットは力なくそういった。

「フィオンさまとは身分も違いますし、薬のことも……」

フィオンの言葉が、すべて薬のせいだなんて思いたくはない。

でも、薬のことがなくて本当に自分のことを好きになったのかといわれると、それも違うような気がする。

急にしゅんとしたようなコレットをみつめると、エリサはメイドが入れたお茶を手に取った。

ゆっくりとそれに口をつける。

「よろしいんじゃないかって」

「えっ？」

コレットが驚いて顔を上げる。

「ですから、バード公爵のこと。好きになってもよろしいんじゃないかって」

「で、でも」

惚れ薬の一件。

エリサは最初からかなり反対していたはずだ。好きになるなど釘を刺され、コレットもその意見には納得するだけの理由があったの

に。

コレットの思っていることを感じ、エリサは肩をすくめた。

「最初はね、反対でしたわよ。だってそうでしょう？ わたくしの友人に声をかけるから見る目があると思っただけで、せつかく紹介しましたのに、それが『惚れ薬』のせいだなんて、馬鹿にするのにもほどがありますわ」

ちよつとだけ眉根をよせ、不機嫌そうにエリサは言った。

あのときのことを思い出すと、今でも腹が立つことは確かだ。

「でもね」

ふんわりと表情を和らげ、エリサは続けた。

「最近ね、それだけじゃないのかしらとも思うの」

「それだけじゃ……ない」

「コレットに好きになられて困るのなら、公爵もあんなに口説いたりしないでしょう？」

いくら惚れ薬の効果があったとしても、公然とみなの前でコレットを口説いてくるのはどう考えても意図的であるとは思えない。

会いたいただけなら、人目を避けて会ったほうが面倒は少ないはずだ。

もしそんなことをするのだったら、コレットの気持ちはどうであろうとエリサは絶対に反対するのだが。

だが、あえて堂々と人前でコレットを特別にあつかうことで、はっきりと自分の態度を示しているフィオンには、盲目的な恋心以上のものが感じられる。

まあ、うがった考え方をするのであれば、まわりに認めさせることによつてコレットの逃げ場をなくしているという考え方もできるのであるが。

それでも、フィオンが真剣にコレットとの未来を見据えているのなら、コレットの気持ちを尊重し応援することもやぶさかではない。

「王さまも王妃さまも、反対はしていないようだし」

反対ならば、王家のパーティーでフィオンのパートナーを務めさせることなどしないはずだ。

「それは……」

確かにはっきりと反対をされた覚えはない。

というか、王妃さまといい、モニカ・サーランド嬢といい、アンリにエリサまで。反対されるどころか、こども応援されるとコレットとしてはどうしていいのかわからなくなってしまふ。

「無理に好きになれといっているわけではなくてよ？」

いくら王弟であるとはいえ、事態が事態である。

コレットには断るだけの権利と理由がしっかりとあるのだ。

「ただ、好きな気持ちに嘘をつく必要はないんじゃないかしら」
そうなのだろうか。

自分はフィオンのことが好きなのだろうか。ずっと好きになってはだめだと思っていた。だからまわりになんと言われても、すべて鵜呑みにするわけにはいかなかった。

けれど……。

好きになってもいいとはっきり言われ、コレットの気持ちが揺らいでいく。

「まあ、それは後でゆっくり考えるところとして」

とまどったような表情のコレットに、エリサはにっこりと微笑んだ。

「夏至祭になにがあったのか、しっかりと聞かせていただきますわよ」

どうやらその話題からは、逃がしてもらえないようである。

エリサが帰った後も、コレットはイスに座ったままその場から動

けなかった。

エリサの言葉が、コレットの頭の中で何度も繰り返し返される。

自分がフィオンを好きかどうかなんて、よくわからない。ただ、フィオンのことが頭から離れなくて、そのたびに苦しいほどに胸がドキドキする。

キースのことも確かに好きだったはずだ。でも彼を想うときにはこんなふうにはならなかった。会えたら嬉しかったし、会いたいても思っていたけれど、こんなふうに分でコントロールできないほどに思考を支配されることなんて……。

コレットの口からため息がもれる。

テーブルの上に飾られた、フィオンから贈られた花。それをじっと見つめると、そっと花びらに指で触れてみる。

それだけで、この花を贈られたときのフィオンの顔が思い浮かぶのだから、自分は本当にどうかしてしまったのではないかと思う。

花から指を離し、再びため息をつくときコレットは視線を上げた。

(えっ?)

顔を上げた瞬間にその場にいた人物に、コレットは動くこともしきずに目を瞬かせた。

今まで頭の中で思い描いていた人物が目の前にいれば、幻でも見ているのではないかと思う。

「……フィオン……さま？」

半信半疑といった感じで名前を呼ぶと、フィオンはにっこりと微笑む。

「ノックはしたんだけど。驚かせてしまったかな？」

確かによく見れば、フィオンの後ろで彼を案内してきたであろうメイドが扉を閉めるのが見えた。決して勝手に入ってきたわけではなく、おそらくコレットにも声をかけたのだろうが、考え事をしていてまったく気が付かなかった。

目の前にいるフィオンが本物であることに驚いて、コレットは慌てて立ち上がった。

王弟殿下でもあり、バード公爵である彼を迎えるのに、ほおつと
していた上に座ったままだったなんて失礼にもほどがある。

慌てて立ち上がったことで、コレットの足にツキンと痛みが走っ
た。その痛みでバランスを崩し、コレットの体がぐらりと傾ぐ^{かし}。

「きゃっ」

倒れるかと思ったその前に、コレットの体がフィオンにふんわり
と抱きとめられた。

触れた瞬間、コレットの体がびくりと震える。

一瞬、強く抱きしめられたと思ったのは錯覚だろうか。そばで触
れて、彼の香りに包まれる。それだけで、息が苦しくなるほどに胸
が痛くなる。

じんわりと涙がにじんでくるのは、決して足の痛みだけのせいでは
なかった。

「急に動いたりしたら危ないよ。まだ怪我が治りきっていないんだ
から」

優しく耳元に届く声に、コレットは小さく頷いた。

コレットの返事を腕の中で感じると、フィオンはコレットの手を
とりゆつくりとイスに座らせた。

「大丈夫？」

「……はい」

ひざまずいて視線を合わせてくるフィオンに、なんだか恥ずかし
くて視線が合わせられず、コレットの視線が泳いだ。

いきなり目の前に現れたフィオンに心の準備ができず、動揺が隠
せない。

そんなコレットを気にする様子もなく、フィオンは胸ポケットか
らケースを取り出すとコレットの前でそれをあけた。

中からでてきたのは、ムーンストーン^{ムーンストーン}のネックレス。花模様のデ
ザインの中に、乳白色の宝石が輝いている。

「プレゼント」

「え？」

「お見舞いの、ね」

言われてもう一度、ネックレスに目を落とす。

自分のためにと彼が用意したのかと思うと、それだけでドキドキして頬が熱くなる。

しかし。

「い、いただけません」

「どうして？」

「こんなに高価なもの……」

ムーンストーンのまわりにあしらわれているのは、小さくカットされた宝石たち。それによって形作られた可愛い花模様は、まるで月の中に咲く花のようである。金色に輝く鎖は、まるで植物の蔓をおもわせるほどに綺麗に作りこまれていた。

フィオンにとってはたいしたことがなくても、決して安い買い物ではない。

「これ以上花を贈ったら、家中が花に埋もれてしまうかと思ったんだ」

フィオンは部屋の中を見渡してそういった。

一応気にはしていたようである。

「それに、この石には癒しの効果もあるから、お守りに」
そういわれてしまえば、断ることもできない。

「受け取ってくれるかな？」

「……はい」

こくりとコレットが頷けば、フィオンはとっても嬉しそうに微笑んだ。その笑顔にコレットの胸が大きく鼓動を刻む。

フィオンはそのネックレスを取ると、ゆっくりとコレットの首にそれを付ける。

向かい合ったままわされた腕に、近付く顔に、全身が意識しているのが分かった。恥ずかしくて、逃げ出したくて、でも、離れたくない。

ただ座っているだけなのに、心臓の音がやけにうるさかった。

どきん、どきんと脈打つ音が、ネックレスをつけるために触れた指先から伝わってしまったらと思うと、どうしていいのかわからない。

もう、否定なんてできなかつた。

(私は、フィオンさまを……)

今まで目を通していた手紙を机の上に落とすと、カサリと紙のこすれる音が室内に響いた。

机の上に重なった手紙の山。

それを見てため息をつく、フィオンはイスの背もたれに体重をあずけて視線をあげた。

「それで、詳しいことは分かった？」

フィオンの言葉に、机をくださった向かいに立っていたロイドは、きちんと整理された報告書をフィオンの前に出す。

「こちらが夏至祭の日に、リアーズ・ガーデンに出入りしていた方の名前になります。広く開放されていましたので、すべての人物を上げることは困難でしたが、貴族の方々はほぼ把握できています」

ロイドは、夏至祭の日のリアーズ・ガーデンを警備していたものからの情報をフィオンに話した。ガーデン内に入るときに馬車に入られた家紋が警備のもの目にはいる。貴族が犯罪に巻き込まれれば面倒なことになるため、警備もそれだけ力が入っていた。どの貴族がいつ入園し、いつ退園していったのか。その情報はかなり正確である。

なかにはおしのびで遊びにくるようなものもいるが、身なりがそもそも貴族と庶民では異なるし、警備兵はあらゆる場所での警護にあたっている。見かければどの貴族なのか判断できるものも多い。貴族であるのなら、夏至祭にリアーズ・ガーデンに入った時点で、それを完全に隠すことは難しい。

コレットがフィオンとはぐれた原因。

馬車でガーデンを出る前に聞いたそれをロイドへ伝え、警備の強化も含めてその原因となった女を捜したが、コレットがその女の姿を見たのは暗がり、それも顔を見たのは手をつかまれて走っているとき、半歩以上後ろからであったこともあり犯人を見つけること

はできなかった。

その女の雰囲気は侍女のような感じだったことより、その日ガーデン内に来ていた貴族をすべて調べたのである。

もちろんその女が必ずしも貴族に仕える侍女ではないかもしれないし、侍女だったとしてその家のものが一緒にガーデン内に来ていたかといわれるとはつきりはしない。

しかし、侍女ともなればそれなりに身なりの整った人物である。

そんな女性が一人で夏至祭のリアーズ・ガーデンに入ってくればどうしても目立つ。行うことを考えれば目立ちたくない心境のはずだ。貴族の令嬢の付き添いなどでその場に来た可能性も高い。

ガーデン内にいた貴族の名前を確認し、フィオンはルノワール伯爵邸で行われたパーティーに出席していた人物とそれを頭の中で照らし合わせた。

今回の犯人と薬を盛った犯人が同一とは限らない。大事に至らなかったこともあり、単なる嫌がらせという見方もできなくはないのだが。

再び、フィオンは机の上の手紙の山に視線を落とした。

手紙の中身は、決して本人には見せられないような罵詈雑言の数々に、恨みや嫉妬の言葉、意味をなさない黒く塗りつぶされるようにペンを走らせただけの紙など。

これらすべて、マカリストー男爵家に届いたコレットへの手紙である。

犯人につながる証拠となる可能性があるとして、コレット宛の配達物は現在すべてがチェックされている状況である。

きちんと送り主が明記されているものや、招待状などしつかりとその家名のもと正式な手続きを踏んでわたされたものなど以外は、マカリストー男爵の許可の元、すべて王家の管轄下にある。

送り主が明記されているものに関しては、個人の問題もあるため父であるマカリストー男爵が一応の管理を任されていた。

現在のコレットへの配達物は、本人に直接渡さない限り必ず誰かのチェックがかかることになっている。

「手紙の配達人については？」

「みな関係のないものがお金で依頼を受けたようです。使用人に運ばせたり、郵便配達人を経由したりしたものはありませんでした」

マカリスター男爵の許可も得て、男爵家の警備はまわりからはそれと気がつかれないように増強されている。屋敷の前ではなく、手紙を持ってきたものがその場から離れた後どこへ帰っていくのかを確認し、その上で手紙のことを聞きだしていた。

郵便配達所に手紙を持ち込めば、料金を支払い配達してもらうことも可能だが、そこでは必ず宛先と差出人が確認されている。差出人の名前がないものをむやみに配達したりはしないため、自分の名を明かさずにこのような手紙を出すことはできない。

使用人すら使わないで運ばせるあたり、自分の行為が、淑女としてどれだけ恥ずかしいことをしているのかという自覚だけはあるようだ。

「手紙なんて、すぐ調べがつくんだけだね」

手紙など、筆跡や紙の材質、デザインなどで人物が特定されやすいのだから、自ら証拠を残しているようなものだ。

これらの手紙は、筆跡などからも一人の人物からのものではない。人物を特定したとしても、たんなるいたずらの範囲で収まる可能性もある。しかし、これらのものをそのままにしておくことは今後もっと大きな嫌がらせに発展する可能性もある上に、この中に夏至祭や惚れ薬の犯人がまぎれている可能性も十分にありえる。

それにしても、フィオンはそれらの手紙をもう一度手に取った。現在の状況下で、この手紙がコレット本人に届くと思っていたのなら、これらを送った人物達の浅はかさを考えられずにはいられない。

これらの手紙にしても、夏至祭のことにしても、どうもつめがあ

まい。それは『惚れ薬』の服用のさせ方にも共通する部分だ。そう考えると、惚れ薬の一件も王弟であるフィオンを利用しようとしたというより、若い女性が無謀な計画を立てて実効したような印象をうける。

「引き続き、コレットのまわりの警備を強化するように。コレットがこれ以上危険な目にあわないようにね」

「はい。必ず」

夏至祭のときにコレットを見失うという失態をしたロイドは、フィオンの言葉に深く頭を下げた。

「それと……」

「なに？」

「少し気になるのですが」

「気になること？」

報告というにははつきりしないロイドの言葉に、フィオンは聞き返した。

「マカリスター男爵家に直接何かをしてくるわけではないのですが、ときどきその周辺で見かける人物がいます。黒い髪の、年頃は十代後半ほどの女性なのですが」

「通行人といった感じではないと？」

「いえ、身なりもおかしなところはありませんし、特に不審な行動があつたわけではありません」

王都にあるマカリスター男爵家の屋敷は、人気のない場所に立っているわけではない。周辺には他の貴族の屋敷もあれば、通りを抜けていけば店も立ち並んでいる。

近隣に住む人物やそこで働くものなどもいるのだから、同じ人物を見かけることだけが不審の理由にはならない。

「しかし確認のためにとその女性の所在を確認したのですが、わからないのです」

「わからない？」

「はい。その女性がどこから来ていて、どこへ行くためにマカリスター男爵家の近辺を通っているのかが」

何度も通りかかるということは、そこに何らかの用事があるはずである。

「何度かその後をつけて確認したのですが、いつも必ず見失ってしまっんです」

「場所は？」

「場所ですか？」

「見失った場所」

「そのときによって多少は異なるようですが、セイズ川のほとりで何度か」

「そう……」

フィオンは少し考えるように口元に手をあてた。

「その人物も引き続き調査を。ただし、相手に気がつかれないようにね」

気がつかれてはこちらがしっばを捕まえる前に行動を止められてしまう可能性もある。

「はい」

ロイドは一礼すると、その場を後にした。

誰もいなくなつた書斎で、フィオンは小さくため息をついた。

夏至の夜の、あのコレットの涙が忘れられない。

いつもなら、フィオンが距離をつめれば腰が引けていた彼女が、あの日はそれすら忘れてしまったかのようにフィオンを受け入れていた。フィオンの腕のなかにその身をあずけていたコレットを思い出すたび、それが嬉しくもあり、そして苦しくもある。

アッカーソン男爵家第二子息、キース・アッカーソン。

会うのは初めてだったが、その名前は知っていた。

正式なものではなかったとはいえ、コレットのことを調べれば、その名前はおのずとあがってくる彼女の元婚約者だ。

幼いころの婚約など、貴族の社会では珍しいことではない。

それは家同士、親同士の利害によるもので、本人たちの意思は含まれていない。だからこそ、フィオンは他の女を選んだというキースのことを、たいして気にもしていなかった。

コレットにとってはショックな出来事ではあつたろうが、しよせんは親同士が決めた婚約者、そう思っていた。

しかし、コレットにとってはそうではなかったということなのだろうか。

自分の腕の中で小さく震えていたコレットを思い出し息苦しさを覚えると、フィオンは首元のタイを少しゆるめた。

書斎の扉がノックされると、執事のクレマンが入室してきた。

カートにはお茶の用意がされている。

「旦那さま、お茶の時刻でございます。少し休憩なさってください」
そういつて机に向かっていているフィオンに声をかけたが、返事がない。

見ると、机に頬杖をついたフィオンが、目を閉じて苦しそうな表情をうかべている。

「ご気分でもすぐれませんか？」

いわれて、ゆっくりと目を開けた。

クレマンをみて、フィオンは深く息を吐く。

「いや、大丈夫だ」

そういつとフィオンは机から離れると、ソファに腰をおろした。

その前のテーブルに、クレマンはお茶を注いだカップを静かに置いた。

胸のつかえを落とすように、フィオンはそのお茶を流し込む。

カップを戻してソファにもたれかかるフィオンは、やはりいつもの彼とは少し様子が違うように感じられる。

「やはりどこか具合がすぐれないのでは？」

問われ、フィオンはクレマンをじっと見た。

「……胸が」

つぶやくように言う。

「胸でございますか？」

「胸が、痛いような気がする」

「どのような感じで痛みますか？」

「……締め付けられるような、そんな感じで」

押さえるように、胸に手をあてる。

「他には何かございますか？」

もしかして、今になって薬の副作用が出たのかと、クレマンは慎重にフィオンの様子を確認した。

「少し呼吸も苦しいかもしれない」

やはり医師を呼ぶべきかとクレマンが思ったとき、フィオンは大きくため息をついた。

「コレットに会いたい」

昨日会いに行ったばかりである。仕事もあれば、犯人を捜す手配もある。他にもいろいろと忙しい身であるが、それをぬってコレットに会いには行っている。しかし、会っても、別ればまたすぐに会いたくなってしまうのだからどうしようもない。

フィオンの言葉に、クレマンはたと気が付く。

これはもしかして……。

薬の副作用といえはいえなくもないだろうが。

「旦那さま」

「ん？」

「もしやそれは、コレットお嬢さまのことを考えられたときに胸が痛むのですか？」

クレマンの言葉に、フィオンはしばし考える。

確かに、今までコレットのことを考えてはいたが。

思い当たることがあるようなフィオンに、クレマンは自分の考え

に確信をもつ。

「それが何か関係があるの？」

「それは……」

「何？」

こほんといつ、クレマンは咳をすると言葉を続けた。

「旦那さま、恋をするとそのような症状があらわれることがありません」

「恋？」

コレットに恋をしている自覚はある。

しかし、誰かを好きだと思つたことが今までの人生の中でまっただくなかつたわけではない。それでも、こんな痛みをフィオンは知らない。

怪訝そうに眉をよせるフィオンに、クレマンは心の中でため息をついた。

今までフィオンが好きだと思つた女性が、彼に心惹かれないなどということとはなかつたのだから、その胸の痛みが何を意味するのか知らないとしても不思議ではないのだろうが。

身分も高く、見目麗しき王弟殿下から優しく声をかけられて、心ときめかない女性などいなかつた。その言葉に好意を感じ取れば、女性として夢み心地に恋へと気持ちは変わっていく。

だが、恋とは本来楽しいだけのものではない。

「恋とは、至高の喜びも、それと同時に苦しみをも与えてくれるものなのです」

些細なことで胸が痛み、嫉妬に苦しみ、それでもほんの小さなことで胸が熱くなる。

たった一人に強く心を揺さぶられる、それを恋と呼ぶのだから。

書斎の窓からバード公爵の敷地内に馬車が入ってくるのがみえたため、クレマンはその対応をするために部屋からでていった。

一人になって、フィオンは何気なく自分の手に目をやった。お見舞いに行った際に、倒れそうになったコレットを抱きとめた。一瞬強く抱きしめた自分に、体をかたくしたコレット。彼女はまだ自分に心を許したわけでない、そう自覚させられる。どう考えても、今後コレットとキースの間になにか起こる可能性はない。そうだとわかっている、この胸のもやもやとした気持ちが消えなかった。

書斎のドアがノックされると、再び書斎にクレマンが姿をあらわした。

そつえば来客がきたのだということを出す。

「誰だったの？」

「王宮からでございます」

「王宮？」

「すぐに宮殿のほうにいらっしゃるようにとのことです」

今日、王宮に上がるような仕事はなかったはずだがとフィオンは思考をめぐらせた。

何か急な用件でもできたのだろうか。

「その……」

珍しく、クレマンが言いよどんだ。

「どうした？ 使者が何かいっていたのか？」

フィオンに問われ、クレマンは意を決したように姿勢を正した。

「解毒薬ができたそつでございます」

その言葉に、フィオンの動きが止まった。その後ゆっくりとクレマンから視線をはずす。

今の時点で解毒薬といえば、言わずともなんの解毒かはすぐにわかる。

少し硬くなったその表情からは、フィオンが何を考えているのか

読み解くことはできない。

「……そう」

静かにうなずくと、お茶の入ったカップをとり残りを一気に飲みほし、フィオンはソファから立ち上がった。

「王宮へ行く。仕度を」

王家の執事が開けた扉の中にはいると、フィオンは眉をひそめた。王への謁見室の中には、惚れ薬の件が最初に話されたときと同様、王と王妃以外にも数人の家臣がその場にすでにそろっていた。

あの時と違うといえば、王家付きの医師たちやバード公爵家御用達の医師までがすでにずらりとそろっていることだろうか。

まわりにそろっているものの表情をみると、どうやらこの部屋の異変はフィオンだけではなく、みなが感じているようだった。

なかには口元を押さえつつ、青い顔をしているものもある。

王と王妃に一礼すると、フィオンはその疑問を口にした。

「何ですか？ この匂いは」

吐き気をもよおすほどの強烈な匂いに、王も眉をひそめ、王妃は口元にハンカチをあてている。

微妙な表情をしながら、王は医師たちの方に視線を動かす。フィオンもその視線の先をちらりとみた。どうやら原因はあそこらしい。

フィオンが着席すると、王は苦しそうに咳を一つして口を開いた。「説明を始めよ」

医師の中の一人、王家直属の医師として他の医師たちを取りまとめる立場である医師長が一步前に進み出た。

その手には数冊の書物が握られている。

「まず最初に、フィオンさまが飲まれたと思われる『惚れ薬』のことについてご説明させていただきます」

持っていた本を上げ、医師長は続けた。

「『惚れ薬』の記載でございますが、もちろん禁忌薬の一つに上げられますもので、一般の医学書、薬学書にその記載はまじなございません。呪い書などにはよく取り上げられておりますが、それも材料を見る限りほとんどがまがいもの、今回のような効果を期待できるような

ものではございませんでした」

古今東西、好きな人をふりむかせたいという人の心にかわりはなく、いつの時代も『惚れ薬』のような薬や呪い^{まじな}などの記載は人の心をとらえてやまない。正式な文書として残ってはいなくても、『惚れ薬』に関する記載は探せばかなりの量が出てくる。

しかしその効果が高ければ高いほど、その詳細は不明なものが多い。人々がすぐに調べることができるようなものは単なる気休め程度のものでしかなく、そのような媚薬、秘薬で本当に効果があるものは、禁断の処方として影で受けつがれる。それらの存在がおもてに出てくることはほとんどない。

「歴史を紐解いてみますれば、『惚れ薬』が使われたという事例がいくつかございます」

そう医師長が続けると、彼の近くに控えていた助手が、それらの書物を医師長から受け取り机の上にならべた。

それらの書物はどの文献も羊皮紙が変色をみせるような、かなり古いものようだ。

「その中でも、『惚れ薬』の効果を消すことができたものとしては、まずは歴史書『トリテュヌスの見解』の中に、古代ストラトス王家でありました『惚れ薬』事件があげられます」

医師長がならべた本の一つ。『トリテュヌスの見解』には、ストラトス王家の三代目の王が、『惚れ薬』を盛られて一人の愛妾に心奪われるという記載がある。

「されど、この惚れ薬の詳細はなく、解毒薬も王妃により手に入れられたものとしてのみ記載されているだけでございます」

古代王家の事件のそれを、後世になって歴史家トリテュヌスがまとめたものであるので、その詳細が明らかでないのも仕方が無いが、これは薬の効果を消すことができた^{成功}と知ることができた^{成功}だけで僥倖^{うわい}だといわなくてはならない。

「もう一例はライセルト著『サーティス伯爵史』の中に、当時のサーティス伯爵であったハラスさまが伯爵家秘伝の惚れ薬を使用した

記述がございます」

少し誇張されて書かれた部分はあるものの、実際の事件をもとにかかれた文書である。

当時サーティス伯爵であったハラスが、複数の人物に惚れ薬を服用させた事件の記録が書かれていた。その中の何人かは、偶然に、またはいろいろな解毒方法をためされたのちに、惚れ薬の効果を消すことに成功している。

「『惚れ薬』の解毒に成功したという記述は多くはございません。しかし、解毒が不可能では決してないということがこれにて分かっていただけだと思います」

医師長は一呼吸つくと、まわりの理解を確認するようにあたりを見渡し言葉を続けた。

「『惚れ薬』は名前こそよく聞く媚薬の一つですが、普通の薬とは違い、呪術的な要素も加味される秘薬にございます。また、それらの処方とは闇にかくされ、効果があればあるだけ処方内容は不明な点が多い。今回の件でも薬が残っていない以上、どのようなものがかわれたのかもはっきりしない状況でございますが、書物による記載を検討し、解毒効果のある薬を調べたうえでの処方となっております」

いろいろな毒に対する解毒に用いられるもの、『サーティス伯爵史』のなかで薬の効果がなくなった人物たちが口にしていたものなど、それらを検討し、必要な薬を集め、抽出方法や処方の組み合わせを確認。

ようやく解毒薬の完成となったわけである。

「処方内容といたしましては、聖水と名高いグリーヴの泉の水をすべての抽出に用いまして、気持ちを落ち着かせる効果のありますハスの種子に解毒作用の強いヘンルーダの葉、レンギョウの果実、サイ魚の肝臓、青色胞子の付きましたミスホリダケ、牛の腸から取り出しました糞石をすりつぶし……」

次々と解毒薬に使われたものがあげられるが、それがどんどんあ

げられるたびにみな表情が曇っていく。

聞いているだけで、気分の悪くなるものも含まれて、本当にこれが解毒薬として効果があるのかという以前の問題であるような気もしなくもない。

処方内容の説明が終わると、みなの前に、コトリと音を立て透明なガラスの瓶がおかれた。

ふたをしていてもその匂いを完全に遮断することは難しいらしく、そこからもれる匂いにまわりのものが眉をひそめる。

だが、ひどいのはその匂いだけではない。

透明な容器からみえるその中身。解毒薬として医師が説明しなければ、にごったように光を通さず、毒々しいまでの青紫色のこの液体が薬だと思えるものは誰もいないだろう。どうみても、口にしたとは思えない代物である。

その薬を目にした後、みな視線は自然とこれを口にしなくてはいけないであろうフィオンへとむけられた。

みな視線が自分に向けられたことを感じると、今まで静かにこの成り行きをみていたフィオンはため息混じりで肩をすくめた。

「すいませんが、それを飲むことはできません」

ざわりと、あたりがざわつく。

「えっと、何でしたっけ？ その薬に含まれているものは」

先ほどの説明にもあったが、長々といわれた薬の原料をすべてそろんじるのは難しい。

「もう一度確認しますと、グリーヴの泉の水に、ヘンルーダの葉、レンギョウの果実……」

「ああ、もういいよ」

医師長が長々と言い出すのを、フィオンはたいして興味もなさそうにとめた。

「いろいろ考えて作ったようだけど、これを飲んだほうが具合が悪くなりそうだ」

「フィオン……」

フィオンの言葉を静止するように名を呼んだ王でさえ、彼の言葉を否定するのは難しそうだった。

確かにこれを飲めといわれても、はいそうですかとはいいいにくい。「惚れ薬」とみناهは騒ぎますが、僕はちつともそれを苦にしません。そのためにこれを飲むというのは、解毒というよりは服毒といえると思いますか？」

「いえ、ちゃんと実験によって毒性の試験はおこなっております……」

確かに見た目はどぎつい色をしているが毒性はないと、医師長のそばにいた別の医師が答えた。どうやら彼が毒性試験をしていたものようだ。しかし、この色と匂いである。まわりの反応から、語尾がよくなるのは隠せなかった。

その言葉をうけて、フィオンは口元をゆるめた。しかし、向けられた視線のおくは、決して笑ってはいない。

「それなら、君が飲んでみる？」
その薬を。

いわれて、まっすぐに視線を受けていた医師はごくりと息をのんだ。

薬を飲むという事実よりも、フィオンのその静かな視線に圧倒される。

「窓、開けていただけないかしら」

雰囲気が重くなった室内に、王妃の声が響いた。

はっとしたように、みな視線が王妃にあつまる。

そんなことは気にもしないように、綺麗なレースのハンカチで口元を押さえていた王妃は、窓のあたりで警備をしている兵士に直接声をかけた。

「窓。早くあけてくだらない？」

直接王妃から声をかけられ、兵士は慌てたようにあたりをみた。

家臣の一人が口をひらく。

「王妃さま、重要な議題について話しているところですので、窓を開けますというのは警備の面で問題があるのではないかと……」

「こんな匂いでは、まともに話なんてできませんわ。いいですわよね、陛下？」

隣に座っていた王は、王妃の顔を見るとしびしびといった感じであらずいた。

「ここは二階だ。窓下そうかにしのんで話を聞くことはままなるまい。窓を開け、階下の様子に注意を払うように」

王の言葉に兵士はふかぶかと頭をさげ、部屋の窓を開けながらそのつど外に人の気配がないかを確認していく。

風が通りやつと匂いが落ち着くと、王妃は口元にあてていたハンカチをはずし、ほうと息をはいた。

やつと呼吸が楽になる。

「お話の続きですけれど、お毒味を試してみればよろしいのではなくて？」

「ですから、毒性の検査は……」

「それは先ほども聞きましたし、みなを信じてまいりますわ。でも、これだけのものを解毒薬だから飲めといわれましても、フィオンだつて戸惑つてしまいますわ。違いますか？」

「それは、そうかもしれませんが……」

「私も可愛い義弟おとこに、得体の知れないものなんて飲ませられませぬし」

王妃はみなをゆっくりと見回すと、最後に隣に座る王ににっこりと微笑みかけた。

「ね？」

この場で王妃の言葉に反対できるものは、いなかった。

しかし毒味をするとして、誰がこの薬を飲むかである。

「毒味役でも呼ぶか」

「あら、それにはおよびませんでしょう」

「どういふことだ？」

「だって、これを作られた方は、これが人が飲めるものだとは判断されたわけでしょう？ 飲んでいただいたら？」

「ディアナ……」

「それに、味がわからなければ改善のしようもないでしょうし」

王妃の言葉に、医師長は静かにうなずいた。

「わかりました。私が」

「いえ、私がいただきます」

医師長の言葉をさえぎるように、さきほど毒性試験をしたというものが名乗りを上げた。

自分が行った毒性の検査に間違いはなかった。もしこれにより王弟の命が奪われるような事態にでもなれば、その試験をした自分もただではすまない。それならば、いつそ自分で証明してみせるとばかりに、彼は一步前に進み出た。

その申し出の真意をはかり、王は許可をだす。

瓶のふたがはずされると、薬がゆっくりと銀杯の中に注がれた。

注がれたというには薬の粘性が強く、ねっとり容器の中に落ちていったというほうがたしかもしれない。杯にあげられた薬により、部屋には窓を開ける前以上の匂いが充満していく。

そこに味と香りを調節する目的として赤いワインが注がれ、銀のスプーンでゆっくりとかき混ぜられたが、それが薬の匂いや味をどこまで押さえ切れているのかはなはだ疑問である。

部屋にいるものたちはみな様にその匂いに顔をしかめ、家臣の中には思わず吐き気をもよおして慌てて視線をそらし口元を押さえたまのまである。

呼吸をすることさえ苦しくなるようなこの匂いの中、医師たちだけは多少顔をしかめた程度だった。解毒薬の研究の際に、すでに匂いに麻痺がでているのではないかと疑いたくなるほどだ。

出来上がった薬がテーブルの上に置かれる。

毒味を申し出た医師は、その銀の杯を両手で持ち上げると目の前までもつてくる。ごくりと息を飲んだ後、覚悟を決めたように一気に薬をあおった。

タンツと、銀杯がテーブルの上に戻される。

服用した医師は、大丈夫であることを知らしめるようにあたりを見渡し。

倒れた。

まわりにいたものが慌ててその体を起こすが、まったく反応がない。

「どうした!」

「気を、失っているようでございます」

どうやら匂いと刺激に目を回してしまっただらしい。

気力でなんとか服用してものの、吐き出すこともできず、直接脳天に響くほどの刺激臭にやられてしまったようだ。

倒れた医師の一人を目にして、やれやれといった様子でフィオンは肩をすくめた。

「話になりませんね」

人に飲ませることを前提として作られたとは到底思えない。

「これでは……フィオンに飲めとはいえませんわね」

運ばれていく医師をみて、王妃もそうつぶやく。

その光景にため息をついて、王は額に手をあてた。

「解毒作用も大事だが、人が飲めるものを作るように」

これでは解毒どころの話ではない。

王の言葉に、医師一同が冷たい汗を感じながら頭をさげた。

31・余波

「ここにいたのか」

王宮の一室。

王弟としてのフィオンの執務室のドアを開けると、パトリックがその中にはいつてきた。

執務をおこなうための机などが取り揃えられているその場所でソファに横になつていたフィオンは、声をかけられ体を起こすと、兄であり王でもある彼に立ち上がって一礼する。

パトリックはフィオンをソファに座るように促すと、自分も彼の向かいに腰をおろした。

「休んでいたのか？」

「ええ、さすがにあの匂いにあてられてしまいました」

先ほど紹介された惚れ薬の解毒薬。

さすがにあれほどの匂いにさらされてはと、フィオンは肩をすくめた。

「休むのなら、ここではなくお前の私室を使えばいい。以前のまま残してあるのだから」

王弟であるフィオンの部屋は、この王宮にもある。

幼い頃からバード公爵位を継ぐことが決まっていたフィオンであるが、爵位を継ぐまでは王宮とバード公爵家を行き来するような生活を送っていたため、王宮には以前フィオンが使っていた私室がそのままのこされていた。

「今日ぐらいは、王宮でゆっくりと休んでいきなさい」

王都内にあるのだから、バード公爵邸と王宮との距離がそんなに離れているわけではない。しかし、あの匂いにやられた後である。

馬車のわずかなゆれですら、体にこたえることもあるだろうと王は提案した。

王の言葉にフィオンはわずかに微笑んで、ゆるりと首をふった。

「いえ、帰ります。僕がここに長居をすれば、諦めがつかない人たちが多いようですから」

フィオンが王宮に滞在すれば、王位継承について諦められない人物たちも増えてくる。

それでは、何のために住まいをバード公爵邸へと移したのか分からない。

バード公爵位を継いだと同時に、フィオンはバード公爵家の領地と建物、それにまつわるすべてのものを祖父ヘンリーから譲り受けている。しかし、王弟という身分である彼は本来必ずしも王宮をさる必要はなかった。

王族であることと貴族であることは立場が大きく異なる。とくに外交面などでは、貴族であるか王族であるかで相手の出方は大きく変わってくる。フィオンが公爵家へと住まいを移したからといって、完全に一貴族となったわけではなく、厳密に言えば王弟としての立場の方がかなり大きい。

それらを加味した上、王宮に残るかまたは王弟としての別邸に移る選択肢もあるなか、フィオンはあえて公爵家へと住居を移した。

王宮内に、無用の火種を残さないために。

「そうか……」

王はそれ以上なにもいわなかった。

前王妃との確執があったとはいえ、パトリックには弟を恨んだりねたんだりする気持ちは不思議とおこらなかつた。

王宮は、前王妃がいたころ、パトリックにとって決して居心地のいい場所とはいえなかつた。

王位継承者の筆頭としてここから逃げることもできず、しかし、その後継者としての地位さえゆらいでいたあの頃から、フィオンはいつも自分を兄として接していた。王位を競う相手ではなく、自分の血縁である兄として。

現在でも、もしフィオンが王位を望むのならば、いや、望まなくともその動きがあるだけで、自分はこの国の安定のためにその事態をほっておくことができなくなる。たとえ自分が弟を可愛がっていたとしても、そうなってしまうてはもはや止めようもない。

それを分かっているかのように、フィオンの行動には一貫のゆるぎもなく、王家の一員としての役割をはたし、王弟として王の支えとなるべく務めている。

その彼を、パトリックは誰よりも信頼していた。

「兄上」

「ん？ 何だ？」

「何かご用があったのでは？」

「ああ」

わざわざ自分の執務室まで足を運んだほどなのだ。何も言わない兄にどうしたのかとフィオンが尋ねると、パトリックは思い出したように口を開いた。

「ディアナがお前に話があるといっていた。帰る前によってやってくれ」

「義姉上が？」

何の用事なのか。それにしても……。

「それならば、誰かに申し付けてくださっても良かったのに」

わざわざ王自らが伝言することでもない。

「久しぶりに、弟とゆっくり話したいと思ったのだ。言付けはついでだ」

なんだかんだといつても、王妃である義姉にパトリックは弱い。

いつもにつこりと笑って、それで他の人たちを動かしてしまう王妃を思い出し、フィオンとパトリックは顔を見合わせて笑った。

王妃との謁見をすませ、王宮から退出するために歩いていたフィ

オンは、見知った人物を見つけて足をとめた。

相手もフィオンに気が付くと、フィオンに近付きふかぶかと頭を下げる。

「これはランデル子爵、先だつては見舞いに屋敷まで足を運んでいただきありがとうございます。あれからお会いする機会もありませんでしたが」

「なかなかお声をおかけすることもできずに、恐縮でございます」

「そういえば、監獄の責任者たちからの報告書、見せていただきましたよ」

ランデル子爵の親族もその中の一人である。

フィオンに惚れ薬を飲ませた犯人が投獄されていた監獄の報告書には、監視体制や脱出の可能性についてなどが書かれていた。

自分達が管理していた監獄での脱走は、管理者からすれば信じられないことであり、どれだけ嚴重な警備だったのが切々と語られていたのだが、逃げられたことは事実である。

「その後調査の詳細を提出するようにとのお話があったと思いますが、どうなっているか知っていますか？」

「他の監獄の責任者達とも確認しながらまとめているようですが、なかなか難しいようです……」

自分達の失敗を赤裸々に語るのは、なかなか勇氣のいることである。

やはり責任者だけに任せているだけでは難しいかと、フィオンはため息をつく。

信頼できるものに視察にも行かせ、その報告も受けているが、それだけでは十分ではないようだ。あまり自分が直接動けば、周りのものを信用していないようで避けたかったが。

解毒を望んでいなくても、犯人を捕まえることはフィオンにとっても重要事項である。

「近々僕も視察を兼ねて行きますので、よろしくおつたえください」
フィオンの言葉に、ランデル子爵は深く頭をさげた。

「まったく、大人しくしているといっただろう！」

部屋に響くような大声で言われ、トリーヌの肩がびくりとゆれた。肩をすくめ足元を見ていた視線を、一緒に怒られている自分の主である少女へと移す。

少女は父親の怒りが納得できないように、憤然とした表情で父親を見ていた。

「お前達がしていることは、我々にとってかなりの危険を伴っていることがわからないのか。もしそこから今回の事件の犯人へと結びついたらどうするつもりだ！」

二人がしたことは、コレットへの嫌がらせ。

子供じみた嫌がらせの手紙を見つけ、大人しくしていると思っていた娘が何をしていたのかを聞き出した父親は、怒り心頭でこの剣幕なのである。

まだ、バード公爵を想う娘の嫉妬によるものだと苦しい言い訳がなんとか成り立つが、そこから惚れ薬とのかかわりを調べられたら終わりだ。現王派からは謀反を疑われ、自分の娘をバード公爵夫人にという王弟派からは、別の意味で睨まれる。そうなれば、現在の地位も危うい。

「でもっ！ それでは、このまま黙って二人のことを見ているとおっしゃるの!？」

父親が言っていた解毒薬はちつとも出てくる気配がなく、その間中あの女とバード公爵がまるで恋人同士のように一緒にいることが耐えられなかったと、少女は苛立ちを父親にぶつける。

「解毒薬はできた」

「それじゃ」

少女の顔が、ぱっと明るくなった。

しかし、父親の顔には眉間に皺がよつたままだ。

「バード公爵は解毒薬を拒否された」

「そんな……」

悔しそうに少女は唇をかみ締めた。

自分が使った惚れ薬の効果の絶大さが、現在となつてはなんとも恨めしい。

少女の父親が調べても、解毒薬の件は王宮内でもあまり細かな情報では確認できなかった。王家として王はこの惚れ薬事件にたいしてかなり慎重になっているようだ。

それでももれ聞こえてきた話では、完成した解毒薬をフィオンが服用することを拒否したという事実である。

カツンと室内に足音が響いた。

父と娘のやりとりを出入り口の扉のそばでぼんやりと聞いていたトリー又は、急に近くに現れた人影にぎよつとして体をのけぞらせた。

主人である少女とその父親も、はつとして入り口の方に振り返る。

「まったく、その話をするには無用心ですね」

入ってきた人物は、勝手知つたるように部屋の中へと入ると、ソファに腰をおろした。

「お前か……。あまり驚かせるな」

「叔父さま」

現れた人物に、少女はほつと胸をなでおろした。

さすがにこの会話が誰かに聞かれると大変だという自覚はある。

「まったく、大人しくしていなかったとは困ったお嬢さんだね。トリー又をせっかく獄舎から出してあげたというのに、これでは自分で犯人だと名のり挙げてるようなものだよ？」

「それは……」

父親には反発していた少女だが、叔父という男性の言葉には素直に反省の色をみせる。

「ふむ。それで、バード公爵が解毒薬を拒否したというのは本当ですか？」

ソファに座ったまま足を組むと、男性は少女の父親にたずねた。

「ああ。それは間違いない」

緘口令をしいたとしても、完全に人の口をふさぐことは難しい。

「そうですね……。そうならば、仕方ありませんね」

「叔父さま？」

男はにっこりと少女に笑いかけた。

「解毒薬など無くても、事足りる。そう王弟殿下が解毒薬の服用をこぼんだとしても問題はないよ」

「だが……」

このままでは、フィオンからコレットを引き離すのは難しい。

惚れ薬が関係しているといっても、王家として二人を引き離す動きはみられない。フィオンだけでなく、王妃までもがコレットを気に入っているという噂まである。

「相手がいなければ、惚れ薬の効果など問題ともなりません」

そう、惚れ薬が問題となるのは、その相手がいるから。

相手さえいなくなってしまうえば、薬の効果などあってもなくても同じこと。

フィオンは王弟として、バード公爵として家系を守る義務がある。次代に後継者を残すために、彼はどんな状況であろうといつかは必ず結婚する。そう、相手が誰であったとしても。

「あの女をけせばいい」

男の言葉が、室内にやけに大きく響いたような気がした。

叔父の言葉に、少女は大きく目を見開く。

今まで、解毒薬でフィオンへの薬の効果がなくなることはかり考えていた。しかし、確かに相手さえいなくなれば、薬の効果など問題にならない。

「そう……ですわよね」

そこまで考えもしなかった少女は、すべての解決策を見つけたように叔父に微笑んだ。

少女の叔父は、はまるで自宅であるかのように近くにあった呼び鈴をならした。

メイドに伴われて、一人の男がその場に入ってくる。

入ってきた男は帽子をとると、深く頭をさげた。

「彼は？」

「こちら側の人間ですよ。トリーヌ、お前は面識があるだろう」

急に話を振られた上、みんなの視線があつまったことにより、トリーヌは視線をきよろきよろと動かしながら中に入ってきた男をみた。

確かに見覚えのある顔に、自分を見ている主人にうなずいてみせる。

監獄から出るときに、自分が入っていた牢の鍵を開けた人物である。

あの時、さすがにどうなるのか、どこにつれていかれるのかと不安だっただけに、相手の顔が脳裏に焼きついていた。

「兄上、この件に関して異論はありませんね？」

「仕方あるまい」

少女の父親は、しぶしぶといった様子でうなずいた。

「カイサル、お前の仕事はただひとつ。マカリストー男爵家、コレットを始末しろ」

「はい」

「失敗は許されない。だが、成功すれば、どんな褒章でも望みのままだ」

男の言葉に、カイサルと呼ばれた男は、ニヤリと口元を緩めながら頭を下げた。

32・戸惑い

自覚をしてみれば、どうしていいのかわからなくなる。
今までと状況は変わらなくても、同じでなんていられない。

湖を渡る風が木々の葉をさらさらと揺らすと、白いパラソルにかかる木漏れ日がそれをなでるように動いた。肌を感じる風の心地よさに目を細めると、コレットはキラキラと輝く湖面に視線を向ける。王都の西に位置するステイルス湖では、夏も本番になるうというこの季節、避暑のために訪れている人も多い。湖には、遠くでボート遊びをしている人もちらほらと見られた。

王都での社交シーズンは終息となってきたが、今度は避暑地としてこの湖のほとりが夏の社交場となっているようだ。夏はいつもマカリスター男爵領ですごしていたコレットにとっては、はじめての経験である。

湖面から少し視線をあげれば、視界をかすめたそれにコレットの心臓がとくとんと跳ねた。

「あら、どうかなさいました？」

急に歩く速度を落としたコレットに、一緒に散策を楽しんでいた王妃が足を止めた。

はっとしてコレットは視線を戻す。

そんなコレットに王妃が歩み寄った。少し首をかしげて、覗き込む様にコレットを見る。

「疲れました？」

「い、いえ。綺麗な景色に目を奪われてしまっ……。申し訳ありません」

「謝ることなんてありませんわ。気に入っていただけたのなら、お

誘いたかひがありますもの」

「つこりと王妃が笑う。それにつられるようにコレットも微笑んだ。

「足の具合はいかが？ 痛んだりしていませんか？」

「はい、大丈夫です」

「そう？ でも痛みを感じなくても、まだ怪我をする前と同じというわけにもいきませんかでしょう。あまり無理はしないようにね」

「はい」

「それにしても……」

小さくため息をつきながら、王妃は続ける。

「先日は本当にごめんなさいね。不肖の義弟がついていながら、あなたにお怪我をさせてしまって」

王妃がいつているのは、先日の夏至祭。コレットが怪我をした事件のことである。

「いえ、とんでもありません。私の方こそご迷惑をおかけしてばかりで、本当に申し訳ありませんでした」

はぐれてしまって、転んで怪我したのは自分である。

フィオンは何も悪くないと、コレットはあわてて首を振った。

「王妃さまにはお見舞いのお花もいただきまして、本当にその節はご心配をおかけいたしました」

「あら、そんなことは気になさらないで。お詫びといつては何ですけれど、この夏を楽しんでいってくださいね」

「はい。ありがとうございます」

夏至祭のときに、義弟であるフィオンが付いていながら怪我をしてしまったコレットへのお詫びもかねて、この夏、ステイルス湖畔の王家の別荘へとコレットは招待を受けた。

王妃の名のもとでの正式なる招待である。

いまや一男爵令嬢のコレットは、王妃の賓客扱いである。

夏とはいえ、湖を渡る風はひんやりとされていて心地よく、パラソ

ルをするりとすりぬけコレットの髪を優しく揺らした。

それを受けながら、コレットは先ほど視界に入ってきたものをちらりと見る。

そこに見えるのは、以前招待を受けたことのあるバード公爵家の別荘である。

湖面を隔てた向こう側にあるそれは、距離があるにも関わらず木々の合間からその白い姿をのぞかせていた。

フィオンとつながりのあるその場所を見ているだけで、コレットの胸はドキドキと早鐘を打ちはじめ。バード公爵家の別荘に招待されたときのことを思い出せば、それだけで頬が熱くなってくるのをとめることができない。

再び何かを気にしているようなコレットのそぶりに、王妃はその視線の先をたどった。

そこにあつたものを確認し、にっこりと微笑む。

「フィオンは」

「えっ!？」

自分が考えていた人物の名が急に上げられ、コレットは驚いて振り返り王妃を見た。

コレットは何も訊いていないのに、王妃はにこにこ言葉を続ける。

「フィオンは後から来ますわ。仕事が終わる次第、こちらに向かうとのことですから」

自分が何に気をとられていたのかを見透かされたようで、コレットの顔が赤く染まった。なんと答えていいのかわからず、視線がさまよう。

「うふふ。せつかくの夏の保養ですもの。恋人同士は一緒にすごさなくてはね」

「いえ、あの……」

恋人の言葉に、コレットの顔は耳まで赤くなる。

そうではないのに、嬉しそうに微笑みかけてくる王妃に否定の言

葉もうまくでてこない。

恋人という前に、好きになってはいけない人なのに……。

「すみません」

赤く染まった頬を隠すように手をあてると、コレットは少しうつむきながら謝罪の言葉を口にした。

「どうして謝りますの？」

「それは」

王妃の問いに、コレットは口ごもる。

フィオンに恋をしてはいけないと分かっていた。まわりでそれを直接的に反対する人物がいなくても、事態が事態である。

それでも、好きだと思ってしまった。

これからどうしたいのか、どうすればいいのかなんてわからない。今までどおり、協力者として王妃の求めに応じながらフィオンのそばにすることが一番の方法なのだろうと思う。

でも、自分の気持ちを自覚してしまっただけでは、フィオンと一緒にいて今までと同じでいられる自信がない。

「私、本当にあなたのことが気に入りましたのよ。フィオンのお相手としても」

「ですが。その、薬のことが……」

「そうね。気にするなといっても無理なのかもしれないわね」

コレットの隣にたち、王妃は静かな口調で言葉を続けた。

「あなたのお相手としてフィオンでは駄目だというのなら、それも仕方ありませんわ。でもね、それを薬のせいにはしないでほしいの。薬のことをなしにしてあのこのことを考えていただけじゃないかしら。いつか薬の効果がなくなるかもしれない。

それを知った上で、フィオンを好きになっただけで欲しいという王妃の願いは、コレットのこれからのための負担があまりにも大きい。

「あなたには、ひどいことを言っているわね。でも例え薬の効果がなくなっても、私はいつでもあなたの味方になりますよ」

(どつして……?)

コレットの口から、思わず疑問がこぼれそうになった。どうして王妃はここまで自分のことを気にかけてくれるのだろうか。

その疑問を口にする前に、王妃の視線がコレットの後ろへと流れた。コレットを気づかっていた優しい瞳の色が一瞬消えたと思った刹那、王妃はそちらに体をむけてにつこりと微笑む。

「あら、ランデル子爵のお嬢さんですわね」

王妃の言葉に促されるように、コレットも後ろを振り返った。

王妃にあいさつするために、ランデル子爵家のジェシカは二人に近付くとふかぶかと頭を下げる。

「王妃さま、お久しぶりでございます。こちらでお会いできるなんて、この偶然に感謝いたします」

「……そうですわね。ここでお会いするなんて初めてですわね、ミス・ランデル。お顔をおあげになって」

「はい。ありがとうございます」

そういうと、ジェシカはまっすぐに顔をあげた。

すっとした鼻筋に、大きな黒い瞳。なかなか美しい少女であるが、コレットはその少女との面識はなかった。

もともとマカリストー男爵家は、あまり他の貴族との交流が少ないうちに、王都での仕事を中心に動いているランデル子爵家とはさらに接点がない。パーティーなどでちらりと見たことがあったとしても、まだ社交界にデビューしたばかりのコレットではそこまでの認識はなかった。

「ランデル子爵は、夏はいつも東海岸の別荘に行かれていたと思いましたが、今年はこの近くに滞在されていたのかしら？」

「はい、この湖畔のホテルに。今年はいろいろありまして、いつもの別荘ではなくこちらで夏を過ごすことになりました」

「そうですね。お父上も、ご親族も、今はとても忙しいでしょう

から」

ジェシカの父、ランデル子爵やその親族は、フィオンに惚れ薬を持った人物を目下捜索中の身。王都から離れるわけにはいかない立場である。

さらに、今年は王妃がステイスル湖畔の別荘に滞在するとなれば、下手に別の場所へと避暑へ行くよりも何かと都合がいい。偶然でも出会うことができれば、王妃やさらには今噂のバード公爵の目にとまる可能性も期待できると、今年のステイルス湖一帯はそんな貴族たちであふれていた。

「あら、王妃さま。お散歩ですか？」

声をかけられ、王妃が振り向くと、そこには彼女の友人でもあるバークリー侯爵夫人が侍女をともなつて馬車から降りたところだった。

王妃を見かけて、馬車を止めたところらしい。

親しい友人の登場に、王妃の表情に明るい笑顔が宿る。

「それでは、ミス・ランデル。楽しい休暇をお過ごしくださいね」
近くにいたジェシカに短く言葉をかけると、王妃は友人でもあるバークリー侯爵夫人のそばに歩みよつた。

バークリー侯爵夫人は、王妃のお茶会で紹介をされたこともあり、コレットもあいさつをするために王妃に続いてそちらへと歩を進めようと、失礼にならないようにジェシカに軽く頭を下げてその場を去ろうとした。

近くにいて口をきかないのもあれなのだが、相手を知っている王妃がジェシカをコレットに紹介しなかつた以上、紹介もなしにマカリスター男爵家よりも爵位の高い子爵家の令嬢であるジェシカに、コレットから声をかけるわけにもいかない。

「いい身分ですわね」

ジェシカの横を通り抜ける前にかけられた言葉に、コレットは驚

いて肩を震わせる。

声の主を見れば、先ほどまで王妃を見送っていたかと思っていたジエシカは、まっすぐにコレットを見据えている。

鋭い眼差しがコレットを貫いていたかと思うと、ふっと口元だけをゆるめた。

「今回の件、あなたがうらやましいわ。『惚れ薬』のおかげで、今の立場があるわけですものね」

それがなければ、コレットがこうして王家の別荘に招待され、王妃と散策を楽しむなどということはありえないと、ジエシカは言外に匂わせた。

「薬の力がなければ、バード公爵はあなたのことを見向きもしなかったでしょうに」

「それは……」

「自分が本当に選ばれたなんて、そんな勘違いをされているのかしら。」

ずきんと、コレットの胸が痛んだ。

それは、コレットの中にいつもあったことだった。

フィオンを信じたいと思っていた心が揺らぐと、彼を好きだと思っ気持ちは悲鳴をあげる。ギュツと胸を締め付けられるような痛みがコレットを襲った。

信じている。

信じていたい。

フィオンの言葉すべてが、薬のせいだなんて思いたくない。でも……。

「コレット」

名を呼ばれ、コレットははっと声のした方視線をむけた。

バークリー侯爵夫人と話していた王妃が、コレットを呼んでい

る。

「……失礼、します」

ジェシカに頭を下げると、コレットはその場から逃げるように王妃の元へと急いだ。そんなコレットを、ジェシカは今度は何も言わずに見送る。

「まあ、どうしましたの？ お顔が真っ青ですよ」

近付いてきたコレットに、王妃は驚いたように声をかけると、コレットの顔を優しく両手で包んだ。

涙が出そうになり、うまく声がでないコレットに、王妃は優しく微笑む。

「やはり疲れさせてしまったのですね。彼女も一緒に私の別荘へ行きますから、一緒に馬車に乗って行きましょう」

「体調が悪いときには馬車の少しのゆれも気になりますでしょうけれど、すぐにつきますから少しだけ我慢してくださいね」

「はい。ありがとうございます」

王妃とバークリー侯爵夫人に促されて、コレットは馬車へと乗り込んだ。

少し離れたとはいえ、じっとこちらを見ているジェシカの気配が感じられ、コレットはそれだけで落ち着かない気持ちになる。

馬車が通りすぎてその姿が見えなくなると、ジェシカはふいつと視線をそむけてもと来た道を歩き出した。

誰もいなくなったその場所。

そこから少し離れた茂みの中から、一人の男が姿をあらわした。体についた草を払うと、今ほど馬車が通り過ぎていった方向を見つめる。

「あれが、コレット・マカリスターか」

33・視察

厚い扉が、重々しい音をたてて開いた。

扉の向こうにつながる暗い石造りの廊下からひんやりとした空気が流れ込み、持っていた燭台の灯りがゆらゆらとゆれた。

換気のためにと、廊下の上部、人が手を伸ばしてもとどくことのない場所には、鉄格子つきの小さな窓が設けられている。しかし、そこからもれるわずかな光では、鉄格子の周りだけをわずかに明るく浮かび上がらせるだけで、建物の内部の明かり取りの役割まではたしていない。

監獄の中を案内されていたフィオンは、ここの責任者の一人であるギルダスに続いてその厚い扉の中へと入った。その後ろにロイドとここの監守が続く。

堅い石の廊下は音が響き、足音だけが大きく響いていく。

「ここでございます」

一つの扉の前で、一番前を歩いていたギルダスが立ち止まった。腰につけていた鍵の束から一つを選び、目の前にある鉄の扉を開ける。

ロイドが持っていた燭台を受け取ると、フィオンは開けられた扉のなかにはいった。暗い室内を照らすように燭台をあげると、あたりをぐるりと見渡す。

狭い室内。ここにも空気とりのために高い場所に窓が設けられているが、やはり天井をぼんやりと明るく見せるだけで、昼間であるのに室内はかなり暗い。その窓も、幼い子供ですら通ることは困難なほどの大きさしかなく、鉄格子が石の間に埋められている。さらに石の壁は、人が手を伸ばしたとしてもわずかに指先さえも外へは出せないほどに厚くつくられていた。

壊された形跡さえもないその場所から、人が出て行くことはできない。

「ここから人が出ることは、不可能です。ここはあの日のまま保存しておりますが、鍵が壊された様子も、壁に傷などもまったくありません」

後から室内へと入ったこのギルダスは、黙って室内を見渡しているフィオンに向かって話を続けた。

「まあ、そうだね」

壁に手をあてながら室内をくまなく見ていたフィオンは、ギルダスの言葉に頷く。

この部屋から出るためには、今出入りしたこの扉の鍵を開けるしかない。それはどう考えてもはつきりしている。

ひとしきり見てまわったフィオンを、ギルダスは部屋の外へと誘った。狭い石の牢獄の中に、フィオンの存在はあまりにも不似合いである。いくら視察のためとはいえ、王弟であり公爵位をもつ彼を、このような監獄の部屋の中に長居させるわけにはいかない。

部屋から出ようとして、フィオンはふと足をとめた。

「どうかなさいましたか？」

「この扉……」

「扉ですか？ 鉄製のかなり丈夫なものになっていますので、こちらも鍵もなく開けることは無理かと思いますが」

「いや、そうじゃない。この扉には、のぞき窓がないね」

監獄の扉にあるべき、中をのぞくための小さな窓がない。

「ここ以外にも、のぞき窓がない部屋はあるの？」

狭い牢獄の一室である。中に入らずに廊下で控えていた監守の男は、急にフィオンに話しかけられて背筋を伸ばした。

燭台のあかりと窓からのわずかな光の中、牢獄の中という環境ですら、フィオンの存在感を薄めることはできない。緊張の面持ちで、胸に手をあて敬礼しながら答える。

「い、いえ。鉄の一枚扉の部屋では、ほとんどのぞき窓はついております。ここは以前よりのぞき窓はなかったのですが、犯人にはのぞき窓すら情報になりえることがありますので、そういうときのた

めにそのままになっております」

つまり、犯人に外の様子を少しでも知られたくない場合に有用なのである。監守の状況などを知られることもなく、暗く狭い部屋での犯人へのプレッシャーにもなる。

今回の犯人も、王弟に不逞を働いた重要人物である。重要人物であるから、この牢獄に入れたという監守の言葉に、フィオンは小さくため息をついた。

確かにのぞき窓や、廊下と牢獄の間が鉄格子のみという場合には、監守の見張りの状況や監視体制などが牢獄の中にも知りえる情報となる。しかし、それは、犯人が外の様子を知ることができないと同時に、監守側からも中を容易には見られないということの意味している。今回、犯人が逃げたにも関わらず、その発見が遅れたのもそのためだろう。

その部屋からであると、ギルダスは廊下のもときた方向へとフィオンを促した。しかし、フィオンはすぐにそれには応じずに廊下の反対側を振り返った。

「ところで、この廊下、反対側はどうなっているの？」

「ここから燭台で照らしても、暗い廊下の奥はよく見えない。」

「向こう側ですか？ 突き当たりにはさらに鍵つきの扉がございまして、塔への入り口へとなっています。監獄の部屋が並んでいますか、何か？」

「見ることはできる？」

「止めておかれた方がいいかと思えます。囚人が数名拘束されておりますし、バード公爵さまの目にするようなものではありません。」

それに……」

「それに？」

「この奥は囚人たちの脱出を困難にさせるために、路がかなり入り組んでいますので」

「路を知っているものでなければ、進むのは困難だと」

「はい」

責任者の言葉に、フィオンはもう一度そちらに目を向けた後、もと来た廊下を歩き始めた。

監獄の建物のなかでも、この責任者たちや監守たちが普段いる場所は、普通の屋敷といってもいいほど綺麗で明るく整えられている。

その一室に通されたフィオンは、この監獄の見取り図を確認しながら、ギルダスの説明をうける。先ほど見学できなかった塔の内部の様子も確認するが、彼の説明はほとんどが王宮での報告時に聞かされたものと同じようなことが終始繰り返されているだけだった。

「このように、監獄のまわりは深い堀で囲まれておりまして、さらにその周りは高い塀がめぐらされています。あの小さな窓から人ができることなど不可能ですが、万が一出たとしましても、建物の周りに足場はなく、落ちれば水音が響いて監視のものに気付かれます」

さらに堀の水の中には、何箇所にも大きな石が置かれている。水の中に隠れているそれは、一見しただけではどこにあるのか分かりにくい、高い建物の上から叩きつけられれば命はない。

発見されるか、命を落とすか、二つに一つの選択しかないと切々をギルダスは説明した。

確かにこれだけの嚴重な建物で、窓や扉を壊すことなく脱出するのは難しい。となると、やはり可能性は一つである。

「この監獄の鍵の管理はどうなっていますか？」

「鍵ですか？」

「そうです」

「……鍵を開けて出て行ったと？」

「可能性の一つとして、ということですよ。どこも壊された形跡がないのですから、その可能性も否定はできない」

フィオンの言葉に、ギルダスはしばし黙り込んだ。

小さく息を吐いた後、重い口を開ける。

「牢獄の鍵は、金庫の中に束になって保管されています。特殊な金庫なので、開ける場合は、二つの鍵を同時に回す必要があるのですが、鍵穴が離れていますので二人同時に開けなければ金庫を開けることはできません。一人で鍵を持ち去ることは不可能です」

誰か一人が犯人を逃がそうとして、その牢の鍵は簡単に手に入れられるものではない。

「その金庫は見える？」

「……どうしてもとおっしゃるのでしたら、ご覧にいれますが」

「見よう。ところで、鍵はそれだけなの？」

「いえ、責任者のお一人でありませすクライエ侯爵さまのところに予備の鍵がございます。しかし、あの事件の日に侯爵さまはこちらに出仕しておりませんでしたし、次の日予備の鍵を確認したところ、すべてが間違いなくそろっていました。盗まれた形跡ありません」

ギルダスがフィオンを金庫の部屋に案内しようと立ち上がったとき、ドアがノックされ雑用係の男がはいつてきた。

フィオンがいたことに驚いて、慌てて頭を下げる。

「どうした？」

「は、はい。ギルダスさまに至急のようがあると使いのものがまいつているのですが」

「殿下がいらつしやっているとときだ。後回しにしなさい」

「で、ですが……」

どうやらこのものも押し切られてきたらしい。

「かまいませんよ」

「バード公爵」

「どうやら急いでいるようですしね。その間、彼に話相手にでもなつてもらいましょう」

用件を伝えに來ただけなのに、いきなり名指しされた男は驚いたように顔を上げ、ギルダスとフィオンの顔を交互に見比べる。

フィオンの申し出にギルダスはどうしたらよいものかと考えるが、申し出に従い入ってきた雑用係に粗相のないようにと申し付けると部屋を出ていった。

残されたのは、まだ少年の面差しを残す頃合の男である。ふかぶかと頭を下げてその場に固まる。

王弟であるバード公爵の名は、貴族界に属していないものでもその存在はよく知っている。自分達にとって雲の上の存在である人物が、今日の前にいるのである。

「まあ、そんなに硬くならないで」

「は、はい!!」

声が裏返る。

硬くならないでといわれても、声をかけられただけで緊張がはしるのを止めることができない。

「名前は？」

「は、はい。ルッツといます」

「そう、ルッツ。君に聞きたいことがあるんだ」

「はい」

「事件のあった日、君はここにいた？」

「え？ あ、は、はい。あの日は夕方からの当番でしたので……」。

で、ですが、僕は決して犯人を逃がす手助けなんてしていません！」

慌てて否定するルッツに、フィオンは笑いかけた。

「別に君を疑っているわけではないよ。ちょっとそのときの様子を聞きたいんだ」

「は、はあ」

そういわれても、あの日実際につれてこられた犯人を自分は見ていない。様子と言われてもと、ルッツは口ごもった。

「当日でなくても、ここで最近変わったことはなかった？」

「変わったこと、ですか？」

「なんでもいいよ。難しく考えないで、どんなことでもいいから」

「そう……ですね。あの日からといえば、この前ここで同じ雑用をしていたヤツが仕事をやめたことぐらいでしょうか」

「辞めた？ どうして？」

「詳しくは分かりませんが、怪我をしたと聞いています」

「怪我？」

「どんな怪我かはオレ……私には分かりませんが、仕事を続けられなくなるような怪我だったようです。ギルダスさまが確認されたというお話でした。で、ですが、あの事件の後もそいつはちゃんと普通に仕事をしていましたし、怪我で仕事を辞めたのだから、事件には関係ないと……」

「そうだね」

慌てて仲間をかばおうとするようなルッツの反応に、フィオンは優しく声をかけた。

その表情に、ルッツはほっとしたように肩の力を抜いた。

「ところで、その怪我をした人物の名はなんと？」

「カイサルといます。無口で自分のことはほとんど話さなかったですけど、仕事は真面目にやる奴でした」

「バード公爵、大変お待たせしましたもうしわけありませんでした」

ギルダスはもどつてくるとふかぶかと頭をさげた。

そんなに長時間待たせたわけではないが、王弟殿下の訪問時にありえない失態である。

「いえ、彼と話すことができて、とても有用な時間でしたよ」

「もったいないお言葉でございます」

もう一度頭を下げると、ギルダスは雑用係に目で合図をおくる。

早くここから出るようにとのしぐさに、ルッツは短くあいさつをす

ると慌ててこの場を後にした。

「至急の用件は、大丈夫だったのですか？」

「はい、本当に申し訳ございませんでした。使いの者にはきつく言い渡しておきましたので」

「いえ、僕の訪問も急なことでしたのでお気になさらずに。ここへ来るむねも、直接ではなく間接的な申し入れとなってしまう申し訳なかったと思っています」

「とんでもございません。そのようなお気遣いいただきまして、こちらこそ恐悦でございます」

「伝言役をおわせてしまつてすまなかつたと、ランデル子爵にそうお伝えください」

「もったいないお言葉でございます。公爵にはいつもお世話になっているのに、そのように気にかけていただいたと知れば、兄も大変に喜びましょう」

につこりと微笑むと、ギルダスは再度フィオンに深く頭を下げた。

34・進言

「そうか……」

王の執務室、監獄への視察についての報告を聞き終わると、王はそうつぶやいた。

「後日、報告書の再提出がされると思います。しかし、あれでは前回とあまりかわりばえがするとは思えません」

監獄での視察時の様子を思い出しながら、フィオンはいいながら眉根を寄せた。

確かに以前提出された報告書にあるとおり、監獄の守りは嚴重だった。

つまりそれは、初めてそこに入れられた人物が抜け出すことは難しく、またまったくその知識のない人間が入り込み犯人を脱出させることも難しいことを示している。

そうになると、導き出される答えは一つ。

同じことに思い当たり、王はため息をついた。

「犯人が逃げた早さから考えて、外部からの進入というより……」

「内部にいた可能性が高いですね」

王が言いよんだ言葉をフィオンが引き継いだ。

犯人の脱獄の早さから考えて、外部のものが脱獄を働きかけたというより、監獄にいた誰かが彼女を脱獄させたと考えるべきだろう。

監獄関係者達を、一から洗いなおす必要があるようだ。まず上げ

られるのは、事件後しばらくして監獄の仕事から外れた人物である。

「あの男の件は、こちらの方で調べておきます。王家としてよりも公爵家としての方が動きやすいですから」

「フィオン、少しは休め。お前は薬を盛られた立場なのだぞ」

「兄上、僕の体調は問題ないと何度も申し上げたはずですが」

肩をすくめ、フィオンは笑った。

そんなフィオンの態度に、王はやれやれとため息をつく。

こちらが心配しても、本人が全く平気な顔をしているのだから困ったものである。

「それで別荘には、いつ行くのだ？」

報告の話は終わったと、王は椅子にもたれかかると話題を変えた。ステイルス湖畔の王家の別荘に、現在王妃が滞在中である。

「今日、一度公爵邸に戻ってから行くつもりです」

「そうか。少し、そこで静養してくるといい。マカリスター家の令嬢も伴っているようだしな」

薬が盛られた後も、王族としての仕事に、バード公爵としての仕事、はては今回の事件のことと忙しくすごしてきた。ここで少し息を抜くことも悪くない。

フィオンの休養のためにも必要だと、王妃が提案した別荘での避暑。その必要性を認めて、王としても許可をだしたのだが、コレットを連れて行くと言い出した王妃のあの嬉々とした表情を思い出せば、王妃がフィオンとコレットの中を進展させようとしているのは明らかだった。

しかし、コレットが王都に残っていれば、フィオンは別荘に避暑になど行かないといわれれば、許可を出さないわけにはいかない。

「兄上は、コレットのことを気に入りませんか？」

渋るような兄の表情に、フィオンは問いかける。

「まったく。お前とディアナは同じようなことを言ってくるな」

血筋的にはいとこにあたる二人は、外見だけでなく考え方まで似ているとあきれたように王は笑う。

「別段、マカリスター家の娘がどのというわけではない。お前が選んだ女性であれば、私は受け入れる用意はある。だが……」

コレット自身が事件に関与しているわけではないことはわかっていいる。王族と男爵家令嬢という身分のことをいつつもりもない。しかし、王として、事件と関連しているものを何もなかったように受け入れるわけにはいかない。

国の秩序を保つためにも、惚れ薬の件を簡単に受け入れることは

できないのだ。今これを容認してしまえば、薬による犯行が蔓延することにもなりかねない。犯人が捕まっていない状況では、なおさらである。

「兄上、これはすべて僕のわがままです」

「フィオン」

「なんとか押し切られてやってください」

眉根を寄せながら自分を見る王に対して、フィオンはまったく意に介し無いようににっこりと微笑み返し、立ち上がった。

「では、兄上。僕はこれで失礼します」

滑らかな動きで優雅に一礼すると、フィオンは退出を許すためにうなずいた王を残しその場を後にした。

王への謁見を済ませ部屋から出ると、フィオンは大きく息を吐いた。

兄の言いたいことはよく分かっている。コレットに何の問題もないとしても、彼女を受け入れることは、国内に波紋を投げかけることになるのは確かだ。

しかし、そんな事態などフィオンにとってはたいした問題ではない。

フィオンが誰を選んだとして、何かしらの変化が国内に現れる。それならば、その相手はコレットがいいと思う。他の誰でもない、彼女にそばにいて欲しい。

歩きながら考え事をしていたフィオンが、ふと視線を上げた。

王の執務室へと向かう廊下。そこを王家の従者に案内されてくる

人物が目にも留まる。相手もフィオンに気がついたらしく、フィオンのそばに足早に近付くとうやうやしく頭を下げた。

「これは殿下。お体の方はその後いかがですか？」

「オースティン公爵、ご心配ありがとうございます。体の方はこの通り何の問題もありません。ところで、今日は王宮へどうなされたのですか？」

「国王陛下に言上さし上げることがございましてね」

そういうと、少し含みをもったようにフィオンを見る。あえてそれに気がつかないふりをすると、フィオンはにこりと微笑んだ。

「そうですか、ご苦労さまです」

「いえ、国のことを思い、国家のために力を尽くすのは貴族として当然のことです」

「ありがとうございます。王である兄に代わって、礼をいいます」
フィオンの言葉に、オースティン公爵の顔の表情がすつと変わった。

「殿下、そろそろ遊びも終わりにされた方がいいのでは」

まっすぐにフィオンを見ている深い緑色の瞳。かすかに白いものの混じった髪の毛の奥にある眼光の中には、強い力が宿っている。他人を威圧するだけの力をもった眼差しを正面からしっかりと受け止めながら、フィオンは口調をかえることなく問い返した。

「遊び、ですか？」

「解毒薬を服用されなかったか」

「どこでそのことを？」

「情報を完全に閉ざしてしまうことは難しい。それが国内の大事であればなおのことです」

「……」

惚れ薬の噂が国内中に広まっている現在、皆がそれに関心のある今、すべての情報を完全に隠しておくことは難しいのは確かである。「殿下のお体は、殿下お一人のものではありません。殿下を大切に思っているもの、いえ、延^ひいては国家としての大事なのですから、

遊びはほどほどにされた方がいい」

「僕は遊んでいるつもりはありませんよ」

惚れ薬のせいであったとしても、今回の件、決して一時の遊びで終わらせるつもりなど毛頭ない。

「私の娘は、殿下のお気に召しませんでしたか？」

オーステイン公爵家の令嬢、アニエス・オーステイン。

このような事件が起こる前、誰もが認めていたフィオンの婚約者候補である。

「アニエス嬢は素敵な女性ですよ。僕にはもつたいないくらいに」

「あれは、よき妻になりましょう。殿下のお立場も、公爵家の立場もよく存じています」

アニエスならば、確かに公爵家令嬢として上流貴族の立場もよく理解している。

王弟妃として、公爵夫人として社交界でも申し分のない働きができることだろうが。

「人にはそれぞれ、定められた立場というものがあります。王弟殿下として、この国を担われる方としてのお立場をお考えください」

その言葉に、ふつとフィオンは口元を緩めた。

この国の行く末など、考えなかったときがあったのだろうか。

「僕は僕なりに、この国のことを思っているつもりです」

自分の立場と、国家の安寧を。

「これ以上あなたをお引止めして、兄上をお待たせするわけには行きません。それでは、僕はここで失礼します」

フィオンの言葉に、オーステイン公爵は静かに頭をたれた。

フィオンが背を向けて歩き出すと、顔をあげてその後姿をじっと見つめる。

その場を去っていくフィオンの背中を見つめながら、オーステイン公爵はつぶやいた。

「ゆがめられた事実は、正さなければならぬ」

バード公爵邸に戻ったフィオンは、着ていた上着を脱いでロイドに渡すと、ソファに腰をおろして大きく息を吐いた。

「少し休まれますか？」

上着を受け取ったロイドは、ソファにもたれかかり目を閉じているフィオンに尋ねた。

普段疲れなど周りに感じさせることなどないフィオンであるが、ここしばらく忙しい日が続いている。疲労が残っているであろうことは容易に想像がつく。

「いや、着替えたらすぐに出かけるよ。仕度をしてくれ」

とりあえず、現在まで王都ですべき仕事は終わった。

これから数日は、義姉である王妃の提案でステイル湖畔の別荘ですごすことになっている。そこにはすでにコレットも行っている。ここでじっとしているくらいなら、少しでも彼女と一緒にいたい。

フィオンの返事に、ロイドは頭を下げると着替えを用意するために一度部屋を後にする。

ロイドが着替えを持って戻ると、フィオンは着替えるためにソファから立ち上がった。そのとたん、ぐらりと傾いだ主人の姿に、ロイドは支えるために慌てて近付く。

ロイドが手をかす前に、フィオンはソファの背もたれをつかみ体を支えた。

「フィオンさま、本当に大丈夫ですか？ やはり少し休まれた方が」

「大丈夫だよ。それより監獄の男の件だけねど」

着替えるためにタイをゆるめ、ロイドから着替えを受け取りながらフィオンは口を開いた。

大丈夫だというものを、これ以上強行に止めることもできず、ロイドはフィオンが脱いだものを受け取る。

「はい、カイサルという男について、すでに調べるよう手配をして

あります」

「それともう一つ。監獄の周辺の地理を確認しておいてくれ」

「周辺ですか？」

建物の内部とその周辺は視察時に確認している。

「もつと範囲を広げて。通常の地図に載っていない場所などはないかを確認しておいて欲しい」

「かしこまりました」

後ろから上着を着ることを手伝うと、ロイドはしっかりとうなずいた。

ほとんど着替えも終わったころ、入り口の扉がノックされ、執事のクレマンが入室してきた。

「旦那さま、ご注文の品が届いております」

そういうと、トレイにのった小さな箱をテーブルの上に置く。

「ああ、ありがとう」

最後、手袋をはめるとフィオンはクレマンが持ってきた箱を手にとった。

その箱を開けて出てきたのは、手のひらにおさまるほどの大きさの真っ黒な粉が入った瓶である。

着替えたものをたたんでいたロイドは、フィオンが手にしたものを見て首をかしげた。

「それは何ですか？」

何か今回の事件に関わるようなものなのだろうかというロイドの問いに、フィオンは少し口元をゆるめながら答えた。

「うん？ まあ、一応対策はしておかないとね」

「はあ」

フィオンのいいたい意味が分からず、ロイドは首をかしげた。

どうやら犯人の手がかりとなるようなものではないようだが……。

わけが分からないといったロイドをみてクスリと笑うと、フィオンは小瓶を上着の内ポケットへとしまい込んだ。

王家の別荘、滞在に際してあてられた客室の中で、コレットは一人ソファにじっと座っていた。先ほどの外出の際、ランデル子爵家の令嬢に言われた言葉がやけに耳にのこっている。

現状が薬のせいであることなんて、最初からわかっていた。わかっているけれど……。

コレットはソファに置かれているクッションにもたれかかると、ため息をつく。

世間の目は、コレットに惚れ薬のせいであることを忘れるなど言っている。それは、コレットも十分わかっている。しかし、当事者であるフィオンにその義姉である王妃、二人は薬のことを気にするなど言ってくる。

いったいどうすればいいのだろう。

惚れ薬のことを忘れたわけではない。それでも、フィオンを好きだと思ってしまったコレットにとって、フィオンと王妃の言葉は気持ち大きき揺さぶってくる。

フィオンを好きになっても、彼の言葉を素直に受け止めてもいいのではないかと。

この別荘への招待も、王妃の直々の誘いである。

断ることなんて男爵家としてはとてもできるものではない。しかし、それで本当によかったのだろうか。

いつか、彼を諦めなければならぬ日があるのなら、そう思うとどうしても気持ちを一歩踏み出すことができなかった。

客室用の寝室にいたコレットの耳に、不意に話し声が聞こえた。

寝室の扉の向こう側は小さな応接室につながっている。そこには王家に仕えているメイドが、コレットが滞在している間彼女の世話をするために控えていた。

どうやら彼女が、誰かと話しているらしい。

誰か来客が来たのだろうかと体を起こす。

扉の向こうが静かになったかと思うと、ほどなくしてその扉を控えめに叩く音が響いた。隣に控えていたメイドが寝室へと姿を現す。

「失礼いたします」

お仕着せを着た王家のメイドはコレットに向き合つと深く頭をさげた。

「お嬢さま、お休みのところ申し訳ございません。体調に問題がなければ、お嬢さまにぜひお会いしたいとのことなのですが……」

コレットの話は、王妃から直接申し渡されているメイドである。彼女にとっては、誰が来ようとコレットの体調が第一なのだ。

「具合は、大丈夫ですけどね。どなたがいらつしゃったの？」

「バード公爵さまが、扉の向こうまで」

メイドの口にした人物に、コレットは大きく目を見開いた。

扉を開いてコレットが応接室に入ると、はじかれたようにフィオンが彼女の方を振り返った。

ドキンとコレットの心臓が跳ねる。

その鼓動を隠すようにコレットは視線を少しそらすと、小さく腰を落として頭を下げた。

気分が優れなかったからといっても、彼が今日来ることはわかっていたことである。到着したのに気がつきませず、顔も見せなかったことを謝るためにコレットは口を開いた。

「フィオンさま。到着されましたのに、お迎えもせず……」

「コレット！」

言いかけた言葉をさえぎるように名前をよばれると、近づいて手をとられる。

驚いて顔をあげれば、間近でエメラルドの瞳と目が合った。

その真剣な眼差しに、コレットはたじろぐ。

フィオンに対していったいどういう態度で接すればいいのか、まだその答えは出ていない。しかし、体が正直に反応してしまうのを止めることはできなかった。まっすぐな瞳に、手を包むぬくもりに、コレットの胸は苦しいほどに早鐘をうつてくる。

「具合は？」

「え？」

ぱちぱちとコレットは瞬きをする。

突然のことで、何を言われているのかわからなかった。

「今日散歩をしているときに具合が悪くなったと聞いたんだ。もっとよく顔をみせて」

頬に手をあてられて、顔を少し上に向けられる。

顔色を確かめるように、フィオンはそっとコレットの頬をなでた。

「あ、あの。フィオンさま」

「ん？」

「少し休みましたし、もう大丈夫ですので……」

「本当に？」

「はい」

頬に手をそえられたまま、コレットは頷いた。

先ほどの散歩のときは、本当に体の調子が悪かったわけではない。ランデル子爵の令嬢、ジェシカの言葉が真実であったから、返す言葉もなく体から血の気が引いた。問題は解決したわけではなくても、少し休んで気持ちが悪く落ち着いた今、体に問題はない。

真剣に自分を見つめる眼差しまなこから目をそらすこともできず、コレットはフィオンを見つめ返す。エメラルドの瞳にとらわれて、そこから動くことすらできない。

じつとコレットを見つめた後、フィオンはふつと表情を緩めた。

「よかった。君に何かあったのかと思っただら、いてもたってもいられなかった。ごめんね」

そういうと、フィオンはコレットの頬に触れていた手をそつとはなした。そのまま優しく髪をなでる。

その優しさに、コレットの胸がツキンと痛む。

ふいに、コレットの耳にあの言葉が聞こえたような気がした。

『本当に選ばれたなんて、そんな勘違いをされているのかしら』

思い出しピクリと、体が揺れた。

「コレット？」

「あ……」

「どうした？ やっぱり具合がまだよくない？」

少し身をかがめて視線を同じくすると、フィオンは心配そうにコレットの顔をのぞきこんだ。

慌てて、コレットは首を横に振る。

「い、いえ。大丈夫です。本当に」

大切なものをあつかうように、優しく優しく自分を見つめるフィオンの瞳に耐え切れず、コレットは少し目をふせた。

もっと彼を見つめていたい。

でも、それは自分に許されることなのだろうか。

「ご心配をおかけして、申し訳ありませんでした」

声が震えないように注意しながら、コレットは何とか言葉をしぼりだした。

「散策の際、なにかありましたか？」

コレットより先に、王妃のいる応接間に戻ってきたフィオンは、

義姉である王妃にそうきりでした。

コレットの体調は心配していたより悪くはなかった。

しかし、自分をみていたコレットの瞳が不安そうに揺れていたことに気がつけば、体調不良は体だけの問題ではなかったと考えられる。

少し考えるふうにして、王妃が答えた。

「彼女の具合が悪くなる前に、ランデル家のお嬢さんにお会いしましたわ」

「ジェシカ・ランデル嬢ですか」

フィオンも何度も会っている人物である。

王妃は横目でフィオンを見た後、涼しい顔をして持っていたお茶を口に運んだ。

「フィオン、女性問題は解決しておいた方がよろしいですよ」

「問いただされるような問題に、身に覚えはありませんが？」

「あなたに覚えがあるかなんて関係ありませんわ。ほんの少しの期待でも、しがみつきたくなる女性はいるということです」

フィオンに、その人を選ぶ気持ちがまったくなくなかったとしても…

…

王妃の言葉に、フィオンはため息をついた。

そういう意味での身に覚えならば、今までに数えきれないほどもある。

フィオンが一度言葉をかけただけで、ダンスをしただけで、はては目が合っただけで、もしかして自分が選ばれるのではないかと期待をした眼差しで見つめられることは一度や二度ではなかった。

さらには、少女達の恋心以上にその親達の期待すら膨らんでいく。「はつきりと思いを示しているつもりなんですけれどね」

誰を選んでいるのか、皆にわかるようにしているのだが、見たくないものは見えないという力が働いているものには、現実が見えていないようである。

メイドに案内され、コレットが王妃とフィオンのいる応接間へと入ってきた。ドレスをつまんで腰を落としながら、頭を下げる。

「先ほどは、途中退席をすることとなって、申し訳ありませんでした」

「体調の方はもうよろしいの？」

「はい」

王妃と会話をしているコレットに、フィオンが静かに近付いた。

隣に立った彼をコレットが見上げると、フィオンはにつこりと微笑み彼女の背に手をあて、ソファに座るように促す。王妃に視線を戻せば、座ることを許可するように王妃はゆっくりとうなずいた。許可を受け、コレットはフィオンに手をとられたままソファに腰をおろす。

「ケリスも心配していましたのよ。先ほど帰りましたけれど、また会えるのを楽しみにしているそうですわ」

ケリスは、バークリー侯爵夫人の名前である。

バークリー侯爵夫人に馬車に乗せてもらい、王家の別荘へと戻ってきた後、結局コレットは具合が悪いことを理由に王妃に退席を許された。そのため、侯爵夫人とはあまり話をする事ができなかった。

「すいませんでした。ほとんどお話もできず、お見送りすら……」

「そんなことは気になさらなくてもいいのよ。あなたの体調が回復したのなら、彼女も喜びますわ。それよりも、ごめんなさいね。不肖の義弟はあなたにご迷惑をかけなかったかしら。止める間もなくあなたのお部屋へと行ってしまったものですから」

通常であれば、体調がよくなったのかどうかを召使などに確認させて、それから別室で会うのが一般的である。寝室と隣接している客室用の小さな応接室に直接行くことは、同性以外では恋人や家族のみが許されることだ。

訪ねられた本人が不快に思わない関係であれば問題ないが、現在の状況は微妙なところである。

「あの、えっと……」

王妃の問いに、コレットは口ごもった。

未婚の女性のたしなみとしては、急に部屋へと訪ねられたことを受け入れるべきではない。しかし、急なことで驚き、戸惑いはしたものの、コレットはそれが嫌ではなかった。

どうしていいのかわからない問題はたくさんあるとしても、ただ純粋にフィオンに会えて嬉しかった。心配して来てくれたことも……。

そう思ってしまう自分に気がつけば、耳まで赤く染まっていく。

そんな様子を見て、王妃はいたずらっぽいなような笑いを含み、コレットとその隣に座っているフィオンをみた。笑いがこぼれるのを押し殺すかのように、口元に手をあてる。

「あの時の様子を、あなたにも見せてあげたかったですわ」

「あの時、ですか？」

「そう、ここに到着してあなたの具合が悪いと聞いたときのフィオンの様子」

くすくすと笑いながら、王妃は言葉を続けた。

「医師の診察も受けて、少し休めば問題ないというお話でしたのに、それすら聞かずに行ってしまうましたのよ」

王妃の言葉に、コレットは隣にいるフィオンを見た。

話の当事者であるフィオンは、王妃の含みのある視線を受けながら肩をすくめる。

「なんとも言うってください」

言われたところで、まわりの言葉に耳をかさずにコレットのもとへと行ったことは事実であり、それを隠すつもりなどまったくない。コレットの視線に気がつき、フィオンがそちらへと振り向いた。

「嫌だった？」

少し不安そうに尋ねる。

まわりにはなんと思われてもかまわないが、コレットに不快な思
いはさせたくない。

「い、いえ。そんなことはありません」

慌ててそう答えてしまって、コレットははたと動きを止めた。

これでは、自分がフィオンを好きだと公言してしまっていること
にならないだろうか。

「そう。よかった」

微笑んでそれ以上追求しなかったフィオンに、コレットはほっと
息を吐く。

「部屋は用意してありますわ。こちらへ滞在するのでしょうか？」

「いえ、今日は公爵家の別荘へ戻ります」

王妃の言葉に対するフィオンの返事に、コレットは驚いて顔をあ
げた。

なんだかんだと悩んでいても、そばにいたいという気持ちは正直
である。

「お戻りになるのですか？」

間近で自分を見つめながらそう尋ねるコレットを、フィオンは愛
しそうに見つめた。

「耐えようもないくらいの誘惑を感じるね」

「えっ？」

「君に引き止められたら、このままここで一夜を過ごしたい気持ち
にかられるけれど」

そつとコレットの髪に唇を寄せる。

「それは、次の機会にね」

目の前でいちゃつかれて、王妃はやれやれと肩をすくめた。

もはや自分は目に入っていないらしい。

「とりあえず、仕事とはいえレディを待たせたのですから、晚餐に
は出席しなさい。よろしいわね、フィオン」

「はい。もちろんです」

「では、私は一度席をはずしますわ。二人にはお邪魔なようですし。コレット、また晚餐のときにお会いしましょう」

「は、はい。王妃さま」

王妃が退出のために立ち上がったので、コレットも慌てて立ち上がり王妃を見送った。フィオンもゆっくりと立ち上がると、すぐに戻ると一言残し王妃に続いて部屋を出た。部屋から退出した王妃に声をかける。

「あら、せっかく二人きりにしてあげましたのに」

気を利かせて部屋からでたのにと、自分を追ってきたフィオンを王妃は見た。

「すぐにもどります」

「どうかなさいました？」

「コレットのことです。彼女をよろしくお願いします」

王都を離れ、王妃の客としてここに滞在している以上、コレットに接触できるものの数は限られる。しかし、コレットにいい気持ちを持っていない人物がいなくなったわけではない。

「そんなに心配するなら、別荘に戻るなどといわずにここに残ればよろしいのに」

「そういつわけにもいきません。今はまだ」

もし王家の別荘に来客がほとんどいない状態で自分が宿泊したとなれば、事実がどうであろうとコレットと自分との間に何かしらがあったと思われてもおかしくはない。

そうすれば、結婚前の女性として、まわりのコレットへの評価がさがる可能性がある。彼女を手に入れるためには一つの手段であることは確かだが、コレットの評判を落とすようなことはしたくなかった。

そんな一時の気持ちで、コレットを欲しいと思っているわけではない。

「わかってますわ。将来私の義妹いもじつてになるのですもの。それでよろしいのよね？」

王妃の問いに、フィオンはにっこりと微笑んだ。
「もちろんです」

部屋に戻つてくると、フィオンはコレットをベランダの方へと誘った。

日が傾き始めているが、夏を迎えたこの季節はまだまだ外は明るさをたもっている。遠くに見える湖面が、暗い影を落とし始めた木々に囲まれながら、空に残っている光をうけてきらきらと波を光らせていた。

フィオンに誘われるままベランダへと出て手すりに手を置くと、コレットはおずおずと尋ねる。

「本当に、戻られるのですか？」

バード公爵家の別荘は、同じスタイル湖畔にある。

もちろん王都の屋敷に比べれば、すぐと言っていいほどの近い距離である。しかし、晚餐が終わってから戻るとなれば、木々も茂るこの場所ではあたりは早くに闇に包まれる。

治安が悪いわけではないが、馬車を走らせるための視界は悪い。

王都からここまでの移動に、さらにその後の移動が重なれば、どうしても疲れが蓄積するのではないだろうか。湖を見ている横顔に、少しだけ疲れの色が見えるような気がするの、コレットの気のせいではないと思うのだが……。

「僕も君のそばにいたい。コレット、君も少しはそう思ってくれていると考えてもいいのかな？」

そつとコレットの手をとり、唇をよせた。

「お疲れなのに、移動されるのは大変なのではないですか？」

赤くなりながら、コレットはそう答えた。

そばにいたい気持ちはあるが、それを素直に言葉にはできない。

コレットの答えに、フィオンは驚いたように眼を開いて彼女を見

つめた。

「疲れているように見える？」

「あの……少しだけ」

「不思議だね。君にはどうしてわかるんだろう」

「え？」

つぶやくようなフィオンの言葉。聞き返すように彼を見れば、フィオンはコレットから手をはなすとのびをするように両手を伸ばした。腕をおろすと、コレットにっこりと微笑む。

「体は大丈夫。こつ見えて、結構丈夫にできてるんだよ」

そのまま、フィオンは内緒話をするようにコレットに顔を近づけた。

「大丈夫だからこそ、ここに残るのに問題があるんだ」

真面目な顔つきになったフィオンに、コレットも何があるのかと真剣な表情でそれを受け入れる。

大きな声では言えないことがあるのかもしれない。

「僕がここに泊まると、君の部屋へとしのんで行ってしまうことをとめられそうにない」

真剣な表情で言われたそれに、コレットはかたまった。

「訪ねて行ったら、ドアを開けてくれる？」

先ほど、彼女の部屋を訪れたときのように。

いたずらっぽく笑いながら、フィオンは軽く片目をつぶる。そのしぐさに、言われたことの意味に、コレットの顔が一気に赤くなっ

た。

コレットが顔をそらす前に、フィオンはひよいと体を戻した。

いたずらが成功したかのように、楽しそうに笑う。そんなフィオンを、コレットは上目づかいに見た。

「からかいました？」

「いや、本当のことだよ」

赤くなった頬を隠すように、コレットが顔にあてた手にそつとフィオンは自分の手を重ねた。ゆっくりとその手を握りしめる。

「今は、まだその時期ではないけれど、いつかきつとね」
笑うのをやめて、真剣に自分を見つめるフィオン。
彼の手のぬくもりに包まれながら、コレットは静かに目をふせた。

部屋を照らしているランプの明かりが、人影にゆれた。

部屋へと入ってきた人物を一瞥すると、椅子に座っていた男は眉間にしわを寄せたまま机の上の書類へと視線を戻した。

「仕事の終了が遅れているようだ？」

「それが、あの女のそばにはいつもバード公爵がいて近付くことができません」

バード公爵が王妃、コレットのまわりにはほとんどの場合そのどちらかが一緒にいる。コレットが一人になるのは、彼女にあてがわれた客室に戻ったときだけだ。それでも周辺はかなり厳重に警戒されていて近付くことさえできない。

もちろん、別荘には王妃がいるのだから、簡単な警備であるはずはないのだが、コレットのまわりも男爵令嬢には思えないぐらいの警戒のしようである。

「別荘内の警備も急に厳しくなり、入り込むことすら困難になって……」

返された言葉に、男は持っていたペンをおいて顔をあげた。

「カイサル」

「はい」

「聞きたいのは、言い訳ではないよ」

「……はい」

カイサルは、言葉少なに頭を下げる。

それをみて、男は深くため息をついた。

確かに、思っていた以上にステイル湖畔にある王家の別荘では警備が厳しくなっている。

現在、別荘内に入る人物は、例えばいつも備品を納める業者だったとしても馬車の中を細かく確認され、立ち入りがかかなり制限されているようだ。この男だけで厳重な警備を潜り抜けるのは難しいかも

しない。

「もうすぐ、貴族が多く出仕しているスティルス湖畔のホテルで夜会が行われる。王妃さまは毎年主賓としておこしになる。そのときあの女も連れてくることだろう」

王弟フィオン・アルファードの想い人、コレット・マカリストアは、現在王妃のお気に入りでもある。外出する際には必ず連れて行くはずだ。

「そのホテルの出資者やその招待客が集まるパーティーだ。多少見慣れぬ人物が混じっていても誰も気付くまい」

男は机の引き出しから短銃を取り出すと、机の上に置いた。

「これが、最後のチャンスだと思え」

ランプのあかりに照らされた男は、眼光鋭くカイサルを見た。

ランプのあかりが陰となり、目元が暗くなっていた男の顔。黒い瞳の光だけがやけにはつきりと見えて、カイサルはごくりと喉を鳴らす。

机の上に置かれた銃に手を伸ばし、しっかりと握り締めると、カイサルは頭を下げた。

少しきつめの酒の入ったグラスを荒々しくテーブルに置くと、カイサルはちつと心の中で舌打ちをした。

スティルス湖から少しはなれた小さなレストラン。夜は酒も出すようなこの場所は、労働者階級の集まる場所である。一人飲んでいたらカイサルは、今ほどテーブルに置いたグラスを強く握りしめた。急かされているのはわかっている。

しかし、目的の人物に近付けないのだから、手の出しようもない。「カイサル？」

名を呼ばれ、カイサルは驚いて顔をあげた。

このあたりに知り合いはいないはずだと、いぶかしげに見上げた

先、そこにいたのは以前働いていた監獄での同僚だった人物だった。
「ルッツ？」

「久しぶり。怪我はもういいのか？」

にこやかに話しかけてくると、ルッツはカイサルの向かいに腰をおろした。

「ああ。お前、何でここに？」

監獄で働いているものが、どうしてここにいるのか。

ステイルス湖畔は、貴族たちの夏の保養に使われる場所。私有地も多いため、労働者が遊びにくるには少し敷居が高すぎる。

「ん？ 仕事だよ。ほら、夏はお偉いさんたちは涼みにこの辺にくるだろう？ 今年なんて、いろいろあつて忙しいっていうのにさ。その使い走りにされてるのさ」

自分が働いている監獄での事件。

その件で、いろいろな人物に手紙や連絡をとるのに使われているのだと、ルッツは肩をすくめながら笑った。

「お前がやめてから、まだ人が入ってこないんだ。具合が大丈夫なら、もどってきてもらえたら助かる」

「いや、俺も今は別の仕事をしてるから」

「そうか」

ルッツはそういうと、レストランのウェイターに声をかけた。軽い食事とビールをオーダーすると、カイサルに向き直った。少しまわりの様子を気にするようにちらりと見る。

「カイサル」

「なんだ？」

「お前、なんかやばいこととかしてないよな？」

「は？」

「い、いや。なんでもない。変なこといって悪いな」

慌てて言葉を取り消すと、ルッツはウェイターが運んできたビールを口に運んだ。自分をじっと見ているカイサルの視線に気がつく
と、グラスを口からはなしテーブルへと置く。

「この前、お前の家に行つたんだ」

「俺の？」

ルッツとは、確かに仕事場が一緒だった。住所ならば、仕事場の連絡用の記載を見ればわかるかもしれないが、それぞれの家を訪ねるほどの用事があつた覚えはない。

「お前、今どこに住んでるんだ？」

「そんなこと、お前に関係ないだろう」

カイサルは、いらだちながら自分のグラスの中身を一気にあおつた。

自分がこれからやるうとして見透かされているようで、なんだか気分が悪い。

「……この間、バード公爵が視察にいらつしゃつたんだ」

言われた名前に、カイサルの眉がぴくりと動いた。

「お前のことを、なんだか気にしてるふうだった。別にお前がそこを辞めたのは怪我をしたせいだし、あの事件とは何にも関係ないとは言っておいたけど……」

じつとルッツはカイサルを見た。

真剣な眼差しで、まっすぐに自分を見るルッツに、カイサルは耐えられなくなつて視線をそらす。

「俺が何をしてようと、関係ないだろう」

「それはそうだけどさ。何か気分悪いだろ？ もと同僚が疑われてたらさ」

「おせっかいが」

「ちえ。せっかく心配してやったのに。まあ、いいや。お前が事件に関係してないなら別にいいんだ。悪かった、変なこと言つて」

両手を顔の前で合わせて謝ると、ルッツはばつが悪そうに笑つた。心配したとはいえ、疑つたような発言をしてしまったと頭をさげる。

そんなルッツを横目で見ると、カイサルは空になったグラスを手にウエイターを呼び止めた。追加の酒を受け取るとそれを口に運び

ながら、ウェイターが持ってきた食事を食べ始めたルッツをじつと見る。

自分が今、ここでルッツに会ったのも、意味があるのかもしれない。

「……なあ、ルッツ」

「んん？」

口いっぱいにご飯をほうり込んだルッツは、大きく口を動かしながら顔をあげた。

「ここで俺に会ったことは、誰にも言わないでくれ。その、仕事の都合上、いろいろあるんだ」

「別にいいけど」

特にこのことを話すような相手もない。

「それともう一つ。……お前に頼みたいことがある」

カイサルの言葉に、ルッツは目をパチパチさせながらこくりと口のなかのものを飲み込んだ。

バード公爵の別荘で、夜会用の白い手袋をはめながら、フィオンは口を開いた。

「それで？」

「はい。監獄で働いていたカイサルという男のことですが、以前住んでいた場所はすでに引き払った後でした。どうやら、監獄での仕事を辞めた後すぐにどこかへ移って行ったようです」

今ほど部屋に入ってきたロイドは、フィオンに促され報告を始めた。

ステイルス湖畔の別荘に滞在していたフィオンに遅れること数日、王都に残っていたロイドはつい先ほどこちらに到着したばかりである。

「もともと近所との交流は少なく、まわりのものもどこに行つたのかまではわからないようです。ただ、いくつか気になることがあります」

「気になること？」

「はい。まず、近所のものはカイサルが怪我をしたということとはまったく知りませんでした。いついなくなつたのかもあいまいなくらいでしたので、その姿を見なかつただけなのかもしれません」

しかし、働けなくなるほどの怪我だつたのなら、誰かの目に留まつてもよさそうなものだが、だれも怪我をしたカイサルを見ていない。

「それと、私がカイサルの住んでいた場所を確認する前、同じように彼を訪ねてきたものがいたとか。すでにカイサルはいなくなつていた後だつたので、会えなかつたようでしたが」

カイサルが住んでいた頃はほとんど訪問者がいなかったのですが、近所の住民も彼がいなくなつたとたんに現れた訪問者に驚き、よく覚えていた。

いなくなつたとたんに搜索されるということは、何かやらかしたのかと興味半分がほとんどだつたが。

「それは茶色の髪の若い男で、カイサルのことを以前から知っていた人物のようだつたとの話です」

「ロイド」

「はい」

名を呼ばれ、ロイドは言葉をとめた。

「茶色の髪の若い男。この国にどれだけいると思う？」

「数えたことはありませんが、かなりの人数になると思います」

「だろうね」

フィオンは、小さくため息をつくとき、近くのイスに腰をおろし、机の上で手を組む。

「その男がどんな用事だつたのか、か。その男について他にわかることは？」

「いえ、カイサルがいないことがわかると、その男は黙って帰っていったそうです。話をした人がカイサルを見かけたら連絡するといったそうですが、断ったとか」

知り合いが尋ねてきた、ただそれだけのことなのか。それとも…

連絡を断ったのも、たいした用事ではないという可能性もある。

しかし、それは自分の存在をまわりに知らせたくないともとれる。

現在はほんの少しの情報も必要なときである。些細なことでもその糸口がつかめるのならば無駄ではない。

「その男がカイサルを訪ねたのはいつだった？」

「私がそこを訪ねた二日前だったとのことなので、今月の二十三日です」

何か考えるように、フィオンは手の甲を口元にあてる。

「今月の二十二日だったね。僕が監獄を視察に行ったのは」

「そうですね」

「若い男で、茶色の髪。カイサルを以前から知っている。それに当てはまる人物が一人、心当たりがある」

その男は、カイサルの元同僚で、フィオンにその名を教えた人物でもある。

「この前会ったときは、何も知らないようだったんだけどね」

視察の際の彼の様子を思い出す。

これだけの情報で、カイサルを訪ねた男と彼を結びつけるのは少し強引かもしれない。しかし、フィオンと話した次の日であることが引かかる。可能性はゼロではない。

フィオンの言葉に、ロイドははっとしたように顔をあげた。

ロイドもその人物には、視察の際に会っている。

「少し彼の周辺をさぐってみてくれ。気がつかれないようにね。それともう一人。監獄の責任者、ギルダス・ドーズについて」

「ギルダスさまですか？」

「ギルダスの方は、僕も探りをいれてみるけどね」

「はい」

一度深く頭を下げると、ロイドは言葉を続けた。

「それともう一つ。フィオンさまがおっしゃっていましたが、監獄の周辺のことですが」

「ああ、どうだった？」

「監獄の周辺、とはいっても少し離れた場所なのですが、現在は使われていない修道院の建物がありました。人気はないのに、地下室周辺に誰かが使用したような痕跡が残っていました」

生い茂った草の様子やそこにつけられた足跡。ある程度わからないようにと隠されてはいたが、全くつかっていなかったにしては綺麗すぎた。

痕跡を残さないようにしたことが、かえって誰かがここを使ったことを示している。

「詳しく調べてみると、その地下室に隠しの通路が見つかりまして」「そこが監獄につながっていた？」

フィオンが引き継いだ言葉に、ロイドは驚いたように顔を上げた。ロイドの表情にフィオンは肩をすくめる。

「だいたい予想はつくよ。王都には王家にまつわる隠し通路がいくつも存在しているからね」

王都周辺には、王家に伝わる隠し通路が存在する。

それは、王家が続いていくなか陰で大きな役割をになってきた。

代々口伝により王家に伝わってきたその通路の存在と使用法は、基本親である王からその後継者へと引き継がれていく知識の一つである。しかし、隠し通路のすべてを相手に教えるということは、王の周辺を丸裸にすることを意味するため、必ずしもすべて伝えられているわけではない。

フィオンはといえば、父である王から、そしてその存在のいくつかを知っていた祖父、前バード公爵ヘンリーからその通路の存在を知らされた。

王家のフィオンの部屋から外部へとつながる道、そして、もし何らかの状況で監獄へと行くことになった場合の抜け道などを。

フィオンが聞いた監獄の通路は、今回の事件と関係した場所ではなかった。しかし、今回の場所の建物の構造や犯人が抜け出した状況から、通路の存在が浮かび上がった。

あの監獄も古くからある建物である。その強固なつくりゆえに監獄となり、長きにわたり使われてきたあの建物になれば、隠し通路があるのもおかしくはない。

今回の監獄の隠し通路。誰が何の目的で作ったものかはわからなくても、それを偶然にも見つけ、使用したものがいたということだろう。

引き続き話を進めようとしたロイドを、フィオンは軽く手を上げて制した。

それと同時に部屋への入り口がロックされる。

フィオンが入室の許可を口にする、扉が開かれバード公爵家の従者の一人であるフランツが入室してきた。

フランツはフィオンの近くにロイドがいるのを見ると、驚いたような表情を浮かべた。ロイドは今回、フィオンの用事で王都に残っていたはずである。

「フランツ」

名を呼ばれ、フランツははっとして姿勢を正した。

「は、はい、失礼します。馬車の用意が整いましたのでお知らせに」
「わかった」

フィオンは立ち上がると、視線をロイドに戻す。

「報告は以上？」

「は、はい」

おおむねの報告は終わったと、ロイドは慌てて頷いた。

話は終了したと、フィオンはかけてあった上着に手を伸ばす。それを見て、慌ててロイドが上着をとり、主人の着替えに手をかした。

「どちらかへお出かけなのですか？」

フィオンが着ているのは、パーティー用の外出着である。

「ん？ 今日クリプトンホテルで夜会が開かれるんだ。姉上がコレットも連れて行くというものだからね」

にっこりと笑いながらロイドを見る。

「コレットをエスコートするのは、僕の役目だろう？」

他の人物に任せるわけにはいかない、というか、任せるつもりもない。

フィオンの言葉にロイドはあいまいに頷いた。否定も肯定も、今の彼には難しい。

そんなロイドをしり目に、着替えを終えたフィオンはにこやかに部屋を後にした。

馬車を降りるために、フィオンが差し出した手にコレットはそつと自分の手を重ねた。透けるほどに薄い絹に、レースで花の模様があしらわれた手袋をした彼女の手をとると、フィオンはそのままぎゅっと握り締める。

ステイルス湖畔のクリプトンホテル。

夕暮れ時、あたりを包むオレンジ色の光が、ホテルの白い外観を美しく染め上げている。

馬車から降りたコレットは、そのホテルの建物を見上げるように顔を上げた。

ふいっとその間にフィオンが顔をのぞかせる。じっと見つめられて、コレットはぱちぱちとまばたきをした。

「フィオンさま？」

「ここ」

フィオンはそつとコレットの眉間のあたりに指先で触れる。

「難しい顔になってる」

言われて、コレットは慌てて手でその場所を押さえた。

夜会は貴族にとって社交の場である。そこで難しい顔をしていることは好ましくない。

眉間を一生懸命に押さえているコレットに、フィオンはくすりと笑う。

「そんなに緊張する必要なんてないよ。いつものままで大丈夫だから」

「は、はい」

「昨日みたいに、楽しそうにしてればいい」

昨日は、フィオンとともにステイルス湖をボートに乗って楽しんだ。

上着を脱いで腕まくりをしたフィオンがオールを握れば、ボート

の上では二人きりで、これからのことも、まわりからどう見られているのかも考える必要のない時間が、湖面の上でゆるやかに流れていた。

だから、コレットもいろいろと難しいこと考えることもなく、穏やかに笑うことができた。

とても楽しそうにコレットを見つめてくるフィオンに、二人乗りのボートの上で頬の熱さを隠すことは少し難しかったけれど。

「そうですね。臆することなどにもありません。私の隣で堂々としていらっしゃい」

ホテルの入り口、本日の貴賓でもある王妃は、くるりと振り向いて自信たっぷりなコレットに笑いかけた。

コレットをエスコートし、フィオンは人の波から少し離れたバルコニーへと移動した。夜風がするりと通り抜け、心地よく体の熱を冷ましていく。

少し落ち着いてコレットはあたりを見わたした。

夜空には星が綺麗に輝き始め、人々の楽しげな声とダンスの曲がホールに響いているのが、バルコニーにいても十分に聞こえてくる。

広間の中では、まだ王妃がたくさん貴族たちに囲まれて会話を続けていた。その中の数人にダンスを申し込まれたようで、王妃はゆっくりとその中の一人に手を差し伸べた。

王が参加していないパーティーならではの光景である。

「王妃さまはみなさんにとっても慕われているのですね」

そう言うと、コレットは隣にいるフィオンを見上げた。

先ほどまで王妃の隣にいたコレットは、王妃自らまわりの人たちへの紹介をうけた。王妃がコレットをそばに置き友人だと紹介すれば、内心どう思っているようにともまわりの人間はそれを受け入れるし

かない。納得などできなくても、表立ってコレットを非難することはできなくなつた。

それでも、みなが入れかわり立ちかわり王妃のまわりに集まる。王妃である彼女に敬意を表すのは当然のことなのだが、いろいろな立場の人が彼女にあいさつをするその姿は、王妃の影響力の大きさをうかがわせた。

フィオンもホールの中の王妃へと視線をむけると、小さく肩をそびやかした。

「まあ、性格もあるだろうけどね」

もともとが社交的な性格である。たくさんの人に囲まれても、それを楽しむだけの余裕が王妃にはある。

それに……。

「義姉上はこの国の要だから」

つぶやくようにフィオンが言った言葉が、コレットの耳に残つた。広間の中に視線を送っているフィオンの横顔をじっと見つめながら、コレットは以前みた王家の系図を思い出す。

現王の妻である王妃ディアナは、バード公爵フィオン・アルファードの母方のいとこである。

王である兄の妻である彼女は、現在この国にとって重要な位置をしめる。

しかしそれ以上に、フィオンと兄である王をつなげる大切な役割があるようにコレットには感じられた。

「とても素敵な方ですよね」

王妃としての役割を十分すぎるほどにはたし、この国を安定に導いている。それは王さまにとっても、フィオンにとってもどれだけの助けとなっているだろうか。

「まあ、否定はしないけれど、あまり見習いすぎないようにね」

「そうなのですか？」

「あんなに精力的に社交にいそしまれたら、僕とこうやって二人きりになる機会が減ってしまうから」

甘い言葉にコレットは頬が染まるのを止められないまま、フィオンを見上げた。それでも、その言葉がまだ社交場になれないコレットへの気づかいだと分かるから、フィオンの優しさがじんと心に見てくる。

先ほど王妃に伴っていたコレットを、フィオンがその場からそつと連れ出してくれたのも、彼が頃合を見計らって人波から引き離してくれたのはあきらかだった。

守られてばかりでは、フィオンの役に立つどころの話ではない。まっすぐにフィオンを見つめると、コレットはにっこりと微笑んだ。それを見たフィオンの目がまぶしそくに細められる。

「ごうみえても、私も貴族の娘です。社交は大切なお仕事ですよ？ フィオンさま」

「僕よりも？」

「まあ」

フィオンの言葉に、コレットは目を丸くするとくすくすと笑い出した。

さきほども年配の重鎮たちと同等に渡り歩いていたばかりのフィオンが、ちよつとすねたように訊ねてくる姿がなんだか可愛い。「そんなの、比べられません」

コレットの答えに、フィオンは楽しそうに微笑んだ。笑いながら問いかける。

「疲れてない？」

「平気です」

「本当に？」

そう言っつて顔をのぞきこんでくるフィオンに、頬を赤らめながらコレットは口ごもる。

そんなに自分は疲れていたように見えただろうかと、コレットは自分の頬をそつと押さえた。

今年社交界にデビューしたばかりのコレットである。

フィオンや王妃のように、社交界の中心となって普段から生活し

ているものとは違い、まだまだ不慣れな点多い。

王妃やフィオンのおかげで以前ほどの居心地の悪さはないものの、まわりの自分を見る目がすべて変わったわけではない。多少の疲労を感じるのは仕方がないことだ。

「……それは、ちよつとは。でも、大丈夫です！本当ですよ」

自分を奮起させるように胸の前でこぶしを握ると、コレットは笑いながら答える。

「ふふ、頼もしいね」

近くを通りかかったホテルの従業員からフィオンは飲み物を受け取ると、その一つをコレットに渡す。フィオンがコレットのグラスに自分のを軽くあわせると、カチンと澄んだ音が響いた。

フィオンがそれを口に運ぶと、コレットもそれにならうように受け取ったグラスに口をつける。

さわやかな香りと甘さが口の中に広がっていく。

自分が思っていたより緊張していたのだろうか。喉を潤せばほつと肩から力が抜けた。

「まだ不慣れなところもありますけれど、でもすぐ慣れますね」

どういふ状況であろうとも、コレットは貴族の娘である。社交の場での対応は、貴族にとつて一生ついてまわることなのだから、いつまでも甘えてばかりはいられない。

そつとコレットの持っているグラスを取り上げると、バルコニーの手すり部分、平らになっている場所にフィオンはそれをおいた。コレットの空いた手をしつかりと握り締める。

急に距離を縮められて、コレットの頬が熱くなっていく。

「あんまり無理をしないように。僕がそばにいるんだからね」

握ったコレットの手にそつと口付けをおとす。と、何か思い出したよう顔をあげて、フィオンはいたずらっぽく唇をあげて笑った。

「でも、そうだな。やっぱりちよつとだけ、コレットにはがんばってもらおうかな」

「はい」

がんばりますと答えようとしたコレットは、まっすぐに自分を見つめるフィオンの真剣な瞳に言葉をとめた。握られた手の力が強くなったことを感じる。

もうフィオンは笑ってはいなかった。

「これからずっと、ここが君の場所だから」
フィオンの手が腰に回ったのを感じる。

この場所、フィオンの隣にずっとということとは、これからの長い時間を社交界の中心の一人として生きていくことを意味している。

その言葉の意味にコレットは驚いて目を見開いた。

本気、なのだろうか。

いや、いつものフィオンの言葉に偽りはないのは感じている。

でも、本気でフィオンはコレットをずっとそばにと思ってくれているのだろうか。薬の効果だけではなく、それを望んでくれているとすれば……。

そう思えば、コレットはその場から動くことができない。そんなコレットをフィオンはゆっくりと抱きしめた。

バルコニーは明るいホールからは軽い死角になっているとはいえ、まわりからまったく見えなわけではない。頭では分かっているのに、体が動かない。

背中にまわされた手に力があるのを感じながら、コレットはフィオンのぬくもりに包まれていった。

抱きしめられるだけで、鼓動が激しく胸を打ち付ける。苦しいほどに胸が痛い。

(好き……)

まだ口にするのできないその言葉を、コレットはそっと心の中でつぶやいた。

「バード公爵」

声をかけられ、抱きしめられる形になっていたコレットは慌ててフィオンからはなれた。

残念そうにコレットから手を離すと、フィオンは声のした方へと振り返る。

「これはマカリスター男爵」

そこにはコレットの父親であるマカリスター男爵が、少し視線を泳がせながら立っていた。

急に現れた父親に、コレットは驚いたように目を瞬かせた。

父親の顔を見た後、フィオンを見上げる。父親であるマカリスター男爵が来ることなど、誰にも聞かされていない。

自分を見上げるコレットに気がつく、フィオンは優しく微笑んだ。

「大切なお嬢さんをおあずかりしているんだから、きちんとご報告はしないとね」

いくら王妃から招待されたとはいえ、現在微妙な立場にいる娘を心配しない親などいない。少しでも娘の顔を見ることができれば安心するだろうという判断のもと、王家からマカリスター男爵にこの夜会の招待状が送られた。

さきほどの場面を父親に見られたのかと思うと、コレットの顔が一気に赤く染まる。耳まで赤くなったコレットとは反対に、フィオンはマカリスター男爵の前でも涼しい顔である。まるでこれでは、さっきまでのことが当たり前におこなわれているようにとられそう、コレットは居たたまれなくなる。

再びフィオンがマカリスター男爵に視線を戻すと、男爵は深く頭を下げた。

「娘が大変お世話になり、恐悦にございます。何か粗相をしてはいないかと心配しておりましたが……」

「とんでもない、彼女は大事な客人です。こちらこそ令嬢を長くお

かりしていることに礼を言わなくてはなりません。義姉上もとても満足していらつしゃいますよ」

「もつたいないお言葉でございます」

頭をあげたマカリストー男爵とコレットの目が合った。と思うとすぐに男爵はコレットからフィオンへ視線を戻す。

「ときに公爵。申し訳ありませんが、娘を少しおかりできますでしょうか」

娘とはいえ、今日はフィオンのパートナーであり、王家の客としての立場である。

父親といえども、王弟でもあるフィオンの許可なく勝手にコレットを連れて行くわけにはいかない。

「コレットをですか」

「ええ、久しぶりでもありますし、できれば親子での会話の時間を少しだけお許しいただきたいのですが」

夜会という社交の時間に親子の会話とは微妙なところだが、現在王家に娘をあずけているマカリストー男爵としては、こんなときでもなければコレットと話もできない。

マカリストー男爵を見たまま、フィオンは自分の腕に添えられたコレットの手に、そつと自分の手を重ねた。

そのまま、ぎゅつと握る。

「お父上の希望なら、かなえないわけにはいかないよね」

ちらりとコレットと目を合わせると、フィオンは薄く笑った。

離れたくないというようにコレットの手を握りながらも、フィオンは涼やかな顔でマカリストー男爵に向き合う。

「もちろんです、男爵。親子が会話するのに、何の問題がありませんか」

名残惜しそつにコレットの手をもう一度握ると、フィオンはそつと彼女の手を離し、彼女の父親へとあずける。

フィオンの瞳に一瞬寂しそうな光がやどれば、コレットの胸がぎゅつとつかまれたように痛んだ。

「フィオンさま」

父親の手をとったコレットは、名残惜しそうにフィオンの名を呼んだ。

父親と話すのが嫌なわけではない。でも、フィオンと離れがたいのも事実である。

コレットに名を呼ばれ、フィオンはあわく微笑む。

「また後で」

「……別荘での生活はどうだ？王妃さまにバード公爵、いろいろ気を使うことも多いだろうが、つつがなくやっているか？」

夜会の広間から離れホテルの庭園に出ると、マカリストアー男爵が口を開いた。

ステイルス湖のすぐ畔に立てられているクリプトンホテルでは、庭からすぐに湖をのぞむことができる。

柵の向こうに湖が見渡せるこの場所は、会場と少し離れているため人通りも少ない。ここに来るまでに、話題の親子の姿を物珍しげに見ていたような人々の視線も受けなくてすむ。

「はい。みなさまには、とてもよくしていただいています」

「そうか」

コレットの言葉に、マカリストアー男爵はしばらく何かを考えるように黙り込む。

「すまなかつたな」

「え？」

「今回の事件に巻き込まれてしまったのは不可抗力だった。だが、騒ぎがそれ以上大きくなならない方法もあったはずだと思う」

惚れ薬で王弟であるバード公爵がコレットを好きになったとしても、それ以上関わりを持たなければ、今までどおり静かに生活ができたはずである。

しかし、貴族社会において屈指の名門であるバード公爵家の当主に直々に請われ、また王家からも直接協力を要請されれば、マカリストアー男爵家の立場ではそれを断りきれぬものではなかった。

同じ貴族でも、爵位が高位であればその発言権も大きくなる。王家に対しても、バード公爵に対しても、もつと毅然とした態度で臨むこともできただろうが、男爵の立場からそれはかなり難しい。

初めて自分に謝る父親の姿に、コレットは驚いて顔を上げた。

苦しそつに湖をじつと見つめている父親に、コレットは父の腕に添えていた手に力を込める。

「私は平気です」

コレットの言葉に、マカリスター男爵はゆっくりと視線を娘に戻した。

父親に見つめられながら、コレットは静かに微笑む。

「大変なことがないわけではないですけど、でも大丈夫です。がんばれますから」

苦しいことはある。

薬のことや、まわりの貴族との関係、フィオンの気持ち、そして自分の気持ち。

気持ちに素直に従うこともできなくて、でも、動きだしてしまつた気持ちをとめることもできなくて。

出会わなければ、こうして接することがなければ、気持ちは育たなかったかもしれない。そうすれば父親の言うとおり、苦しむことも悩むこともなく過ごせたのかもしれないけれど。

いつか今よりもっと苦しむときが来るのかもしれない。

それでも……、今ほんの少しでも彼の側にいることに幸せな気持ちを感じている自分が確かにいるのだ。それはもう否定することはできない。

「そうか」

コレットの言葉にうなずきながら、マカリスター男爵は少し寂しそつに微笑んだ。

いつまでも自分の子供としてみていた娘が、一人の女性へとしっかり変化していることに一抹の寂しさを感じながら。

「お父さまは、フィオンさまが苦手ですか？」

父親の表情がはれないことに気がつき、コレットは訊ねた。

「バード公爵か……」

大切な娘に近づいてくる男は、父親にとってあまり受け入れられない存在であることは間違いない。

しかし、それはフィオンだけでなく、誰でも同じことである。

ただ今回は、惚れ薬の件があり、その上そのことを気にしていないようなフィオンに対して、王弟でありバード公爵でもある彼への対応に戸惑っているところがあるのも事実である。

「フィオンさまは本当によくしてくださいます。いつも私の方がご迷惑をかけてしまっていて……」

父親が言葉を濁したことを勘違いしたのか、フィオンの弁護を始めた娘に男爵は小さくため息をついた。

コレットがフィオンにかけている迷惑がどれだけのことであろう。コレットと一緒にいることを自ら選択したフィオンより、最初から選択肢などほとんどなかったコレットの方が迷惑をこうむっているはずである。

どのような気持ちであれ、コレットがフィオンに対して悪からぬ気持ちを持っていることは確かなようだ。しかし、それをはつきりと聞くことは男爵にはできなかった。

「お前には、つらい選択をさせることになるのかもしれない」

「え？」

自分をじつと見つめる父親に、コレットは小さく首を傾げた。

「お父さま？」

どういう意味なのかと問おうとしたコレットの頭を、男爵は優しくなでる。

「もどろう。あまりバード公爵をお待たせするわけにはいかない」

「……はい」

はぐらかされた感が残るものの、それ以上何も言うつもりがないように足を進めたマカリスター男爵に、コレットは何もいえなかった。

バルコニーの手すりにもたれかかると、室内からの窓からもれた明かりと、あたりに置かれたランプの光に浮かび上がった庭を見渡すことができた。

父親に連れられ庭を歩いているコレットの姿を見つけると、フィオンの口元が少しゆるむ。それと同時に、心の中になんともいえない寂しさが湧き上がってきた。

コレットはマカリスター男爵家の令嬢である。父親であるマカリスター男爵はコレットの保護者であり、娘に対する決定権は彼のものだ。いくら公爵、はては王弟という立場であっても、それを覆すことはできない。

コレットとこれからもずっと一緒にいることのできる権利は、まだフィオンのものではないと思い知らされるようで、ズキリと心が痛んだ。

気持ちを落ち着けようと息をゆっくりと吐き出す。ふいに自分のいるバルコニーへの光がかけたことに気がつき、フィオンは後ろを振り返った。

そこにいた人物に、フィオンはおやつと眉を上げる。相手はフィオンが自分を見たことに気がつく、ふかぶかと頭をさげた。

「これはドーズ卿、先日は案内をありがとう。こんな場所でお会いするとは奇遇ですね」

そこに現れたギルダスに、フィオンは少し口元を上げて話しかけた。

「私の兄がここの出資者の一人なのです。今日は姪の付き添い人として来ていました」

「そうですね。まだ仕事も山積みでしょうに、付き添いまで受けられるとはお忙しいことですね」

「このホテルのことを気にかけるのもまた仕事のうちです。それに」
ギルダスはちらりと自分の後ろに視線を送った。

「今宵は王妃さまもいらっしやるパーティー。この子にとっても大

切な機会ですのぞ」

ギルダスの後ろにひかえていた少女は、フィオンと目が合うとにっこりと微笑んでドレスをつまむと優雅に一礼した。

「こんばんは、バード公爵。今宵お会いできましたとても光栄にぞんじますわ」

「こんばんは、ランデル嬢。そういえば先日散策の際にお会いしたと、義姉からきいています。こちらのホテルに滞在されていたのですね」

「ええ。お散歩をしていましたときに、偶然に王妃さまにお会いしましたの。お時間がなくて、あまりお話することができずとても残念でしたわ。でも、あんなわずかな時間でしたのに王妃さまがわたしのことを覚えていてくださったなんて、とても光栄です」

「そこで何か話されたのですか？」

「いえ？ ちょうどバークリー侯爵夫人が通りかかられましたので、みなさんですぐにそこから移動されましたので、ごあいさつぐらいしか」

「そうでしたか。それはすいませんでした。あの後、急に大切な客人が体調を崩しましてね」

「そうなのですか？」

「ええ、散策の際一緒にいたマカリストー男爵家の令嬢なのですが、ご存知ありませんでしたか？」

「ちらりとお見かけしたただけでしたので。でも今日いらっしやうているということは、体調はもどられたのですね」

「ええ。姉上の適切な対処のおかげでね」

自分をまっすぐに見るフィオンを、ジェシカはしっかりと見返した。

コレットの動揺ぶりからして、ジェシカが彼女に何かを言ったのは間違いないと思われる。しかし、ジェシカはそんなことはまったく知らないといったふうに、フィオンから目をそらすこともない。

本当に何も言っていないのか、または、何か言っていたとしてそ

れをコレットが誰かに言う可能性がないと確信しているのか。ジェシカの態度は、そのどちらとも取れた。

まあ、どんなことをしたとしても、自分の行動が正しいと思い込んでいる人間にはこういう行動が目につくことがある。実際どうであったかは本人たちしか知らないわけだが、これ以上ジェシカを詮索しても無意味だと判断し、フィオンはふつと表情を緩めた。

「そういえばドーズ卿、少しお伺いしてもよろしいですか」

ジェシカから視線をはずすと、フィオンはギルダスに話しかける。「はい。なんででしょう」

「カイサルという男をご存知ですよね」

「どこのカイサルですか？」

「この前視察にうかがった場所で働いていたという話を耳にはさんだのですが」

フィオンの言葉に、ああと思い出したようにギルダスはうなずいた。

「ああ、彼のことですか。確かに働いていた男にそういう名前のものがいましたが、それがどうかされましたか？」

「ええ、彼は現在仕事をやめたそうですが、彼の居場所に心当たりはありませんか」

「働いていたところにすんでいた場所ならば、記録があったはずですが、それ以外に。あなたならご存知ではと思ったのですが」

「さあ、詳しい資料がないと私もなんとも申し上げられません。出身なども資料を見ればわかると思いますが、後日公爵のもとにお届けしますか？」

「お願いします」

「お仕事のお話ばかりですね」

「ジェシカ」

会話に入ってきたジェシカをギルダスがたしなめるが、彼女は気にしてもいないようにフィオンへと近づいた。

「バード公爵、今宵はせつかくの夜会ですもの。難しいお話はやめて楽しみませんか？」

広間からは、音楽家たちが奏でる音楽が流れてくる。ちょうど曲が変わるところらしい。中の様子をちらりと見れば、ダンスをしている人たちがパートナーを変えたり、新たにダンスの輪に加わったりしているところだった。

「公爵、どうですか。ジェシカと一曲踊っていただけませんか？」

ギルダスの言葉に、ジェシカの表情がぱつと輝く。

「公爵、よろしければぜひ。パートナーの方もまだもどられていないようですし、その間だけでも」

コレットがフィオンのパートナーとして隣にいることは、会場の注目を集めていた。

確かに夜会ではパートナーとばかり踊る必要はないのだが……。

「誘いは嬉しいのですが、申し訳ありません。少し用事を思い出しました。それが終わった後に、機会があったのなら」

そういつてにこりと微笑みながらやんわりと断ると、フィオンはバルコニーを後にした。

くるりとあたりを見てコレットがまだ広間に戻っていないことを確認すると、フィオンは歩き出した。

別荘でフィオンに調査結果を報告し彼を見送った後、調査と護衛のために少し遅れてここに来ていたロイドは、フィオンが広間を少し抜けたところで静かに彼に近付いた。

「ギルダスから目を離すな」

ロイドが近付いたことを気配で感じながら、他の人に聞こえないぐらいの声でフィオンは命じる。

「夜会が終わった後も、彼の動向に注意するように」

「はい」

足を止めると、フィオンはさつきまでいたバルコニーの方に視線を向けた。

「ギルダスはカイサル場所を知っている。僕に資料を渡す前に必ず会いに行くはずだ」

ロイドが自分から離れたのを確認すると、フィオンは庭園へ出るために階段をおりた。

庭園の出入り口付近で話している女性たちにあいさつをし、その誘いをやんわりと断り建物の外に出るとあたりを見渡す。

マカリスター男爵と一緒にいるとはいえ、戻ってくるまでに少し時間がかかっていると感じてしまうのは、コレットと一緒にいたいと思っている自分の気のせいだろうか。しかし、以前のパーティーや夏至祭でのこともある。コレットの様子に気を配っても配りすぎるといふことはない。

あたりを見回し一人の人物の姿をとらえると、フィオンは眉根をよせた。すぐに彼に近づく。

「お話し中すいません、マカリスター男爵」

呼ばれて、マカリスター男爵とそれと一緒に話していた人物、ノーフォーク伯爵がフィオンに向かって振り返った。

「これはバード公爵、どうされました」

最初に口を開いたのは、ノーフォーク伯爵である。

「急に話しかけて会話を中断させてしまいましたか？」

「いえいえ、公爵にお声をかけていただけるとは光栄のいたりです」
「楽しげに話しかけてくるノーフォーク伯爵とは逆に、マカリスター男爵の顔色がだんだんと悪くなってきたことにフィオンは気がついていた。」

「マカリスター男爵、コレットはあなたと一緒にではなかったのですか？」

「あ、いえ、先ほどまでは一緒だったのですが、先にバード公爵、あなたのところに戻ると……、まだ広間へ戻っていないのですか？」

マカリスター男爵の答えに、フィオンの血の気がすつと引いた。ここに来る前、広間にコレットの姿は見かけなかった。広間は二階にあるが、内階段を降りれば庭園へとつながる扉はすぐである。時間を要する距離ではない。

フィオンが首をめぐらせあたりを見回したと同時に、どこからか女性の悲鳴が聞こえた。

「すいませんが、失礼します」

ノーフォーク伯爵とマカリスター男爵から離れると、声のした方向にフィオンは走り出した。先ほどの悲鳴が自分の聞き間違いではなかったことを証明するように、あたりにいたパーティーの参加者たちも何かあったのかと顔を見合わせている。

そのざわめきを切り裂くように、あたりに一発の銃声が響いた。

一人で庭園からホテルの中へと戻る出入り口付近に戻ってきたコレットは、そこまでくると歩調をゆるめた。立ち止まって振り向けば、父親がとある貴族に捕まっている姿がまだ見える。

父親であるマカリスター男爵と広間に戻るために庭園を歩いていた。それをほとんど面識がないと聞いていいノーフォーク伯爵に声をかけられたのは、つい先ほどのことである。

「先に戻りなさい」

にこやかに話かけてきても、コレットをあからさまに値踏みしたような伯爵の視線に、マカリスター男爵はコレットにそういった。

そのままその場をさっすっいいいものかと父親を見上げたコレットに、男爵は優しく微笑む。

「伯爵、申し訳ございません。娘は失礼させていただいてもよろしいでしょうか。先約がございますので」

「ああ、かまいませんよ」

にやりとノーフォーク伯爵は口元を緩めた。

「父親として、聞かせたくないこともいろいろおありでしょうからね」

思い出して、コレットは小さくため息をついた。

ノーフォーク伯爵の表情は、どうみても好意的なものではなかった。

フィオンや王妃に守られている自分と違って、父親であるマカリスター男爵は今回の件でとても大変な思いをしているのだとあらためて感じる。

そんな中、父親を一人残したことが気にかかった。

父親と一緒にあの場に残っていたとしても、コレットに何ができるわけではない。一緒にいることによって、父親だけならうまく切り抜けられることを妨げることになるかもしれない。しかし、なんだかその場から逃げてきたような気がして、コレットは居心地が悪かった。

それでもあの場所に戻るわけにはいかない。

「もどらないと」

誰に言うでもなくつぶやくと、コレットはしっかりと前をむいた。父親のことは気になるが、今コレットが戻らなければならぬ場所はフィオンのところだ。そのために父親がつくった機会を無下にするわけにはいかない。

フィオンのことだから、コレットが側にいなくても困ることはないだろうし、他に彼に話しかけたい人たちはたくさんいるはずだ。コレットがちょっと戻るのが遅くなったからといって、重大な問題が発生するわけではないと思う。

それでも……。

コレットの脳裏にフィオンと離れたときの彼の表情がよぎった。さびしそうなフィオンの表情を思い出すだけで、コレットの胸がぎゅゅと痛む。そして、先ほどまで一緒にいたはずなのに、すごく彼に会いたくなる。

その気持ちに従うように、コレットは広間へと続く入り口へと急いだ。

庭園からホテルへと続く入り口は、綺麗な格子模様の枠にガラスがはられた窓が並ぶ一角にある。ガラスごしに、建物の中からも庭園を楽しむことができるが、日も暮れた現在は庭園から中のきらびやかな様子がよく見えた。

その入り口の扉の前で、コレットは再び足をとめた。

開け放たれたその扉は、先ほど父親と一緒に庭園におりた際に通

った場所である。決して狭くはないその入り口付近、ちょうどそこをふさぐように立ち止まって話をしている人たちであふれている。何とか通れそうな場所をさがすが、コレット一人通る場所も難しそうだった。

人が通る通路にもなっている場所である。通りたい人がいれば、それとなくあけるのが礼儀ではあるが……。

ふさいでいる人物の一人と、コレットは目が合った。

そこにいたのは、ノーフォーク伯爵家のジュリアである。

ジュリアはコレットを一瞥すると、つんと顔を背けた近くにいる人たちとの会話を続けた。ジュリアと話している人たちも、ちらりとコレットを見たがそのまま動く気配はない。くすくすと笑いながらこちらをちらりちらりと見ているのは、どうやらコレットが通りたいのをわかっていて、その反応を楽しんでいるといった様子である。

この状況では、声をかけたとしてもどいてもらうことは難しそうだ。

身分の高い人たちも多いこのパーティーの中で、フィオンのパートナーになっているとはいえ、一人でいるときのコレットはただの男爵家令嬢である。身分をわきまえるべき立場であり、楽しく話している人たちに声をかけてどけてもらうことも、無理に通ることもできない。

声をかけ相手をどかせるといふ行為は、コレットを気に入らない相手にたいし自分を攻撃する理由をあたえることになりかねない。

王宮でのパーティー、ジュリアはあからさまにコレットを嫌っていた。そんな彼女がいればなおさら気をつける必要がある。

(どうしようかな)

このままでは広間に戻ることができない。

しばらくここで待っていれば、他にもこの入り口を利用する人も出てくるだろう。それまで待っているか、それとも……。

コレットは建物にそって続く石畳に視線をうつした。この小道は庭園を散策するものであり、ホテルの他の入り口にも通じているはずだ。

広間にもどるための入り口はここだけではない。

一番近い場所はここだが、ホテルの客室の方から庭園に出るための入り口がいくつかあったはずだと、コレットはここを案内されたときに聞いた説明を思い出す。今日はこのホテルの客室はパーティーの休憩室として使われている場所もあり、そちらの入り口も使用できる。

まだパーティーの最中である。休憩室を使用している人数は少ないだろうし、あまりまわりの目にさらされることもないだろう。

しかし、客室側の出入り口となると、ここから少し離れてしまう。ここで待つべきか、別の入り口から戻るべきか。

もう一度扉に視線を向けるが、さらに知り合いがとおりかかったのだろうか。人は増えているばかりで通れる気配はない。

どうしたものかと、コレットはもう一度石畳の小道を見ると、そのまま視線を上にした。

パーティーの会場はホテルの二階。先ほどの人でふさがれた入り口から中に入り、一階ホールの大階段を上がっていけばすぐである。上を見上げれば、パーティー会場のバルコニーが見えた。

ひとつひとつの窓によって区切られているバルコニーには、いくつか人影がみえる。

先ほどまでその一つにフィオンと一緒にいたことを思い出し、コレットの頬が熱くなった。中からはカーテンの影となっていたとはいえ、もしかして外からは見えていたのではないだろうか。

あの時は、そんなことまで考えることもできなかったが。

熱くなった頬に手をあてて、そのまま視線を動かしたコレットの視界に、金色の光がよぎった。その光のもと。建物の中からの光を

受けて、遠めにみてもきらきらと輝いているように見える人物に、コレットの鼓動が跳ね上がる。

先ほどコレットと一緒にいたときそのままに、まだバルコニーにいるフィオンにコレットの鼓動がドキドキと高鳴った。それを押さえるように、胸に手をあてる。

心は正直に、コレットの体を支配していく。

自分の側にいないときのフィオンをのぞいているようで、コレットの口元が少しゆるんだ。が、次の瞬間コレットの表情が固まった。バルコニーの上。フィオンの隣に見えた人物には見覚えがあった。そこにいたのは、数日前にあつたばかりの少女、ジェシカ・ランデルである。

コレットのいる場所から二人の会話など聞こえるはずもない。しかし、楽しそうに会話している二人の姿にコレットの胸にさざ波がたつ。

他の貴族と話すことはフィオンにとって当たり前で、それはコレットがどうこう思うようなことではない。しかし、どうしてだろう。他の女の人と話しているフィオンの姿をみていると、胸が痛い。

それなのに二人から目をそらすことができないで一人庭にぼつんと立っている自分は、フィオンからとても遠いように感じられた。

会話の中の流れなのだろうか。フィオンジェシカにっこりと微笑みかけた。

にこやかに会話をすることは当たり前のことなのに、コレットの心がズキリと痛む。

ふとジェシカと目が合ったような気がして、コレットは隠れるように建物側に移動した。なんだか心臓がドキドキして、じっとしていることが心もとなくなる。それ以上ここにいないことができなくて、コレットは足早にその場を離れた。

まるで逃げるようにあの場を離れたコレットは、人気がない場所までくると歩調をゆるめた。

なんだかすごく疲れたような気がする。

(別に、逃げる必要なんてなかったのに……)

フィオンとジェシカが話していた。ただそれだけのことなのに、すごくシヨックを受けている自分に驚く。

ゆっくりと歩いてきた足が止まった。

一度目をつぶり、大きく息を吸い込む。

どのような状況であろうと、自分は今日フィオンのパートナーである。社交の場であるこの場所で、まわりに振り回されてパートナーとしての役割をおろそかにしてはいけない。

「もどらないと……」

フィオンのところに。

力なくコレットはつぶやいた。

パーティーの会場から離れたため、庭園は人気もまばらで少し薄暗い。

喧騒から離れて静かな場所で一人たっていると、なんだか自分の足元がおぼつかないような気がしてくる。

フィオンを見つけたときのドキドキも、バルコニーで一緒にいたことも、なんだか今はすごく遠くに感じられた。

自分の立場は、分かっている。

どういう状況にいるのかも、分かっているつもりだ。

いつか薬の効果は消えてしまうもので、今の状況はそれまでのもので……。だから、自分にはフィオンが誰と一緒にいようと、楽しそうに会話をしていようと、それを気にするだけの立場にはいない。分かっている、はずだったのに。

フィオンを好きだと思う自分の気持ちを止めることができなかつた。それでも、フィオンの側にいればそれも駄目ではないような気持ちになっっていた。

そんな自分は、今の自分の立場というものを失念していたのだらうか。

震える手に力を込めて、コレットは胸の前でぎゅっと握り締めた。思考を振り払うように頭を振る。

今はこんなことを考えている場合ではない。

不安があるのはわかっている。それでも、側にいたいと思ってフイオンを好きになったのは自分なのだ。今、パーティーの最中、フイオンのパートナーとして彼に迷惑をかけることだけは、絶対にできない。

好きだから、自分の務めをしつかりと果たさなくてはならない。

例えばそれが、どんな状況であろうとも。

大きく息を吸い込むと、呼吸を何度か繰り返す。そうしてなんとか気持ちを落ち着けると、ゆっくりとあたりを見渡した。

ここはパーティー会場から少しはなれたものの、ホテルの客室がある建物の近くだ。ここからなら、別の入り口もたいした距離の違いはなかったと思う。先ほどの広間近くの入り口に戻っても通れるかどうかわからないなら、別の入り口から中に入った方がいいだろうとコレットは歩き出した。

それ以上に、少し気持ちを落ち着けるだけの時間が欲しかったということに、コレット自身気がつかないまま。

綺麗なバラのアーチを抜けると、建物の入り口が見えてきた。

これで広間に戻れるとほっとしたとき、ふいにコレットの肩がぐいっと引き戻された。驚いて振り返ろうとするが、その前に口をふさがれたため動きがとれなくなる。

口をふさがれた手には布のようなものが握られて、それを口元に

当てられれば薬品のような匂いが鼻についた。くらりと、めまいのように視界がゆれ、体から急速に力が抜けていくような感じがする。口にあてられたその手の大きさと硬さ、そして自分を拘束する力の強さに、直接相手が見えなくてもそれが男性であることがわかる。コレットの脳裏に夏至祭のときのことが思い出され、体が震えた。なんとか離れようと体をよじり、口をふさがれた手をどけようとする。

「静かにしろ」

見知らぬ男の声の後に、カチャリと耳元で音がした。

こめかみの辺りに感じる冷たい感触に、コレットは頭を動かすことができないまま、目だけを動かしてそちらをうかがう。

短銃の銃口がびたりと押し当てられている。コレットの体が恐怖で震えた。

だが、体が思うように動かない。

この辺りは休憩室となっているホテルの客室へと通じる出入り口である。まだこの時間では利用している人もほとんどいない上、コレットがいる場所は男に引っ張られたことにより建物の明かりが直接はあたらないようになっていた。薄暗いこちらの場所は、明るい場所からは死角となり、意識して見なければ気がついてはもらえない。

ずるずると引きずられるように庭園の奥につれていかれそうになり、コレットは震える体をなんとか動かし逃げようと試みる。しかし、夏至祭のときとは違ってが違う。

逃げようと思うのにな、思考がうまくまとまらず、体も言うことをきかない。

女性と男性ではその力に根本的な差がある以上に、今のコレットの力では一人では到底逃げることはできなかった。

ガシャンと器の落ちるような音がして、コレットは驚いて体を震わせた。反射的にぎゅっと目をつぶる。

しかし、それが自分を捕らえている男が立てた音ではないことに気がつき、コレットは音のしたほうに目をやった。そこにはこの従業員かどこかのメイドらしき少女が、手にしていたであろうトレイを落とし、こちらをじっと見つめていた。

気がついたものがいたことで、コレットはなんとか今の状況を理解してもらおうともがく。

その動きにいらだつたように、男はコレットの口を押さえている手に力を込めた。その手を引き離そうとしてもまったく動かさず、反対に呼吸がどんどん苦しくなっていく。

そんなコレットの耳に、少女の悲鳴が聞こえた。

不意にこめかみのあたりに当てられていた感触がなくなったと思うと、どきりとコレットの体が地面に投げ出される。

何が起こったのかわからないまま立ち上がることでできないコレットの耳に、痛いほどの銃声が響いた。

ひどい耳鳴りで、頭ががんがんする。

その場に投げ出されたものの、なんとか腕でかばったことにより衝撃をやわらげることができた。しかし、無造作にすてられたコレットの体は近くの石畳の上にたたきつけられ、決して小さくはない衝撃があたえられている。

耳鳴りのせいか、薬のせいか。

思考が働かないコレットに、唯一打ちつけた腕の痛みだけが強く伝わってきた。

ゆっくりと目を開くが、なんだかとても目蓋が重い。

働かない頭で、痛む体で、それでもここから逃げなければと体を起こそうと腕に力を入れようとするが、打ち付けたばかり腕は痛む上に震えが止まらなくて、思ったように力を入れることが出来なかった。

ふいに、背中に触れられた感触にコレットの体がびくりと震える。

逃げなくては。

逃げなくては。

逃げなくては。

そう思うのに、体が言うことを聞かなくて泣きたくなる。

ただ体の震えだけが大きくなるばかりで、少しも動くことができない。

「大丈夫ですか？」

耳に聞こえた声に、コレットははっとしてそちらを見た。

焦点が合わず視界がぼんやりとしているコレットの目に入ってきたのは、男性ではなく女性の姿。

あたりがあまり明るくないのでよくは見えないが、先ほど目の前

に現れた少女のように見える。近い距離でコレットをのぞき込む少女の黒髪がさらりとゆれた。

「怪我は？」

「……腕が……」

気づかうように優しい少女の声に、コレットはなんとか声を絞り出した。

その答えに、少女はてきばきとコレットの体を確認する。

転んだときにぶつけた腕には、すりむいた痕がある。あたりの弱い光の中でははっきりとはしないが、もう少し時間がたてば皮下出血の色も濃くなってくるはずだ。しかし、骨に異常はないようだ。少女は短い間でコレットの体の状態を確認した。

これならばすぐに命に関わる怪我ではない。

しかし……。

「動けますか？」

少女の問いに、コレットは力なく首を振る。

先ほどから起き上がるうと力を入れてはいるが、体に力が入らず立ち上がることができない。

近くで人が動く気配がした。

一緒に聞こえた男のうめき声に、コレットの体は反射的に震えを強くする。

先ほどまでの恐怖は、まだ体に染み付いていた。

声のした方をちらりと一瞥し、少女は眉根をよせた。

「申し訳ありませんが、もうしばらくお待ちください」

そういつてにっこりと自分に微笑みかける少女を、コレットは驚いて見つめた。

この少女はいったい誰だろう。

さつき見かけたときは、ホテルの従業員かそれとも貴族に使えるメイドのように見えた。しかし、彼女の行動はどうみてもただのメイドのものではない。

その疑問を口にする前に、目の前の少女は立ち上がろうと腰を浮かせる。その腕を、コレットはなんとか動かした手でつかんだ。

相手は銃を持っている。どう考えても分が悪い。

心配そうに自分を見つめるコレットを優しく見つめると、少女はコレットの手にそつと触れた。

「大丈夫です。もうすぐ人も来ますから」

コレットの手を自分の腕からはなすと、少女はすつと立ち上がった。

胸元からキラリと光る細いナイフのようなものを取り出し、声のした方へと向かう少女がコレットの視界から消えた。

それ以上少女を追うこともできず、コレットは急速に薄れる意識と戦いながら、まわりの音が遠くなっていくことだけを感じていた。

目に飛び込んできた光景に、体中の血液が逆流したような気がした。

その後数発の銃声が聞こえ、気が気ではなくフィオンは走り続けた。

人の声と銃声が聞こえたその場所。

フィオンが来たとき、まず目に飛び込んできたのは倒れているコレットの姿だった。

ぴくりとも動かないコレットに近づこうとして、その場にいたもう一人の人物に気がつく。うずくまって手を押さえている男は、フィオンの気配にはつとしたように頭をあげた。

フィオンと男の目が合う。

が、すぐに男は目をそらすとあたりに忙しく視線を動かした。

何かを探しているような動きが止まる。その視線の先にあつたものにフィオンも気がついた。

探していたもの。

落ちていた銃に手を伸ばした男の目の前で、フィオンが先に銃を拾い上げた。そのまま流れるような動きで、ためらいもなく男の眉間に銃口を突きつけ引き金を引く。

「ひっ！」

そのあまりにも躊躇のない動きに、男は引きつったような声を上げて息を飲む。

鋭い視線を向けたまま、フィオンは口元だけを少し上げた。

「残念。弾はなかつたようだね」

そういうと、フィオンはそのまま確かめるかのように再度引き金を引いた。引き金が引かれるたび、男はびくりと体を振るわせた。

しかし男は銃が使い物にならないことを悟ると、懐から短剣を抜き取りフィオンの腕を払いのけるように動かした。間一髪、フィオンはするりと体を引いてそれをよける。

それとほぼ時を同じくして、ホテルの衛兵たちがフィオンとその男を取り囲むように集まってきた。

「バード公爵さま、お怪我はございませんか」

「僕のことはいい。あの男を捕まえろ」

持っていた銃を近くに來た衛兵に放り渡すと、フィオンはその腰からするりと剣を抜き取った。無駄のない動きで、その剣先はまっすぐに男の方へ向けられる。

「ごくりと男が息を飲むのがわかった。」

短剣と長剣ではあきらかに男の方が分が悪い。その上まわりは衛兵に取り囲まれている。

唯一逃げる手段の一つとして、男はコレットの方をちらりと見た。人質をとれば逃げる速度は遅くなっても攻撃はされなくなる。

男が動こうとしたその瞬間、フィオンはコレットと男の間に回りこんだ。

「命がいらぬようなら、今すぐその望みを叶えようか？」

これ以上コレットに手出しをするのは許さない。

フィオンにひたりと見据えられれば、その瞳の奥に宿る怒りの感情に男の背筋がぞわりとあわだった。

男はちつと舌打ちすると、そのままくると踵を返す。

庭園の奥へと逃げ込む男に、衛兵たちが急いでその後を追いなから走り去っていった。

衛兵が男を追っていくのを見送ると、フィオンは急いでコレットに近付いた。

ここにいた男を何とかする必要があったから、すぐにコレットの側に来ることが出来なかった。

コレットの側に膝をつくと、持っていた剣を置き、急せく気持ちを押さえながら、そっとコレットを抱き起こす。

「コレット」

呼びかけて、食い入るようにコレットを見つめる。

息はしている。だが、息をしていることと無事であることは同じではない。

コレットの背中に回していた手が震えそうになり、フィオンはそれに力を込めた。祈るような思いでもう一度コレットの名を呼ぶ。

震えるように睫毛がゆれ、ゆっくりとコレットの目蓋が開いた。

視線をさまよわせ、フィオンを見る。

「フィオン……さま？」

自分の名を呼んだコレットに、フィオンは優しく微笑みうなずいた。

「ごめん、遅くなったね」

そういつてフィオンは、コレットの顔にかかる髪を優しくはらう。

「どこか痛むところはない？」

「すみません……」

「どうして謝るの？」

優しく微笑むフィオンを見ていたコレットの瞳が潤んだ。

きつと、絶対迷惑をかけた。

それなのに、優しく優しく自分を腕に抱くフィオンのぬくもりに、先ほどまでの不安がゆっくりと溶かされていく。

「もう大丈夫。怖い思いをさせた」

フィオンにだけ分かるくらいの動きで、コレットは小さく首を横に振った。

壊れ物をあつかうように、フィオンはゆっくりとコレットを抱いたまま立ち上がる。

護衛のために近くに控えていた衛兵が、フィオンが地に置いた剣を手に取りまわりの安全を確認すると、二人をホテルの中へと案内した。

いつまでもここには危険であるし、コレットの手当ての必要もある。

「フィオンさま……、彼女はどうなりました？」

薄れ行く意識の中、コレットは小さな声でフィオンに訊ねた。

「彼女？」

誰のことを言っているのかわからず、フィオンは聞き返す。フィオンがここに来たとき、そこにいたのは倒れていたコレットと近くにうづくまるように膝をついていた犯人の男だけである。

「……私を、助けてくれたんです。男の人に……薬をかがされて、声も出せなくて……。でも彼女が見つけてくれて、悲鳴を……」

フィオンが聞いた女性の悲鳴は、コレットのものではなくその女性のものだったということなのだろうか。

「まわりに女性の姿はなかったから、ちゃんと逃げてると思うよ。確認するから、今は何も考えずゆっくり休んで」

その言葉に安心したのかフィオンを見て少し微笑むと、コレットはそのまま意識を手放した。

41・間隙

よく手入れのされた生垣に身を隠し腰をおろすと、カイサルはほつと息を吐いた。

クリプトンホテルの敷地内。何とか衛兵たちをまいたものの、ホテルの出入り口は警備で固められ簡単に出れる状況ではなくなっている。

ちつと舌打ちをすると、カイサルは持っていたナイフで着ていた服の右腕の部分を切り取った。ナイフを口にくわえ、切り取った布でまだ血が滴る右腕をきつく縛り上げる。

これでなんとか止血をすることができる。

血を滴らせたままでは、周りに自分の位置をしらせるようなものだ。

ここに集まっている貴族たちを避難させ終われば、庭に犬が放たれる可能性もある。そうなれば血の匂いで簡単に見つかってしまうことは免れない。

ナイフを左手で握り直すと、カイサルはそれを強く握り締めた。

任務完了までもう一步というところで邪魔が入った。

先ほどのことを思い出して、カイサルはぎりりと歯をかみ締めた。ターゲットであるマカリストー男爵令嬢コレット。

彼女が一人にいるという絶好のチャンスにおいて、この手に捕まえるところまでは計画の遂行は滞りがなかった。

しかし……。

コレットを捕まえたときにその場に居合わせた女にすべての計画は打ち碎かれる結果となった。

まだ十代ほどであろうその少女は、一見すればホテルの従業員の

ような服装で、夜会の準備をしてるようにその手にはトレイを持っていた。

それに油断していた。

その女は、トレイを落としてあたりに音を響かせると、声を張り上げて悲鳴を上げた。

それだけなら恐怖のあまりに声を上げたともとれたが、普通ならばその後は逃げる場所である。女の一人でやれることは限られている。せめて人を呼びに行くなど、その場から離れる行動をすることを考えたその少女は、あるうことがカイサルの方へと向かって走ってきた。

ぎよっとして銃を向けたときには、すでに間合いに入られていた。少女の肩で切りそろえられた黒髪がさらりと揺れるのが目に入ったかと思えば、銃を持った手をぐいっとな握られる。

カイサルは反射的にコレットを振り払うように手を放した。薬がかがされ力が入らなくなっていたコレットが、その場にどさりと倒れる音が耳に入る。

これなら逃げる心配もないだろうと、カイサルは目の前の少女につかみかかった。

しかし引き離そうとした瞬間に、少女によって銃の引き金が引かれた。

銃声とともに激しい衝撃が自分の手につたわってくる。びりびりと痺れるような感覚に手が振るえ、耳元で聞こえた爆音のせいで思考が飛ばされた。

それが少女が引き金を無理に引いたせいだと気がつけば、なおさら頭に血が上った。

女だと侮っていたが、どうやらそれだけではないようだ。

女は故意に銃を発射している。

激しい耳鳴りのなか、さらに腕をつかまれ空に向けたまま銃を発砲させられる。下手に動けば自分に当たる可能性もある。

まったく怖がる様子もなく銃をつかむその少女に、カイサルはか

つとして手を振り上げた。女一人に押さえつけられるはずがないと、思いつきり殴りつけるためにおろした拳は空を切り、下腹部に激しい痛みを感じて倒れこむ。

自分の腕と肩につかまり、それを支点として足の間を蹴り上げられたことに気がついたときは、すでにその場に膝をつき頬に夜の冷たい草の感触を感じていた。

ぎりぎり歯を食いしばる。

(あの女……！)

少女とは思えないほどの激しい一発である。

女性用の服装というものは、男とは違いそんなに動きやすく作られているわけではない。それなのにこれだけの痛手を負わせることができるのは、それを意図的に行い、かつ女の力でもどうすれば効果的に行えるのかを計算しているからである。

ただの給仕の女ではない。

やっと起き上がり、腸が煮えくり返るような気持ちで再び銃を構えたとき、その女が持っていたナイフで腕をえぐられた。

反動で銃を取り落とし、腕を押さえつけたところにバード公爵がくれば、もうコレットには手を出さどころの問題ではなくなった。

これが王家の威厳というものなのか。眼光鋭く睨め付けられれば、それだけで足がすくむほどの威圧感に気圧されてしまいそうになる。そのまま頭をたれてしまいそうな自分を何とか奮い立たせ反撃にできたものの、結局その場から逃げることはできなかった。

カイサルは生垣からそつと顔を出すとあたりの様子を確認した。いつまでもここにいないわけにはいかない。

生垣の奥には柵があり、その向こうは湖へと面する岩場になっている。風に撫でられざわめく湖面は、その岩場に水音を響かせていた。ここからなら何とか湖に降りられるか……。

そう思いながら、カイサルは自分の腕に目をやった。

ここから湖まではかなりの高さがある。問題は、この腕がそれまで持つか。

しかし、このままここにいれば見つかるのは必至。逃げようにも、このホテルの出入り口はすべて封鎖されている。

この広い湖の中、夜にこの湖すべてを探すことはできないだろう。ここから降りる以外に逃げる道はない。

もう一度あたりに人がいないことを確かめ、カイサルは生垣から外へと這い出した。

自分の腰のあたりまでの木でできた柵に手をかけ、そこから崖下をのぞく。真つ暗な闇色の岩肌。その下に、わずかな月の明かりに照らされた湖面が浮かび上がっている。

ごくりと息を飲んで柵を越えようとしたそのとき、カサリと草を踏む音が聞こえ振り返った。

そこにいた人物の顔を見ると、カイサルはほっと息を吐く。

「なんだ、あんたか」

声をかけられた人物はカイサルを一瞥すると、先ほどまでカイサルが見ていた崖下に目をむけた。

「まったく、余計なことをしてくれたな。これであの女に対する警備はもつと強化されるだろう。うかつに手も出せなくなる」

「そ、それは……」

邪魔をした人物がいたからだと言おうとしたカイサルの言葉を、

男はさえぎった。

「銃は？」

「あれは、弾がなくなって捨ててきた。拾う間はなかった」

「銃ならある程度の距離があってもターゲットを狙えると思って渡したが、お前には使いこなすこともできなかったようだ。今更言っても仕方がないことだが」

「……」

「すでにホテルのまわりは衛兵に取り囲まれている。わかっているな」

「ああ、この岩場から湖にでるつもりだ。そこからなら見つかる可能性は低いから」

カイサルの言葉に、男は柵の向こうに視線を向けた。

「最後にひとつだけ」

柵を越え岩場に足をかけて降りはじめたカイサルに、男は話かけた。

見上げるように顔をあげたカイサルに、男は取り出した銃を向ける。

「何……を」

「銃というのはね、こうやって使うんだよ。距離を保てば、返り血も浴びずに目的を遂行できる」

湖から冷たい風が吹き上げる。

波の音と共に、あたりの木々が大きくざわめく。それと同時に男は引き金を引いた。

「お前はいろいろと知りすぎている。捕まられては面倒なんだよ」
落下物の水音を確認すると、男は持っていた銃を湖に投げ入れ、その場に静に背を向け歩き出した。

ホテルの一室。ノックの音に、フィオンは顔を上げた。

ドアが少しだけ開けられ、フィオンに来客が来たことが告げられる。

診察が終わり静かに眠っているコレットの髪をそつとなでると、フィオンは椅子から立ち上がった。

部屋に残ったコレット付きのメイドが、コレットの看護をするためにベッドの近くに移動するのを横目で確認し、フィオンは部屋を

後にする。

コレットが休んでいる部屋と続きの間である応接室に待っていたのは、コレットの父親、マカリストー男爵である。

フィオンが入ってくると、男爵は深く頭を下げた。

フィオンは男爵に着座を促すと、自分もソファに腰をかけた。

「医師の診察は終わりました。転んだときに打ち身をしたようですが、命に関わるような問題はありません。今はよく眠っています」

「そうですか。公爵には大変お世話になりました、本当に申し訳ありません」

見知らぬ暴漢に襲われそうになり、それをフィオンが助けたことは男爵の耳にもはいつていた。

王家の来客であるコレットは、現在クリプトンホテルの特別フロアに王妃やフィオンとともに滞在している。襲われる危険性がゼロではない今、コレットの身は王家にあずけられており、父親であるマカリストー男爵でも勝手にはできない。

「男爵、頭をあげてください。僕ももっとコレットのまわりに注意を払うべきでした」

「とんでもありません。私が、至らぬばかりにこのようなことになり、本当に申し開きもございません」

今回フィオンと一緒にいたコレットを連れ出したのは、他でもない彼女の父親であるマカリストー男爵である。男爵としては、フィオンのところに最後まで娘を安全に戻すことができなかつた点で失態である。

コレットが今回危険な目にあつたことは、犯人がまだ捕まっていない今本当の理由はわからない。しかし、その原因の一つとして、フィオンが惚れ薬によってコレットを見初めたことが関係していることは明らかだ。

そのために今までバード公爵家やマカリストー男爵家はもちろん、王家も協力する形でコレットを守ってきたというのに、今回の事件となってしまうたのである。

そのもとの現況がフィオンに関連していることとはいえ、男爵にはフィオンを責めることなどできない。

問題はそのような状況でコレットを一人にしたマカリスター男爵にあり、フィオンは危機からコレットを助けた恩人でもあるのだ。

「コレットはこちらでお預かりします。明日、コレットの目が覚めたらまたご連絡しますよ」

「ありがとうございます」

「バード公爵、お訊きしてもよろしいですか？」

少しの沈黙の後、意を決したようにマカリスター男爵は口を開いた。

「なんででしょう」

「娘は、コレットは、王弟殿下に本当に必要ですか？」

あえて公爵ではなく、王家の一員としての彼に男爵は問いかけた。コレットも男爵家とはいえ貴族の娘である。望まれば公爵家へと嫁ぐこともありえないことではない。

しかし、公爵家と王家とでは意味合いが異なってくる。

それも今回は、『惚れ薬』の事件が関与している。それだけにまわりからの目も、二人の関係には厳しく映っていた。

それでも、コレットはフィオンにとって必要なのだろうか。

王弟としての彼に、そして王位継承第一位にいる彼にとって、コレットが隣にいることに問題はないのだろうか。

「答える前に、僕も訊いておきたい」

フィオンはまっすぐにマカリスター男爵と視線を合わせた。

「その答えを、今、僕が口にしてもいいのですか？」

フィオンがはっきりと口にした時点で、それがどのような要求であろうとマカリスター男爵に断る権利はなくなる。

どんな理由を並べ立てても、決定権は王弟であり爵位の高位であるフィオンにある。フィオンが決定を下した段階で男爵にはそれを覆すことは困難なのだ。

フィオンの決定を変えることのできる人物はこの国にただ一人、王であるパトリックのみ。祖父である前バード公爵や王妃であるデアアナも、彼に助言や苦言としての意見を述べることはできる。しかし、現在王位継承第一位にいるフィオンに対して、王以外の人物が決定を覆すことは難しい。ほぼ皆無である。

フィオンに問われ、男爵は口を閉ざした。

ここで意見を聞くということは、フィオンがその決定をマカリスタ―男爵に伝えるという意味になってくる。

否とも是とも答えることのできない男爵に、フィオンは静かに微笑んだ。

「男爵、この話はまた日を改めてすることとしましょう。ですがただ一つ言うのであれば、僕の気持ちはあのときと同じであるとだけ言っておきます」

その言葉にはっとしたように、男爵はフィオンを見た。

王弟であり、公爵でもある彼に不躰な質問をしたことを怒っている様子もないフィオンに、男爵はそれ以上言葉をつむぐことなく深く頭を下げた。

42・覚醒

浮上してきた意識にしたがって、コレットはゆっくりと目蓋を開いた。

ゆっくりと何度か瞬きをすると、小さなランプの灯りに淡く照らされた部屋の中を見回す。

(……ここは?)

ベッドの天蓋も、深い赤のカーテンも、ベッドルームにしては広すぎるような室内も、そこに置かれた調度品にも見覚えはない。

ぼんやりとしたまま、コレットは体を起こした。

体を支えるためについた手にツキンと痛みが走れば、一気に記憶がよみがえる。

無意識に自分を抱きしめるように腕をまわすと、もう一度あたりを見回した。椅子に座ったままベッドに臥せっている人影に、びくりと肩を震わせる。

そこにいた人物には見覚えがあった。

王妃さまから自分に付けられたメイドの一人である。そのことを確認すると、こわばらせた体の力を抜いた。

疲れているのだろう。

すやすやと寝息を立てているメイドを起こさないように、コレットは自分の近くにあった上着を彼女にかけて、そっとベッドから抜け出した。

のどの渇きを覚え、テーブルの上に置かれた水差しからグラスに水を注ぎ、それを両手でしっかりと持ち上げた。ゆっくりと飲み干しほっと息を吐く。

自分はいったいどれくらい眠っていたのだろう。

カーテンの隙間から漏れる光はなく、まだ夜中であることを知らせている。

ここはクリプトンホテルの中なのだろうか。

本来ならば、今日は夜通しパーティーが開かれているはずだった。しかし、コレットの耳には何の音も聞こえてこない。

もしかして、あの事件のせいでパーティーは中止になってしまったのかもしれないと思えば、気が重くなった。

テーブルのそばの椅子に力なく腰掛けると、自分の腕に目をやる。白い夜着のゆったりした袖口から見えるのは、手首までしっかりと包帯に巻かれた自分の腕。それをじっと見ながら、コレットは自分の手を開いたり閉じたりして動かしてみる。

起き上がる時には痛みを感じたが、多少動かしても問題はないようだ。肘のあたりにぴりぴりとした痛みを感じるし、腕をひねれば指先にまでじんと痺れが走る。しかし、水を飲んだときもそんなに痛みを感じなかったし、動かせないほどではない。

怪我自体を確認してはいないが、自分が感じる痛みから思っていたより大きな怪我ではなかったことにほっとする。

どうやら怪我をしたときに力が入らなかったのは、腕の怪我のせいというよりもかがされた薬のせいであつたらしい。

怪我をした後のことは、記憶がとぎれとぎれで状況をあまりよく覚えていない。

自分はどうかやって助かったのだろう。

夢と現をさまようような中で、フィオンの声が聞こえたような気がした。彼の腕に抱かれて話をしたのは現実だったのか、それとも自分が見た都合のいい夢だったのだろうか。

どうしてあんなことになってしまったのか、その答えは一つ。コレットが人気のない場所へ入り込んでしまったからだ。

ホテルの中なのだから、一人になっても大丈夫だと思っていた。少しでもはやく広間に戻らなくてはと思つて急いだが、それによつてそれ以上の迷惑をかけたことになる。

呆れられてしまっただろうか。

貴族の娘として、社交界でしっかりと立ち回るだけの義務と責任

がある。そんな話をしていたばかりだったというのに、パーティー自体を台無しにしてしまう結果となった。

王妃が付けてくれたメイドがいるということは、この部屋は父親が用意したものではなく、王妃またはフィオンが手配したものなのだろう。

だがそれは、彼らがコレットの行動を怒っていないという証明にはならない。

眠ってしまう前に見たフィオンの優しい表情。

本当にあれは夢ではなかったのだろうか。

急に腕の痛みが強くなったような気がして、コレットは自分の手で腕をそつと押さえた。

カタンと小さな音が聞こえ、コレットの思考が現実に戻された。びくりと体を震わせて、あたりを見回す。

小さな物音は、眠っているメイドには聞こえなかったらしい。そのままやすやすと寝息を立てている彼女を見ると、コレットは音の聞こえた方に視線を向けた。

隣の部屋に通じているであろうドア。

息を飲みながらじつと見つめる。

それ以上音は聞こえなかった。

隣に誰がいるのだろうか。

ゆつくりと扉に近付くと、コレットはドアを少しだけ開けて隣の部屋をのぞき見た。

ベッドルームとは比べ物にならないほどの高い天井に広い室内。

どうやら隣は広めの応接室になっているようだ。

暖炉や壁にかけられた灯りで、室内はやわらかな光に包まれていた。

そこにおかれたソファにいた人物に目を留めると、コレットの鼓動が跳ねた。

淡い光に照らされながらも、キラキラと眩しく光る金色の髪。目

に入ったそれに引き寄せられるように、コレットは扉をすり抜け応接室へと入る。

ソファの肘掛けに頬杖をついたまま、目を閉じているフィオンに近付いた。

眠っているのだろうか。

自分が近付いてもそのままの状態で動かないフィオンを、コレットはじっと見つめた。

金色に光る髪がかかる端正な顔立ち。いつも自分を優しく見つめるエメラルドの瞳は閉じられ、長い睫毛が影をおとしている。

どうして彼がこんなところで眠っているのだろう。

疑問に思いつつ、コレットはくるりと首を廻らせた。

フィオンの他に、この部屋には誰もいなかった。コレットがいた部屋とは反対の方、別の部屋とつながっている扉のない通路からは、淡い光がもれている。

フィオンがここにいる以上、あちらの部屋には誰かが控えているのかもしれないが、それらしい物音は聞こえなかった。

まるで時間が止まってしまったように感じられる。

聞こえるのは、窓の外からかすかに聞こえる虫の音だけだ。

落とした視線の先に、コレットは床に落ちている毛布に気がつく。夏とはいえ、湖の側のこの場所は夜には涼しい風がふき、朝方には少し肌寒さを覚えることもある。

毛布を拾うと、コレットはそれを整える。起こさないようにとそっとフィオンにかけようとすると、急にその手をつかまれた。

びっくりして顔をあげれば、オレンジ色の光を受けて色を深くしたエメラルドの瞳が、優しくコレットを見つめている。

「す、すいません。起こしてしまいましたか？」

「いや、起きてたから」

「えっ？」

フィオンの言葉に、コレットは目を瞬かせる。

起きていたというのは？

「いつから……ですか？」

「君がこの部屋に入ったときから、かな。近付いてくるのがわかったから、目を開けたら消えてしまっくんじやないかと思って開けられなかった」

「フィオンさま？」

切なげにフィオンがコレットを見つめる。

フィオンの苦しそうな表情に、コレットはその場から動けなくなつた。

「具合はどう？ どこか痛むところはない？」

優しく訊ねながら、フィオンはコレットが持っていた毛布をとりソファの端に置くと、彼女を自分のとなりに座らせた。

コレットは答えるように、小さく首をふる。

「少し腕が痛みますけど、大丈夫です」

「そっ」

コレットの言葉にうなずきながらも、フィオンはまだ心配そうにコレットの腕の包帯に視線を落とす。

つかんでいたコレットの手をそっと持ち上げ、包帯の上からそつとコレットの腕に唇を落とす。

「……っ！」

直接肌に触れたわけでもないのに、熱が伝わってきたような気がして、コレットは思わず手を引いた。

コレットの腕を気づかっか、強く握られていたわけではない手は、フィオンの手の中からするりと抜ける。

急に手を振り払う形になってしまい、コレットは顔を伏せつつ目だけでそつと窺うように視線をあげた。

フィオンと目が合うと、ずきんとコレットの胸が痛む。

(どう……して……)

フィオンの苦しそうな顔がそこにあった。

どうしてそんな切ない目で自分を見ているのか。

「あの……」

何を言えればいいのかわからなくて、コレットは口ごもる。

「コレット」

「は、はい」

「触れてもいい？」

「えっ？」

いつもそんなことを言わずに触ってくるくせに、急に聞かれると戸惑う。

それでも、フィオンの瞳から目もそらせずにコレットは小さくうなずいていた。

ゆっくりとフィオンの指がコレットの頬をなぞる。

その手の冷たさに、コレットはびくりと肩を震わせた。

フィオンはそのまま手のひらで包むように頬に触れ、するりと耳を撫で、髪に手をうずめる。

その動きがぴたりと止まったかと思うと、コレットはぎゅっとフィオンに引き寄せられた。

触られる手の動きを気にしていたコレットが自分の状況に気がついたのは、すっぽりとフィオンの両腕の中に閉じ込められてからだった。

「……君が無事でよかった」

耳元で苦しそうにささやかれた言葉に、反射的に力を込めそうになっていたコレットの両腕が止まった。

コレットの存在を確かめるかのように、フィオンの腕に力がこもる。

「君が倒れているのを見たとき、心臓が止まるかと思った」

抱き寄せられた腕の力に、その声音に、どれだけフィオンに心配をかけてしまったのかが伝わってくる。

「ごめん」

フィオンに心配をかけたことを謝罪しようとしたコレットの唇が、耳に入った言葉で凍りついたように固まった。

(ごめん……?)

それはどういう意味なのだろう。

フィオンに謝罪をされる理由が、コレットにはわからない。
迷惑をかけたのは自分である。

謝らなければならぬのは、自分であるはずなのに……。

「君には、怖い思いをさせた」

「それは私が……」

「もっと僕が注意しておけば、こんなことにはならなかった」

フィオンがコレットを側においている時点で、彼女に危険が及ぶ可能性はあることはわかっていただけたのだから。

フィオンの言いたいことは、コレットにもわかった。

それでも……。

「フィオンさま、怪我なら治ります」

近い位置からコレットはフィオンを見上げた。

「コレット」

「それに、フィオンさまは私を助けてくださいました。命を助けていただいたのに、謝罪をしていたら理由なんてありません」

おぼろげな意識の中で、それでも聞いた声はフィオンのものだった。

彼が助けてくれたことに、コレットのもとに駆けつけてくれたことに疑う余地はない。

「それでも、君に怪我をさせて、怖い思いをさせたことにかわりはないよ」

「……私がいけなかつたんです。お庭の方に一人で歩いていったから」

「それは」

「だから」

フィオンの言葉をさえぎるように、コレットは言葉を続けた。

「だから、もう私に謝らないでください」

フィオンに非があるというのなら、コレットにもその責任がある。

自分の身を守るだけの、守ってもらっただけの準備をしていなかったことに違いはない。

そのためにフィオンが苦しい思いをするほうが、コレットにとって辛かった。

目をそらさずにじっと自分を見つめるコレットを、フィオンは戸惑ったように見つめる。

ふっとフィオンの顔に笑顔が戻った。

それにコレットの胸が温かいもので満たされたようにほっとする。

「あんまり僕を甘やかさないで。どんどんつけあがりそうになる」

そういつて、フィオンはこつんとコレットの額に自分のそれを合わせた。

間近に見つめるエメラルドの瞳。

その瞳に囚われてしまったように、コレットは目を離すことができなかった。

どのくらい時間がたったのだろう。

ほんの少しのような、とても長いようなそんな静寂を破るかのよう
うに、ぱたぱたと隣の部屋から足音が聞こえたかと思うと、バタンと扉が開いた。

驚いて、コレットはフィオンから体を離すと音の方向に振り向いた。

目が合ったのは、隣の部屋で眠っていたはずのメイドである。

どうやら目を覚ましたときにコレットがいないことに気がつき、慌てて探したらしい。

メイドの少女は、扉を開けて確認したコレットとフィオンに目を見開く。

「も、もうしわけありません」

慌てて頭をさげると、扉を閉めた。

現れたかと思ったら、また隣の部屋へと引っ込んでしまったメイドの態度に、コレットは目を丸くする。

くすりと笑い声が聞こえて、コレットはフィオンを見上げる。

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、フィオンはコレットに笑いかけた。

「思わぬ邪魔がはいったかな」

「えっ？」

自分たちを見てすぐに踵を返したメイド。

彼女が見たものは、仲むつまじくソファで身を寄せ合っていたコレットとフィオンである。

自分たちが彼女にどう見られたのかを考えると、コレットの顔が一気に朱に染まった。

「でも、いいタイミングだったのかもしれない」

フィオンの言っている意味が分からず、コレットは小首を傾げる。

「このまま無防備な君を腕にとどめていると、自分を止められる自信がなくなりそうだ」

フィオンの言葉に、コレットはたと自分の状況に気がついた。

薄暗い室内の中だったこと、そして最初フィオンが眠っているばかり思っこの部屋に入ってきたため失念していたが、今のコレットは夜着のままである。

あまりの恥ずかしさに、コレットの瞳がじわりと潤んだ。どうしているのか分からずに、両手で顔を隠すようにおおう。

「コレット」

優しく呼ばれても、返事ができない。

「ごめん、少し調子に乗りすぎたかな」

フィオンはそういうと、ソファのわきに置いた毛布をコレットの体を覆うようにそっとかけた。

夜着を隠すようにかけられたそれに、コレットは両手を離して少し顔をあげた。

「まだ夜も遅い。もう少し眠った方がいい」

フィオンはソファから立ち上がると、コレットをエスコートするように彼女の手をとった。

そのままベッドルームの扉まで行くと、ドアをあける。

ドアに背を当てていたのだろうメイドは、扉が開いたことで慌ててその場をどけると二人に対して頭を下げた。

「もうコレットから目を離さないようにね。これ以上は僕が止められなくなる」

後半の言葉はコレットを見ながら言うと、自分は足を進めずにコレットだけをベッドルームに促した。

「今夜は、もう何も心配せずにゆっくり休んで」

そのまま扉を閉めようとしたフィオンにコレットはくるりと振り返った。

先ほどのフィオンの手の冷たさを思い出し、扉にかかる手をあてて閉めるのをとめる。

「あの……」

「どうした？ 一人寝は寂しくなった？」

「そ、そうではなくて……」

赤くなっていく頬の熱さを感じながら、コレットは言葉が続けた。

「フィオンさまも、ちゃんとお休みくださいね。夏とはいっても、

こんなところで眠られては風邪をひかれます」

避暑地でもあるステイスル湖畔は、夜はかなり温度がさがる。う

たた寝をしては風邪を引くことにもなりかねない。

「大丈夫、といたいところだけど、そうだね。このままここにいるのは確かに危険かな。薄い扉一枚隔てただけでは、僕を止めるのも難しそうだしね」

にっこり笑うと、フィオンはコレットの髪をそつとすくい彼女の耳へとかけた。

少し寝乱れた髪がなんとも悩ましくて、離れていくのを惜しむかのようにするりと撫でる。

「コレット、ありがとう」

「え？」

何を？ と聞き返す前に、フィオンはコレットから手を離れた。

「それじゃ、おやすみ」

「……おやすみなさい」

コレットの返事に優しく微笑むと、フィオンはゆっくり扉を閉めた。

43・吐露

遠くの山から顔を出した太陽が、白くかすむ世界に光をはいた。朝日に照らされ朝露を含んだ葉をきらきらと輝かせる木々の間から、鳥たちのさえずりが聞こえてくる。

湖面を隠すように覆っていたわずかに残っていた霧も、太陽の光を浴びて少しずつその姿を消していく。

ステイルス湖畔では、いつものように夏の一日が始まるうとしていた。

柵に手をかけ、崖の下をのぞくように見ていたフィオンは、ゆっくりと顔をあげた。

「血痕はここで途絶えています。その状態から、昨夜怪我をした犯人のものと考えてまず間違いないでしょう」

後ろに控えながら報告をするホテルの支配人を、フィオンはちらりと一瞥した。

ステイルス湖畔地域は山の中腹ちゅうぶにある避暑地である。

昼と夜の寒暖差のために霧がうまれ、山に阻まれ姿をあらわすのが遅くなった太陽がやっと顔を出したばかりの今は、対岸はかすみがかったようにうつすらと白く見えた。

「明るくなってきましたので、さらに搜索の範囲も広げさせます。

必ずや殿下のもとに朗報をお届けできるはずですよ」

「ということは、まだ見つかってはいないんだね」

「は、はい。申し訳ありません」

もう一度、フィオンは崖下を見下ろした。

再び視線を落とした湖の上は、朝日を浴びて波をきらきらと輝かせ始めている。

あの怪我でこの崖を無事降りることができるか、疑問が残るところである。遺体となってみつかるか、それとも……。

「あの状態で一人逃げることは困難でしょう。あたりに聞き込みも開始いたします。水流にのって下流に流されたということもふまえて、まして捜索していただきますので、もうしばらくのご猶予を」

「わかった。引き続き捜索を続けるように」

フィオンの言葉に、支配人は深く頭を下げた。

支配人が慌しくホテル内に戻っていったのを確認し、フィオンは部屋へと戻るために歩き出した。

「それで？」

後ろをついてくるロイドに話しかける。

「昨日の男の身元が分かりました。以前監獄の雑用をしていたカイサルという男です」

「彼が、か」

大方の特徴から予測はしていた答えに、フィオンは頭の中でタベの男の顔を思い出した。

思い出すだけで、コレットに怪我を負わせたことへの怒りがよみがえってくる。

自分の銃に何発弾が仕込まれていて、どれだけを撃つたのか。銃を扱いなれているものであれば把握できるはずのことを、彼は把握していなかった。

自分が使用していた銃を向けられ、フィオンが引き金を引いたときの反応から、あの銃は彼の持ち物ではないことはあきらかだ。もとより、盗みでも働かなければ、銃など監獄の雑用程度のも物が所持できる代物ではない。

惚れ薬の犯人が捕らえられていた監獄で働き、その後姿を消した男。彼がこの場でコレットを狙ったのは、必ずその背後に誰かがいることを示唆している。

「それにしても、そんな怪我をしているとは思えなかったけどね」

フィオンと対峙した際には腕を押さえていたが、血の滴る腕はどう考えても直前に追った傷である。走って逃げた姿からも、コレッ

トをその手で拘束したであろうことから、仕事ができなくなるほどの怪我を負ったとは考えにくかった。

パタリと部屋のドアが閉まる。

「それで、もう一人の方は？」

「はい。昨夜は、令嬢を伴い一度部屋に戻りましたが、その後すぐに外出されています」

主語を言わないそれは、しかし、フィオンとロイドの中では誰のことを言っているのかすぐにわかった。

「友人の所にホテルの様子を確認しに行った、とのことですが、途中で姿を消した時間があったようです。ホテルの自室に戻られたのは夜もかなりふけたころでした」

犯人が姿を消した時間に、同じように姿を消した時間がある。

それは偶然なのか、それとも……。

「引き続き、彼の行動を確認してくれ。それと、もう一人。先日会った、監獄のルッツ、彼の動きも確認して欲しい」

「かしこまりました」

鍵となる人物であるカイサル。

その周辺にいる人物を再度確認していく必要がある。その裏に、必ずこの事件に関わる人物が隠れている。

惚れ薬を自分にもったものと、彼に命令し、コレットに直接危害を加えようとした人物が……。

「思っていたより、早くもどっぴらっぴらっしたのね」

カップをソーサーの上に戻しながら、エリサは口を開いた。クリプトンホテルでの事件の後王家の別荘に戻ったコレットは、怪我の療養のためにしばらくそこに滞在していた。その後予定を切り上げて王都に戻ってきたのは、つい三日ほど前だ。

それを知ったエリサに誘われ、今日はコールフィールド伯爵の町タウン屋敷インハウスに招かれ二人でお茶の時間を過ごしていた。

「それで？」

急に問われて、コレットは小首を傾げる。

それとも言われても、なんのことだかわからない。

「別荘では、何か進展はありました？」

「進展ですか？」

「そう、きちんと白状なさい。王妃さまのはからいで王家の別荘にいったのに、フィオンさまと何もなかったなんてことは聞きませんわよ」

言われたことの意味に、コレットの頬が赤く染まった。

コレットもつけず、上掛けすら着ていない夜着のままフィオンの腕に抱きすくめられたことを思い出し、いたたまれずに顔を隠すように両手で頬を覆う。

恥ずかしかった。

消えてしまいたいぐらい恥ずかしかったのに、抱きしめられた腕の強さや、そのぬくもりがいつもよりももっと近くに感じられて、忘れることができない。

思い出すたびに、恥ずかしくて、でも愛しくて、そして側にいられないことが寂しくなる。

そしてなにより、あの日から思い出すたびにそんなことを考えてしまう自分が一番恥ずかしくて、どうしていいのかわからない。

そんなコレットの様子を見て、エリサは大きくため息をついた。フィオンとの間に何かがあったのは間違いない。

それがどんなことだったかはわからないが、それがコレットにとって大きな意味を持つことだけは彼女の表情から読み取ることができる。

一人何かを思い出し表情を変えるコレットの腕を、エリサはそつととつた。

急に手をとられ、驚いてコレットはエリサを見る。

「この怪我也、フィオンさまが関係されてますのよね？」

長めのゆったりとした袖に隠されてはいるが、コレットの腕にはまだ皮下出血の痕が残っている。

包帯をした方が余計にめだってしまうこともあり、外出の際には肘の部分以外には包帯はしていなかった。そのため少し袖を上げれば、まだ治りきらない痕がちらりと顔をのぞかせる。

「こ、これは、私の不注意が原因で……」

「そうだったとしても、そうせざるを得ない状況があったのはあなたのせいではないでしょうか？」

その場にいなかったエリサでも、状況はたやすく想像することができる。

フィオンと離れたときが、嫉妬渦巻く女性たちにとってコレットを攻撃できる絶好のチャンスである。

「でも、本当に悪いのは私なんです。フィオンさまはすぐに助けに来てくださいましたし」

必死にフィオンを弁護するコレットに、エリサはにっこりと微笑んだ。

しっかりとコレットの手を両手で握る。

「コレット」

「はい」

「自分の気持ちには、気付いていらして？」

「え？」

「もう、わかってはいらっしやるのでしょっ」

エリサの問いに答えることができなくて、コレットは息を飲んだ。

是とも否とも言わないコレットを、エリサの青い瞳がまっすぐに見つめ返す。

「わたくしにまで、気持ちを隠す必要なんてありませんのよ」
驚いてコレットは大きく目を見開く。

エリサに促されるようにして、コレットの唇が動いた。

「私は……」

一度息を飲むと、ゆっくりと言葉をつむぐ。

「フィオンさまが……好きです」

今まで口に出ることが出来なかった言葉がこぼれた。

口にしてしまうと、コレットの肩からずとんと力が落ちたような気がした。そして、それと同時に抑えていた気持ちが溢れてしまうように愛しさがこみ上げてくる。

「でも、好きになつては駄目だつて……思つて」

自分で口にした言葉が、コレットの心を激しくえぐる。

好きになつては駄目だと、ずっと言い聞かせてきた。薬のことも、身分のことも、まわりの状況のことも、そんなのどうしたつて耳に入ってくる。

そんな状況で、どうしてフィオンのことが好きだなんていえるのだろう。

「どうしていいのかわからなくて……」

好きと言つことが出来なくて、それでも自分の気持ちをなかつたことにはもう出来なくて。

「その気持ちは、フィオンさまには言いました?」

ふるふるとコレットは首を力なく横に振った。

そんなこと言えるわけがない。

「どうして言いませんの?」

「言つことなんてできません」

思つことは自由でも、それを相手に伝えた時点で自分だけの問題ではなくなってくる。

「迷惑に、なりたくないんです」

フィオンに、いつかその気持ちが迷惑になつてしまふときがくるような気がして。

コレットの答えに、エリサはおかしそうに笑い声をあげた。

「前にも言いましたわよね。好きになられて困るのなら、最初からあなたを口説いたりはしないでしようって」

「でも……」

それは惚れ薬を飲んだから。

その言葉のすべてが薬のせいだなんて思っていない。けれど、薬の影響がまったくないわけではないことは、コレットもよく分かっている。

「コレット、あなたが一人で悩むことなんてありません。その悩みも不安も、フィオンさまと一緒に背負っていただけばいいのです」
それだけの覚悟がなければ、この状況でコレットを好きだと言えるわけがない。

「もしそこで逃げ出すようなら、それだけの人だったということですよ。あなたが好きになる価値なんてない。でもそうではないことは、コレット、あなたはよくわかっていますわよね」

コレットの目はエリサを見つめていた。しかしその目に映っているのは、エリサの言葉によって思い出される彼の人の姿。

よく、わかっている。

彼の言葉は、軽く言っているようでもその気持ちに嘘なんてなかった。それが例え薬の影響だったとしても。

コレットを見つめるまっすぐな瞳も、自分に触れてくるその手の優しさも、その中には迷いも嘘もなく自分を求めてくれていた。

フィオンに、言ってもいいだろうか。

この気持ちを。

素直にこの気持ちを伝えることは、自分に許されることなのだろうか。

「あなたは考えすぎですよ」

「それは……、いろいろ考えます」

コレットは困ったように眉根を寄せた。

「とりあえず、もう考えるのはおやめなさい。考えるのは、自分の思いをちゃんと口にしてから、それから二人で考えればいいことでしょう」

「……どうして、エリサは私とフィオンさまのことを応援してくださるの？」

不思議そうに自分を見るコレットに、エリサはにっこりと微笑んだ。

「だって、あなたがフィオンさまを好きだと思っているのがわかってしまったんですもの。仕方ないですわよね」

肩をすくめたエリサに、コレットは少しだけ表情を緩めた。

馬車の中で揺られながら、コレットはエリサの言葉を頭の中で繰り返した。

少しだけなら、わがままを言ってもいいだろうか。

(思いを口にすることだけなら、許していただけますか?)

誰に許しを請うているのかも分からず、コレットは心のなかでそうつぶやいた。

馬車の扉が開けられて、コレットははっと顔をあげた。

考え事をしていて、家に到着したことすら気がつかなかった。

御者に手をかりて馬車を降りたところで、玄関の扉がバタンと大きく開かれる。

「お帰りなさいませ、お嬢さま」

「た、ただいま。どうしたの？ ノーラ」

飛び出さんばかりの勢いで急に出てきたメイドの少女に、コレットは驚く。

「急いで旦那さまのところまでおいでくださいませ。急な御用がおりとのことだ」

促されるままに、コレットは玄関に入った。

家の中に入れば、他の使用人たちもなにやら外出の準備などをしていて騒然としている気がする。

「何かあったの？」

ノーラが答える前に、玄関ホールの階段の上から声がかかる。

「コレット、戻ったのね。よかったわ。今、伯爵家に使いをだそうと思っていたところだったのよ」

「お母さま。ただいま戻りました。どうかなさったんですか？」

「急いで仕度なさい。使いの方がいらっしやって、お父さまとあなたに至急王宮に上がるようにとのことなの」

「今からですか？」

慌てる母親とは反対に、急に呼ばれたことの意味もわからずコレットはきょとんと目を瞬いた。

44・命令

「見つかった？ どこで？」

上着のカフスボタンをとめていたフィオンは、ロイドの報告に手を止めて振り返った。

「ステイルス湖の支流のかなり下流の方です。思ったより流されていたようです」

「状態は？」

「はい。それが……」

ロイドは口を濁す。

「何か問題でも？」

「彼の肩口には銃で撃たれた痕が残っていました」

あの夜、フィオンと対峙したときのカイサルがおっていたのはナイフで刺されたような痕のみだった。

銃痕じゆうこんがあるとすれば、その後に受けたことになる。

それを受けたのは、クリプトンホテルから出る前か、出た後か……。

…。

「カイサルが見つかったことは、他に誰が知っている？」

「自家の管理下で発見しましたので、まだ他に報告はいたしておりません。フィオンさまにご報告の後にと思いましたので」

「そうか」

フィオンはしばし考えると、机にむかいペンをはしらせた。

書いたものを封筒にいれ、印を押す。

「これをクリプトンホテルの支配人に。カイサルが見つかったことは口外せずに、この手紙を渡してくれ」

「これは？」

「カイサルの捜索の進行具合を確認する手紙だよ」

「ですが、カイサルは……」

先ほど見つかったと報告したばかりである。

「カイサルの状況は世間には知らせない。もちろん、クリプトンホテルの支配人にもね。彼らが知った時点で、それは相手方にも情報が流れたと思っただけいい」

他の人間が知れば、カイサルの後ろに潜む人間にも必ずそれが知られることになる。

それまでに、こちらでできる対策はしておかなくてはならない。

「わかりました。お預かりいたします」

ロイドは、フィオンから手紙を受け取った。

「返事はどうされますか？」

「とりあえず、現状どこまでわかっているのかを知らせるように言っただけでいい。返事はもらってきなくていい。僕はこれからでかけるけど、夜には戻る予定だから」

そう言うと、フィオンはイスから立ち上がる。

「お供せずに大丈夫ですか？」

「ああ。王宮に行くだけだから問題ないよ。兄上に呼び出されてね」
多分今回のクリプトンホテルの一件についてだろうとフィオンは続けた。

王妃もいた場所での事件である。

王に直接報告しないわけにもいかない。

「じゃあ、頼んだよ」

ひらりと軽く手を上げると、フィオンは部屋を出るためにロイドに背を向けた。

「監獄の関係者だったらしいな」

フィオンを謁見室に呼び出すと、重い沈黙の後に王はそう切り出した。

人払いをしてあるため、部屋の出入り口付近には警備のものが待

機しているが、部屋の中にいるのは王とフィオンの二人だけ。そのため、決して大声ではなかった王の言葉は、それでもはつきりとフィオンの耳に届いた。

その内容が、クリプトンホテルでの事件のことを指しているのは聞くまでもない。

「はい。現在はすでに監獄の仕事は辞していましたが、薬の事件の際には監獄で働いていたようです」

上段に腰をおろし自分を見下ろしている王に、フィオンはそう答えた。

その事実からでも、カイサルが惚れ薬事件の犯人の脱獄に關与し、それと今回の事件とが無関係ではないことを示している。

言わずとも、王もフィオンもその事実に関心がついていた。

「現在、捜索も進めているところですが」

「フィオン」

その言葉を王がさえぎる。

まっすぐにフィオンを見据えて、王はゆっくりと言葉をつむいだ。

「もちろん、犯人を捕まえること、その後ろに潜むものを見つけ出すことも急務であり、必要なことだ。だが、マカリストー家の娘にまで直接被害がでた以上、私もただ見ているわけにも行かない。それは、わかるな」

「はい」

「貴族たちの中にも、惚れ薬という禁薬が使われたことに対し、この状況に異を唱えるものも少なくない」

王のもとには、この状況の打破を求める陳情書も少なくなくあげられている。

「フィオン、解毒薬を飲め」

耳に届いた王の言葉に、フィオンの瞳が大きく開いた。

王家として解毒をするための研究をしている。それは分かっている。

ても、王が自分に対し直接それを口にしたのははじめてである。

「兄上、それは」

「お前の一存だけで、本来なら何の関係もなかった彼女を危険な目にあわせている。その自覚をもて」

フィオンに惚れ薬が盛られたことにより、今回の事件に巻き込まれる形となってしまったコレット。

本来ならコレットにはまったく関係のなかった事件である。

いや、薬の効果によって関わるようになってしまったとしても、フィオンが近づかなければこれだけ危険な目にあうことなどなかっただろう。

すべてはフィオンがコレットとの距離を近づけたため。

兄である王の言葉に、フィオンはぎゅっとこぶしを握り締めた。

眉根を寄せながら、それでも自分の言葉にうなずかないフィオンに対し、王は言葉を続ける。

「マカリスター嬢コレットは、この件について了承した」

「……えっ？」

自分の聞いた言葉が信じられず、フィオンは顔を上げた。

「コレットが、僕が解毒薬を飲むことを、ですか？」

「そうだ」

「いつですか」

「今日、先ほど私から説明した」

その言葉に、フィオンは唇をかみ締める。

フィオンが解毒薬を服用する必要性を王自らが説明したとなれば、コレットが異を唱えることなどできるはずがない。

貴族の令嬢であるコレットに、王の言葉は絶対である。

そうわかつてはいても、フィオンの心にずきりと痛みが走る。

しかし、自分のわがままがコレットを危険な目に合わせているという自覚もあるからこそ、それ以上フィオンには何も言えなかった。

「フィオン。このままでは、いくら犯人が見つかったとしても事件がすべて解決したということにはならない。お前が解毒薬を飲まな

い限り、お前も彼女もずっとその呪縛から逃れることなどできないのだぞ」

「……」

「フィオンっ！」

「もし……、僕が解毒薬を服用したのなら」

つぶやくように、静かにフィオンが口を開いた。

「これ以上、犯人以外の件で惚れ薬については触れないでいただけるのでしょうか」

解毒薬を飲んだとして、それでも今後自分がどんな決定をしても薬の影響を疑われるのではなんの意味もない。

「もちろん、そのための解毒だ」

「それは、兄上も含めてと思ってよろしいですか？」

「どういうことだ？」

「もし、僕が解毒薬を飲んでもコレットと一緒にいたいと望んだのなら、兄上はそれを認めてくださいますか」

フィオンの訴えに、王は困ったようにため息をついた。

「フィオン」

「解毒薬を飲んだのなら、その後どのような判断をしてもそれを認めてくださいますか。その後も薬の影響を疑われ、何度も解毒を迫られるのなら何の意味もない」

自分のこれからの判断が、結局はすべて薬のせいになされてしまう。

いくら解毒薬を飲んでも、そこがはつきりしなければまったく意味のないものになるとフィオンは語気を強めた。

「マカリスター嬢の今後を憂える気持ちもわからなくはない。だが、それは王家として対処していく問題だ。お前が背負う必要はない」

このような事件に巻き込まれてしまって、コレットの今後に影響がないとは考えられない。

だが、王妃のおぼえもめでたく、さらに王の後援もあるとなれば、コレットに他の縁談を見つけることは難しいことではない。

「兄上。僕はそのようなことを話しているわけではありません。僕が

もし解毒薬を服用した後、そう申し上げたとき、兄上は惚れ薬の影響のある戯言としてではなく、王弟として、バード公爵としての意見であるとそう受け取ってくださるのかどうかを確認しているのです」

フィオンの真剣な瞳が、王をまっすぐに見つめる。

「わかった。お前が解毒薬を服用し、自分の立場をふまえた上で判断したことなら私は認めよう。もちろん、他の貴族、いや、いかなるものであるとも、解毒薬を服用した後、その件を持ち出すことを禁じる。それでよいな」

一度ゆっくりと目を閉じると、フィオンは苦しそうに息を吐いた。

「……わかりました。仰せに従います」

王は安堵の表情を浮かべながら、うなずいた。

椅子から立ち上がり、しっかりとフィオンを見据える。

「王の名のもとに、バード公爵フィオン・アルファードに命ずる。

惚れ薬に対する解毒薬を服用せよ」

パトリックの言葉を受け取り、フィオンはゆっくりと肩膝をつき頭（うぶ）をたれた。

「御意のままに」

45・確認

王宮の王妃の自室で、ディアナはゆったりとイスにもたれかかった。

「それで、何か動きはありました？」

「いえ、あの後からは特にまわりで怪しい動きはないようです。本日もコールフィールド伯爵邸に訪問されていたらっしゃいましたが、帰りの道ながらも何事もなくもどられていらっしゃいます」

「そう……」

ゆっくりと肘掛に腕をつき頬杖をつきながら、王妃はゆっくりと窓の外に視線を移した。

「このまま静かにしてくださいださればいいのですけれど」

だが、そうはいかないだろうことは簡単に想像ができる。

「まだあなたにはいろいろとやってもらわなくてはいけないことがありますね」

王妃の言葉に少女は深く頭をさげた。

「それと」

「まだ何かありますか？」

「本日はコールフィールド伯爵邸から戻られた後、マカリスター男爵とともに王宮へと上がられていらっしゃいます。ともに陛下に拝謁されたとのことでしたが、王妃さまはご一緒ではなかったのですね」

「陛下と？」

「はい」

王妃はいぶかしむように頬にあてていた手から顔を離すと、少しだけ身を乗り出すように座りなおす。

今日王宮にコレットが来るなんて話は聞いていない。

王が独断でコレットに用事があったということなのか。本人だけでなく父親であるマカリスター男爵もともにとは、いったいどのよ

うな用件だったのか……。

トントン。

ドアが軽くノックされると、扉の外で待機していた侍女が王の
きたことを室内に伝えた。

王妃に報告を行っていた少女は、口をつぐむと深々と頭をたれる。
王の来訪に、王妃はイスから立ち上がるとにこやかに微笑んで王
を出迎えた。

「陛下、いらっしやいませ。急にいらっしやるなんて、どうかなさ
いまして？」

にっこりと微笑んで、自分が座っていたイスの向かいに王を誘^{こほす}
王妃に、王は腰を下ろしながらため息をついた。

「陛下？」

じつと自分を見つめる王に王妃が声をかける。

なんでもないと首をふり、王は侍女が入れたお茶に口をつけた。

「コレットがいらしていたそうですね」

突然話を振られ、王は口に含んだお茶をふきだしそうになって慌
てて飲みくだす。

「そういえば、先ほどフィオンも王宮にあがっていたようですし。
二人に何をいいましたの？」

質問をしておきながら、その実大体のことは予想しているだろう
王妃の言葉に、王であるパトリックは小さくため息をついた。

事実、ここに来たのもそのことを王妃に知らせるためだったのだ
から、隠しておく必要はない。

「……フィオンには、解毒薬を飲ませる」

「ぱちぱちと、王妃は目を瞬かせる。

「どうしてですか？」

「ディアナ」

「解毒をする必要がありましたか？」

「王族に対して禁薬が使用された、その事実をそのまま放っておくわけにはいかない。王妃として、そなたもわかっているはずだ」

「そうですわね。確かに薬が使われたことは問題ですわ。ですけど、私は王妃として、そしてフィオンの義姉として、今までもお話ししてきたつもりです」

王妃として、フィオンの義姉として、その自覚を持ちながらこの一件を見守ってきた。

「以前にもお話ししましたわよね。マカリスター嬢コレットではフィオンのお相手としてご不満ですかと」

「彼女自体に不満があるとかないとか、そういう問題ではないとそのときも話したはずだ」

「陛下。フィオンもいつか結婚しますわ。そのお相手が、コレットではいけませんか？」

「ディアナ！」

「……どんなにそなたが気に入らうと、フィオンが望もうと、解毒薬を服用しない時点で私は王としてそれを受け入れることはできない」

王として、パトリックには国の秩序を守ると言う義務がある。

被害を受けたフィオンがそれをそう思っていないとしても、正すべきところは正す必要があるのだ。今後同じような事件が起こらないようにと。

その上、巻き込まれたコレットにまで危険が及んでいる状況では、解毒薬の服用は急務である。

「フィオンにも、マカリスター男爵とその娘にも、もうこの件は申し渡した」

「……いいいましたの？ それをフィオンに」

「これは王としての命令だ。ディアナ、そなたでもこれを覆すことは許さぬ」

「陛下、フィオンに何をいったかわかってらっしゃいますの？」

「わかっている」

「本当に？ 愛する人を失うという痛みを、あの子に与える可能性
がありますのよ」

コレットがこの国からいなくなるわけではない。

しかし、好きな相手が目の前にいたとしても、その気持ちを失っ
てしまったときの苦しみはいかほどであろうか。

好きな気持ちは、それが薬のせいであろうとなかろうと、芽生え
たり消えていったりすることはある。

だが、好きでいたいと望んだにもかかわらず、それを失うのでは
話が違う。

好きな気持ちがあつた。その気持ちを知っていればなおさら、失
つたときには激しい痛みを伴うことだろう。

それを薬のせいだからと一蹴してしまふことができるだろうか。

「薬のせいであるのなら、その乱れた秩序を修正することも王とし
ての務めだ」

王の意見ははっきりしている。

王妃といえど、命が下つた以上王の言葉を覆すことなど出来ない。

「あの子は、陛下の命になら従います」

つぶやくように、王妃は口を開いた。

王弟という立場で、それより上の立場を望もうと思えばできたか
もしれない義弟おとこ。しかし、彼はそれをせず王である兄の命に従って
きた。それが、この国を思う彼の意思。

「ですから、命令だけはしていただきたくなかつたですわ」

ディアナの言葉に、王は黙り込んだ。

王として、パトリックがフィオンに命ずることはほとんどない。
命ずる以前に、フィオンはその意思をくみ取り行動しているから。

そのフィオンが、今回どうしても望んだのがコレットだった。

惚れ薬が関係していなかったのなら、パトリックもここまでの反

対をすることはなかっただろう。

だが……、事件は起こってしまった。

その上で、二人が出会ったのだ。

「フィオンは、何かいつていまして？」

「解毒薬を飲むのは一度きり。その後は、惚れ薬影響についての意見は、誰のものであるうとも一切受け付けぬと」

「そうでしょうね」

そうでなければ、解毒薬を服用する意味などない。

あの強烈な匂いを思い出し、王妃は眉根をよせた。あれを服用するの、かなりの覚悟を必要としそうだ。

「それと……」

執務室を出て行く際、フィオンが最後に口にした願い。

「解毒薬を服用する前に、マカリストー家の娘に会いたいと。その願いは、叶えよう」

コレットが狙われる事件が起こったのだから、出来ることならこれ以上二人を合わせて犯人を刺激するようなことは避けたいのが現状だ。

しかし、フィオンの気持ちもわかるから王はそれに許可を与えた。

服用後に、フィオンにどんな影響が現れるのか。それを想像すれば、頷いてやるのが兄としてできるせめてもの情けだ。

苦渋の決断をおわせる王の言葉に、ディアナは静かに頭をさげた。

公爵邸のプライベートルームで、フィオンはグラスにワインを注ぐと、それを一気にあおった。テーブルに空になったグラスを置けば、静かな室内にはやけによく響く。

少し酔いたい気分だというのになかなか酔いはまわってはくれず、妙に頭の一部分だけがはつきりとしていた。普段、酒にのまれないのは自分の立場上便利なことだと思っていたが、こんなときはその体質が少しだけ恨めしくなる。

小さく息を吐いて、カーテンの開けたままになっている窓を見上げた。

夜も更けている時間だというのに、窓から見える夜空は明るい。

その光が、窓から室内に青い光をおとす。

その光に誘われるように、フィオンはベランダへと足を運んだ。手すりにもたれかかるように体重をあずけると、そのまま空を見上げる。

そこには、世界を青い光で包むもとなっているまるい月がうかんでいた。

夜だというのに、空にかかる雲はその光で白さを浮かび上がらせ、世界はまぶしいほどの光に照らされている。高台にあるバード公爵邸からは、その光で王都の広い範囲を見渡すことができた。

ようやく温度を下げ始めた夏の夜風が、さらりとフィオンの髪を揺らす。

風に優しく髪を遊ばれるのをそのままに、フィオンは町をじっと見つめた。

静かに時間がながれていくなか、フィオンは昼間の兄の言葉を思い出し小さくため息をついた。

少し疲れていたのかもしれない。

自分を取り巻くまわりの状況に、自分の未来に。

バード公爵であり、王弟でもある自分。その立場には、おのずと責任と義務が課せられる。

結婚もその一つ。

国内の安定と、王家の安寧、そして継いだ公爵家の存続のために、それに相応しい女性との結婚はフィオンに幼いころからかせられた義務である。

別に、それが嫌だとか、逃げたいとか思ったことなどない。

結婚相手が誰であろうとそれなりにうまくやっていく自信はあった。相手に自分を好きにさせる自信もあつたし、結婚して幸せにする確信もある。

だが……。

結婚相手が、そしてその家族や親族が王位を望むものではないこと。現王パトリックに反旗をひるがえす可能性が低く、フィオンを政治的に利用し意のままに操ろうと考えないもの。

それがバード公爵として、王弟としてのフィオンの結婚相手の第一条件。

しかし、その第一条件を満たす相手が、貴族の勢力図からなかなかうまく行かないのが現状だった。

結婚相手はたった一人。

誰を選ぶかで、バード公爵家だけではない、国の状況が一変する可能性もある。

第一条件にもっとも近い相手というのが、親族でもあるサーランド侯爵家のモニカだ。

モニカがフィオンの婚約者候補となっていたことに異を唱えていたことを思い出し、フィオンは口元をゆるめた。あれだけきっぱりと言われれば、それはそれで清々しいくらいだ。

それほどまでに気軽に話すことができるということであり、ある意味うまくやっていける可能性もある。モニカにはつきりと決まれば、彼女の意見などあつてないようなものが貴族の社会である。しかし、これ以上親族間での婚姻が続けば、国内の貴族の反感も大きくなる。それに反する勢力というものも結びついていく可能性もあつた。

それならば、第一条件を満たさずとも、それを取り込む形で婚姻を結び、相手を抑え込むという方法もある。その観点からみる結婚相手の筆頭がオースティン公爵家のアニエス、そして王宮での役職を持つノーフォーク伯爵家のジュリアだ。

彼らが、政治的にフィオンを利用しようとしていることもよくわかつている。だが、それを内に取り込むことによって、反対に動きを封じていくこともできる。

しかしそれは、今まで戦っていた戦場をバード公爵家の中にまで引き入れることを意味していた。

そんな状況だったから、婚約者候補となっていた令嬢を避け他の女性を選ぶには、かなりの大きな理由が必要だった。

誰もが納得する、いや納得などしなくともいい。フィオンが相手となる女性を名指しするだけの、何らかの理由が。

そう、それこそ今回の惚れ薬の事件のような。

初めてコレットを見たときのことは、今でもよく覚えている。

可愛らしい若葉色のドレスに身を包んだコレットに、一目で心を奪われた。心臓を鷲掴みにされたような衝撃とともに、大きく鼓動がはねあがり、近づけば、透き通るような綺麗な琥珀色の瞳をずっと見ていたくて目が離せなくなった。

それが薬のせいだったのか、それとも本当に一目惚れというもの

だったのか、今となってはよくわからない。

それでも、その後ずっとコレットと一緒にいたいと思ったのは確かに自分の意思だ。

彼女ならいいと思ったのだ。

自分の結婚相手として。

そして、フィオンにとってもこれはまたとないチャンスだった。

自分に王位を望む貴族の令嬢を妻にしたとしても、フィオンにはそれを押さえ込むだけの用意はある。それでも、そうではない未来が開けた瞬間だった。

コレットにとっては、青天の霹靂である。

いくらなんでも惚れ薬で好きになったなど、相手が王弟であるとはいえ、コレットにはフィオンに対して怒る権利があった。

フィオンも、コレットにとっては侮辱だと怒られるだけのことを頼んだ自覚はある。

自分でも辛い立場になるだろうに、それでもコレットはフィオンのわがままを受け入れてくれた。

コレットの言葉に一喜一憂する自分の気持ちを察したかのように、フィオンを気遣いながら。

どんなにそれが嬉しかったか、彼女にわかるだろうか。

コレット自身が側にいるだけで、肩の力がすんとおりて、力がわいてくるような気がした。愛しくて、それを隠す必要もないことに、さらに気持ちを抑えられなくなった。

マカリスター男爵家が、フィオンにとって政治的な意味からも受け入れられる家柄だったからというだけではない。コレット自身がフィオンにとって必要だった。

それは甘えだろうか。

たった一つだけでいい、安らげる場所を欲してしまった自分の。

自分の手のひらを、フィオンはじっと見つめた。

青く光る月明かりを閉じ込めるかのように、フィオンは手を握り締める。

コレットに会いたい。

彼女を思うだけで、こんなに愛しさがつのっていく。だが……。

フィオンはもう一度、青い光に包まれる町を見下ろした。

同じこの光の下にコレットがいる。

同じ光のもとで、同じ夜のなかにいるというのに、その距離はとても遠く感じられる。

昼間、王に呼び出されたコレット。

彼女は、どんな気持ちでその要求を受け入れたのだろうか。それを思うだけで、フィオンの胸がずきりと痛んだ。

「コレット。君は今、どんな気持ちでいるんだろう。少しは僕のこと、思ってくれている?」

フィオンの言葉は、誰に聞かれることもなく月明かりの中に溶けていった。

食後の紅茶のカップをもったままぼんやりとかたまっている姉に、アンリは盛大にため息をついた。

食事もほとんど手をつけず、やっと口に運んだと思ったら急に行動がとまってしまふ。今日、王宮から帰ってきてからずっとこの調子である。

まったく、見ているほうが疲れてくる。

「コレット」

返事がない。

「コレットっ！」

「……え？」

やっと呼ばれたことに気がついて、コレットはぼんやりとテーブルを見つめていた視線を上げた。

この調子では、カップを持っている間にデザートが置かれたことすら気がつかなかったに違いない。

「あのさ、ぼんやりするのは勝手だけど、食事が終わってからし
てくれない？」

「……うん。ごめんなさい」

そういつて、コレットは持ち上げたカップにまったく口をつけな
いまま、それをテーブルの上に戻した。

いつもなら反撃にもならない反撃をしてくるのに、今日はそれす
らもない。

「何かあった？」

王宮で。

帰ってきてから、父親もコレットも何があったのかを口にしない。
その後、両親は知り合いの貴族の家に出かけて行って、今食卓に
ついてるのはアンリとコレットだけである。

理由もわからず目の前で不審な行動をされては、アンリもたまた

ない。

「何か……」

思い出すように視線を泳がせた後、コレットの動きがまたとまる。しばらく待ってみても何も言い出さないコレットに業を煮やし、アンリが口を開こうとする。が、声を出す前にコレットがイスから立ち上がった。

「コレット？」

「……ごめんなさい、少し疲れたみたい。先に休むね」

ナプキンをテーブルの上に置くと、コレットはそのまま部屋から出て行く。

わけのわからぬまま残されたアンリは、コレットが出て行ったドアを見ながら大きく息を吐くとイスにどかりと体重をあずけた。

自室にもどるとすぐに、部屋に入ってきたメイドによって、コレットはてきぱきと夜着に着替えさせられた。ぼんやりとしているうちにすべてが終わる。

何も言わないコレットに、メイドは今日の仕事は終わりと受け取り頭をさげて部屋から出て行った。

一人部屋に残ったコレットは、ぽすんとベッドに腰を下ろす。やわらかなベッドに体が押し返されるのをそのままに、コレットは倒れるようにベッドに横になった。

蜀台にもされた灯りだけの室内。

両親ともに出払った邸宅は、今夜はとても静かだ。

そんななか、今日何度も頭の中を駆け巡った言葉がありありとコレットの耳に聞こえたような気がした。

「すまかった」

そういつて頭をさげたのは、誰あろうこの国の王、パトリック・アルファードその人だった。

父とともに呼び出された王宮。

何があったのかと思ひ通されたのは、王の謁見室だった。

マカリスター男爵である父とともに王へのあいさつをすませると、コレットに直接話があるという王に別室へとつれてこられた。

何があるのだろうと不安になったコレットに、王は開口一番にそういつて頭をさげたのである。

「別荘での一件、報告は受けている。危険な目にあわせてすまなかつたな」

「と、とんでもございません。こちらこそ大変なご迷惑をおかけする事になりました、本当に申し訳ありませんでした」

王の言葉に、コレットは深く腰をおとし頭をさげた。

別荘での一件は、コレットの危機意識の低さが招いたものである。少なくとも、コレットはそう思っている。それを王に頭をさげられでは、申し訳なくていたたまれない。

「以前から、そなたには謝らなければならぬと思っていた。弟が迷惑をかけた。今回のことも、あれがそなたにかかわらなければ起こらなかったことだろう」

フィオンがコレットに近づかなければ、事件になど巻き込まれることはなかった。

惚れ薬の件は予測ができなくても、その後コレットにふりかかった事柄は、とめることができたのである。

「もう、そなたに迷惑はかけぬと約束しよう」

「……えっ？」

どういう意味だろう。

「フィオンには解毒薬を飲ませる」

王の言葉に、コレットはびくんと肩を震わせた。

一瞬時間が、とまったような気がした。

「そうすれば惚れ薬の効果は消える。このような事件に巻き込んで迷惑をかけたが、これで少しはそなたの周りも落ち着こう」

「……は、はい」

返事をしたコレットの声がかすれる。

どうしたのだろう。

口の中がからからに乾いて、うまく言葉がでない。

震える手を押さえるように、コレットはぎゅっとしぶしを握り締めた。

頭から血の気が引いて、なんだかくらくらする。

そんなコレットの様子に気が付いたのだろうか。王はゆっくりとコレットに近づくと、そばのイスに座らせた。コレットは促されるままに腰をおろす。

「もつと早くに、フィオンには解毒薬を服用させるべきだった。そなたのためにも、フィオンのためにも、国のためにも。国王としてフィオンの兄として決断を誤ったのは私だ」

座ったコレットとの前に立つと、王は言葉が続けた。

「今後も、そなたにはこの事件の件で不快な思いをすることがあるかもしれぬ。だが、今後のそなたへの処遇も名誉もすべて王家が保障しよう」

フィオンに解毒薬が使用されれば、コレットとフィオンの関係は現在とは異なったものとなる。

薬が原因である以上、フィオンに責任を取らせることはできない。

「フィオンを許してやって欲しい」

許す……？

失礼だということさえ失念し、コレットは王を見つめた。

「そなたを事件にまきこんだこと。そして、解毒をした後のことも頭の中でそれを理解すると、それにあわせてコレットの目が大きく見開いた。

今までコレットに接してきたフィオンとはまるで別人のような態度になってしまつかもしれない。解毒をするということはそういうことだ。

それは、王がフィオンのことを大切だと思っているからこそその言

葉。その思いが痛いほどコレットに伝わってきた。

どうして、ここで嫌ということなんてできるだろう。

一国の王が、ここまで心を砕いてくれているのに。

胸が痛い。

呼吸ができなくなるかと思うくらいに、痛む。

でも、息を止めて無理やりにその痛みを押し込めると、コレットはイスから腰をあげ王に深く頭をさげた。

コレットに残された答えは、一つしかなかったから。

思い出して、コレットの胸がずきりと痛んだ。

押し込めていた感情が、それをきっかけに浮上してくる。

ぼろりと、涙がこぼれた。

それはすぐにやわらかな布団の上にこぼれ落ちていく。ぼんやりと横になったまま、ぬぐうこともなくコレットは静かに涙を落とした。

わかっていた。

最初からこの日が来ることはわかった上で、フィオンの側にいたのは自分だ。

解毒薬ができるまでの間だと、フィオンの側に一緒にいるのはその間だけだと、自分でもそう思っていた。

だから、ずっと好きになってはいけないと思っていたのに……。

フィオンの顔が、コレットの脳裏に浮かんでは消えていく。

優しく自分を見つめるエメラルドの瞳も、いたずらっぽく笑いかける姿も、そして、少しさびしそくに遠くを見ている目も、全部が愛しくて、愛しくて、苦しい。

どのくらい時間がたったのだろうか。

ようやく涙が止まるころには、蜀台の灯りはいつのまにか消えて

いた。

泣いていたせいだろうか。頭が痛くて、思考がうまく働かない。それでも、妙に部屋の中が明るいことに気がつく、コレットはゆっくりと体を起こした。

カーテンの隙間から入ってくる青い光に誘われるように窓の側に近づくと、カーテンを開ける。

その青い光のまぶしさに、コレットは目を細めた。

高くのぼったまるい月が、明るく世界を照らしていた。

静かな青い世界。

窓を開ければ、かすかに昼間の熱気をおびた空気が夏の香りを運んでくる。

あの日も月が明るかったと、コレットはぼんやりと思い出す。

初めてフィオンと出会った日。

ルノワール伯爵家のパーティーのあの夜。

あのときは、こんな気持ちになるなんて想像もしていなかったのに。

月の青い光を浴びながら、コレットは目を閉じた。

春から夏へ、出会ってからほんの数ヶ月の時間しかたっていない。だが時間を巻き戻すことができないように、この気持ちをなかつたことになんてできそうになかつた。

でも、だからといってどうすればいいというのだろう。

ただ、一つだけはっきりしていることは……。

(好きななんて、いえない)

フィオンが解毒薬を服用しなければならぬ状況で、もう自分の気持ちを伝えることなんてできない。

その苦しさに、コレットは窓枠にもたれかかったまま、ゆっくりとその場にしゃがみこんだ。

48・不安

古い階段は、おりるたびにギシギシと嫌な音をたてる。

できるだけ音をたてないようにと足を忍ばせるが、階段をおり廊下に踏み出したときにもっとも大きく床がきしむ音が響き、ルッツはその場に立ち止まったまま大きくため息をついた。

古い集合住宅。

部屋には小さな暖炉があり、わずかに煮炊きができるだけの簡素な部屋の集まりである。床や階段は今にも抜けそうなほどに歩くとびにきしむが、まだ抜けた箇所がないだけましといったところだろうか。

音をたてずに歩こうとしてみても、気にすればするだけ大きな音が出てくるような気がする。ルッツは音をたてずに歩くことを諦めて歩き続けた。

少し傾いた玄関のドアを開けると、人がいないことを確かめて外にでる。

別に自分が悪いことをしているわけではないのに、人目を気にしているような自分の行動に、今日何度目かわからないため息がでた。
(まったく、引き受けるんじゃないかなあ)

心の中でそうごちると、ルッツは足早にその場を立ち去ろうと歩調を速めた。

二件先の建物の路地を曲がって裏道を進んでいけば、人目につかずに通りに行けることができる。そうすればそこから乗合馬車に乗って、と頭の中で道筋を確認しながら古い石畳を足早に進んでいく。

(それにしても、どうするかな。これ)

ルッツは手に持っていた鍵に目をおとす。

この鍵を渡す人物。

ルッツ頭の中に、以前に会ったとある人物の顔が自然と浮かんできた。しかし、つてがあるわけでもないルッツが簡単に会える人物

ではない。

(まあ、もうしばらく待つてみるか)

手のひらの鍵をぎゅっと握り締めると、それを懐にしまいこんだ。そのまま路地に入ろうとした瞬間、ぐいっと肩をつかまれ、ルッツははじめられたように振り返った。

見られるな、それが依頼の第一条件だったのに……。

一瞬で、冷たい汗が体中から噴出したような気がした。

自分の肩をつかんでいる人物を認識すると、ルッツはあつと声をあげそうになるのをなんとかこらえた。その人物には見覚えがある。だが、なぜこんなところにいるのだろうか。

「あ、あの……」

「私のことを覚えていたようですね。それなら話ははやい」
相手の意図がくみ取れず、ルッツはごくりと息を飲んだ。

「私と一緒にきていただきます。拒否は受け入れられません」

自分に承諾を求めているわけではないその言葉は、決定事項をただ伝達しているのみ。否など、ルッツには言えるはずもない。

しかし、ここで会ったのも、何かの縁であるのかもしれない。

先ほど頭に浮かんだ人物の顔を、ルッツはもう一度しっかりと思い浮かべる。そして、目の前にいる人物をまっすぐに見つめると、しっかりと頷いた。

「伺わせていただきます。僕もご報告したいことがあったんです」

王宮の一室に通されると、コレットの後ろでパターンと扉が閉められた。

部屋の中にひとり残されたコレットは、ゆっくりとあたりを見渡すと窓辺へと近づく。

部屋の中には、綺麗な絹張りのソファも、飴色に磨きこまれた彫りの美しい木製の肘掛イスも置いてあったが、なんだか座る気分にはなれなかった。

現在いる二階の窓から外を見下ろせば、先ほど自分も通った王宮の門のあたりがよく見えた。

綺麗に整えられた木々が整然とならび、夏の眩しい光を受けて濃い緑色の葉が艶やかに輝いている。室内から見ると、眩しいほどに輝いている外の世界。

その明るい世界から、まるで一人取り残されてしまったような感覚におちいり、コレットはそつと胸元に手をあてる。やわらかな空の色を思わせる青のドレスの胸元にあるのは、花模様のあしらわれたムーンストーンのネックレス。

『癒しの効果もあるから……』

そう言われた言葉が、コレットの脳裏をよぎった。

お守りだともらったネックレス。それをもらった時には、こんなときに頼ることになるとは思ってもいなかった。

少しでも冷静になれるようにと願いながら、呼吸を整えるために大きく息を吸い込むとゆっくりと吐き出す。

それを何度か繰り返したところで、門から王宮へと続くアプローチに馬車が入ってくるのが視界に入り、コレットははっとして顔をあげた。よく見れば、すでに何台かの馬車は王宮に主を降ろしているところだった。

続々と王宮に集まる人々の姿に、否が応でも今日ここで何が行われるのかを目の前に突きつけられたような気がして、ずきりとコレットの胸が痛んだ。

ネックレスに触れていた手に無意識に力が入る。

考えては、いけない。

今自分が何を考えてもこれから起こることは変えようもないことで、この国にとって、フィオンにとっても必要なことなのだ。

王さまに会ってから、何度も繰り返していた言葉を自分に言いきかせる。

だが、悲鳴を上げるように痛み始める胸を沈めることができない。それどころか、これから失うであろうものの大きさが頭をよぎると、コレットの体が小さく震えた。

目の前の光景を見ていることができず、コレットは窓から離れる。

不意に室内にノックの音が響いた。

従僕らしき男性が開いた扉から、フィオンが部屋へと入ってくる。振り返ったコレットと目が合うと、彼は優しく微笑みかけた。

扉が開けられ室内へと入ったフィオンを見ただけで、鼓動は大きく跳ね上がる。

その気持ちを悟られないように視線を落とすと、コレットは膝を折ってゆっくりと頭をたれた。フィオンは、頭をさげたコレットに足早に近づく。

「ごめん。待たせたね」

フィオンはコレット前でひざまずき彼女の手をとると、ゆっくりと指先に口付けを落とした。

そのまま上を見上げたフィオンと視線が絡む。

まっすぐな瞳で熱く見つめられ、コレットは目を合わせることができなくてわずかに視線をそらせた。

自分の気持ちを見透かされそうで、視線を合わせていることができなかつた。

口づけられた指先が、熱を持ったように熱い。

視線を合わせなくても、エメラルドの瞳に見つめられていることを感じ、した耳朵がちりちりと熱を帯びていくのがわかる。

ぎゅっとコレットの手を握り締めたまま、フィオンが立ち上がった。

た。コレットを促してソファに座らせると、フィオンもその隣に腰をおろした。

「腕の怪我は大丈夫？ 痛みはない？」

「はい。もう大丈夫です。ご心配をおかけして、申し訳ありませんでした」

腕にはもう包帯はしていない。

痣もほとんど治っている。ときどき肘の部分に痛みを感じることもあるが、それは肘をどこか硬い場所にあてたときなどで、日常生活にはまったく問題がない。

「そう。それならよかった」

フィオンの視線が、コレットの首筋に落ちた。そこにあるものを確認すると、フィオンの指がコレットの肩の辺りにそっと触れた。

「着けてきてくれたんだね。ありがとう」

フィオンがプレゼントしたムーンストーンネックレス。それをなぞるようにフィオンの指が動く。

衣服ごしにフィオンの指先を感じ、コレットの視線が泳いだ。

ちらりと視線をあげると、フィオンがネックレスを見ながらとても嬉しそうに微笑んでいる。それを見ると、コレットも嬉しくなつて頬がゆるんだ。

「……先日はすまなかった。兄上が急に呼び出して、驚かせてしまったね」

少し静かな時間が流れた後、フィオンが口を開いた。

急に話題が変わり、びくとコレットの肩が震える。

今日、フィオンに会うことになるが決まったときから、この話題がのぼることは覚悟していた。覚悟はしていたが、聞きたくない。聞いていたくなかった。

耳をふさぎたい衝動を必死でこらえて、コレットは首を横に振る。

驚いたのは事実でも、フィオンが謝る必要などまったくない。それは王がフィオンやコレットのためを思っただけで、

コレットにはよく分かっている。

むしろ今、フィオンに謝られることの方が辛かった。

「兄上からも聞いたとおり、僕はこれから解毒薬を飲まなくてはいけない」

「……はい」

フィオンの言葉に、コレットは頷いた。

頷いた拍子に少しだけ顔をあげると、自分を見つめているフィオンと間近に視線が絡んだ。思考がうまく働かず、視線をそらすことすら忘れて、コレットはじっとフィオンを見つめる。

少し寂しそうに笑うと、フィオンはぽつりとつぶやいた。

「そうしないといういる納得しない人たちが多くて、困ったものだね」

困ったように笑いながらも、フィオンの瞳には迷いがなかった。

そう、彼は決めてしまったのだ。

解毒薬の服用とその後のことも……。

王命が下り、フィオンもコレットもそれを受け入れた。それはフィオンを思うゆえの命令だったから、もちろんコレットに拒否などできるわけではないが、自分でもよく考え覚悟を決めたはずだった。

それでも、気持ちは素直に従うことができない。

いったい自分はどうしたいのだろう。

解毒薬を服用することになれば、もうフィオンの言動に薬の影響があることを不安に思う必要もなくなる。国内もこの騒ぎに終止符を打ち落ち着くことだろう。だが、解毒薬を服用することですべてが以前のとおりになるのなら、フィオンとの接点も、こうして言葉を交わすこともなくなってしまうかもしれない。

飲んで欲しい。

でも、飲んで欲しくない。

フィオンのため、国のため、いろいろな理由をつけて自分を納得させようとしても、コレットの中でもどうしたいのか、どうなって

欲しいのか、混乱していてよく分からない。

コレットのまぶたが熱くなって、涙が出そうになる。それをぐっところえるように、体に力をいれた。

それに反発するように、喉の奥がひりひりと痛んでくる。涙を見られるのを避けるように、コレットは膝の上に置いた手に視線を落とした。

フィオンの手が、ソファの背もたれにのばされたことを気配で感じた。少しだけ意識をそちらに向けた刹那、フィオンがコレットの耳元に顔を寄せる。

触れるか触れないかというその距離に、空気をつたってくるわずかな温もりすら熱い。

「君にとって、僕の想いは迷惑でしかなかった？」

「……………えっ？」

耳元でささやかれた声に、ぱちぱちとコレットは目を瞬かせる。

一瞬、何を言われているのかわからなかった。

（迷惑……………？）

迷惑だなんて思ったことなどなかった。

惚れ薬の一件で戸惑ったことは多かったし、危険な目にもあった。それでも、フィオン本人を迷惑だなんておもったことなど一度もない。

迷惑どころか、いつも助けてもらっていたような気がする。

辛いときも、困ったときも、危険な目にあったときも、いつもフィオンがコレットの側にいてくれた。

「どう……………して？」

顔をあげれば、辛そうな表情をしながらまっすぐに自分を見つめてくるエメラルドの瞳がある。それは、自分が不安に押しつぶされてしまいそうな表情をしているからだ、コレットには気がつくことができない。

ぼろりとコレットの瞳から涙がこぼれた。
迷惑なんかじゃない。

ただ、好きで、側にいたくて。でも、だからこそどうしていいの
か分からなくて。

「ごめん。君には辛い思いをたくさんさせた」

「ち、ちが……」

否定しようと口を開く。

でも、涙が止まらなくて、胸が苦しくて、のどが締め付けられる
ように痛むから、うまく声がでない。それでも、フィオンの言葉を
否定したくて、コレットは必死で首を横に振った。

違う。

違うっ！

迷惑でも、嫌いでもない。私は……。

何とか声を絞り出そうと息を吸い込んだ次の瞬間、コレットはフ
イオンに引き寄せられた。背中に大きな手の温もりを感じながら、
ぎゅっと抱きすくめられる。

動きを封じられるようにすっぽりと抱きしめられれば、フィオン
が好きだということ以外何も考えられない。

少しだけ力が緩められ、フィオンはコレットの顔を上にむける。
ゆっくりとフィオンの唇がコレットの目元に落ちてきた。それを受
け入れながら、コレットは静かに目を閉じた。

濡れて冷たくなった頬に熱いほどのぬくもりを感じる。

熱い吐息とともに唇が離れると、コレットは目を開く。

間近に見えるエメラルドの瞳に、もう我慢することなんてできな
かった。

「……私……」

これから解毒薬を服用しなくてはいけない。だから、思いを伝え
ては迷惑になると思っていた。

それでも。

なんとか搾り出すように言葉をつむぐ。

「私……っ！ フィオンさまのことが、す……」

「失礼します」

コレットが言い終わらないうちに、その声に覆いかぶさるようにしてノックの音が響いたかと思うと、部屋の扉が開かれた。

「準備が調いましてございます。別室へのご移動をお願いします」

従僕の言葉が聞こえなかったように、フィオンはコレットを見つめたまま動かない。

「フィオンさま。ご移動を……」

聞こえなかったのかとのおも食い下がる従僕に、フィオンは小さくため息をついた。

「君は、誰に命令してる？」

「い、いえ、決して命令しているわけでは……」

慌てたように、従僕は頭をさげた。

「もうしばらく、待っている」

有無を言わず命じると、自分を見上げるコレットにフィオンは優しく微笑みかけた。

コレットの頬に手をあて、涙をぬぐう。

「時間だね」

「あっ……」

「コレット、君が好きだよ。……もし、君も少しでも僕を好きだと思ってくれるのなら、この先何があったとしても僕を信じて欲しい」

「フィオンさま」

コレットに微笑みかけ額にそっと口付けると、フィオンはソファから立ち上がった。コレットに手を差し伸べしっかりと握り締める。彼女が立ち上がるのを確認し、部屋の隅で待機していた従僕に顔を向けた。

「行くところ。案内を」

コレットの背丈の倍以上ありそうな扉をくぐって室内にはいると、最初に目に飛び込んできたのは大きなシャンデリアだった。その眩しい光に、コレットは思わず目を伏せた。

案内されたのは、王宮の一画にある会議場である。

王や上流貴族たちが国の案件などを話し合うこの議場の中は、壁一面に国の成り立ちが描かれた大きなタペストリーが何枚もかけられ、大きなシャンデリアの光がそれらを照らし荘厳なまでに浮かび上がらせていた。

入口の扉からまっすぐに赤い模様入りの絨毯が敷かれ、その奥の一段高い場所には王と王妃のための玉座があり、絨毯の両脇には議題に参加するための貴族たちの席が用意されている。

王弟の来室を告げられ、すでに席についていた貴族たちが、一斉に椅子から立ち上がり入口の方へと視線を向けた。頭を下げようとして、フィオンと一緒に入ってきた人物に皆の視線が固まる。

本日の主役であるフィオン。彼が伴ってきた人物にそれぞれが顔を見合わせ、室内がざわついた。

皆の視線を一気に浴び、コレットは足がすくんでしまいそうになる。

この議場は、王や上流貴族たちが国の案件についてなどを話し合う議場である。一男爵家の令嬢であるコレットが本来踏み入れるような場所ではない。

しかし、コレット自身もこの場にと王さまからの使いに言われてしまえば、コレットに断る権限などなかった。

コレットの手を握っていたフィオン、その手に力が込められたのを感じる。はっとして、自分の手をとって半歩前を歩いていたフィ

オンを見上げると、彼はコレットに優しく微笑みかけた。

シャンドリアの明かりに照らされて、フィオンの金色の髪がキラキラと輝く。エメラルドの瞳が、大丈夫だとコレットに目で教えてくれる。何も心配することはないと。

それだけで、コレットの胸に切ないほどの愛しさがこみあげてくる。

これから解毒薬を飲むのは、フィオンである。

一番大変であるのは彼であるはずなのに、こんな時でもコレットを大切にしてくれるその優しさに胸が痛くなる。

そんなフィオンに答えるように、コレットも何とか少しだけ頬をゆるめ、まっすぐに前を向いて歩きだした。

貴族たちの視線を受けながら、扉からまっすぐ正面の壇上に座っている王と王妃の前にフィオンとコレットは進み出た。フィオンが胸に手を当てて深く頭を下げると、コレットもそれにならい、ドレスに手を添え深く腰を落とし頭を下げた。

「兄上、義姉上。お待たせしてしまい申し訳ありません」

「いや、私が許可を出したことだ。問題ない」

持っていた書類から視線をあげると、王はしっかりとフィオンとコレットを見た。その後ゆっくりと議場を見渡すと、ざわついた室内はしんと静まり返った。

それを見届けると、王は貴族たちに着席を許した。皆が椅子へと腰を下ろす。フィオンとコレットも許可を受け、顔をあげる。

「これより、王弟であるバード公爵フィオン・アルファードに用いられた惚れ薬の解毒の作業を執り行う」

王は持っていた紙を近くにいた侍従にわたし、それをフィオンの前に広げさせた。

「それは、今日来た貴族たちの署名だ」

広げられた長い巻紙には、有力貴族たちの名がずらりと書き込まれている。

それをしっかりと確認するようにフィオンは視線を落した。

「今回の解毒を見届ける件、そして、服用後惚れ薬の影響について異議を申し立てるのを禁ずる件についての承諾書でもある。もちろん、本日欠席したものたちにも知らせは行っている。後からの不服は一切受け入れられないともな」

言いたいことがあれば、この場、この議場内で行わなければならない。

本日以降、それを言い出してもそれは国として取扱いを行わないことを示している。

「兄上。格別の配慮、感謝いたします」

「うむ。では、準備に入るように」

「はい」

そういうと、フィオンは再び王に頭を下げた。

「お待ちください」

フィオンが動こうとしたその時、議場に声が響いた。

皆の視線がそちらに向く。

「ノーフォーク伯爵。何か問題でも？」

ノーフォーク伯爵は、立ち上がると頭を下げた。

「発言をお許しくださりありがとうございます。大切な案件を前に一つ気になるがございます」

コホンと一つ咳をすると、ノーフォーク伯爵はちらりとコレットをみた。

「ここに、この場所にそぐわぬものが混じっているようですが」

ノーフォーク伯爵の視線の意味に、皆がコレットに視線向けた。

それは、コレットがこの場に入ってきた時より皆が感じていた違和感である。

ここに集められたのは、王に王妃、当事者であるフィオンと解毒を担当する医師たち。そして、この件を見届けるために立会人とし

てこの場にきた貴族たちである。

国の重要事項でもあるこの場に、貴族とはいえ爵位の低い男爵家、そしてその一令嬢であるコレットがいていい場所ではないと伯爵は申し出た。

皆の視線から隠すように、フィオンはそつとコレットを自分の背にかばう。

「彼女も今回の関係者ですよ。もちろん、被害者としてですが」

マカリスター男爵家がこの惚れ薬の事件に直接かかわった犯人でないことは、公然の事実だ。マカリスター男爵家を、そしてコレットを今回の事件に巻き込んだのは、他でもないフィオン自身である。ノーフォーク伯爵の意見に、王は小さくため息をついた。皆の目を見れば、同じ意見のものが大半を占めているようだ。

「失礼。その件であれば、私から申し上げてもよろしいですかな」

フィオンとノーフォーク伯爵の視線が対峙するなか、オーステイン公爵がゆつくりと立ち上がった。深緑の鋭い眼光が皆を一蹴する。王がオーステイン公爵の発言を許可すると、公爵は少しだけ頭を下げた。

「今回、そのものがこの場に来ることに關しては、私が陛下に申し上げた。解毒の必要性の件とともに」

「な、なぜそのような」

「現実というものを、知っておく必要があるでしょう。今後のためにもね」

そういうと、オーステイン公爵は目は笑っていない状況で、少しだけ頬をあげた。

今後、フィオンが解毒を終えた後に、コレットやマカリスター男爵家からの苦情を防ぐためだとオーステイン公爵は言外に含ませたのである。

その言葉に、ノーフォーク伯爵は納得したようにうなづく。

発言を終えたオーステイン公爵が、ちらりとコレットを一瞥した。その深緑の瞳の奥に、コレットへの侮蔑ぶへつの色を感じ、コレットの体

が小さく震えた。

オースティン公爵もノーフォーク伯爵も、いや、ここに来てこの一連の事件について見届けようとしている貴族のほとんどが、コレットが今後、フィオンの今までの行動を盾に彼に責任を迫る可能性があると考えているのだ。

自分がどう思われているのかをあらためて感じて、コレットは唇をかみしめた。

「皆さんのお話は、もうよろしいかしら」

あたりが静かになったことを確認すると、今まで黙って事の成り行きを見守っていた王妃が口を開いた。

「それでは、今後こそ解毒の準備にとりかかってもよろしいですね。それではコレット、こちらにあなたの席を用意させましたから、いらつしやいな」

そう言って王妃が指示した場所に、コレットは大きく目を見開いた。

示されたのは、王妃のすぐ近く。王と王妃の席がある場所より一段低い場所に用意された椅子だった。

そこは、王と王妃に次ぐ上座である。

王妃の言葉とはいえ、コレットは躊躇しあたりに視線を泳がせた。呼ばれたからと言って、はいそうですかと行けるような場所ではない。

戸惑っているコレットに、フィオンはにつこりとほほ笑んだ。

「大丈夫だよ。君は堂々としていいんだ」

そういうと、フィオンはそのままコレットを王妃のそばの椅子にエスコートするために一步を踏み出した。

「お待ちください」

「どうかなさいました?」

オースティン公爵の声に、フィオンがゆっくりと振り向く。

「王妃さま、それはお戯れが過ぎましよう。そこは、そのものが座

るべき場所ではありませんまい」

「おっしゃる意味がわかりませんわ。オースティン公爵」

「本日はそのものの父親も出席している様子。その保護者である男爵のそばが相応と思われませんが」

父親の名前が出て、コレットははつと顔をあげた。先ほどまでまともに見ることもできなかった貴族の席をしっかりと見れば、その中の後列に父の姿を確認することができた。

王家からの使いの馬車に乗って王宮に上がったコレットと違い、父親は貴族の一員として自らこの場所に赴いている。そのため、今日コレットと父が行動を共にすることがなかったため失念していた。コレットよりも先にこの場において、気まづい思いをしていたであろう父親は、それでもしつかりと前を向き静かに席に座っている。コレットと目があつた男爵は、少しだけ表情を和らげしつかりとうなずいた。

そんな父親の態度に、コレットは少しだけ勇気づけられ背筋を伸ばす。

オースティン公爵の言葉に、王妃はさも不思議そうな表情を浮かべてにつこりとほほ笑む。

「まあ、マカリストー男爵は本日貴族の一員として参加していらっしやいますのよ？ コレットとは意味合いが異なりますわ」

「王妃さま、議場での秩序は守っていたただかなければ今後の示しもつきません」

「この件は、僕が兄上と義姉上にお願ひしたのです」

騒ぎが大きくなる気配を止めたのは、フィオンの一言だった。

「フィオン殿下、それはどういふことですか」

まっすぐにフィオンはオースティン公爵と向き合った。

「コレットを巻き込んだのは僕です。彼女がこの事件にかかわることになったのも、今こうしてこの場にいないてはならない状況をつくったのも、すべては僕の責任です」

「それは薬の効果のためでしょう。問題は、殿下がそのような状態なのをいいことに、それに便乗し、自分の立場というものを失念しているものにこそあるのではございませんか」

「たとえ薬の影響があつたとしても、彼女を選んだのは僕です。本来なら、僕がこの場で最後まで責任を果たす必要がある。しかし、今日これからのことを考えればそれも難しい可能性があります。ですから、義姉上にお願ひしたのです。それはご理解いただけないでしょうか」

「わたくしも可愛い義弟の幸せそうな顔が嬉しくて、コレットに協力をお願ひしましたの。わたくしがお願ひしたことでも、わたくしにも責任があります。それなのに、ここにきてマカリスター男爵にお任せするなんて、そんな礼を失した行動はできませんわ」

「王妃、フィオンもそのくらいにしておけ」

うふふと笑いをもらしながらも、一切の反論を許さない王妃の言葉。まだ言い足りないような王妃に、王は止めるように口を開いた。その後、オーステイン公爵にも視線を向ける。

「コレット・マカリスターの席は、私が許可を出した。彼女に王家が協力を要請したのは紛れもない事実。オーステイン公爵の申し出があつたのは確かだが、私が彼女も関係者であると判断し、この場への出席を許可したのだ。今回の一連の件で、彼女に関する意見は的外れだ。彼女は王家の意向にしたがつたまでなのだからな」

王にはつきりそう言われれば、これ以上反論することはできなかつた。オーステイン公爵はピクリと眉を動かしゆっくりと腰を下ろした。

フィオンは、コレットの手をしっかりと握りしめると、王妃が用意した席までコレットをエスコートする。

「義姉上、コレットをよろしく願います」

「もちろんですわ。さあ、コレットそこにお座りなさい」

王妃の言葉に膝を軽く曲げて頭を下げたコレットを、フィオンは椅子に座らせる。

手を離す直前、フィオンはコレットに優しく微笑みかけた。

「大丈夫。何も怖がる必要はないから」

ぬくもりを失った手が、それを求めて伸びそうになったのを、コレットはもう片方の手で押さえて膝の上に押しとどめた。

コレットから離れ、フィオンは議場の中心、医師たちが取り囲むテーブルのそばに近づいた。医師の一人がひいた椅子に、フィオンはゆっくりと腰を下ろす。

「はじめよ」

王の言葉が、議場に響いた。その言葉に、医師たちは深々と頭を下げると、その中の一人、王家の医師長が一步前に進み出た。

「それでは、今回使用されます解毒薬について説明させていただきます」

椅子に座ったまま、なんだかうまく回らない思考の中、コレットは目の前で行われていることをじっと見つめていた。

解毒薬について、医師の一人が説明を行っているが、一つ一つの薬の材料や効能効果を説明されても、薬の知識がないコレットにはよくわからない。

それでも、薬の効果が本物であることが説明され、それをほかの貴族たちも検証の結果認めたといいただけは理解できた。惚れ薬の解毒薬がまったく効果のないものでは、ここでみんなが立ち会う意味などなくなるのだから、それに慎重になるのは仕方がないことだろう。

だからこそ、あのテーブルにあるものは、間違いなく惚れ薬の解毒薬なのだろう。

一通り薬の説明を終えると、医師長はうやうやしくガラスの瓶を取り上げた。ふたをとり、銀のカップに薬がゆっくりと注ぎいれられる。

綺麗なガラスの瓶から、ねっとり半透明の紫色の液体が落ちる。それとともに、室内に薬のツーン鼻の奥を刺激する匂いが充満した。以前の薬の状態を知るものならば、吐き気をもよおす匂いと濃い青紫色の状態から比べずいぶん改良がくえられたことがわかる。しかし、今回初めてそれを目の当たりにする多くのものがその匂いに顔をしかめた。

あたりから、苦しそうな咳払いや鼻を抑えるような音が聞こえる。しかし、王妃はハンカチで口を押えているものの、特に何の反応もなく事態を見守っている。そんな中、その匂いに文句が言えるものはいなかった。

銀杯に注がれた薬に赤いワインがくわえられ、銀のスプーンでゆっくりとかき混ぜると、そのスプーンに変色などがないかをしっかりと確認する。

何らかの原因で、万が一毒が混ざった場合銀食器は変色することがある。

何事もないことを確認すると、医師の一人がカップの前にたった。この薬の毒性試験の責任者、前回薬の毒見で卒倒した人物である。王や王妃の前で、今度こそは薬に問題がないことを見せる必要がある。

出来上がった薬を別の杯に分け入れると、王や王妃、フィオンに頭を下げた後男はそれを飲み込んだ。飲んだ瞬間、一瞬動きが止まる。

しかし、そのまま喉を動かし薬を飲み込むと、大丈夫であること

を知らせるようにまわりを見た。

その男の脈など一通りの診察を終えると、医師長は盆に載せてフイオンに解毒薬の入ったカップを渡した。

「毒見も問題ないようです。バード公爵、こちらを」

立ち上がると、フイオンはゆっくりとした仕草でカップを持ち上げた。

シャンデリアの下にいるフイオン。銀のカップはキラキラと明かりを反射して光り、明かりに透けるように輝く金色の髪、そこだけが輝いているように見える。

カップを持ったまま、ゆっくりと一人一人の顔を見るように、フイオンは議場をぐるりと見渡した。そして、覚悟を決めるように一度目を閉じた後、まっすぐに前を見据える。

「それでは、この国の繁栄と王家の安寧のために」

乾杯をするように一度カップを高く持ち上げると、そのまま一気に杯を仰いだ。

薬を飲み干すと、持ったカップをそのまま逆さにし、フイオンはカップが空になったことを周囲に見せつける。

苦しそつに一度小さく咳き込むと、フイオンは大きく息を吸い込んだ。

「これで、満足ですか？」

しんと静まり返った議場の中に、フイオンの声が響いた。

「バード公爵には、今後体調の変化などが起こる可能性があります。しばらくの安静が必要になります」

医師長は深々と頭を下げ、王にそう申し出た。

先ほど毒見をした医師もまだこの議場内に残っている。今のところ、彼になんら異常な所見は現れてはいない。今までの毒性試験でも大きな問題は生じてはいないが、体に惚れ薬が入っていてそれを解毒する立場と、その影響が体内にないものとは状況がことなる可能性がある。

「フィオンは十分な休息を取るように。ここからの退出を許そう」

「お待ちください兄上」

口直しのためにと渡されたワイングラスをテーブルに置くと、フィオンは王に向き直った。

「どうした？」

「このまま僕がこの場を退出すれば、後々納得できないものも出てくるかもしれません。後から、解毒薬をもどしたのではないかと疑いをかけられても困ります」

吐いてしまつては、解毒薬の意味をなさなくなる。不安要素は少しでも残さない方がいい。

「皆が納得するだけの時間、もうしばらくこの場にとどまることをお許しください」

「薬が体内まで入るにはどの程度の時間が必要だ？」

「はんとき半時もあると十分と思われませんが」

医師の言葉に、王はうなずいた。

「では、その時間ここにとどまることを許そう」

「ありがとうございます。みなにも、もうしばらくお付き合いを願います」

あたりにそう声をかけると、フィオンはようやく椅子に腰を下ろ

した。

時間がとてもゆっくりと流れているような気がする。事の成り行きを見ていたコレットは、息が詰まるような緊張のなかじつと座っていることしかできなかった。

震えてくる手を抑えるように、膝の上でぎゅっと握りしめる。息苦しくて、なんだか頭がくらくらしてきそうだった。

医師たちがフィオンの脈をとったり、体温を確認したりと、彼の体調に変化がないかを確認している音だけが議場内にわずかに聞こえるだけで、皆がまんじりと事の成り行きを見守っている。

「バード公爵？」

その沈黙を破ったのは、医師の声だった。

皆がフィオンの方を見たのが気配でわかる。コレットも、気を失うのではないかという緊張のなか、はっとして顔を上げた。

椅子に座ったままこめかみのあたりを押さえてうつむいているフィオンに、医師がどうしたのかと顔をのぞきこんでいる。

促され顔をあげたフィオンは、遠目に見ても顔色が悪い。大粒の汗が玉を結び、額から流れ落ちた。

「ああ、……大丈夫だ」

「ですが、お顔が真っ青でございます」

医師長は慌てて王に頭を垂れた。

「陛下。バード公爵の体調が急変いたしました。このままこの場所においては体への負担が大きいのと思われます。どうか退出のご許可を。」

先ほど言った半時にはまだ届かないが、体に影響が出ている時点ですでに薬の効果があると考えていいだろう。

「先ほど飲んだ毒見役は問題がないというのに、どうしてこのような症状が出るのだ」

王のいらだつたように声を荒げた。

「おそらく、惚れ薬の影響があるものと」

「皆の者も、解毒薬の服用に関しては納得したであろう」

フィオンの状態に、王の言葉に異議を唱えるものはいなかった。

「退出を許可する。早くフィオンの治療にあたるように」

「ありがとうございます」

素早く医師長は踵を返し、あたりの医師の指示を出す。

医師に体を支えられながら、フィオンは椅子から立ち上がった。

しかし、フィオンはそのままふらつきテーブルに手をつく。

だが、その手でしっかりと体を支えることができず、そのまま横にずれるように倒れた。そのときフィオンの手が、先ほど薬を飲んだ銀杯にあたると、そのまま床へと転がり落ちる。

「公爵っ！！」

近くで呼んでも、フィオンの反応は鈍い。

それでも何とか意識を保ち、フィオンは駆け寄った医師たちの声掛けにわずかにうなずいている。

医師たちに支えられながら立ち上がったフィオンが一瞬コレットの方を見た。目の前で起こっていることに茫然と立ちつくしていたコレットに、フィオンがほほ笑んだ、そんな気がした。

いつの間に立ち上がったのか、わからなかった。

ぼんと肩をたたかされると、びっくりと体を震わせ、コレットはゆっくりと振り返った。コレットより一段高い場所にいた王妃が、コレットの肩に手を置いて彼女を気遣わしげに見下ろしていた。

「大丈夫？ お顔が真っ青ですわ」

倒れたフィオンと遜色そんしょくないぐらいに顔色の悪いコレット。その手を王妃はゆっくりと取った。

強く握りしめたせいか、真っ白に血の気を失った手を温めるようにそっと両手で包む。

「フィオンは大丈夫」

「王妃さま……」

「大丈夫よ」

そういつて、王妃はコレットに優しく微笑みかけた。

馬車の揺れが止まった。

マカリスター男爵家の前に馬車が止まると、出迎えに出ていた執事が扉を開けた。マカリスター男爵は馬車を降りると持っていた帽子を執事に預けた。そのまま家に入るうとし、しかし、自分の後ろに動く気配がないことに振り返る。

馬車が止まったことすら気が付かなかったように、ぼんやりと馬車の中で座ったままの娘にため息をつく。

「コレット」

返事がない。

男爵はもう一度馬車に乗り込むと、座ったままのコレットの肩に優しく手を置いた。

びくんと震え、コレットが頭をあげる。

「家についた。馬車から降りなさい」

「……はい」

消え入りそうなくらい小さな声でうなずくと、コレットはようやく馬車を降りるために腰を上げた。

頭の中が真っ白になって思考が動かないまま、コレットは自室へと入っていった。

なんだか頭が混乱していて、いろんなことが現実味がない。

王宮からの迎えがきて、フィオンに会った。そのあとフィオンが解毒薬を飲んで……そして、倒れた。

大粒の冷や汗をかいて倒れたフィオン。あれは、まぎれもなく現実だった。それを思い出すだけでコレットの体が震えてくる。

解毒薬を服用することは、惚れ薬の効果をなくすことだと思っていた。

まさか、それ以前にフィオンの体調があんなに悪くなるなんて考えてもいなかった。

王宮を出る前に、王妃がコレットを気遣って声をかけてくれたことも、父親がコレットを連れて帰ってくれたことも、それに自分がどんな反応をしていたのかよく思い出せない。

ただ、王妃が去り際に言った一言だけが、コレットの耳に残っている。

（フィオンさまは、大丈夫。大丈夫）

自分に言い聞かせるように何度も何度も繰り返し、震える体を抑えるようにコレットは自分の体を抱きしめた。

解毒薬を服用して倒れたフィオン。

もし、あのまま目が覚めなかったら……。

何度大丈夫と言いつ聞かせても、不安は波のように押し寄せてきて、コレットに襲い掛かった。

フィオンが自分を好きではなくなる。それどころの話ではない。

もし、もう二度と会うことができないようなことになったら……。

ぞくりと、コレットの背筋に冷たいものが流れた。

考えてはいけない。

そんなことは絶対がない。

大丈夫、大丈夫……。

しかし、何度言いつ聞かせても言いつ聞かせても、震えはどうしても止まってくれそうになかった。

『僕の気持ちは、迷惑なだけだった？』

コレットの脳裏に、フィオンの言葉がよみがえった。その時の切ない表情とともに。

はっとして、コレットは大きく目を見開く。

解毒をする直前まで、自分のことを大切にしてくれたフィオン。フィオンには、いつでもたくさんの愛情を注がれていた。それなのに、自分はずつと彼にそんな思いを抱かせていたのだろうか。

どうして、自分は彼にちゃんと気持ちを伝えなかったのだろうか。

薬のせいだとしても、フィオンはそれをわかったうえで自分の気持ちと向き合い、コレットにまっすぐに気持ちを伝えていたのに。

「そう、なんだ……」

力が抜けたように、コレットはそのままペタンと絨毯の上に座り込んだ。

そうなのだ。

結局、惚れ薬にこだわっていたのは、他の誰でもないコレット自身だった。

フィオンを信じたいと思いつつながら、その実、一番彼の言葉を信じていなかったのは自分だったのではないだろうか。

だから、いろいろと言い訳を付けて自分の気持ちと向き合うことができなかった。

コレットの目から涙があふれた。

「お願い、無事でいてください」

コレットは祈るように震える両手を合わせた。

今のコレットには、ただ祈ることしかできなかったから。

「フィオンさまを助けて……っ！」

赤い絨毯のしかれた大階段。よくみがきこまれた手すりは、大きなシャンデリアの光を受けてきらきらと飴色に輝く。

その階段を少年は軽い足取りで駆け上がると、最後の階段を飛び越えて両足をそろえて着地した。やわらかな絨毯は少年の足音を吸収し、勢いのわりには静かな靴音だけが小さく響く。

その動きで、少年のプラチナブロンドの髪が揺れた。

額にかかった髪を気にすることもなく、少年はそのまま走り出した。しかし、廊下を曲がったとたんに聞こえた声に、ぴたりと足をとめる。

今向かおうとしていた場所から、自分の名が聞こえたような気がした。そう思えば、歩調ゆるめ足音をしのばせながら部屋へと近づく。

「お父さまは、フィオンのことが可愛くはないのですか!？」

「それとこれとは別の問題だ」

母親の言葉に、祖父であるバード公爵がため息交じりでそう答えるのを、フィオンは扉のそとに立ったまま耳にする。

母親が祖父に自分のことで何かを申し出ている姿を聞くのは、これが初めてではない。

いつものことなのだから、この場から離ればいい。そう思っても、フィオンの足はその場から動かなかった。

「王の実子なのですから、フィオンにだって王位継承の権利があるはずです。お父さまが賛成してお力添えをくだされば、あの子が王になることは」

「サラ！」

一人まくしたてる王妃に、父であるバード公爵は強い口調でそれを止めた。

王都から離れたバード公爵領。その莊園屋敷マナーハウスの中とはいえ、王妃がめつたなことを口にするものではない。

「ここでそれ以上口にすることは許さぬ。フィオンはバード公爵家を継ぐ身。それは王妃となるときに、そなたも納得していたはずだ」

「その時とは状況が違います」

「何も変わってなどいない」

重い沈黙が部屋を包む。

「わたくしは諦めませんわ、お父さま。これはフィオンのためなのですから」

そう言った後、自分の方に近づいてくる足音に、フィオンは慌てて扉から離れた。

部屋から出てくると、サラは階段の近くにフィオンを見つけ嬉しそうにほほ笑んだ。

美しい王妃の笑顔は、それだけでまわりが明るくなったかのように感じられる。

「フィオン、元気にしていましたか？ おじいさまがあなたをバード公爵領に連れて行ってしまわれたから、とても寂しく思っていましたのよ。明日あすには王宮にもどります。仕度をなさいね」

そういつて優しく自分を抱き寄せ髪をなでる母親を、フィオンはじっと見つめた。

自分にはいつも優しく接してくる母親。

しかし、先ほどの荒げた声も確かに彼女のものではあったのだと、幼いフィオンにもわかっていた。

「さあ、こちらに来てどんな風に生活していたのか、母さまにおしえてくださる？」

にこやかに自分の手を引こうとした母親から、フィオンは一步離れた。

「フィオン？」

「母さま。明日発つのなら、おじいさまにもごあいさつをしないか
ない」と

母親の顔が少し曇るのをみて、フィオンは可愛らしくにっこりと
ほほ笑んだ。

「お話が終わったら、すぐにお部屋にうかがいますね」

扉をたたいて入ってきたフィオンを、祖父であるヘンリーは優しく
微笑んで迎え入れた。

近くに呼び寄せると優しく頭をなでる。

「今日は乗馬をしてきたのだったね。どのあたりまでいってきた？」

「メイフィスの森を抜けて、高台まで行ってきました」

「そんなに遠くまで行ってきたのか。フィオンは乗馬の上達が早い
「いえ、セントリースはよい馬ですから」

いつもはその日にあったことを楽しそうに話すフィオンの声が沈
んでいるのに気が付き、ヘンリーはため息をついた。

「聞いていたのか？」

先ほど交わされた祖父と母親、二人の会話を。

返事をしないフィオンに、ヘンリーは自分の予想が当たっていた
ことを確信する。

「フィオン、おいで」

言うとヘンリーはフィオンを抱き上げ、出窓の台の上に座らせた。
そこからは、窓外に広がるバード公爵領がよく見える。

「フィオン、お前は王になりたいか？」

「……わかりません」

「そうだな」

いくら母親である王妃があつた状態でも、まだ十にも満たない少年
にその質問は難しいだろう。

「私は別に、お前が王に相応しくないと思っているわけではないよ。

もし、お前が王位についたとして、それを立派にやりとげられるとも思っている」

今の幼いフィオンでは、王位を継ぎ、国を治めることは困難かもしれない。しかし、彼が成人になるころには、国内をまとめ導いていく力があると確信している。

年若くも、聡明で人当たりがよく、自然と皆を引き付ける魅力を持った王子。王となる資質を兼ね備えているからこそ、その母親である王妃は諦めがつかない。

「兄をどう思っている？ 嫌いか？」

母親があの状態なので、同じ王宮に住んでいても会うことすらままならない実の兄。

「……」

「ここには私とお前しかいない。はっきり言ってい」

「……嫌いじゃないです」

「そうか」

母親が嫌っている実の兄。

フィオンを王にと望むものにとっては、確かに現在王位継承第一位にいる兄パトリックは目障りな存在かもしれない。そんな状況下、フィオンを敬遠してもおかしくないであろうパトリックは、フィオンに対してそんな政争などないかのように接していた。

王位に執着していないのか、それともただ愚鈍なだけなのか。そのような意見が飛び交う中、ヘンリーはそれとは違う印象を受けた。パトリックは、フィオン自身が敵対しているわけではないことを知っているだけだ。そして、フィオンもそんな兄に信頼を寄せているように見える。

このような状況で、まわりをしつかりと見つめ現状を把握しているパトリックは、信用に足る人物であると思う。

「お前が望むのなら、私はお前を王位につけるために尽力もしよう。だがそのためには、パトリック殿下を排除しなくてはならない。国は荒れるだろう」

王位継承第一位であるパトリックを排除することは、それ相応の理由が必要となる。それが不当であれば、次期王たるものの正当性も失われてしまう。

王家が弱体化すれば、それを狙って国内外にも波紋を及ぼしていく。

「国を守るためには、王家の安泰も重要だ。今の状況でお前が王位を継ぐには、犠牲が多すぎる」

国を分断するような危機は避けなくてはならない。

例え王になったとしても、フィオンにそれらの犠牲を上回るだけの益はどうみても見込めないことを、ヘンリーはひしひしと感じていた。

「パトリックがお前を排除しようとするのであれば、私は必ずお前の側につこう。しかし、お前が兄を信じられるのであれば、お互いを支えあって生きていく道もある」

祖父の言葉が、フィオンの胸にゆっくりとしみこんでくる。

「見なさい、フィオン」

ヘンリーはそういうと、窓を開け放ち、フィオンに外を見るよう促した。

窓の外には、高大なバード公爵領が広がっている。

「この地は、お前のものだ。ここはいつでもお前を受け入れる。どんなときでも、どんな状況でも。だから、いつでも帰ってきなさい」
開け放たれた窓からは、夏の濃い緑の匂いがした。

ゆっくりと意識が浮上してくる。

重い瞼を開けると、フィオンはベッドの上で目だけを動かしてあたり見回した。王都にある、バード公爵邸の自室であることを確認すると、深く息を吐いた後に体を起こす。

体を起こし、額に流れる汗をぬぐう。

喉の渴きを覚え、フィオンはベッドから起き上がった。

立ち上がった瞬間にめまいを覚える。何とか踏みとどまると、テーブルにあつた水差しからグラスに水を注ぎ、一気に飲み干した。久しぶりに昔の夢をみた。

ぼんやりと、見ていた夢のこと思い出す。

幼いころ、あれはまだ王である父も王妃であつた母も存命だったときだ。あのころの母親の態度は、今思えばまだまじだつた。その後、父親が死んだあとの母親の王位への執着は強まる一方で……。そこまで思いを巡らせると、フィオンは近くにあつた肘掛け椅子に腰をおろし、大きく息を吐いた。

いつのころからだつたらうか、母親が自分を王位につかせたいと望むようになったのは。

どうして母親があんなに王位に執着していたのか、結局フィオンは知ることができなかつた。ただ、その命が尽きるときまで、フィオンに王位を継がせたいそれだけを願っていた。

祖父は、母親が王妃となる前からそのことを危惧していたのであろう。

フィオンが生まれる前から、フィオンの母親サラが生んだ男子をバード公爵家の跡取りとすることが決まっていた。

王とその弟では、国の中での権力に大きな差がでる。それを不満と思わないように、王弟という地位だけでなく、国内有数の大貴族であるバード公爵位を受け継ぐことによって、国内での立場は盤石となるようにと。

隣のドレッシングルームに人の気配を感じ、フィオンは顔をあげた。

「失礼します」

小さなノックの音の後、バード公爵家の従者であるロイドとその後ろにもう一人見覚えのある人物が姿を現した。

自分が解毒薬を飲むその時にも立ち会った、公爵家付きの医師である。

「公爵、お目がさめましたか。ご気分はいかがですか？」

「まあ、いいとは言い難いかな」

そう言うと、フィオンはにっこりとほほ笑んだ。

「僕に恨みでもあった？」

「は？」

「解毒薬に殺されるかと思ったよ」

あながち冗談ともいえないセリフに、医師は目を見開くと大きな声で笑う。

「公爵、そのお言葉は医師長の前ではおやめになってください。卒倒しかねません」

「彼らにこそ、言っただけでやりたい気分だけどね」

そういいながら、真面目な医師長たちの反応を想像し、フィオンと医師は目を合わせてもう一度笑った。

「あれからどのくらいたった？」

自分が薬を飲んでから。

「三日です」

「そう……」

それだけ寝ていたのなら、体を感じる倦怠感もふらつくのも仕方がないか。

「とりあえず、診察をお許してください。それと軽めのお食事を」

「あまり食欲はないけれど、仕方ないね」

少しは食べなければ、体力の回復は見込めない。

フィオンがうなずくと、ロイドは食事の準備のためにと部屋を後にした。

「僕は、いつ公爵家ニに戻った？」

「倒れたその日の夕方でございます。ご自分で大丈夫だから戻るとおっしゃって、覚えてはいらっしやいませんか？」

そういわれれば、そんなことを言ったような気もする。

しかし、薬を飲んだ後の記憶はあいまいだ。

「まず診察の前にベッドにお戻りください」

「まるで病人扱いだね」
そういつて肩をすくめると、フィオンは椅子から立ち上がった。

52・到達

ロイドが主人のベッドルームの扉をたたくと、中から短い返事が返ってきた。

お茶の準備をしてきたカートを押しながら室内に足を踏み入れると、ゆつたりとした肘掛け椅子に背をもたれて座っている主人の様子に、ロイドは気が付かれないほどの小さなため息をついた。

解毒を行った直後に倒れ、意識が回復してからはまだ二日ほどしかたっていない。

バード公爵家のお抱え医師からも、さらには王の親書を携え、公爵家へとやってきた王家の医師長からも、十分な療養の必要を指示されている。さらに王からの親書には、体を十分に厭いとい、体調が戻るまで王宮への出仕を差し控える許可が、見舞いの言葉とともに添えられていた。

フィオンが目覚めたことを聞きつけ国内の多くの貴族たちが見舞いに来る中、体調を理由にすべての面会を断っている状態である。にもかかわらず、当の本人はまわりの心配をよそにベッドの中に大人しくしているつもりは毛頭ないらしい。

「どうした？」

部屋に入ってきたというのに、入口で立ち止まったまま何も言葉を発しない従者に、フィオンは読んでいた手紙から顔をあげた。

「飲み物をお持ちしました」

「ああ、そこに置いておいてくれ」

医師の指示にて日に何度も勧められる水分の補給に、フィオンは辟易したように答えると、頬杖をつきながら再び手紙に目を落とす。お茶の準備をしながら、ロイドはちらりとフィオンの方に視線を向けた。

体調が万全でないためか少し気怠そうな様子はあるものの、テーブルの上に積みあがっている見舞いの者たちからの手紙やカードに

目を通してしているフィオンに、特に変わった様子はない。

体調も少しずつではあるが、改善の兆しが見られている。

フィオンが目を覚まして二日。

こうして起き上がって言葉を交わしてみれば、解毒前と後で生活しているうえで大きな変化は見られていなかった。

ただ、一つの点を除いては。

ロイドは手早く紅茶を入れると、クツキーの入った皿とともにテーブルの上へとおく。

そのまま、じつと静かに立っているロイドに、フィオンはため息をつくと、再び顔をあげた。

「見張っていないくても、ちゃんと飲むよ」

「それを確認するのも、私の仕事ですから」

数日間の絶食状態と、解毒を行った影響で消化機能が弱っている可能性がある。その負担を減らすために、少なめの食事を何度かに分けて摂取するようフィオンを診察した医師からの指示がでている。

普段は主人であるフィオンの命令が第一だが、今回は主人の体調にかかわることである。フィオンになんと言われようと、ロイドにとってそれだけは譲れなかった。

自分の言葉よりも、医師の指示を忠実に守るロイドに、フィオンはやれやれと肩をすくめると、手紙をテーブルに置いた。

それでも自分の体調を優先していることが分かっているため、素直に従いカップを手取る。

「こちらもお召し上がりください」

「いらない」

「では、何か食べたいものはありませんか？ 果物でも……」

「ロイド」

「はい」

「僕は病人ではないよ」

「……はい」

薬の影響で意識を失い、生死の境をさまようかとまで思われたその症状は、病気よりも心配の要らないものなのか。

釈然としないままロイドが視線をフィオンから逸らすと、さつきまでフィオンが見ていた手紙が目に入ってきた。

奇麗な薄紫色の便箋に書かれた文字に、ロイドは見覚えがあった。この数か月、何度となく主人に渡した手紙と同じ筆跡だ。

以前その手紙を読んでいたフィオンの様子を思い出す。

先ほどまで手紙を見ているフィオンの表情は、他の手紙やカードを見ていたときと変わることなく、ただその内容を確認しているだけのようにロイドには見えた。

数日前まで、この差出人からの手紙を嬉しそうに見ていたときは明らかに表情が異なっている。

フィオンが目覚めてから二日。

目覚める前と後、唯一異なっていることといえば、あれほど毎日口を上っていた名前が、ぴたりと止まってしまっていることだった。フィオンが目覚めてから、ロイドは一度もコレットの名前を耳にしていない。

「お返事を書かれますか？」

ロイドの言葉に、フィオンはカップをソーサーの上に戻すと、さつきまで読んでいた手紙にちらりと目をやった。

だが、さしたる興味もないようにすぐに視線を戻すと、椅子の背もたれにゆつくりと体重をあずける。

「いや、まだいい。それよりも、例の件はどうなっている」

「はい。一応の聴取はとつてあります。いつでも会えるように手筈は整えてありますので、体調が回復次第……」

「では、すぐに手配を」

「は？」

「明日、いや、今日の午後にもここに連れてくるようにね」

「だ、駄目です」

「是非は聞いていないよ。これは決定事項だ」

「ですが、お身体が」

「僕が外出すると言っているわけではないよ」

「で、ですが……」

「連れてこないなら、僕が出かける」

冗談とも思えない口調に、このままでは本当に外出しかねないと、ロイドは諦めぐったりと肩を落とし頷いた。

午後の日差しが差し込む、バード公爵家の応接室。

窓から差し込む光と室内にともされた明かりが混じりあい、金の額縁に入れられた大きな絵も、天鵝絨張りのソファも、輝くシャンデリアもすべてが美しく輝いている。

その部屋に置かれた彫りも美しい木目のテーブルの上に、この部屋には似つかわしくない古びたトランクが置かれていた。

トランクの鍵を開ければ、中にはきれいな便箋や封筒が何枚も入れている。

上質な紙がつかわれたそれらの品は、あちこちが擦り切れ古くくすんだこのトランクにはあまりにも不釣り合いな品物だ。

乱雑に入れられた手紙をロイドは丁寧に広げると、それをフィオンに手渡した。

「見たことのある筆跡だね」

足を組み換え椅子に座りなおすと、フィオンは便箋をめくりその内容を確認する。

一通り目を通すと、フィオンは顔をあげた。

「それで、君はこれをどうやって手に入れたの？」

室内のきらびやかさに気おされてばかんとまわりを見ていたルッツは、急に声をかけられ、はっと前を向いた。

フィオンとロイド、二人の視線が自分に集まっていることを感じ、ルッツはごくりと息を飲む。

「あ、あの、カイサルから預かって欲しいと頼まれたんです。もし自分が三日たっても取りに来なかったら、あいつの……彼の部屋に行つてこのカバンの鍵を持ってくるようにと」

そういうと、ルッツはトランクと一緒にテーブルに置かれた、古びた鍵を見た。

「何日も待つてみたんですがカイサルは姿を現さないし、そのうちあいつがホテルを襲撃した犯人だって言う噂を聞いて、取りに行くかどうするか迷ったんです。あの、あいつの部屋に行ったことがわかったら、オレ……僕も疑われるんじゃないかと思って。でも、このトランクに何が入っているかわからないのも怖くなって、それで、そういうながらうつむくルッツに、フィオンは優しく声をかけた。「そこでロイドと会ったんだね。大丈夫、僕たちは君を疑ったりしていないよ。それで、カイサルは他に何か言っていなかった？」

フィオンの言葉に、ルッツの表情がぱっと明るくなる。

「は、はい。鍵をとりに行くときは誰にも見られるな、それとこのトランクの中は、働いていた牢獄の関係者には絶対に見せないようにと言っていました」

「牢獄の関係者、ね」

「はい。でも、カイサルがホテルの事件に関わっているなら、牢獄での脱獄にももしかして関わっているかもしれないって思って、誰かに言わなくちゃって思ったんです」

このトランクの中身が、事件と何らかの関わりがあるのかもしれないと思うと、ずっと自分が持っているのも怖くなる。だが、ただ警察に持って行っても信じてくれるかわからない上、ルッツ自身が

疑われる可能性もあった。

カイサルが牢獄関係者に見せるなどといった意味は分からなかったが、分からないからこそ、あえてそこに報告するのもはばかれる。誰にも相談できなかったルッツが、ただ一人思いついたのが監獄を視察に来ていたフィオンだった。だからその従者であるロイドに声をかけられたとき、これがチャンスだと思い迷いもなくついていったのだ。

「それで僕に話す気になってくれたんだね。ありがとう。とても助かったよ」

「それで、あの、カイサルは脱獄に協力していたんでしょうか……」
ルッツは不安そうにフィオンに尋ねた。

「君には残念だろうけど、それは間違いなさそうだ」

手紙に書かれていた内容。

牢獄から逃がした女を連れて特定の場所にカイサルを呼び出すためのもの、そして、コレットがいつどのような状況でどの場所にいるかなどの情報や、襲撃を催促するものなど、今回の主犯からカイサルに出された指示が記されている。

手紙には相手の名前はない。

しかし、いつも同じ種類の封筒に便箋を用い、同じ筆跡であれば、おのずと同じ人物からの手紙だと名前などなくてもわかる。

カイサルが主犯である人物からの指示を受け、惚れ薬事件の犯人を牢から脱獄させ、コレットの命を狙っていたことは間違いない。

フィオンの言葉に、ルッツはがっくりと肩を落とす。

「ルッツ」

「は、はい」

名を呼ばれ、ルッツははっと背筋を伸ばす。

「この件は、まだいろいろと捜査中で、機密事項なんだ。誰にも他言はしないようにね」

「はい」

「そして今から君は、僕の庇護下に入る。仕事もしばらく休んで、身を隠すように」

「え？ 隠れるんですか？」

「しばらくの間だけだよ。君は、どうやら思っていることが表情に出やすいようだからね。それに、君がいるいろいろなことを知っていると分かると、それを快く思わないものが行動を起こさないと限らないからね」

さつとルッツの顔から血の気が引いた。

どうしてカイサルが自分の前に姿を現さないのか、その意味が頭の中を巡っていく。

「念のためだよ」

慰めるようにそう声をかけたフィオンに、ルッツは不安を隠すこともできずただ頷くしかなかった。

ロイドに促されルッツが退席すると、フィオンは椅子から立ち上がりトランクの中に詰められたものを一つ一つ確認していく。

手紙には、必ずこれらを読んだ直後に燃やすようにとの指示があった。しかし、どうやら燃やされ処分されたものはないようだ

他にもトランクの中には薄汚れた紙に殴り書きのように書かれたメモや、報酬の一部としてもらったものか、金貨が数枚と札束が紙袋に入れ詰められていた。

手紙が全く処分されていなかったということは、最初からカイサルは主犯たる人物のことを完全に信用していなかったようだ。

その上、これをルッツに預けたということは、確信ではないにしろ自分の身の危険も考えていた可能性が高い。それが主犯の人物に対する警戒か、それともコレットを襲撃した後での逃走を見越したものは分らない。だが、カイサルの言っていた牢獄関係者に見せるなという指示は、これらの証拠を隠蔽いんぺいされないようにするためのもので、予想が前者であることを予測させる。

扉が開き、ロイドが部屋へと戻ってきた。

「彼の関与は疑いようがないね」

「はい、まず間違いなく」

カイサルを撃つたと思われる銃が、ホテル側の捜索でステイルス湖で見つかっている。それは、カイサルが持っていたものと同じもので、そして牢獄で常時使われているものと同じ型だった。

カイサルが盗んだと言いつてもできるが、あの時カイサルは弾の切れた銃一丁しか持っていなかった。その後、その銃を使い、その場に捨てた人物がいたと考える方が自然だ。

そしてロイドの調べで、それを個人で購入した人物の名があがっている。

その名の人物とこの手紙の筆跡の人物が同じであることは、たとえ手紙に名がなくともそれを目にしたことのあるフィオンとロイドにはすぐにわかった。

犯人の一角は明らかになった。

惚れ薬の主犯が彼かどうかは別として、惚れ薬事件の実行犯は間違いなく彼の近くにいます。そして、クリプトンホテルでの襲撃や、カイサルの肩の銃痕に彼が関与しているのは間違いない。

「そろそろ、観念してもらおうかな」

証拠もそろった以上、言い逃れなどさせない。

「ギルダス・ドーズとその周辺を徹底的に洗い出せ」

フィオンの言葉に、ロイドは深く頭を下げた。

「思ったより元気そうで安心しましたわ」

マカリスター男爵家の応接室の一室。窓際に置かれた椅子に腰をかけると、エリサはそう切り出した。

木々が夏の日差しを遮り、中庭に面した窓からは木々を通り抜けたひんやりとした風が心地よく入り込んでくる。その風を頬に感じながら、コレットもエリサの隣に腰をおろした。

それで、とエリサは言葉を続ける。

「フィオンさまから、連絡はきていますの？」

バード公爵フィオン・アルファードが解毒薬を服用してから十日、体調を崩して倒れ、その後誰とも面会せずに療養していたバード公爵が、先ごろ王宮への出仕を再開したとの話が流れていた。

エリサの問いに、コレットはゆるく首を横に振る。

「まったく？」

「いえ、まったくというわけではありませんけれど……」

そう言いながらも、コレットは言葉を濁した。

解毒薬服用後、フィオンの目が覚めたという話を聞いて父親であるマカリスター男爵は彼のもとにお見舞いの手紙を出した。本来なら、手紙だけで済ませるにはマカリスター男爵家は今回の事件に大きくかわりすぎているが、フィオンの体調のため面会ができないとなれば、見舞に行くこともはばかられ、手紙のみのあいさつとなってしまうていた。

その手紙を出す際に、コレットも彼への手紙をしたためた。

父親も確認する手紙である。

自分のフィオンへの気持ちなど書けるはずもなく、体調を気づかうむねの内容であったその手紙に返されたのは、マカリスター男爵家に届けられた一通の手紙だけだった。

代筆で返されたその手紙には、すべての面会を断っているものの、体調は回復に向かっていること。そして何らかの際にはこちらから連絡することが記されていた。そう言われてしまえば、マカリスト―男爵家の方から連絡するすべはなく、そのまま現在にいたっている状態なのである。

代筆の上、事務的に返された手紙からは、フィオンの本心を垣間見ることはできなかった。いや、その手紙自体が、すでに彼の答なのかもしれないけれど……。

コレットの表情に、今、ちまたで流れ始めた噂を思い出し、エリサはため息をついた。

解毒薬を服用した王弟殿下は、直後に倒れられたものの、その経過は良好である。

惚れ薬の影響下で寵愛深かった令嬢とは、現在まったく連絡をとっておらず、王宮へ上がった後も、その話題に特に興味を示すこともなくなった。涼しげなその表情から、解毒薬の効果は良好であるようだ、というのがここ数日王都でのもっぱらの噂である。

これでやっと惚れ薬服用前に戻ったと、特に娘を持つ貴族たちはほっと胸をなでおろしていた。

目の前のコレットの様子から、あながち噂がまったくのデマではないことが推察される。

フィオンの解毒薬服用後、ずっと自宅にいたであろうコレットの耳に、どのくらいまで噂が入っているのかは疑問であるが、噂の渦中にいるマカリスト―男爵家にまったくそれが伝わっていないとは考えにくかった。

「大丈夫ですか？」

自分を気づかわしげに見つめるエリサに、コレットはふんわりと微笑んだ。

「はい……」

「嘘つきね」

エリサはコレットの頬に優しく触れた。

泣きはらしたであろう目もとの跡を、そつと指でたどる。

「私も、たくさん悩んだりもしましたけれど……」

「けど？」

「片思いから、始めることにしました」

「……片思い？」

目をぱちぱちと瞬かせ、エリサはコレットの言葉を繰り返した。

「はい。それが難しいことかは、分かっているつもりです。でも…

…」

気持ちを簡単になくすことはできませんから、とコレットは続けた。

王弟でもあり、国内でも屈指の名門バード公爵家の当主でもあるフィオン。一地方領主のマカリスター男爵家の娘が恋い焦がれて叶う相手ではない。

それでも、芽生えてしまったこの想いを消すことなんてできなかつた。

「苦しいですわよ？」

ただの片思いならば、ほんのわずかの幸せでも心温め期待することもできる。

しかし、今までのフィオンの言動と比べてしまえば、コレットに興味をなくしてしまった彼と会うことは、より一層苦しみを大きくするだけである可能性が高い。

さらに周囲の目は、王弟殿下の寵愛を失った少女が無駄にあがいているとコレットを見ることだろう。

「生きていてくださるだけで、再び会える可能性があるだけで幸せなんだと気が付きましたから」

それに、とコレットは言葉を続ける。

「私、今までフィオンさまの言葉をどこかで信じていなかったような気がするんです。惚れ薬を服用されたから、その影響があるから言葉ではないのかと」

それは、いつもコレットの胸にあったことだった。

信じたくて、でも信じることができなくて。その迷いが、彼を愛しいと想う気持ちを苦しめてきた。

「これからは、疑いを持たずに信じられる、それだけで少しは楽なのかもしれません」

その言葉が、たとえコレットの傷を深くするものであるうとも。

「それに、いくら薬を服用していたとはいえ、フィオンさまはずっと私にはつきりとした好意を示してくださいました。その時、私は今の私と同じ思いをフィオンさまにさせていたと思います」

だから、フィオンは最後に会ったときコレットにあんな言葉を言っただの。

「コレット……」

「今度は私が片思いから始める番です」

そういうと、コレットはエリサがはっとするほど美しい微笑みを浮かべた。

玄関ホールまでエリサを見送ると、コレットはそのまま庭へと足を踏み出した。

木陰のベンチに腰を下ろし、濃い青空に浮かぶ輝く雲の流れをぼんやりと見上げる。

片思いから始める。。

心の中でもう一度つぶやくと、コレットは小さく息を吐いた。

倒れたフィオンの無事を願い、心が押しつぶされそうになっていた数日間。ようやく彼が目覚めたと、ほっと胸をなでおろしたのもつかの間。フィオンはコレットへの興味をなくしたようだと噂がちらほらと聞こえた。

いくら父や母が気を使っても、噂などどこからともなく入ってくるものだ。

それをコレットに聞かせたいと思っている人物が、王都には少ないのだから。

そして、その後のフィオンのふるまいが、噂はただの噂ではなく、真実なのだということをコレットに突きつけてくる。

フィオン自身にあって話をするまでは、わからない。彼の言葉だけを信じたいと思ってはいても、まわりの状況はそれを許さないようにコレットを追い詰めていく。

たくさん悩んで、苦しんで、それでも想いを消すことなんてできなくて出した答え。

しかし、フィオンにとってはすべて終わったことで、薬のせいで悪い夢を見ていたようなものだったのかもしれない。コレットとのことも、もう決別することを決めてしまっているのかもしれない。

最初の婚約者には振られてしまい、次に好きになつてくれた相手は惚れ薬を飲まされていた。そんな状況だから、自分に興味をなくしたフィオンを振り向かせる力がないことは、コレットが一番よく分かっている。

それでも、たった一言でも自分の想いを伝えたかった。

最後に会ったあの時。

あの日のフィオンの顔が、表情がコレットの頭から離れない。

思い出し、コレットの胸がツキンと痛んだ。

ぎゅっとこぶしを握りしめると、痛みに耐えるように胸に押し当ててる。

あの日から、何度も感じる痛み。大切な人を失うかもしれない恐怖に、心が悲鳴を上げている。しかし、こんな痛みはなんでもないとコレットは自分に言い聞かせた。

彼の言葉を信じきれていなかった自分。

そんな自分の態度が、どれだけフィオンを苦しめていたことだろう。

今度はそれを自分が背負う番なのだ。

フィオンの最後の問い。それに答えを返したかった。本当の自分の気持ちを伝えなかった。

たとえその答えに、今は何の意味もないとしても

階段を降りてきたジェシカは、玄関から入ってきた人物を見つけると、ぱつと顔を輝かせて足を速めた。

「叔父さま」

「ああ、ジェシカ。兄上はいるかい？」

「お父さま？ 確かまだ外出先からもどってきてはいなかったと思うけど、何かご用だった？」

「相談したいことがあったんだが、まあいい」

この家の当主がいない中、ギルダスはまるで自分がこの家の主人であるかのように足を進め、ジェシカと兄ランデル子爵の書斎へと足を踏み入れた。

使用人を遠ざけ二人だけになると、ジェシカは待ち切れなかったように口を開いた。

「叔父さま、王宮へはもう行かれたの？ フィオンさまのご様子はどうでした？」

ジェシカの元にもちらほら聞こえてくる噂。

その噂の真相はどうなのかと、ジェシカは期待を込めて目を輝かせる。

「王宮へはこれからだ。だが、バード公爵に会った人物から話を聞いたが、解毒の成功はほぼ間違いないようだな」

その答えに、ジェシカの表情がぱつと明るくなる。

「よかった。これであの女が我が物顔で殿下のおそばにいることもなくなるのね」

惚れ薬の効果で、王弟フィオン・アルファードの隣にいることになった少女。

それを思うだけで、ふつふつとわきあがってくる怒りを止めることができなかつたが、これでようやく安心できるというものだ。

「そうだわ。お父さまにどんな相談だったの？」

「トリー又のことだ」

「トリー又？」

「あれがいつまでもこの家にいると、あとあと面倒なことになる」
その意味するところに、ジェシカの顔にさつと影が落ちる。

粗忽者で、失敗をすることもある侍女だが、トリー又はジェシカの言うことを告げぐちすることもなく実行する。何かと都合がいいメイドだった。

ジェシカの考えていることを察し、ギルダスは言葉を続けた。

「別に、殺すと言っているわけではない」

「じゃあ」

「とにかく、トリー又はルノワール伯爵家や牢獄で顔を見られている。このまま王都にいては、誰に見つかるかもしれない。いつまでもこの屋敷にいるのは危険だ」

今までは、下手に移動して見つかることを懸念していたが、今後も家の中に閉じ込めてばかりいるわけにはいかない。

さらに、ランデル家やギルダスの家にいることで、見つかった場合に申し開きができなくなる。

「トリー又には、王都を離れてもらう。王都から離れた場所で、目立たぬように暮らせばまず見つかることはないだろう」

殺してしまって、その遺体を見つけられた方が後々面倒になる可能性がある。

遺体が見つかった場合、惚れ薬の犯人であるとばれてしまうと、どこかでジェシカと一緒にいたことに気が付くものがあるかもしれない。

薬の一件があるまで、トリー又は普通の侍女が行うように、いつ

もジェシカの身の回りの世話や付添などをこなしていたのだから。「トリーヌを別の場所まで移す。もうその手筈は整えてあるから、今日の夕方には行動ができる。そのことを報告しに今日は来たんだが」

兄であるランデル子爵は外出中だったというわけだった。

「それにしても、カイサルを始末してしまつて本当によかつたんですの？　こんなとき役にだつたでしょうに」

「死人に口なし。あいつはいろいろ知りすぎた。せめてあの女を始末できれば、逃がしてやつてもよかつたが、あの状態ではな。あそこで捕まえられるわけにはいかなかつた」

まだカイサルの遺体があがつたとの報告は聞いていない。しかし、ギルダスはカイサルの死を確信していた。

「それは、そうかもしれないですけど」

「今回の件は他の人間を手配してある。問題はないよ」
「ちらりと時計を見ると、ギルダスは立ち上がった。」

「お父さまを待たないんですの？」

「私はこれから王宮に呼ばれている。カイサルの件で報告を求められているからね。また帰りによる」

カイサルを撃つた時に捨てた銃が、どうやら見つかつたらしい。

そのどちらもが牢獄で使用しているものと同じとなれば、それについての説明を求められるのは仕方がない。

「大丈夫ですの？」

「なに、これも想定のうちだ」

少し考えて、ジェシカは口を開いた。

「叔父さま、わたしも王宮へ連れてつて」

「遊びに行くのではない。私は仕事として王宮へ出仕するんだ」

「お仕事だから、他のことが確認できないでしょう？　かわりに王宮でいろいろと話を聞いてくるから」

「お前が気になっているのは、バード公爵の現状だろう」

「そうよ。悪い？」

じつとジェシカを見る。

確かに、王宮での情報は多いにこしたことはない。ジェシカの急な動向も、バード公爵の体調を気にしてということであればなんとか言い訳になるだろう。

「……わかった。ただし、あまり目立つことはするな。自分の立場は分かっているな」

この一連の惚れ薬事件。

首謀者は間違いなく、目の前にいるこの少女なのだから。

「わかってるわ、叔父さま」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3127e/>

薬の罫に気をつけて

2011年7月11日03時29分発行